七月一日發行

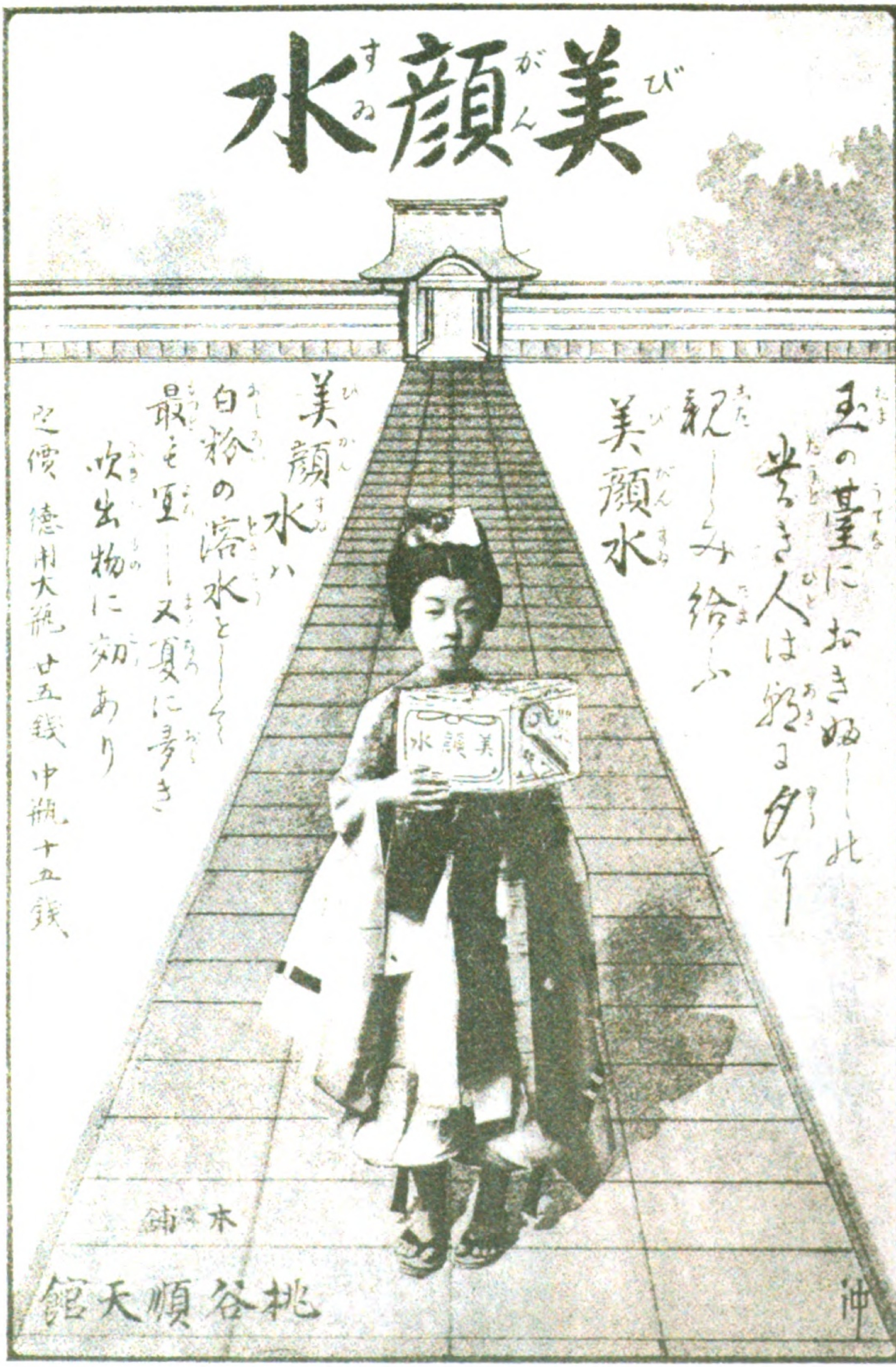
女學世界

明治三十三年十一月廿五日 明治四十三年六月廿六日印刷納本
第三種郵便物認可（毎月一回廿六日印刷納本）

第十巻第九號



博文館



美顔水
親しみ給ふ
美顔水
美顔水ハ
白粉の溶水としても
最も宜しく又夏に多き
吹出物に効あり
定價 徳用大瓶廿五銭 中瓶十五銭
美顔水
本舗
桃谷順天館
沖

避暑旅行ノ御準備ハ？

旅行用具ハ三越ニテ御求メ遊バサル、ガ最モ得策ナリ

旅行用衣服ハ勿論ノヿ帽子カラ靴鞄マデ悉ク備ハレリ

山ノ景色、海ノ眺メハ日ニ〳〵優レリ。或ハ温泉或ハ海水浴ニ暑サヲ避ケラル、御方ノ日ニ〳〵多ケキ今日此頃、御旅行ノ御準備ハ如何ニ？

三越ハでぱーとめんとすとーあナレバ、平常着、訪問服、又ハ洋服ハ申ニ及バズ、時計、指輪、化粧箱ヨリ、空氣枕、膝掛、すてつき、洋傘ナド、所謂頭ノ先カラ足ノ先マデ御用ノ品々何呉トナク陳列販賣仕候間、是非共御用命下サレ度奉願上候。

東京駿河町

越

三越呉服店

振替貯金口座（東京三〇〇番）

女學世界第拾



卷第九號目次



一品一効

!!純無鉛!!

御料たつた白粉

●一品多能の望なきを主張する吾製造各種の化粧料は常に

▲博士大家無害證明▼



▲新式中の新式白粉▼

●如斯美人を試金石とし着實に善良の効果を收めつゝあり

御料あらいこ

▲一合の牛乳で洗ふより▼



▲一さじの御料あらひ粉▼

歐羅巴宮殿式

御料フード

▲水なしで化粧のできる▼



▲西洋風新式おしろい下▼

化粧界新美觀

夏用二枚櫛





甲種
無地本鼈甲臺彫刻
二枚揃一組
五十圓　六十圓　七十五圓

乙種
無地四方張臺彫刻
二枚揃一組
七圓半　十圓　十二圓

丙種
鼈甲色ゴム臺彫刻
二枚揃一組
壹圓半　貳圓　貳圓半　三圓

東京市京橋南傳馬町
振替口座九二九三番

大西白牡丹

電話本局三十番・三千番

女(いの一)

女（いの二）

ぬりもの

美術蒔絵物

常陳列縦覧御随意

東京日本橋通室町

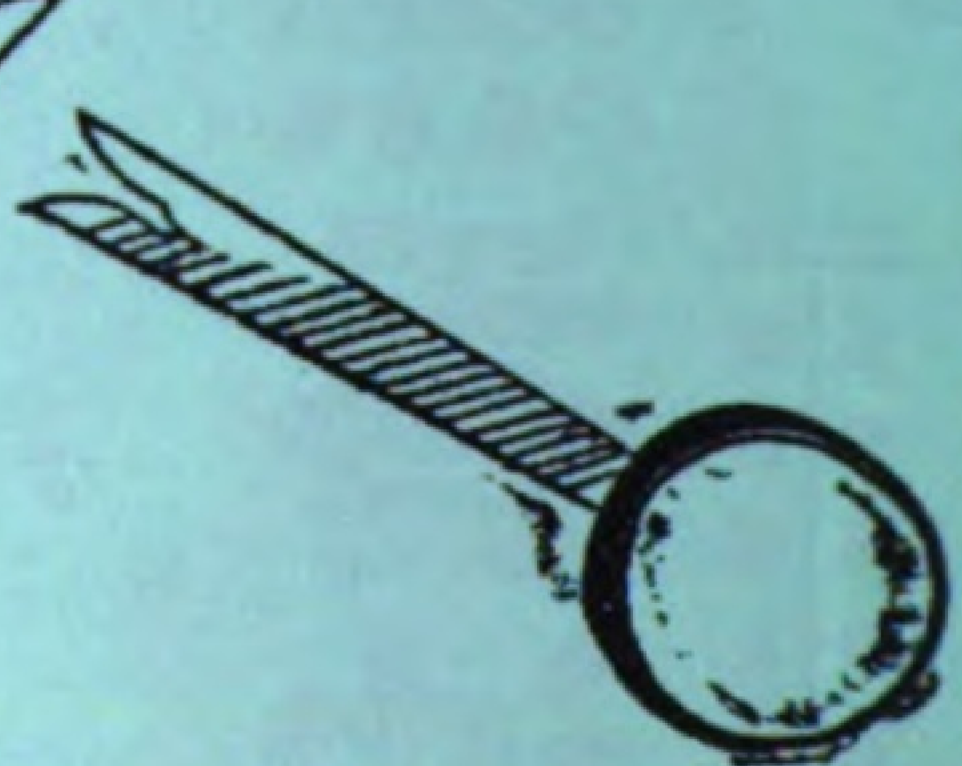
木屋漆器店

電話本局 九百九拾七番

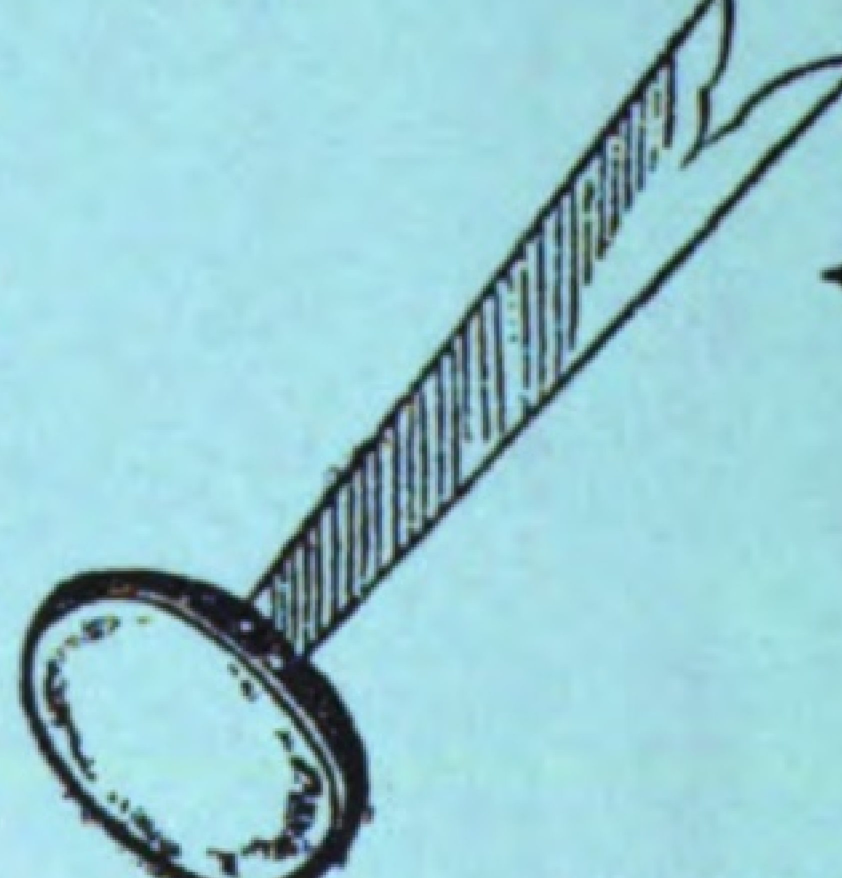
長 千七百拾番

---

(1)



(2)



ひすゐ砡の両天

夏の姿の御婦人方の緑滴る黒髪に一際見栄えよき物は先づ（ひすゐ）なるべし弊店こゝに圖の如き丸形、小判形、或は彫刻ある物を以てさま〴〵に意匠をこらして両天をしつらへ置候へば願はくば御光來の上御用命あらんことを

(1)銀臺金消丸形ひすゐ両天 金二圓五十錢

(2)銀臺金消小判形ひすゐ両天 金二圓八十錢

彫刻付ひすゐ両天 金四圓より十

ひすゐ玉根掛 金十圓より金六十圓

同 玉簪 金四圓より金二十圓

自七月一日至七月十五日 ディスカウントセール（割引賣出）開催

中元賣出しとして七月十五日迄ディスカウントセールを開催仕御買上金額に拘はらずもれなく（五分より二割迄）割引券封入の福ぶくろを呈し即時御買求金額より割引仕候

（地方御注文の方も期間内同様に御座候）

營業目録 送費四錢

東京市神田區鍛冶町

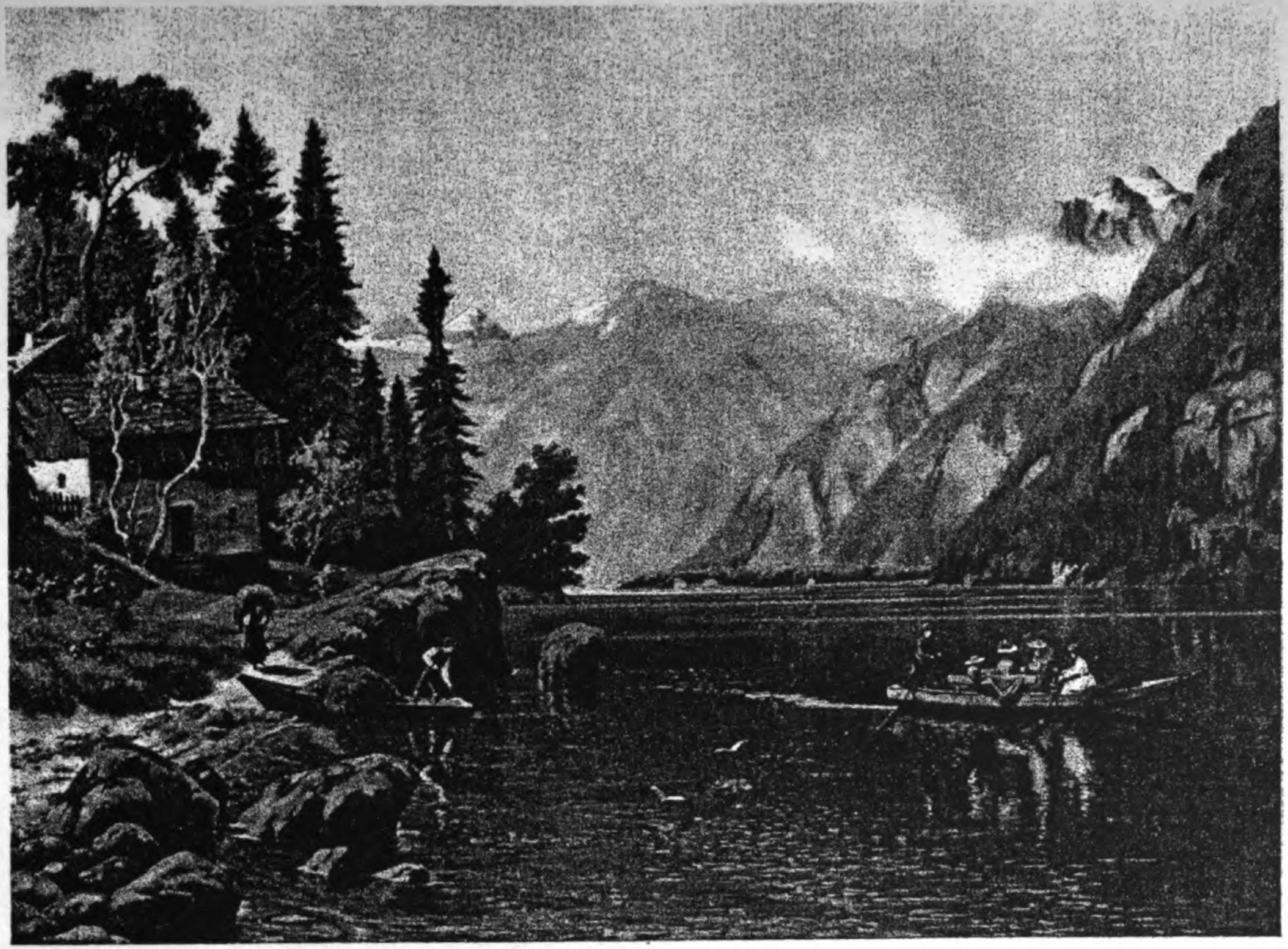
白牡丹中西

電話本局二〇四〇番振替口座一五二一四番

女(いの三)


月の夜に歩けば白髪になるのですッてネ
▲不思議ですよ▼
▲頭髪の營養に極てよき逸品なり
白髪や赤毛も此スミレ黑香油を常に用ゆれば自然に艶よき黑き毛髪となる。病後産後に脱毛た毛髪は此スミレ黑香油に依つて早く毛生いたします。
スミレ黑香油
一本金三十錢、送費四錢
電話浪花百十番
振替東京百十番
バール煉香油
スミレ香油
東京市日本橋區横山町三
平尾銑也
女(いの四)

清風



田中製版所三色版

婦人一生中に最も心配な事實

政治上實業上に外交の繁き夏夫を持つ夫人と日々多數の嫖客に接する婦人は殊更注意せよ恐るべき難産と流產と不姙症は必ず來るべし

婦人は身體の構造上梅毒痳病に對し病毒の發源地となりて他人に感染せしめ又病毒の蕃殖地となりて自己の腟子宮を害し血の道、癪に苦むは婦人の持病と諦め腰より脚部へ冷る如く感ぜば婦人は冷へ込む天性と自覺して帶下、白帶下、赤帶下の惱むも冷込と速斷し他人の擧兒を羨むと共に我が子寳なきを嘆きながら之も例の冷込みと誤信して見當違の暖め藥等を内用する故遂に長引は畢竟誤療の結果と知るべし元來婦人の生殖器は天然的受身に構造せられ即ち人類の田畑なれば病菌の蕃殖するは當前にて結婚の機會に病菌侵入し其田畑を荒すゆゑ子宮血の道に惱み倍々荒せば荒す程其肉落ち身體の窶れるは實際惡き土地の田畑に滿足の農產なき道理なり婦人科學上婦人病の療法は局部の治療を第一義とし局處の外用する藥劑の要求は益急を告るに至る余は藥劑師にて衛生の天職上豈に傍觀するに忍びず積年苦心慘憺研究の末方今婦人科學の泰斗として臨床上實地の錬達一世を壓する獨乙伯林のフロインド博士の研究と其實驗に成る處方に則る藥液をして直接に婦人の局處に作用すると同時に吸收せられて其藥効を發揮すべく可要球(座藥にて内用藥にあらず)を調劑し幾多の婦人科醫に之が實驗を請めたるに子宮内膜炎にて下腹痛み常に帶下ありて白帶下又赤帶下に苦み腰より下腹へ筋張り更に胸先きへ差込み子宮糜爛して痛み、子宮出血して褌を汚染し、厭な處に惡臭ありて他に嫌れ又は燃へ立つ搔痒を起し搔ば痛む症、月經時の疼痛と月經過多に惱み或は痳毒性子宮病等の諸症に用ゆれば何も其の効力神速にして驚ろくべき顯著なりとの賞賛を受たり「可要球」は最新の學理に適合し最も親切なる良劑にて恰も田畑に完全の肥料を與ふる如き直接に其の藥効を顯すを以て婦人の姙娠すべき局部と田畑の道理を思ひ彼是と迷ふ事なく殊に婦人病には必ず「可要球」を外用して速に根治し給ふべし尚病毒の疑ある婦人は速に唯一丸を内用せば拭ふが如く其病毒を去り面白き程治療す故に良夫あれば相互に其病毒を驅除する事を忘るべからず

「可要球」定價三球入貳拾錢、八球入五拾錢、拾八球入壹圓、四拾球入貳圓

「唯一丸」定價三日分四拾錢、七日分八拾錢、十四日分壹圓五拾錢、三十日分參圓(いづれも内地遞送無料)

東京市本郷區湯島天神表門中坂上

發行所 藥劑師 中西莊吉

振替貯金口座東京千五百番

(その一)

現代文壇の最大產物
嚴肅なる人生の批評

坪内雄藏
內田貢
池邊吉太郎
編輯

東京朝日新聞社發行

菊判八百頁
コロタイプ肖像一面
挿畫五面入
正價金二圓三十錢
郵税金十二錢

二葉亭全集

第一巻 創作之巻 浮雲、其面影、平凡

此沈鬱なる聲を聞けよ、此痛酷なる描寫を味へよ、二葉亭の著作に由て初めて**人生の爲めの文學**を見るを得、三十年前の**「浮雲」**が沈痛なる露國の文豪の音響を傳へて戯作の甘睡を破りたるが如く**文學史上永遠に輝く**の**此三傑作**は**今日**も**猶**ほ、**明日**も**亦、永久**に**渡**りて人生の教訓とすべきものなるべく、犀利峻嚴細さに到るの描寫に由て**人生**の**パノラマ的縮圖**を活躍し來る、眞に空前の大手筆也、座右**二葉亭全集**あつて初めて嚴肅なる、森沈なる痛酷なる現代思潮を談ずるを得べき也

▽發賣元 東京本町 博文館 振替貯金口座東京二四〇番

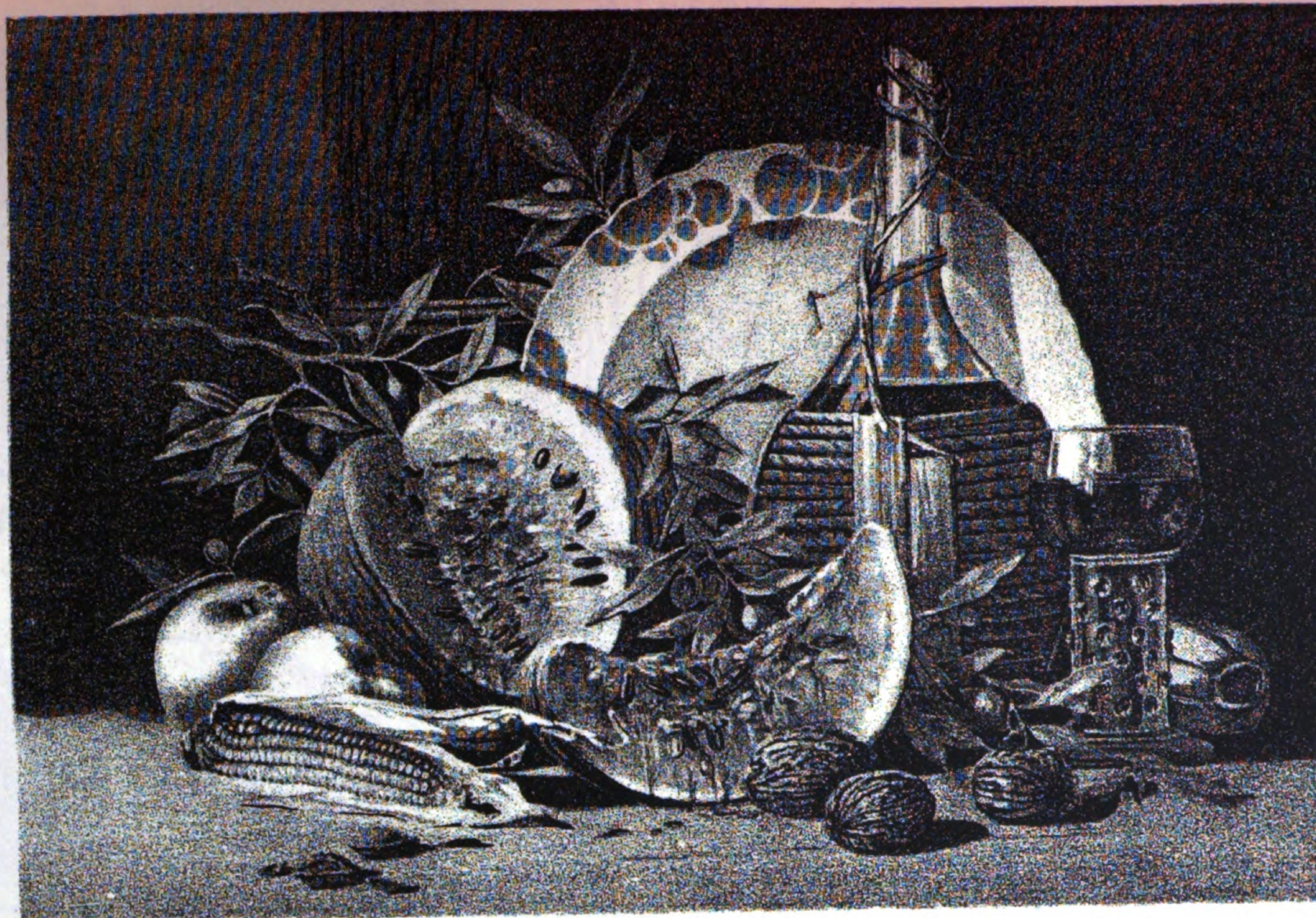
（ろの二）


千代田香油
千代田香油は廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖々たり
特製 金七十錢
大瓶 金三十五錢
中瓶 金二十五錢
小瓶 金十七錢
東京市馬喰町
山岸三之助
電話浪花二七九三


純白浮きスワン石鹸
純良なる家庭用浮石鹸
▲定價 二個積(壹本) 廿二錢
製造所 英國ポルトサンライト市 レバー兄弟商會
日本輸入元 小林
日本一手販賣
東京馬喰町四丁目
山岸三之助

(その四)

涼味萬斛





久能木式 石油厨爐

厨爐の好季と相成候

今の季節に於て常に不用の炭火を起し置くが如き不經濟はなされぬものにて候然ればにやマッチ一本にて直ちに强烈の火力を發する簡便と且つ最も煮炊に經濟なる當『石油厨爐』は此期季に於て益々註文を重ね愈々好評を博しつゝ有之候間未だ御試用なき御方は御參考までに御遠慮なく目錄御請求下され其使用法を御一覧下され度候（目錄無代進呈）

八月末日迄
五歩引券
有効の事



製造發賣元 久能木商店 東京日本橋室町三丁目

長電話本局二八九番 振替口座一四五七番

女（ばの一）

兒童訓話の絶好資料

四十七士譚は少年少女諸君
武士的精神修養の寶典たり

學校家庭
必備之書

巖谷小波先生校閲　沼田笠峰先生編述

大好評

兒童教訓 赤穗四十七士畫譚

洋裝頗美本
舶來紙刷美
麗寫眞版六
拾餘個挿入
定價六拾五錢
郵送料八錢

少年少女に讀ませる目的で四十七士の傳を委しく述べた書物は未だ發行された事がない。本書は少年少女の教養に經驗ある編者が元祿義擧の顛末を平易なる文章で述べると共に六十餘の鮮明なる繪畫を加へて四十七士の個々の行動をも詳細にあらはし、少年文學の泰斗たる小波先生が校閲を經たるもの少年少女の士氣を養ふには最も適當なる讀みものと信ず。

大好評
大歡迎
續編發行

西川三五郎編

續 學校家庭 兒童百話

新刊

洋裝全壹冊
正價卅錢
郵税四錢

學校家庭 兒童百話

拾版

洋裝全壹冊
正價廿八錢
郵税四錢

今回更に最も嶄新にして趣味ある童話百餘種を蒐めて續編を刊行せり乞ふ一讀あらん事を。

發行　東京神田松下町　文盛館　振替東京二〇一四一六　東京神田美土代町　博文書院

女（はの二）

女（はの三）

ケーバ石鹼

舶來石鹼界の覇王にして亦本邦製品の企て及ぶ能はざる特色を有する本品は江湖の高評に酬ふる爲め原料を精選し品質に一大改良を施したり

レツクス



實用浮石鹼

英國ボツソンエンドシンプソン會社特製品

會社の自慢本品特點

香氣の高きは本品の特點なり

價格の低きは本品の特點なり

實用に適するは本品の特點なり

上流界に好評を博すは會社の自慢とする所也

論より證據實地御使用を乞ふ

ケーバ香水

●全世界を通じて流行品

最も紳士貴婦人間に愛用せらるゝはケーバ香水



定價

小瓶	金廿五錢
中瓶	金一圓
大瓶	金二圓
特瓶	金五圓

東洋一手代理店

竹間商店

●賣捌所は全國到る處の信用ある舶來小間物店及び化粧品店に有り升

女(はの四)

旅だち



石川玉溪筆


宮内省御用達
内外國金銀
名譽賞牌受領
米國アラスカ、ユーコン
太平洋博覽會に於て
名譽大賞牌受領
最上醬油之元祖
開業貳百六拾六年
上
千葉縣銚子町
釀造元 濱口合名會社
電話銚子二十一番

婦人畫報

七月一日發行　七月の卷　一冊廿五錢

郵税二錢　六冊共一圓五拾錢　郵税十二錢　十二冊共二圓八拾錢

畫報

- 後園（彩色美人畫）磯野吉雄筆
- 七夕（彩色美人畫）池田輝方筆
- 東伏見宮兩殿下御外出
- 英皇帝陛下大葬遙拜式
- 赤十字社總會雜況
- 廣瀬中佐銅像除幕式と杉野兵曹長の三遺児
- 東洋婦人會のバロタ王歡迎
- 家庭に於ける若き妻の一日

●現代婦人の侶伴。清新なる家庭の讀物●

讀物

- 嫁入前と嫁入後……高田博士
- 于蘭盆の祭り……高木男爵
- 教育ある婦人と平凡な家庭……中川謙二郎
- 高等女學校と實科女學校……小泉又一
- 婦人老若の交際……三輪田眞佐子
- 流行を追ふ婦人……巌谷小波
- 酒飲みの夫と同情ある妻……岸邊福雄

▼跡見玉枝女史へ御下賜品の色々……▼お茶の水高女生の應接ぶり……▼加納子爵の家庭▼京都淑女卒業生……▼婦人正風會福岡支部と中島義式氏……▼鍋島直映氏と夫人愛兒▼大阪割烹……▼花の如き數名家令孃▼貯金事務競技會▼夏の日比谷公園……▼弟橘姫の紀念碑と宮中女官の和歌……▼婦人藥劑師と經木眞田競技會……▼西ヶ原蠶業講習所▼珍らしき扇……▼植物園に於ける婦人衞生會員一同……▼團扇は如斯して製す▼瀧の川學園……▼高崎男の應接室▼遞信省運動會……

▼命を賭けて病友に盡せし女……谷紀三郎▼信州より出米國へ新婚旅行の召使▼夏の客と涼しげなる應接……櫻井ちか子▼瀟洒な夏の服裝と化粧……江木榮子▼婦人記者の一年半……山崎千代▼女の手にて製造さるゝ團扇……▼應接ぶりより觀た現代の貴婦人……▼白痴を教育する瀧の川學園……▼臺所と飲食用具……西村學士▼七月の料理と漬物のいろ〳〵……高橋學士▼美しき眼とみにくき眼……▼七夕と盆……戸川殘花▼食べもの色々▼和歌入門……信綱▼朽綱德子……いれ子▼小説菖蒲園……尾島菊子……其他……

東京飯田町四の四　東京社　電話番町二三三九　振替口座一一八一八

女(二の三)

悪筆は一生の損



速に入會して頗る能書家となるべし

本會獨特の特許速成通信教授の方法にて練習すれば如何なる惡筆にても最も短日にて上達すること全く機械的なり

▽本會書者兼講師

稻川雲谿先生
玉木愛石先生
小野鵞堂先生
外講師大家數拾名

▲見本 詳細會則無代進呈

帝國習字速成學會

東京本鄉區大學正門前
電話下谷 三〇一一番
電話下谷 三貳一〇番

（にの四）

盆踊り



跡見先生筆

宮島聖崎蓬莱岩



宮川安信筆

女（ほの一）

婦人界に於ける新智識の涵養を努むは本講義也

緑蔭本講義を繙くは理想也

女子大學講義

新に第三回の學期を開始す

編輯所（東京小石川區目白臺 電話番町七百七十番）日本女子大學校櫻楓會

○本講義は毎號雲上賢き邊に奉獻すべき光榮を有せり
○入會は至極簡便にして學科は女子大學家政科に據る
○本講義は文章平易趣味豐富假名付なれば何人も讀得
○講師は悉く女子教育に經驗ある博士大家を集めたり
○通信教育は簡便なる勉學方法にて家庭的婦人に適す

○全學を修めば十八册の百科全書を備付せるに等し
○本講義は賢き基礎の上に立ちたれば世の信用多大也
○本月限り入會金を免除す會費は一ケ月五十錢なり
○會則は『往復ハガキ』にて申込次第無代にて進呈す
○會員には毎月好評ある婦人雜誌『家庭』を無代進呈す

發行兼申込所（東京小石川區久堅町一〇八 電話番町九三二番）精美堂

女（ほの二）

文學博士芳賀矢一先生序　武谷　等先生著

女學生寶鑑

美麗洋裝菊版　三〇八頁　繪入總假名附

定價壹圓　郵稅八錢

容姿を正しうせんと欲する人に鏡を要するが如く、向上的精神を養ひて文明の淑女たらんと欲する方には本書を要す。本書には。哲理を述べ、倫理を説き、且、古來の教訓的和歌、俚言、論語、中庸、大學、等の格言を分類收錄せり。實に令孃淑女机上の寶鑑なり。

發行所　東京市神田區小川町十三　大野書店

營業目錄

袋物、造花、刺繡

摘ミ細工、果實、瓶細工

編物、器具並に材料

婦人技藝材料

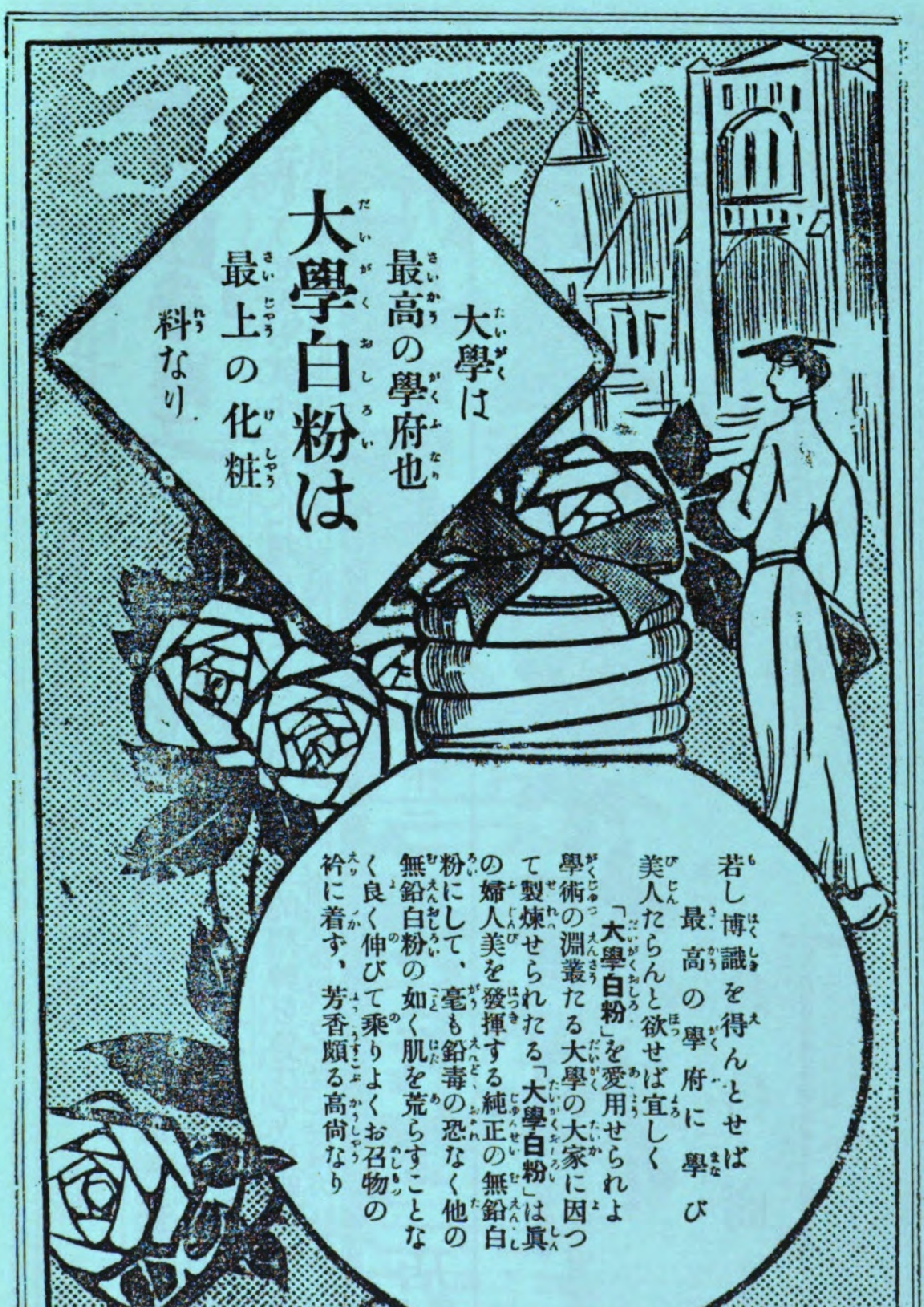
東京市本郷區弓町二丁目　倉持商店

電話下谷三五一三、振替貯金口座壹七壹壹

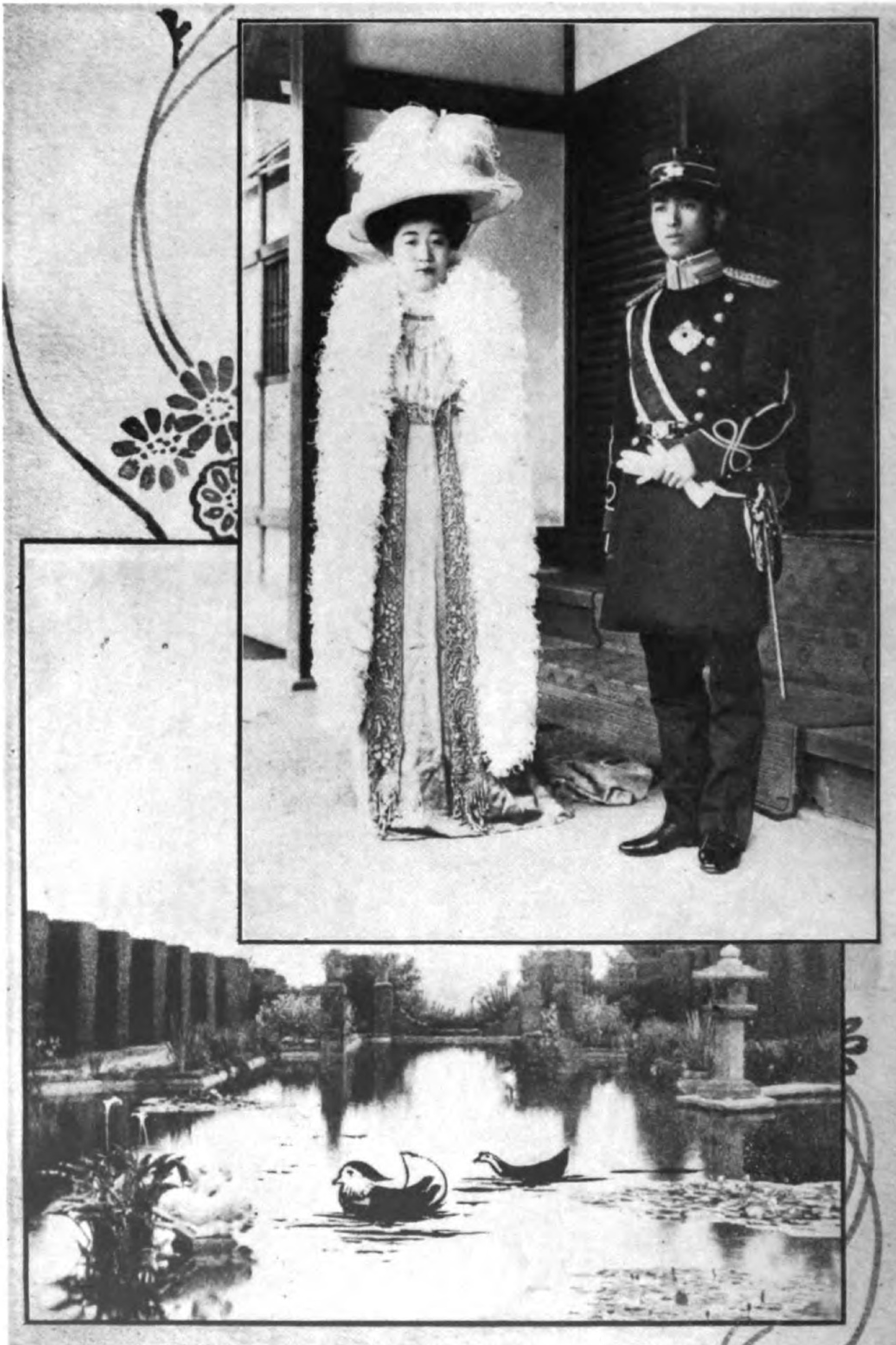
此切取を添へ御申越しの方へは美術技藝の栞並に定價表無代進呈す

（○女學世界七月號）

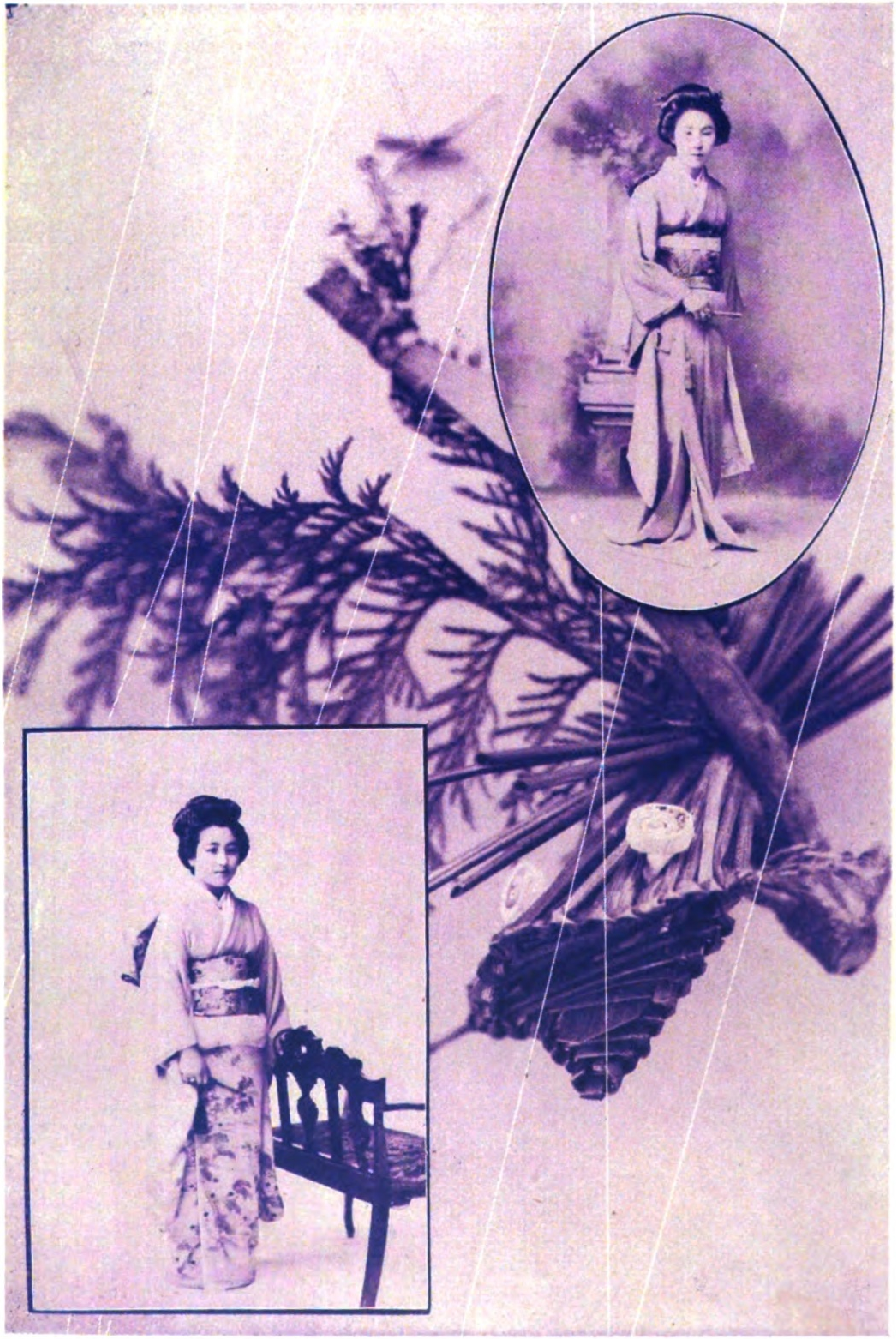
女（ほの三）


大學は
最高の學府也
大學白粉は
最上の化粧
料なり
若し博識を得んとせば
最高の學府に學び
美人たらんと欲せば宜しく
「大學白粉」を愛用せられよ
學術の淵叢たる大學の大家に因つ
て製煉せられたる「大學白粉」は眞
の婦人美を發揮する純正の無鉛白
粉にして、毫も鉛毒の恐なく他の
無鉛白粉の如く肌を荒らすことな
く良く伸びて乘りよくお召物の
衿に着ず、芳香頗る高尚なり

朝香宮兩殿下



圖は兩殿下が六月八日神武天皇御陵へ御參拜の際京都久邇宮御本邸にて御撮影遊ばされし時の也（京都館友今尾翔翠謹寫）



右圖　仁禮子爵夫人つや子（相浦男爵令妹）

左圖　伊東元帥令孃廷子



東京市京橋區大鋸町十二番地　**女子文壇社出版**　（振替口座東京第壹七貳九番）

二卷第七號
七月一日發刊

雜誌 少女

毎月一日發行　百頁美麗口繪五頁

▲定價金拾錢　郵税壹錢　半年分六拾三錢

六卷第九號
七月一日發刊

女學雜誌 女子文壇

毎月一日發行　百六十頁口繪十頁

▲定價拾五錢　送料壹錢半　半年　增刊共　壹圓參拾四錢



少女は愛らしき少女達の讀物には一等評判がよいです

女子文壇は到る處の令孃方に注意愛讀されて居ます

賣捌店は全國到る處にあり

最寄書店品切の節は直接出版元へ御申込あれ初號より取揃あります

▲百聞一見に如かず

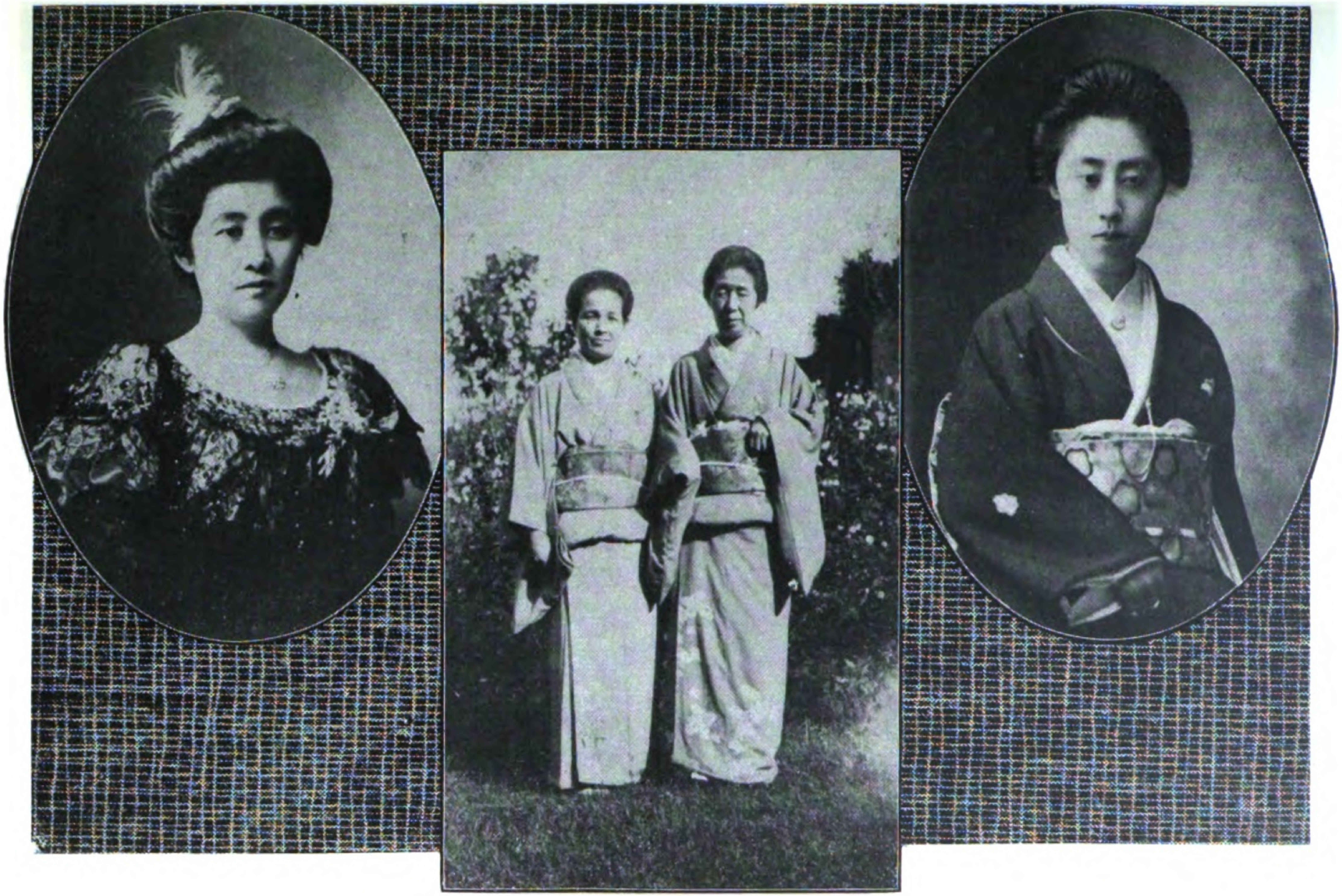
此二大雜誌の內容を知らぬ諸孃達は速に試讀あれ論より證據實に豐富疑なし

女(への二)

女(への三)


ネッスル
コンデンス・ミルク
ミルク・フード
育兒に
必要なる
最良滋養品

名流婦人



右圖　三井得右衛門氏夫人　鍈子
中圖　澁澤男爵夫人　兼子
　　　神田男爵夫人　熊千代子
左圖　園田孝吉氏夫人　銈子

名家の令孃





右、牧野男爵令孃　雪子
中、蜂須賀侯爵令孫　年子
左、黒木伯爵令孃　愛子

飲む丈血になる

ボビナイン

病者は藥を飲む前に先づボビナインを飲め

▲總ての病者は藥物的療法を行ふと同時に滋養療法を行はざるべからず、然らざれば如何なる名藥も其効甚だ尠なかるべし

▲ボビナインは以上の目的に最も適合せる滋養品にして歐米にては廿餘年前より貴重なる滋養品として賞用せらる

▲血と肉とを構成するボビナインは生牛肉中に含蓄せる總ての滋養分を最も嶄新なる方法に依り其性質を變んずることなく抽出したる理想的滋養品なり

▲ボビナインが幾多滋養品中傑出せる所以は消化吸收力の速かなることにして如何に胃腸の惡しき人又弱き人にも直に消化せらるべきを以て幼兒の滋養品として牛乳に滴下し用ふる時は其効最も著るしかるべし



大瓶二圓十五錢
小瓶九十五錢
送料一本八錢

▲

適症　貧血、神經衰弱、產前產後、小兒の發育不良、食慾消失、肺結核

服用法はサイダー、牛乳等に混和して用ふる時は尤も妙なり

各地到る處の藥舖、洋酒店にあり　●説明書御報次第進呈

ボビナインは飲むだけ血になる滋養品なり

女(その一)

日本總代理店

横濱市境町二丁目

藥種貿易商　合資會社　友田商店　振替口座東京一九三八番

女(その二)

女(との三)

女との四）

日英博覽會大觀



工藝館



美術館



園藝館



貴賓館

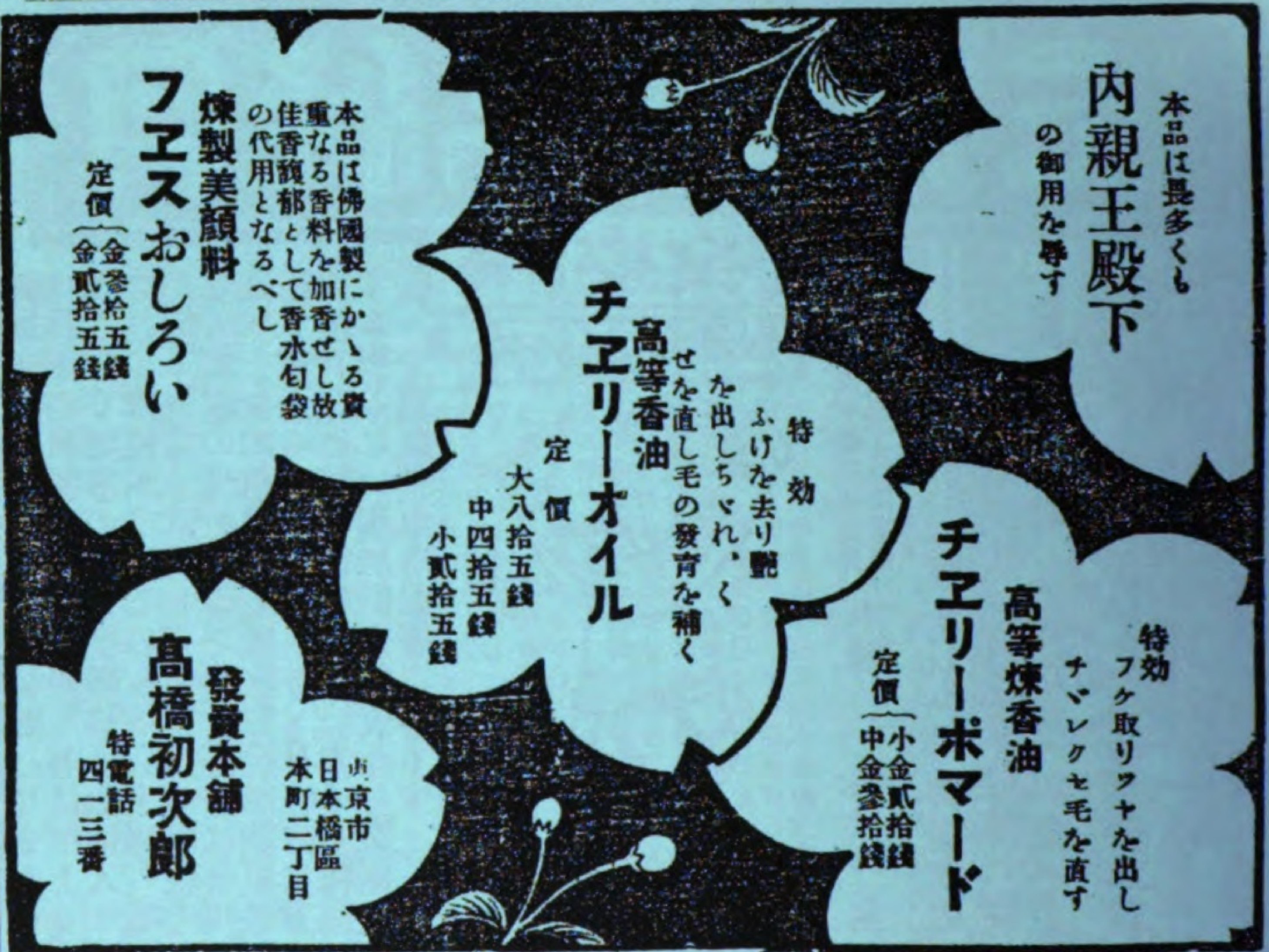


音樂館

理想の子供服



女子共立會立案


本品は畏多くも
内親王殿下
の御用を辱す
特効
フケ取リツヤを出し
チヾレクセ毛を直す
高等煉香油
チヱリーポマード
定價（小金貳拾錢 中金參拾錢
特効
ふけを去り艶を出しちゞれ、くせを直し毛の發育を補く
高等香油
チヱリーオイル
定價
大八拾五錢
中四拾五錢
小貳拾五錢
本品は佛國製にかゝる貴重なる香料を加香せし故佳香馥郁として香水匂袋の代用となるべし
煉製美顔料
フエスおしろい
定價（金參拾五錢 金貳拾五錢
東京市日本橋區本町二丁目
發賣本舗
高橋初次郎
特電話四一三番

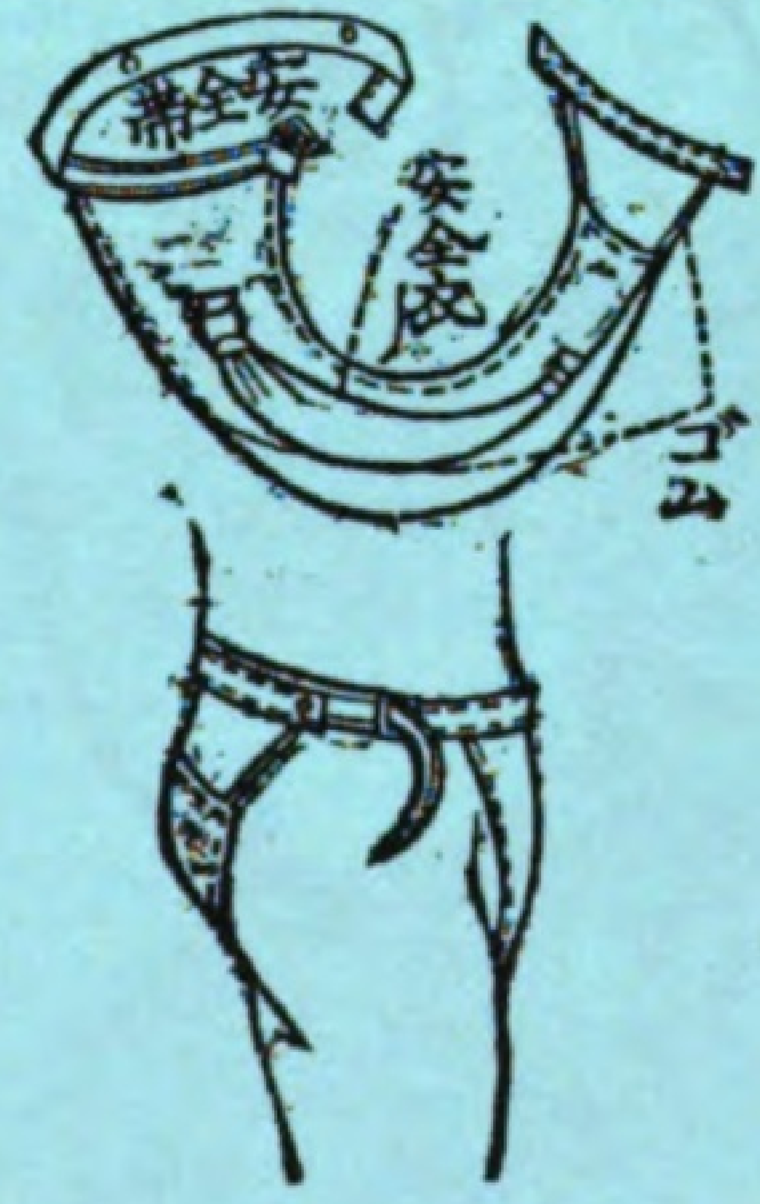

於内外博覧會名譽大賞及金銀牌受領
元和二年創業
ヒゲタ印醤油
HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor
G. TANAKA
Choshi, Chiba-ken, JAPAN
宮内省御用達
千葉縣
田中玄蕃釀造
銚子港
ヒゲタ印醤油

女（ちの一）

月経帯の大王

特許安全帯

強き方も決して粗相せず



御婦人者が生涯無病でお過しなさるには月經の處置が最も大切な事は申上るまでもなく從來の様に脱脂綿等を挿入なされては經水の滯るのみならず綿の纖が殘りて屹度子宮病ヒステリ等の病源となり醫家の嘆かる事です安全帯は藤川藥學士發明消毒安全吸收力脱脂綿の數倍で博士の甚く賞用さるゝ月經時に重寶便利な如何程經水の多い方でも粗漏する事のない起居動作極安全な又産後や白血長血痔漏等に妙です

東京本郷區湯島天神町三丁目二番地 本舗 安全堂

牛込袋町廿六 特約大販賣 御園おしろい 御園商店

定價 安全帯特甲一筋壹圓貳拾錢、特乙八拾錢 並四拾錢、一筋ニテ二三年使用出來升 安全衣は一打入一箱特甲金六拾錢、特乙金四拾錢

市内ハ藥種化粧品店ニテ販賣致升

小包料ハ一組金拾貳錢一組増事ニ貳錢増シ候

●新案特許 一〇三六二號 衛生的なる改良かもじ發賣

●丸髷 拾五錢より七拾五錢迄 ●島田髷 三拾錢より壹圓五拾錢迄 ●銀杏髷 廿錢より六拾錢迄 送料各八錢



本品の特長

一 根元に コロップ を装置せるにより舊式のもの、如く硬からず膚ざわり軟かなり

二 皮膚を摩擦すること少なきゆゑ頭の はげる 憂なし

三 頭痛 癖ある婦人に用ひて爽快なを覺えしむ

四 百五十度の熱蒸氣にて 消毒 しあれば毛髮の傳染病を媒介するの憂なし

●諸かもじ製造販賣 東京市神田區豐島町十七番地（振替口座東京一八一八八番）田中金三郎

特約 京橋大西白牡丹、本郷兼康、淺草駒形百助、淺草駒形紅勘、神田須田町三井屋、日本橋通二卯屋、外到處の小間物化粧品店ニ有

らい病

此らい病藥は有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分拆し當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる有力藥なれば一度其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむるは難事なれども其病勢の甚しからざる中に本劑を四ヶ月間服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても繼續服用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする瞞着主義の賣藥に非ず

●●●醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど藥劑師には其規則無ければ決して他へ知れるをなし安心服用あれ

ナノサール 一ヶ月分 貳圓

複方ナノサール 一ヶ月分 參圓

三河國碧海郡刈谷町

本舗 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞 鑑製

電話 刈谷參拾貳番 振替口座東京貳參壹壹

女（ちの二）

石鹼一個の代金を節して本書を熟讀實行せば最幸福なる根本的の美人たるを得べきなり

最新美人法

一册送料共金廿七錢
振替送金は金廿八錢
切手代用は三錢を十枚

本書は醫學上藥學上の學理實際と幾多令孃令夫人の實驗とより成り然も何人にも實行しやすきを本旨として記述せしもの也。乞ふ世の雜書と同一視する勿れ。

白色法 醫學上より見たる白色法●色白くなる飲み藥●色白くなるつけ藥●實驗有效の白色法●色白くなる簡單なる方法●キメを細かにする法●日にやけるを防ぐ法●手の色を白くする法其他種々

美髮法 髮の毛を美しくする法●髮の毛をやわらかにする法●つやをよくする法●毛のぬけるを止める法●毛をのばす法●ふけをとる法●ちゞれ毛くせ毛薄毛赤毛白毛等をなほす最良法等其他種々

美顏法 愛嬌と愉快●顏を洗ふ最良の方法●油の多過ぐる顏と油のたらぬ顏●赤すぎる顏と青き顏との療法●顏を醜くする食物●しわのよらぬ法●齒を白くする法●ニキビそばかすホクロの療法等

治療法 やせる法●こえる法●鼻を高くする法●聲をよくする法●おしろいやけイボあざシモヤケわきがヒゼン田虫タコなまづ等の最良療法●毛をはやす法●赤鼻●眉毛のさか毛●手のあれを治する法其他

養生法 根本的美人となる平素の養生法●食物と美人との關係●充分に睡眠せよ●寢る時の心得と寢具●運動はかくの如くすべし●醜婦も此の如く常に注意せば亦美人に優る●婦人病と顏色の關係

化粧法 入浴中行ふべき美人法●此の如き化粧品は反つて恐るべき結果を來す●化粧品の撰擇法●おしろいのつけ方●鼻高く見する法●目を大きく見する法●唇を薄くす又は厚く見する法其他種々

服裝法 服裝を美しくする法●衣服の材料●衣服の洗濯●衣服の色●衣服の縞●衣服店にて染色縞柄を見る秘訣●此の如き模樣と縞柄とは甚しく美人を醜婦とす●帶のしめ方●前のあわせ方等種々

これ内容の大略のみ、眞に婦人の寶典也、眞に少女の必讀書也、御身の幸福を得べく一日も早く本書を讀め

發行所 東京神田錦町三ノ二 振替東京一六一八番 **學友社**

根治確證

わきが

新治療藥 ラビヨン

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脫せよ

丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢送料拾五錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を清潔驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ひよ

毛のぱへる

毛髮生長液 原名ヘグネス

有力なる最新液にて

毛をはやしたき人早く

試みられよ●ぬけ毛落毛を止めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●其他の所に毛なき人用ひよ毛髮增生す◎頭などにはげのあるのは見苦しき者也

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ

化學製品

色の白くなる液

紡シドコロン溶液

本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝を盛にし皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料拾錢本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして

月やくをとろし

メソルビン此藥は子宮を痛ず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ケ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極て烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る、月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製貳圓卅錢參圓五拾錢送料拾貳錢

專賣 東京神田區小川町東明館前 **オリエンタル藥舘**

女(ちの三)

女（ちの四）

令嬢かゝみ

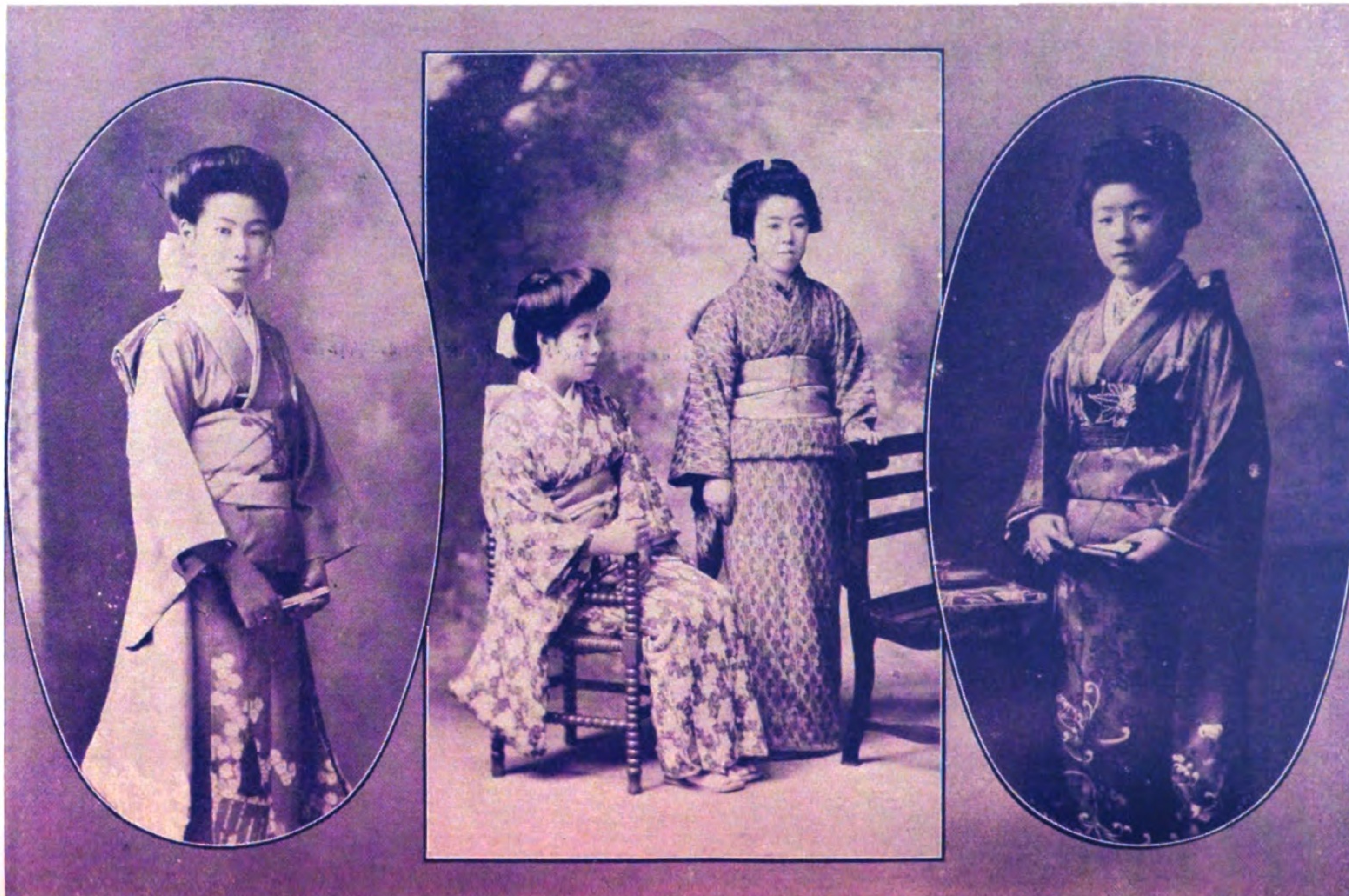






右圖　長谷川孝子（東京控訴院長長谷川喬氏令嬢）
中圖　石井みさを子（外務次官石井菊次郎氏令嬢）
左圖　鬪　靖　子（海軍大佐鬪干城氏令嬢）

令孃かゝみ



右圖 醫學博士北里柴三郎氏令孃 やす子
中圖 醫學博士岡田和一郎氏令孃 和子
左圖 高輪病院長瀨脇壽雄氏令孃 千代子



瀟洒たる新粧の
時期は來れり
文明的衞生薄化粧料
として水晶おしろいを
措いて他に求むべからず
透明せる水の如く
用方極めて簡便なり
常に之を使用すれば皮膚を
艶麗ならしめ自然美を發揮す
特製
水晶おしろい
通鹽町
大和屋

(一三一)

女(りの二)

IVORY SOAP

アイボリー石鹼

Procter & Gamble. Cincinnati

日本輸入品に限り包裝紙に斜に「**アイボリー石鹼**」と記入し一見模造惡質石鹼と判別に容易ならしむ御購求の節「**アイボリー石鹼**」に御注意を乞ふ

禿、脱毛、薄毛、生際惡き人試みよ……

東京皮膚病院發明山崎製

毛生液



本劑は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め、髮の毛はへぎは眉毛髮等の薄きをこく生じ皮膚病でき物ヤケド跡はげ其他あるべき所に毛なきに用て毛はへる事請合

○藥價三十錢、五十錢●特製一圓、二圓●送料六錢

本舖 東京市日本橋區馬喰町二丁目 山崎愛國堂

●實用新案 芳香入扇子●



本品は紙質を撰び扇面には優美なる彩色を以て蝶を描き蝶身は金屬製にして親骨内に仕込頭部は取外して香料の入替を便にす腹部には小穴ありて芳香發氣の要部となる夏季汗臭き折柄本品を使用せば芳香馥郁として快感を與へ尚ほ一層の涼さを增す、夏季必要品なれば是非一品を御求めあれ

香料付定價 男用 甲貳拾五錢 乙貳拾錢 女用 甲貳拾三錢 乙拾八錢（送料各一品貳錢）

●舶來香水紙●

大好評忽にして賣切れの處 新荷着一

本品は佛國**ピノー**會社特製の香水紙にして體裁よく簞笥の引出、貫入、又は外出の際帶、襟、ポッケット、帽子の裏等に其一枚を挾まれよ一ヶ月以上は香氣を保ち發汗の際他人に惡感を抱しむる患なく瓶入香水に比し上等にて且つ經濟也

定價七枚壹組金貳拾錢 送料貳錢 郵券代用一割增

大阪市北區下福島三丁目八十八番地

各種新發明 諸雜貨中介

中外用達合資會社

振替口座大阪貳七六貳番

女(りめ三)

第五回内國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標

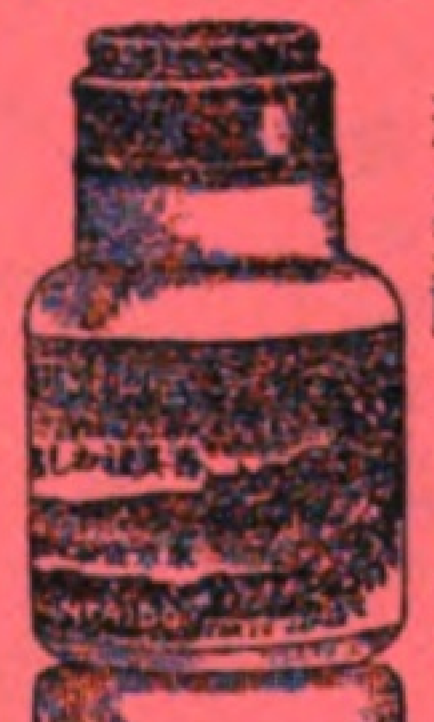
壽美禮おしろい

五二會品評會
功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴアイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子器入



壽美禮おしろい

ヴワイオレツト水製

ねり製 （大壜二十錢 小壜十二錢）
水製 （大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢）
玉製
粉製
肉色各種
錫栓附乳白硝子壜入

◎壽美禮白粉

は歐米諸國に専ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顔肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「菫おしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨むに衛生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す又東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◎西洋皮膚艶麗劑 壽美禮あらひ粉の特性

綠、藍、紅彩蝶番ひ罐詰 八錢
別製罐詰 五拾錢
大袋 二錢
小袋 一錢

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨得の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美くしくなす◎壽美禮あらひ粉は御髪洗に御用ひ給へば髪のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は温湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

登錄商標
西洋色白くなるあらひ劑

SUMIRE
WASHLNG IOWDFR
壽美禮あらひ粉



製造本舗 東京東兩國元町（兩國橋際） 壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣薬店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ（電話浪花二七六五番）



女學世界

七月號

第拾卷第九號

多勢の子供を養育して得た母親の實驗

金森通倫氏夫人　金森小籌子

私には二十二歳の長男を首に三歳の末の子に至るまで、丁度九人の子供がございまして、長男の大學、次男の高等學校、長女の高等師範を始めとして、高等女學校、中學校、小學校、幼稚園の何れにも參つて居ります故、母としての實驗には求めても得られぬよい材料をもつて居ります譯でございます。これにつけても私は母としての責任の愈々重いことを感じますので、子供等の教育に就きましては出來る丈け注意をいたし始終何うしたら宜しいかといふ事を考へて居るので御座いますが、さてなか〳〵研究は屆きません。しかし長男を儲けました二十二年前から今日に至るまで九人の子供を育てゝ參つた間には、多少の經驗がないでもございませんから、今日は私が其間に於て何れ丈けの研究を積み、何れ丈けの變化を子供の教育に及ぼしましたかといふ事に就いて、お話いたして見やうと存じます。

△理想の母が狼狽へてばかり

まづ私がまだ母にならない前に、母といふ事に就いて如何なる考をもつて居つたのかと申しますと、それはなか〳〵大きな抱負を懷いて居つたものでございます。其理想として居りました處は林克倫の母だとか、那翁の母だとか、華盛頓の母だとか、ゲーテの母だとかいふもので、自分はこれらの母の如き母に成り得られるものと考へて居つたのでございます。處が何うでせう、その天下の英雄豪傑の母を氣取つて居つた私が長男を產みますと、まづ第一着物を何うして宜しいか襁褓を何うしてよろしいかといふ事からしてさつぱりわからないではございませんか、お乳は何う飲ませてよいか、牛乳は乳と水との割合を何うすべきものか、其善惡の見分方は如何、時間は如何などいふ事すべて

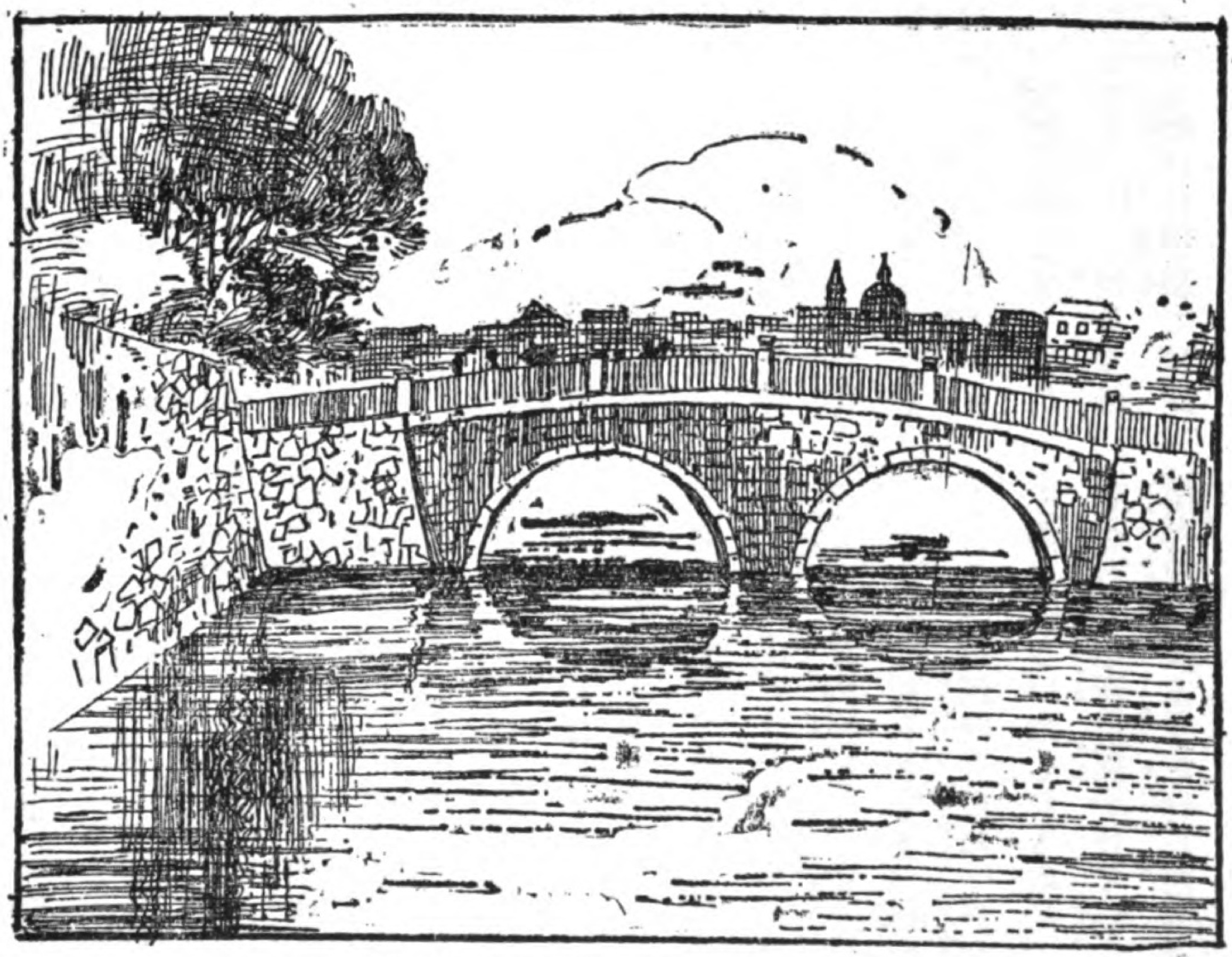
見當がつきません。それが一層何もしらないものですと、習慣や人の言葉其儘に從つて安心して居られるのでせうが、憖ひ少しものを知つて居りますためにそれも出來ないので御座います。例へば着物でもたゞ眞木綿や晒木綿で作つたものでは何となくもの足りないやうな氣がいたしまして、何うかも少し氣のきいた仕方はないものかと思つて西洋人からでもきいて見るといふ風です。今日は學校で子供の育て方などは十分お敎へになり、そればかりではなく、いろ／＼と書物も澤山出來て居つて大層便利でございますが、私共の時分の學校の學問と申すものは少しもさういふ場合の役には立たないものでございましたし、また一寸調べたい事があつても手引の本がないのでございます。で西洋から雜誌や書物を取り寄せて讀むといふやうな騷ぎをいたして居りましたが、其癖自分には斯うした方がよいといふ確定した考は一向ないのでございます。偶には子供が風を引きます下痢を起します。さあ何うすればよいだらうかと、理想の母がまあ事毎に狼狽てばかり居るといふ始末でございました。

△一寸した注意が必要

此間もさる晩婚の奥樣がお子樣をお持ちになりました。其方は高等師範の卒業生で、長らく敎職に就かれた方で、敎師としては實に有數の方ですが、生徒をお敎へになるよりは、赤樣をお育てになる方が難いと仰しやつて、矢張り私が長男を持ちました時のやうな騷ぎをしてお出でになります。私は其奥樣などに對しては天晴先輩ぶつて、いろ／＼お敎へがましい事を申して居りますが、しかし大勢を手がけました今日ですから、時にはハツと思ふやうな過をいたす事があります今日も丁度出掛にその過をいたしたのでございます。末の三歲になります子が他からお菓子を頂戴して歸りましたが、何時も私に一旦見せることにしてございますのに何ういたしたものか、家へ入ると直ぐ自分の腰をかける場所に腰かけて一人で開かうとかゝりました幸ひ兄になる子が傍に居りまして「なぜ母樣に御目に

かけないのですか」と氣をつけてやりましたものですから、また紙に包み直して私の許へもつて參りました、で私は小皿を三つ取り寄せて、いつもの通り末の方の小さい子供等三人に分けたのでございます、處が分けて見ますと極僅になつて了ひましたのですから頂いて參つた子供がこれでは嫌だと申して泣き出したので、其時、私はハツといたし、何故子供自身に分配させなかつたかと思つたのでございます。私へ持つて來て見せました時に、お兄様方にも分けてお上げなさいと申しきかせましたならば子供が快く分けて樂しく頂きましたことでせう。尤も私も出がけで急いでも居つたことでございますが、兎に角これは私の落度であつたと實に申譯なく感じたのでございます。九人目の子供になつてさへ斯様に過失をいたして居るのでございますから、まして長男を育てました折のとは思ひやられます。

常盤橋　(東京市中雜觀)



△子供の質問に答へるに就ての苦心

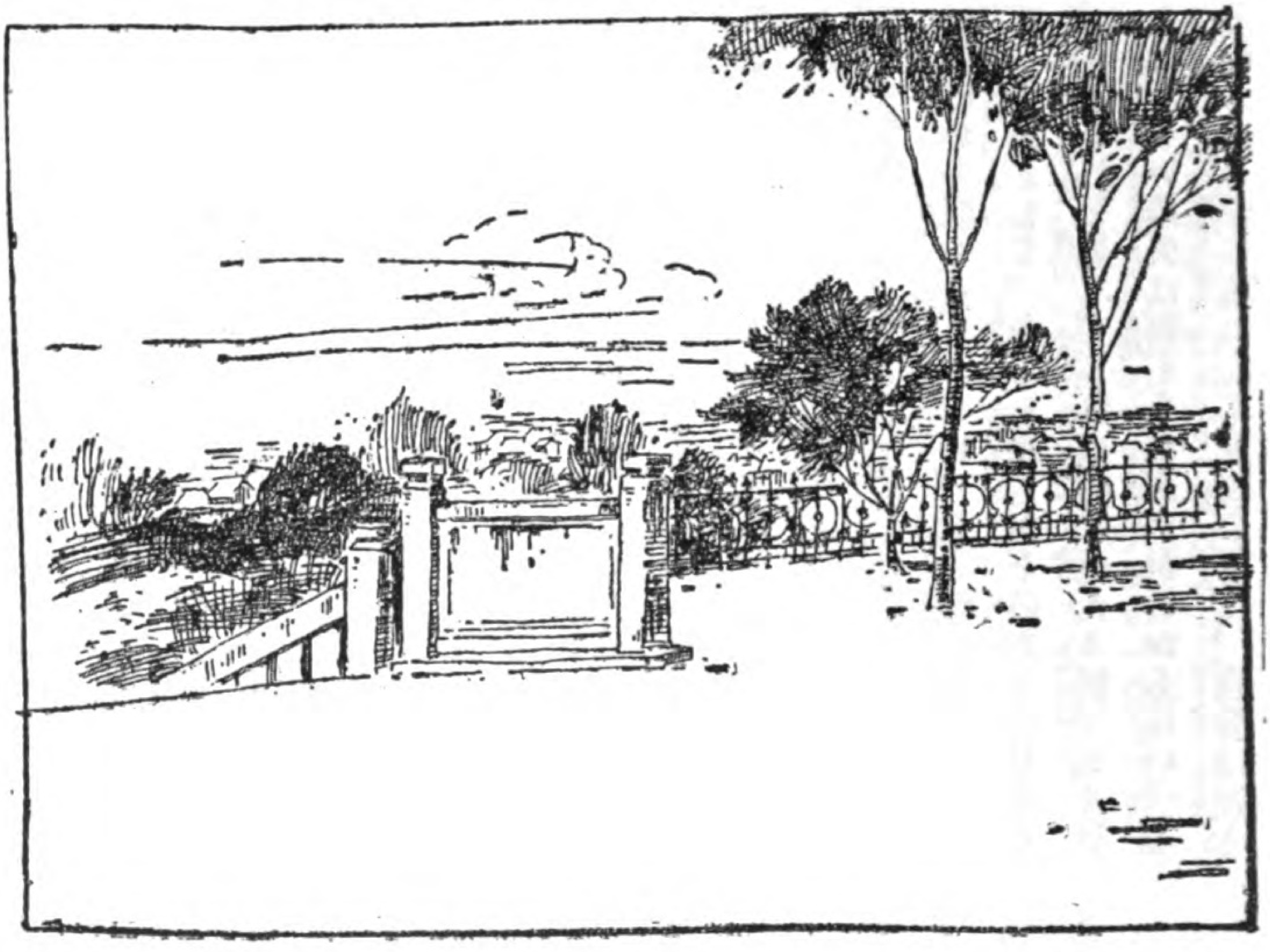
難しいのは子供の疑問に答へてやることです。星は何うして光るか、花は何うして咲くかといふ風に、子供の目には何でも不思議に見えますから、随分面白い質問が出ます、私共で七歳になります子は、格別にまた疑問を起す性質で、この夏など姉が休暇中植物採集をいたして居りますと、自分も花をとつて來てはいろいろ説明してもらつて居りましたが、其日有ゆる植物を採つて參りまして、雄蕊は何うだとか、雌蕊は何うだとか、莖が何うで葉が何うだといふやうな事を私にまできゝに參りますので、少からず困らされたのでございます。つひ此間もある夫人がお出でになつた時、御一緒に散歩に出懸けましたが其七歳になる子を連れて參りますと、途上目にふれるもの何にかまはず質問を起すのでございます。看板の字を見ては、あれは何と書いてあるのですかときゝます。彼の字と此の字とは似てますが同じ字ですかときゝます。イ、エ似ては居れど一寸違つた處がありますと教へてやりますと、今度はポストに角なのと圓いのとあるのは何うした理由ですかといふ風に、それは〳〵煩い程ものをたづねるのでございます。御一緒に參りました夫人などは、「あなたはよくこのお子様と始終御一緒に入らしつて御辛抱が出來ますね、私はもうあき〳〵した」と申されたのでございます、斯様な子供の質問に對しては餘り難しい説明をいたしてもならず、されば と申して説明が足りませんでもいけず、それ相當な答をして間違なく導いて行くといふ事はなか〳〵六つかしい事でございます。これから少し成長いたしますと、何でもぶつて見たくなります。質問が少くなる代りに今度は人の真似をしたがるのです。何うも小學校の時代が一番難しく、また大切な時代と思はれます。お友達の真似などは直ぐいたします、それが縦令悪い事であるにしても、たゞ悪いと叱れば子供にお友達を輕蔑む心を起させますから、それを避けてよい工合に話してきかせますにも随分氣をいためます。それから父母と先生と説を異にする場合でございます。両方を立てゝ父母の尊敬も先生の尊敬も失はせぬやうにしやうと存じます

と並大抵の苦心ではありませぬ。

△中學時代に注意すべき事

次に中學時代、これがまた甚だ大切な時代と存じます。私の經驗によりますと小學時代に於ける落度は中學時代に於て、其の大部分を取り返す事が出來るのでございます、精神上に於ても身體の上に於きましても中學でも三年から四年五年の間は格外な注意を要する時だらうと存じます。私が常に尊敬いたして居ります夫人で、西洋の方ですが、二人のお子樣を實に完全に敎育された方がございます。私は其夫人にお目にかゝります毎に必ず子供の敎育に就いて、何か心得になる事を敎へて頂いて居りましたが、四五年前其の夫人が一つ貴女に特別に御注意をして置きたい事があると仰しやつて、「私の子供はまことに温順しうございますが長女が十七歳頃になつて一寸おもひ付いた事があります。私がものをいひつけますと、いふ通りには致しますけれど、何うも今迄とは違ひまして、何處やら不快の色が見え、私に對して何となくわけ隔てが出來て參つたやうに思はれてなりませんでした。それで私がふと思ひつきました事は、娘が十七歳にもなつて見ればもはや一個の見識がついて居る筈である、その見識のついた者に對して、母だからといつて命令的にするのはよくない、いはれずともするものをといふ感じが何うしても起つて來るのであらうといふ事です。さう氣づきましたから私は今迄の母としての態度を一變して今度は娘の友達になる積りで、萬事相談的に事をもちかけることをつとめましたら、それから大變よくなつて參りました。貴女のお孃さんはまだ其年頃におなりなさらないけれど、豫めこれは御注意して置きます」と御話して下いました。

日本の母はことに子供に對して斷言が多くていけませんが、これはよいお話を伺つたと存じて、餘程注意いたして居りましたが、成程子供が一通りの見識をもつやうになりますと、お母さんは斯う思ふが何うでせうかといふ風に相談をしかけた方が、命令的に出ます



愛宕山上の眺望

よりも子供の感情には遙かに快い響をあたへるのでございます。此間も私が一寸他へ出かけましたので門の内が散らかつて居るのに氣がつきましたから、長男に「庭を掃いて置いて下さいね」と申ました處「ハイ僕も氣がついて居りました」といつて快く立つて掃除にとりかゝつてくれました」が僕も氣がついて居りましたといふ言葉には、お母さんが仰しやらずとも掃除する積りでしたといふ事が含まれて居ると氣がついてハッとしたのでございます、庭の掃除は長男の受持になつて居りますし、學校の往き歸りは勿論日に幾度となく門を出入りして居るのでございますから、私が申すまでもなく氣がついて居つたのでございます。快く返事はいたして呉れましたけれど心の中には餘り嬉しくない感情が起つたことであらう、も少しいはずに居ればよかつたにと後悔いたした事でございます。かういふ事は何でもない事のやうですけれど、子供の精神上には少からぬ影響を與えるのでございますから餘程注意いたすべき

ことゝ存じます。こんな事を申せば幾らでもありますけれども、それでは限りが御座いませんから、私が今過ぎさりし廿二年間を顧みると、何んな感想が浮びますかといふ事に就いて申上げてお話をまとめることにいたしませう。

△子供の生ひ立ちと共に學ぶ必要

母として最も大切な事は、子供の生ひ立ちと共に、自分も學んでゆかなければならないといふ事でせう。私の經驗によりましても知つて誤ることは少く、知らずして行つて居ることが多いのでございます、私が長男を育てます時には、何も存じませんでしたから、始終仰向けにばかり臥せましたゝめ、頭の後の方が平たくなつてしまひまして、今でも幾らかそのあとが見えるので、私はそれを見て、これは眼に見える誤であるけれども見えない過失は何くらゐ多いかわからない。もしもそれを一々形に現はして見たならば、自分は迚も見て居るに堪へない事であらうと冷汗の流れるやうな思ひをいたします、また私が他のお子様に上げやうと思つて、一寸珍らしい文房具などを求めて歸りますと子供等に「まあお母さんは、もうそんなものは今つかふ人がありませんよ」などゝいはれて、さうですかと て止めにいたすやうな事が御座いますが、お母さんは昔者で今日の事はわからない知らないでは濟みません母は子供のために新しい知識も得てゆくやうに始終心掛けて居らなければならないので御座います。母としての學問は何も書物や、先生に依つて、いたすには及びません、子供を材料にして子供をよく見て居りさへすれば、自然とわかるのでございます。親が子供を教育すると申しますけれども、親はまた子に依つて教育されるのでございます。廿年前の私と今日の私との違つて居ります處は、みな子供のお陰と申してよろしいので御座います。

△人知れず冷汗を流す

それから七歳頃迄の敎育を一番注意しなければならないと思ひます。この間の敎育が人間の一生を支配するといつてもよい位の勢力を有つて居るやうです、三つ兒の魂百迄と申ますが、實際育ちと申すものは爭はれぬもので、何かの場合に出て來るものでございます岡山孤兒院長の石井さんのお話に子供程親の眞似をするものはない。子供は親のいふ通りにはならぬが、する通りにはなるといはれました、實際子供を敎へるには親がお手本を示してやるのが一番です。よくあゝいふ親御樣に何うしてあんなお子樣が出來たのと思はれるやうな事がございますが、其實多くはあゝいふ親御樣故にあゝいふお子樣がある譯なのです。つまり他人からは表向のお母樣しか見えませんけれど、お子樣には裏面のお母樣がよく見えますから、何時の間にかお子樣はすつかりその裏面を見倣つて居らつしやるのでございます。ですから子供が何う斯うといふ事は、つまり親の何う斯うといふのと同じ事でございます。子供などまゝごとをするのを見て居りますと、母親の眞似をそつくりいたします。私共の小さい女の兒などはお客樣を迎へる時の挨拶「さあお上り遊ばせ」から「まことに宅は子供が大勢で御座いまして」など言葉といひ樣子といひまあ何時の間に斯うも見て居ることゝ思はれるばかり私そつくりの眞似をいたします。姉娘などがまあお母樣そつくりですよなど申して笑つて居りますが、それを聞くと私の心の中は身の毛のよだつ思ひでございます。子供には父親の感化ももとよりありますけれど、始終接して居りますものは何うしても母親なのですから、子供に關する責任の大部分は當然母親の負ふべきものといつてよいのでございます。私は子供の弱點が見えます每に、自分の過失を指摘されるやうに感じます。この心は父も知らず、子も知らないのでございますけれど、母親は獨り心苦しく感じて居るのでございます。

△母親の最も大切なつとめ

何よりも忽にしてならぬ事は、母親の健康でござ

います。矢張り私と同じやうな理想をもつて居られた方で、七人のお子様のおありになる夫人が、御身體がお弱いのでとう〳〵なくなられました。其方はお子樣方の事を非常に氣にかけて、私にくれ〴〵も頼むと仰しやいましたから、私も出來る丈けは御同情申上げて居りますが、何しろお母樣のないお子樣といふものはお氣の毒なもので御長男の方などは、私共へ御出でになつて宅の子供がお母さん〳〵と申して騒いで居りますのを御覧になるに堪へないとて遊びにもよう入らつしやらないので御座います母親を母親と呼ぶことの出來ぬ人は何より不幸でございますから、母親は子供のために先づ身體を大事にしなければなりません。遺傳や天災などは何も仕方がないけれど、自分の不注意から病氣を惹起すやうな事になつては、第一子供に對して申譯がございません。（南葵文庫にて講演の梗概）

耶馬溪の夏



一から十まで樣子の違ふ米國の風俗

ドクトル川瀨元九郎氏夫人　川瀨文子

▲私の學生時代

私が米國へまゐりましたのは十二歳で未だ小學時代でございましたが、子供を外國で學ばして見たいと云ふ父の望で彼地に居る親戚に托し、ボストンの小學校へ私を入れたのでございます。處が中學へ入るやうになりましてから不幸にして父が歿しましたので學費が差支へてまゐりました。併し折角遙々參つたのに退學するのも殘念と存じ苦心して居ります內、或資產家の未亡人が卒業まで學資を供給してくれました。この未亡人の名前は校長から聞いて居りましたが一度も顏を見たことがありませんでしたから會つて禮を述べたいと存じ屢々面會を乞ひましたけれども一回も會つてくれません。卒業の時せめて寫眞でも貰ひたいと申込みましたがこれも斷はられました。こんな風にして學費の供給を受けた日本の女學生は隨分多かつたと申すことで、旣に私の跡へ來られた方も矢張この未亡人に助けられました。

▲未亡人の好模範

同情の深いのは婦人の天性とは申しながら徹頭徹尾自分を秘して少なからぬ財を擲つと申すことは却々尋常のものに出來にくいと存じますが、この未亡人なぞは本當の慈善の道に叶ひ、而して資產ある未亡人の好模範だと感心いたして居ります。慈善何々會と云ふもの丶趣意は誠に結構なことでございますが、どうかいたすと掛り負けなぞがあつて會員勞力の割合に收益が少なくその上、口の惡い新聞などで名前を世間に表はす貴婦人の道樂仕事位に評されますのは殘念なことでございます。

▲苦學のお蔭

中學時代は慈善家の手で助けられましたが、カレージへ入りましてからは苦學生の仲間入りをいたしました。併し苦學と申したところで日本よりも種々便宜な方法がございますから割合に働らき宜かつたのでございます。彼地の大學校は暑中休暇が永いのでその間家庭敎師に雇はれたり、裁縫師の許へ手傳にまゐつたり又は彼地で雜貨店を開いて居る親戚の家の貰子となりましたり、色々な眞似を爲て學費を作りました。一體カレージは學課攻の學校で普通家庭向の仕事は少しも學ばれないのでしたから、苦學のために色々な眞似を爲たのが今日になつて少しは家政の參考になるやうでございます。

▲理想と實際の齟齬

彼地に居る間は何でもカレージさへ卒業すれば宜い卒業して日本へ歸つたら筒袖を着て世の中のために働かうなぞと空想を抱いて居りました。ところが親戚の勸めと牧師の媒酌でその頃彼地に居つた川瀨と結婚いたすことに定り、卒業して直ぐに彼地で式を擧げ日本へ歸つてまゐり一家を以つて見ますとカレージで學んだことより裁縫や料理なぞの方が直接必要を感じ彼地でこれらをもつと學んで來れば宜かつたと後悔いたしました。而して主人の體面や習慣上筒袖でお客に接すると申次第にもまゐりかね萬事がこの通り理想と反對になりました。併し子供だけは手製の折衷洋服で育てゝ居りますが運動のためにも經濟のためにも極都合がよろしふございます。

▲唯面白く暮して來ました

御承知の通り彼地では特殊の學校の他は中學でも大學でも男女同席で敎授を受けますし、子供の內から別に男女の隔てを置かぬ習慣ですから、女は自然快活になるのでございます、而して女學生は男學生に負けまいとやつきとなつて勉强爲ますので、どうしても成績が男學生に勝る傾きがございますが平常の交際は却却禮儀正しいもので卑しい態度なぞ微塵もありません

一體に知識慾が盛んな所爲か學事以外のことに無益な心配はいたしません。私なぞも唯面白い〳〵で過して了ひました。私は十年餘もこんな生活を爲て居りましたので日本へ歸つてから世間の交際向が不案内で本當に困りました。

▲女が交ると男が眞面目になる

男女交際のいたし易い彼地の風習は羨ましく存じました。習慣上婦人を優待しなければ紳士の仲間入が出來ぬとなつて居りますから男子同志打解て居



るところへ婦人が一人入つて來ますと直ぐにキチンと眞面目になり煙草も決して吸ひません。良人以外の男子と共に歩いても心配は少しも無く又誰も怪しみません。學生達でも女學生が夜分泥濘に踏み込んで困つて居るところなぞへ男學生が通り合せますと、直に女學生の手荷物を持つて助けてやりその宿元まで送り屆けますが、誰一人怪むものもなし、且かく爲なければならぬことになつて居ります。畢竟婦人が確乎と爲て居るのと男子の公徳が行はれて居る所

爲かと存じますが、この點は至極好都合でございます男の仲へ女が交ると眞面目な談話も戯談と代り行儀もくずれるやうでは却々安心な交際は出來ません。

▲社交を退いた譯

彼地の女學生の服裝でございますが、これは矢張紐育のやうな都會向の學生はいくらか華美でございますが先づ一般に日本より質素でございます。特に私の居つた學校の生徒なぞは何の飾りも用ゐず白と黒との變化位のもので裾を短くし濶歩して居りましたがそれで却々意氣でございました。夫人側でも日本より着物の數が極少く外出着は大抵二着限り（但し上流は別）、而して切るまで一とつ物を着通します。尤も切れた時分にはその折の流行服を拵へますが、間にチョイ〳〵拵へることはありません。それですから會の折にもあの奥様は又あんな新奇なお召物が出來たと目を欹てることもなく、互に流行の眞似をいたし合ふ面倒も要りません。虚飾の悪いことは百も承知して居りましても女はつひ他に制せられるもので、私なぞも歸朝の當時二三の會へ出ました頃は殆んどその度々に違つたのを召す方々の中に自分一人押繪の女のやうでもなぞと、いつしか當初の決心も鈍り、わざ〳〵求めこそいたしませんが、切れも破れもせぬ紋付の染直しをいたすとか又は平常着でも求める折一寸流行の反物を呉服屋に見せられますと、先達彼の御方の召していらつしたのは是れだなぞと胸に浮んでうつかり買ふ心も出ると云ふやうな風になりますので、私のやうな不精者が出ましたとて會のために何のお役にも立たず、自分も唯衣服の苦勞を増すだけではと存じて唯今では家のお三どん一方を働らいて居ります。

▲良人の朋友は大切

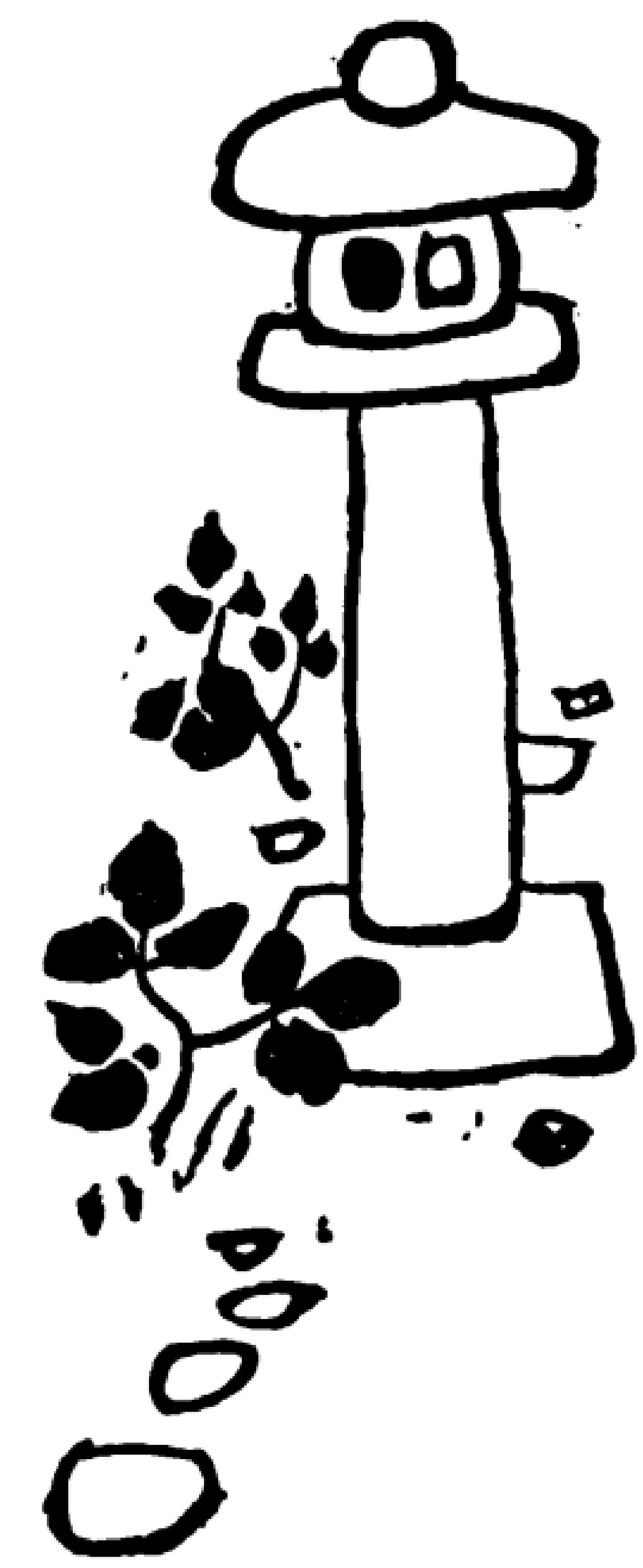
私のやうな不手廻りなものが方々の會へ出ました爲に良人に少なからぬ不都合をかけました。定時間より延び勝な閑散を濟して慌てゝ歸宅して見ますと、良人は下婢の給仕で夕食を了つたところ。子供等は淋しる

うに待佗て居ることが毎々でございました。無意味な暇取を爲て一日の勤に疲れ果てた良人の夕食の世話も出來なかつたと存じますと氣の毒で堪らず、女は如何しても家庭に盡すべきものと反省いたして引込思案となつたのでございます。而して交際は淺く範圍を擴めますより內輪の親密な交際の方が精神上の裨益にもなり特に良人のお友達は何より大切だと考へまして珈琲會と申すやうな集りでもいたして親友を招き私も御相手いたさうかと存じて居ります。





米國でも上流婦人は交際上自然流行に捕はれ、外出勝のために子供の敎育も中流ほどに行屆きません、大抵家庭敎師任せか學校へ出しても花やかな科目を主にする學校へ通はせ眞面目に頭腦を養ふと云ふ注意は少し足ぬやうでございます。中流婦人は大抵道心堅固で慈愛の心深く而して經濟に行屆き實に模範的の行を爲て居ります何の國でも裏面には何か缺點もあるでせうが新聞雜誌は成る可く包んで居りますから社會が自然體裁よく保てる樣に存じます。（談話筆記）



雜記帳

與謝野晶子

×

源氏物語の夕顔の君で、紫式部は源氏の君の口を假りて「はかなびたるこそ女は愛たけれ。强く人にならびかぬ、いと心づきなきわざなり」と云ひ、又「女は唯やはらかに、とりはづしては人に欺かれぬべきが、さすがに物愼みし、見ん人には從はんなんあはれにて」と云つてゐる。式部は半可通でお俠な女が嫌ひである。又意志ばかり强くて溫味や濕ひの無い、物の哀れも趣の風情も知らない樣な女が嫌ひである。濃かに優しい感情を持つてゐて、人づきあひも柔かく、うつかりすると男の輕はづみな情にも絆されて過ちをさへ仕出かし相でありながら、自ら衞り愼む心深く、能く其誘惑に堪へ得る女であつて、而も眞に我を辱しめぬ立派な人格の男に愛せられては、一生を捧げて悔いない樣な女を、式部は好くのである。

×

女子高等師範の校長中川先生や同敎授下田次郞先生などが、眞實の意味の高等敎育を女子に勸めて入らッしやるのを、私は嬉しく思ふ、奈良朝や平安朝でほんの女子の一部に高等敎育を奬勵した丈でも、あの樣に多くの立派な皇后、皇女、賢夫人、才女を出したでは無いか。學問技藝を男子の獨擅の樣に思ふのは僻んだ考である。天照大御神を禮拜した民族の子孫は、もつと女子を尊重して婦人の價値を引上げる事は寬大であつて欲しいと思ふ。帝國大學を開放して自由に男女の傍聽を許すなどゝ云ふ事も成るべく遠からぬ將來に

實現して欲しい。日本の博士と云ふ人々を悉く尊敬すべき學者だとも私は思はないけれど、まだ一人の博士からも口づから講義を聽く事の出來ない樣な女子教育は慘めである、女子教育に携はつてゐる人で高等の教育を受けた人と云へば大抵學士であるが、其學士の中でも歐洲を見て來た人は下田次郎先生お一人位なものである。

私は以前から下田先生を尊敬してゐる。決して同じ文學士でも〇〇〇さんなどゝ一緒に云ふべき人で無いと思つてゐる。併し先生は近頃妙な事を折々お述べになる。或雜誌の上で家族制度の重んずべきを說かれた中に「皇室を初め奉り細民に至るまで同じ祖先から出たもので、國を擧げて一大家族制を成してゐる」と云ふ意味を述べられたなどは、皇室に對して不敬の語であり、同時に先生の日本歷史に昧い事を示された事にも成つてゐる。皇室を初め奉り其御系統である神別皇別は優秀なる貴種の天孫人種であり、其他の國民は熊襲、アイヌ、土蜘蛛、國栖、蝦夷、佐伯、支那、朝鮮等雜多の人種から成立つてゐる事位は、格別新刊の古代史や人類學考古學の書物を覗かずとも、舊い姓氏錄を讀んだ丈でも見當が附く事である。是等の蒼蠅なす異人種を征け和して巧に統御せられた所に天孫人種の尊嚴を仰ぐ事が出來るのである。皇室と土蜘蛛などの蕃族とを同じ祖先から出たと云ふのは、文部省の直轄學校に奉職せられる先生のお言葉とも思はれない。小松原英太郎氏が之を聽かれたら、必ず戰慄せられる事であらうと思ふ。

下田先生は又同時に祖先教を奬勵して「祖先崇拜は日本の特色であつて、日本の家には必ず佛壇なり神棚なりを備へてある。今日田舍の家庭では之がよく行はれてゐるが、東京あたりの家庭には佛壇も神棚も無い家が多い。之は甚だ憂ふべき事で亡國的の徵候を來してゐるものと云はねば成らぬ」と述べられたのは、實以て意外の感がする。何處の國に父母祖先を尊敬せぬ人間があらう、其れは自然の德性であるから印度や支那朝鮮の昔にもある。決して日本人に限られた特色で

は無い。よし又其れが我國の特色であるとしても、古來の特色が一々今日に價値のあるもの、是非保存し奬勵せねば成らぬものと限つては居無い。先生が漫然と特色と云ふ事を楯に取られるのは途方も無い間違を惹起す本である。腹切は源平以來の特色、異母兄妹の結婚はずつと古い神代からの特色、陰陽崇拜は神道發生以前からの特色、斯樣な特色をも保存せねばならぬ結論に立到るであらう。

私の考では、祖先を尊敬するのは自然の人情であるから、特色だなどゝ間違つた理由で以て大袈裟に奬勵するには及ばないと思ふ。況して其れを宗教として奬勵しようなどゝ云ふ事は、思想の進歩を無視した反自然の迂論である。先生はまさか歐洲近代の文明が基督教に反抗した所に源を發し、神權や教會の威嚴が全く今日の識者は勿論多數の文明人間に認められて居らぬ一大事實を御存じない事は無からう。

祖先は尊敬の程度に止めて置くがよい、崇拜するには當らない。一家の祖先などには隨分愚劣な者もある。今日の知識情操から比較すれば大抵見劣りのする祖先が我々の家には多い。大名華族の祖先などには皇室に弓を引き、親子兄弟相殺し合つた不忠無道の人も少く無い。其等の祖先を毎朝禮拜せよと云ふのは民を愚にするものである。教育勅語の御趣旨にも悖る事である。私は祖先などを崇拜する位なら、日本は勿論世界の偉人を崇拜した方がよいと思ふ。まだ其方が將來かけて廢らぬ自然の人情だと思ふ。併し古人を一概に崇拜するのは我を卑屈にする弊があり、又現代の偉人の價値を沒却する嫌があるから、決して奬勵すべき事では無い。殊に今日の樣に、鎖國時代の消極主義者たる二宮金次郎や、秩序紊亂者殺人犯者たる赤穗四十七士佐倉宗吾などを崇拜するに到つては非文明も甚だしいと思ふ。

又下田先生は「田舍には神棚や佛壇が多い」と言つて、其れを一概に美事として居られるが、果して田舍には其丈の宗教心が盛であるか何うかは疑問である。神棚や佛壇の多いのは、其丈田舍には未だ舊い形式が

殘つて居つて、新しい文明に觸れない老人達の固陋な勢力が餘命を保つてゐる證據だとも見られない事は無い。教育は若い者に對する教育である。教育者たる人の發言は若い者の實際を見極めた上で爲て戴きたい。今の若い者の思想感情には概して都會と田舍との區別は無いと思ふ。其れを御承知なくては可惜議論が時代遅れに成つて仕舞ふ。

も一つ序に下田先生にお尋ねしたい事は、先生は祖先教の御信者であるか何うか。先生のお宅には現に神棚や佛壇を備へて朝晩御祖先の位牌に御禮拜を遊ばすか何うか。年頃先生の御著述などを拜見して窃に敬意を表して居る私には、どうも然う云ふ實際の御經驗とは想像がつかない。而して少し之は邪推かも知れませんが、近頃歐米から歸つて來られた床次と云ふ半可通のお役人が頻に家族制度や宗教の必要を說かれる。あれにかぶれて當局者に氣に入り相な場當りを云はれるのでは無からうかとも想はれる。

×

古人の特色は參考としてのみ尊い。我等は別に我等の新しい特色を出したい。古人の生活を其儘に承け繼ぐ事は屈從である。我等は新人の生活を創めねばならぬ。我等が獸、野蠻人、奴隷としての生活でなく、面白い「人」としての生活を。

×

他を批難する人は自己の事に未熟なれども、元氣に滿つ、更に其の未熟を補ふを得べし。他を寛容する人は人生に通ずる所多けれども、元氣を缺く、又何事をも爲す能はざるべし。前者は青年、後者は老人。

×

わたしは二宮金次郎の消極的な經濟主義は嫌です。併し金次郎が『幼い子供が父さん母さんと喚んで外から歸つて來たなら、親はどんな忙しい事のある場合で

も直ぐに返辭をして迎へに出て遣れ」と云つた語なんかは好きですよ。金次郎も此語で初て人間らしい親みを覺えるのですが、あの人の傳記になせ斯う云ふ味のある語を洩して置のでせう。

×

治者になりたい。貴族になりたい。權力の府になりたい。併し其れは虛榮でなく。實力の伴うた聰明なる治者、貴族でありたい。妙な事に今日ではどうやら被治者平民の方が物識なのである。之は變調である。早晩世の中の組織が其の位置と價格とを顚倒せねば已

まないのであらう。

×



自由劇場の第二回を觀て、舞臺監督の小山内さん、左團次莚若等の俳優、其れから滿場の觀客、何れも新しい藝術の熱心家揃ひであるのには涙を流して嬉しく感じました。エデキントの一幕物でオペラ役者に左團次が扮したのは情合が移りませなんだ。羽左衞門の樣な男振の役者にさせたらと思ひましたが、若し羽左衞門が扮したなら

又別の意味で可笑しかつたでせう。中幕の「生田川」は背景が餘り明る過ぎて人物の氣分と合ひませなんだ。あの脚本はどちらかと云へば能掛の粗撲な趣で演るべきもので、あゝした派手な背景は却て調和を破るかと思ひます。或新聞の評に『萬葉集にある史實の生田川を脚色し云々』とありましたが、萬葉集にあるのは蘆屋少女を詠じた蟲麻呂や家持の歌であつて、其等の歌には生田川と云ふ川も鵠の事も歌つて無いのです。後世の大和物語に初めて詳しい記載があり、又後には同じ事が謡曲にも作られて居ります。

私は其夜、左團次や莚若などに全く舊劇を止めさせて、斯様な新しい劇のみに專ら力を用ゐさす様な保護者が貴族や富豪の間から起れば宜いと、當も無い事を祈つて歸りました。

×

伊藤公の薨去後半年の内に政治の舞臺は全く山縣系に歸して仕舞つた。榮華の夢は平家ばかりで無い。いつか亦山縣系にも同様の運命は廻つて來るでせう。私は知名の政治家にお勸めする。古の權家には優れた人格が多い。其等の人々は當面の政治以外に猶幾多の不朽なる功業を學問藝術の上に貽して居ります。飛鳥、奈良、平安、鎌倉各時代の宗教、學問、文藝、美術が今日に傳へて光輝あるのは、概ね當時の權家が保護し奨勵したのが一大誘因になつて居る。今の權家も其れを學んで戴きたい。差詰伊藤系の人々は政治上の競爭を見限つて、其力を此方面へ轉じ、藤原氏や在原氏が爲した如く、勸學院、奨學院の如き私立大學を興すとか、書堂を建てるとか、私立文藝院を創めるとか、詩人、學者、才媛、音樂家、畫家、俳優などを歐洲へ留學さすと云ふ様な美擧に出て欲しい。昔は道長の一門に政權が移れば、他の藤原氏や源氏は容易に勢力を挽回する事が出來ない。其れで皆宗門の人となつたり文藝美術の方で驥足を伸さうとしたり爲て仕舞つた。今後もう末松子爵や伊藤博邦公などが大臣になられる見込は無からうと思ふのです。

×

日本の婦人の會話も聞いてゐると、無意味な敬語の助動詞許りを交換してゐる様だ、と或人が云はれたのは同感です。婦人許りでなく、男の方の會話も隨分內容が乏しくて下手ですね。文章では緻密な高遠な而して相應に趣のある事を書く人でも、座談となると全く平凡な無駄話に時間を費してゐるのです。色々の原因もありませうが、日本人の無學が第一の原因かと思ひ



ます。偶ま蘊蓄のある方でも聽く相手に理解する丈の豫備知識の無い事が分つてゐるから、態々差控へて、相手の平凡な話に相槌を打つに止めて置かれるのでせう。私は鷗外先生や上田敏先生などの御話を承る度に、よく其御斟酌が見えるので自分の無學を愧ぢて居ります。尤も、此兩先生は申す迄も無く學問其他社會の多方面に通じて居られて、其上會話が御上手ですから、どんな階級の者にも逸らさないでお話をなさいますが、專門の事や用向の外には口が利けないと云ふ

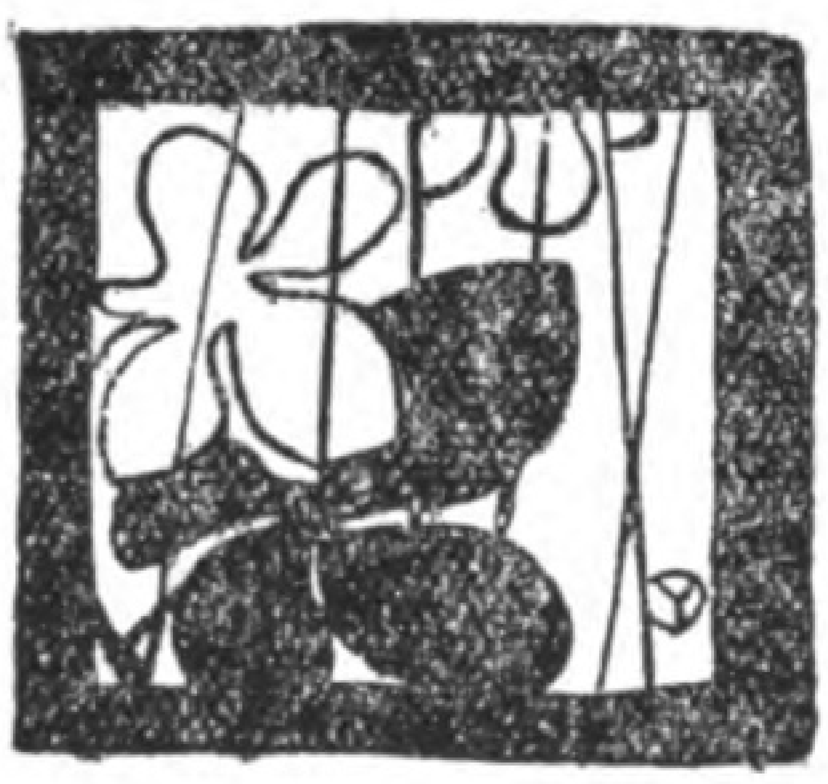
様な紳士は、清少納言なら凄じい物の中に入れるでせう。

×

東京の女學生の中で女同志の會話に君、僕と云ふ詞を盛に用ゐる仲間がある。私は其れを何と云ふあさましい事かと思ふ。併し斯う云ふ流行も過渡期の變態である。識者は之を咎めるよりも進んでもつと此等の半可通と似非ハイカラアとを煽り立て、早く其階段を過ぎて、ヅッと幾階か上に奥ゆかしい眞のハイカラアな殿堂がある。其處まで昇りつめよと導くがよい。保守的消極的に叱ッたり壓へたりするのは宜しくない。維新の志士の中にでも弘化年度には歐洲にある無政府黨員の様な無頼浮浪の壯士が混つてゐたが、大禮服を著る時節が來ると眞逆沐猴の衣冠とも見えず、隨分立派な大臣や元老の風采を備へて來るのである。今の一部の女學生が歯の浮く様な半可通を振廻すのも、立派な文明の淑女たる位地に達する階段の第一歩で、其れに蹉いたからと云つて以前の女大學流の敎育に戻さうとするのは間違つてゐる。識者は手を引いて早く其階段を昇らすがよい。

×

小説家の國木田獨歩さんが自分の失戀を書いた物の中に、戀人に毎日薩摩薯の粥ばかり食べさせて置いて而して其戀人に逃げられる處がある。何と云ふ腐甲斐ない人であらう。自分は獨歩さんの失戀に少しも同情が寄らなくなつた。





呉服屋の手代に附廻された娘の衣裳

洋畫家　神中糸子

▲褒められた平常着

私が畫を習ひ始めました頃は女學生は特別志望の者の一部位なもので從つて髪や服装なぞも唯今の方ほどかまはないやうでございました。で私なぞも矢張その部類ではございましたが、段々畫學の緒が分るに從つてこの方の趣味を應用して身なりをも研究して見たくなりました。併し親がゝりの學生の身で衣服の好みも申せませんし、又別に新調して見たいと云ふ方の考はなかつたので、唯有合せの品で色々と配合を爲て見るのが面白くなつたのでした、こんな趣味を持ちましてから近處の人や友達なぞに平常立派な服装をなせするかと申されましたが、實際は何一とつ強て買ひ求めたのではなく襦袢の襟と着物の釣合だの帶の柄あちこち取交へたりすることなぞを描畫の暇にやつて見る位のものでした。併しその頃師と爲た某畫伯が私の常着の配合を分析的に褒めて呉れました時は、いくらか取合せを覺えたのかと存じて嬉しうございました。

▲呉服屋の手代に附從された着物

畫の方で少しづゝ收入があるやうになり自由に衣服を造る境遇になりましてからは流行なぞには少しも頓着せず自分に似合さうな格安な品が見當ると求めました。イエ私の身なりでは隨分滑稽談がございます。或博覧會で求めた小豆色の珍らしい小紋縮緬を羽織やきものに仕立鹿角を細工した根掛を紐に應用し、唐人髷に銀丈長の巾廣と云ふ若やいだいでたちで外出しましたら往く處で視線を引き「良い風ネ。」と云ふ評語を耳に爲ました。而して或路で一人の壯夫が跡をつけてまゐりましたので氣味が惡くなり横道へ外れました處、

背後を付けますから足を進めてふりかへつて見ますと彼は呉服車を曳かした手代に、「矢張縮緬だつた」と話して居ました。抜目なく私の珍柄羽織の詮索をいたしたのでございませう。縹緻の良い方が褒められるは當然ですけれども私のやうな醜い者が假令敝女でも褒められたのはこれで取合せのお蔭かと愉快に存じました併し唯今皆様に繪畫上のおはなしを申上るやうになりましてから却つて自分は無頓着になり唯人様のおなりのお世話が焼きたいやうになりました。

▲他人の着物を見立てる

私は以前通りがけの呉服店に一寸目に入つたものがつるしてありますと誰々に着せて見たいと思つて直に買取つたことがございました。それで何時も反物で見ては誰も感心しませんでも身に着けると誠に宜しいのでつい道楽になりましたが如何なる場合にも經濟問題は頭脳から離れませんでしたから、安心して居りました。

▲夏襦袢の襟と半コート

私はコートが未た流行出さぬ内から一種の格安な舶來布で拵へて着ましたので大層贅澤のやうに評されました。近頃は純雨具式のコートは廢れて半コートが流行出しましたが、これは實用より美の側でせうから羅紗やセルより羽織地の方が宜いと思ひます。合羽式の物を召すならば在來の長き方がゆうびにて昔の武士の半合羽のやうに足の方もキリツと用意なされた方が釣合ふでございませう。で矢張半コートは羽織か被布のつもりで地質を選ばれた方が程がよいやうに思はれます。又夏襦袢のえりの下に肌着の襟を着はしたのも不細工でございます。つまり高價な襟を用ゆる身分のお方なら襟を毎々取替へられても宜しいでせうし、出來ぬものは洗ひ易い麻か又水に入るゝも縮まぬ絹位をかけて心配なしに着た方が宜しく何れにしても二枚襦袢は熱くるしくもあり物欲しさうに見えて面白くありません。それから日本人は幼兒に桃色やとき色のリボ

ンをよく用ゐますが、その色は可憐で美しいのでありますけれども子供の内はよい髪でも眞黑のが少いものですから、どうもこんな色はうつりません赤味の多い毛には猶更惡るいので天然の愛らしい姿を失ふのでございます。

▲お重の内まで美の觀念

美術とか工藝とか申すと經濟一方の婦人は縁遠い感じが一寸いたしますが、客間の書棚よりお鍋の葢まで美の觀念を持て作られてあることを考へますと、一家の主婦は工藝品を集めた中に暮して居るやう



なものでございます。その取扱ひ方見合せ方なぞは諸雜誌に山ほどかいてあつて私共の申までもありませんが、實際些細のことにまでこの觀念が働らくことを感じます。假令は昔からやりくりする彼岸のごもく飯は貰つた方でお重をバタリとうつむけに明けた時底の方が見苦しくないやうに加役を載せて置きますが矢張元のやうに重箱の上の方が綺麗なものですから、到來したお重は一度器へ明け又他の器へふせてあけますと元の通りになつて送つた人の意匠も見え満足に感ずるのでありませう。

こんなことは主婦の氣轉でございますが矢張家庭に及ぼす美術の一つかと思ひます。

▲家庭に及ぼす畫學の効

專門に入ることは一部の婦人に限ることですが、一般家庭に應用の出來るだけの畫學の素養は女に必要だと存じます。前申上たやうな經濟で優雅な衣服を考へたり座敷の飾付、お料理の取合せなぞも自然に畫學の趣味が活用いたしますし、花たばを作つても美しく出來、子供にお話しをするにも畫で說明が出來、少し進めば旅行して氣に行つた風景を手帳にざつと書き入れて自他を悦ばせることも出來ませうしその他刺繡、造花、編物なぞの手藝をされる方には畫學によつて目の力が非常に發達いたしますさうで、私は先年日本女子美術學校刺繡科生徒に實物を寫生して自から下繪を作る稽古を聊か敎へたことがありましたが、生徒に刺繡下繪を模寫させて圖畫を見る事と畫くことを養ひ小菊の枝を袋に縫箔してもあまり圖畫に無責任でないやうに注意を加へて見ましたが、それは自分ながらも必要と思ひました又精神的から申しますと、畫心のある婦人は偏癖に流れず虛飾にとらはれず、胸中常に綽々として淸い樂しみがあるやうに思はれます。洋畫は專門家になるのには天稟も要り骨が折れますが家庭應用の程度位までならば一般の婦人に至つて習ひ易いものでございます。私方へお出の方々にはそれ〴〵御望の向に從ひ當はまるやうな方法でお稽古いたして居りますが、私の元來の希望は家庭向の趣味を養つて上げて見たいのでございます。

記者申す神中女史は毎土曜日毎に根津西須賀町五番地のお宅で門生方を敎授して居られます。



女ナポレオンに面會した記

一 記 者

米國ニューヂャーシー、レントンのフヰツシヤー商會の女主人、カール、フヰツシヤー夫人は、駐米淸國公使吳廷芳が評して「米國一の女傑」と云ひ、世俗には「女のナポレオン」と呼んでゐる位の女傑だ。その夫なる人の父君は、世にも稀れなる萬力と、鐵鉆を發明して特許を得て巨萬の財を作つた。後夫は汽車より落ちて脊骨を打ち、馬車や電車ではヒシ〳〵こたへてたまらぬと、そこで自働車を用ゐてゐたが、數年前に死んだ夫人は代つて六十名の職工を監督し、傍ら自働車を飛ばして東西に奔走するのを娛樂とした。今や世界漫遊の目的を以て去る四月二十七日日本に來り、神戶から沿道の嶮惡を犯し、幾多の大冒險をして東海道を上り、箱根から熱海の間では、雨風の夜峠で野宿したと云ふ。豫て轉地療養中なりし記者は、彼の女熱海ホテルにありと聞いて、快遊の小手はじめに、訪問して一夕を快談した。



△

場所は熱海ホテルの西洋館の廊下。窓外に一碧の風光畫ける如く。波の音一定の律をおびて響く。

「此方がフヰツシヤー夫人。この方が、何々と言つて、轉地療養中のヂャーナリストです」內山通譯が紹介する。會釋して温かき握手。卓に鼎座して、國はかはれど、矢張紋形の挨拶から始まつた。僕英語を解せざるにあらず。されどズヰブン破格の短刀直入であるから、通譯がゐる以上おとなしく控へるが智ある業である。

夫人は六十に近いさうなが、よく太つた。頰の赤い頗る樂天的の容貌である。自働車上衣をきて、頭には伊太利のロツトクラブの徽章のついた帽を戴き、ネクタイにはすばらしいブローチ。指には寶石入の指輪を五つも六つもはめて、スカートの代りに、熱海名物の雁皮織の――大枚三圓五十錢の袴をはいて、表情と身ぶり澤山でよく語り、よく笑ふ。ヂャパニースハカマ實によろしい。國で工場の梯子へ上りおりするにはこれ第一。下から見ても不細工でないと喜ぶ。

自働車の冒險、蠻地通過談、殖民政策。日本の外人誘導策。そんな事は割愛しておかう。僕は日本の婦人についての所感を質れると、「左樣、神戶上陸以來日も淺い事ですし、日本婦人に知

己もなし、言葉も出來ませんから、深い觀察は致しませんが。お國の女はおとなし過ぎるとおもひます。遠慮なく申せば、小さい家に住んで、單調な生活をして、食して、たゞ子供を生む機械に過ぎません——」

内山通譯も僕も聊かギヤフンの爲體。通譯はしきりに日本の良妻賢母主義を說く。僕は、東京で是非「日本女子大學」を參觀なされよとすゝめた。

「日本女子大學？　何だか見たい氣がしますね。私が行つても參觀を許すでせうか」

「喜んで許すでせう。何なら成瀨校長に紹介狀を書いておいてもよいです」

「オヽさう願へれば——是非々々—。」

△

話は良妻賢母主義にもどる。彼の女の唇は語るらく「良妻と賢母とは女子の理想です。家庭で必要なのは裁縫と炊事と會計のきりもりの三つでせう。私は三つとも勉强しました。中でも炊事は自慢なんですよ」

内山通譯は口を添えて、

「一昨夜輕井澤峠で大風雨の晩野宿しました。ミセス、フオツシヤーは大いに料理の手なみをあらはしたのでした」



彼の女は灰色の眸に笑をたゝえて。

「それからも一つ必要なのは看護で、婦人の天職と云ふべきでせう。話は飛びますが、私の愛犬を日本につれて來やうと思つたら、船で許さないのです。船長が親切な方で自分のものとして、私共より一と船先に日本へつきました。するとその友達の英國人が、預かつて非常に可愛がつて下すつたのですよ。大變そこの子供にもなついてれエ。私がいよ〳〵日本內地の旅行に上るのだと云ふ時には、

「つまらないなア。犬行つちやうのだとさ」

と皆な鼻を鳴らした位です。その時この英國人は病氣で床についてゐましたが、どうも私の睨らんだ時ぢやチブスの樣なんです。お禮と申せば現金ですが、兎に角犬を可愛がつた方ですもの見すてゝは行けません。看護婦は嫌だとおつしやるので私が一と晩つききりにして、花を活けたり、話をしたりして早く醫者におかゝりなさいと云ひのこして立ちましたが、はたしてチブスで、手あてが早かつた爲め、もう恢復期に入つたと禮狀を靜岡でうけとりました。女として看病の心得のないのは恥しい事です！」

語る處へ、自分が話題にのぼつてゐるとは知るや、知らずや犬コロ先生やつて來た。ブルドツグと云つて獰猛無比の一種。主人に忠實で、他人には勇敢で、食ひついたら首がチギれても

離れぬといふ。ブルドツグに二つ有名な種族があつて、イングリツシユ、ブルドツクと、フレンチブルドツグ。これはその雑種で、ボストン、ブル、テーラーといふのだと字まで書いて呉れる。名はホンキー。蓋し自働車のラツパの音は日本人にはブーブーと聞えるが、西洋人には Honk, Honk とより聞かれないその音から彼の名が出たのであると、説明する時、ホンキーはテーブルの下の三 人の足の尖が突き合ふあたりへもぐり込んで、何か倒して、ガチヤンと大きな音をさした。

「ホンキー!!」

とフヰツシヤー夫人が叱る。モンキーを想ひあはして、をかしく、ふいと部々の内を見ると、偶然にも本物のモンキーが鎖につながれてゐた。これも夫人のペツトの一つであらう。明治の孫悟空は自働車の旅をするかとほゝゑんだ。

△

いろ〳〵の會話の末に、

「御主人はおいくつでなくなつたのです！」　と僕が問ふ。

「オヽ吾夫？――」　一味悽愴の表情がその樂 天的の面を走つた。

「今生きてゐれば七十二。私とは隨分違つてゐました」

鮎皮の名刺入れをぬき出した。　天保錢入の寫眞と、一葉の古



名刺とをぬき出して示し。寫眞はこれ良人の肖像。額の廣い。四角い顔の精力の强さうな五十男の胸から上がうつツてゐる。名刺には Mr. Charl Fisher とあつた。亡き人の形見を肌身離さずつけて、世界を冒險してあるく彼の女は、鮎の敏捷に鳩の心を兼れ具へたるものだ。

僕は父なくて育つた。彼女の良人は脊髓に故障があつた。何となく同情の念がわきおこる。二時間の長物語、愉快なる夕よ。

僕は立つて歸るといふ。"I will meet you again" と日本語でどう云ふかと通辯に問ふと、

「マタ、オメニ、カヽリマセウ」と答へる。「マタ、オツメニ……very difficult ….」と仰山な表情をして、どんと尻もちをつく籐の椅子がギーと鳴つた。

沈默。波の音、夕は欄外に迫る。

僕はからうじてかう云つた。

「私の健康が全く恢復した日、私は是非世界漫遊に上ります。」

私は支那や印度へ行くでありませう。エヂプトへ行くでありませう。而してギリシヤ。而して伊太利……貴女のローマの別莊を訪ふかも知れません。いやそれより或は米國から先づ廻つて、レントンの工 場のハンマーの響のうちに貴女と手を握りたいと思ひます！」

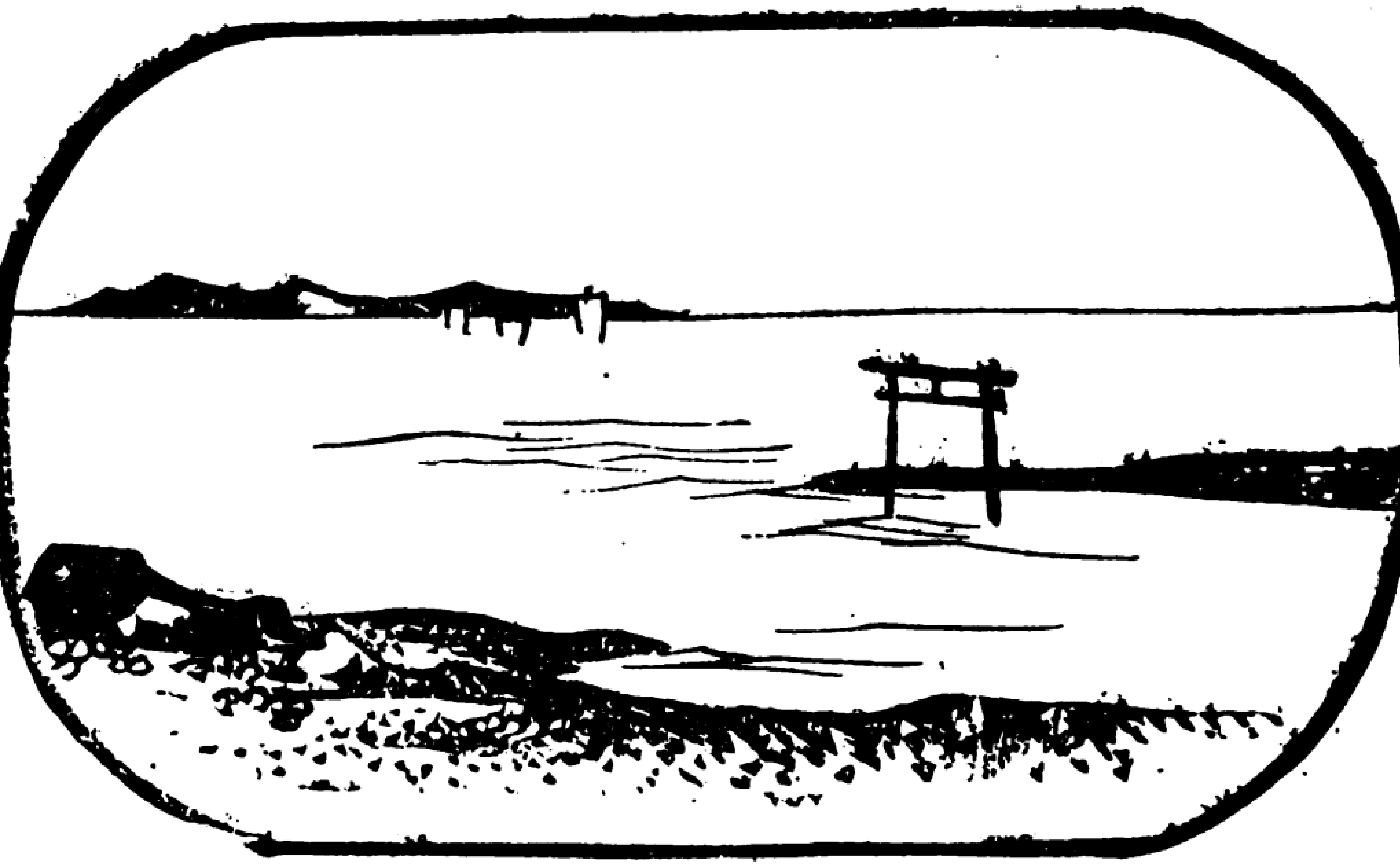
快然として彼の女は笑つた。

涼しき室內裝飾

微笑庵主人

居ながらにして白砂靑松の境に遊ぶ趣向

この頃はおひ〳〵趣味も向上してきたものと見えて茶の湯、生花の樣なものは勿論の事、香道などゝいつて久しく中絕して仕舞つたものさへ、復古したとでもいはふか、彼方此方で「これは柴舟」などゝ、小首を傾けて、翫賞してゐるものも見受けられるが、盆石盆山などは、一つは室內の裝飾ともなり、幽趣を添へるところからでも



あらう、日に〳〵上品な家庭には現はれて來る樣である。そこで今までの床飾や、棚下の裝飾ばかりでなく、室內に吊り額の樣にして、壁間にかける事も出來るもので、客の種類、四季の時節、祝儀不祝儀等、その時々の事情に從つて、好みの盆を打ち上げこれを壁間に吊して、室內の裝飾ともし、また幽邃な境に思を寄せられもする。

　この吊額風の仕立にするには、床飾に打つのとは、打方も全然變つてゐて、微風にも散つて仕舞ひさうな白砂を重に使つたものであるから、チヨツト此道を知らないものゝ眼を驚かすもので、それに黒蠟色塗の盆地

の上に瞭然と明媚な風光を白砂で描出してあるのでその器は小さくても、チヨツト衆人の眼を惹附けるだけの價値は十分あるものです。これには留砂といふ方法があるので、糊で盆の上に白砂を一時とめておく事ですが、何でもない樣な事ではあるが、これには手練を要するもので、盆石が十分打てゝ來なくては扱へませんが、室飾としては上品で、その家の主婦たる人の心意氣も奥床しい樣に感せられる。この頃見受けたものを二三擧げて見やうならば、



第一、吊額、「伊豆朝日の瀧」

圖様は狩野派あたりの繪に見ると同一形式ではあるが、峨々たる兩岸相迫りたるところ、白絹を疊みかけて、垂らした樣に、岸上には古松二三本、幾千年の霜に曝されたるを粧點ひ、向ふは天空、黒色の盆地にて見切りたるところ、別に技巧を弄びたるところはなけれど、夏の盆としては、清涼の氣、膚を犯す樣で、面白いところがある、殊に繪

書とは違ひ、盆面に白砂を以て、自由に高低凹凸を現はす事が出來、自然の陰影を示してゐるので、技術の上のものでありながら、チヨツト小さくして自然の風光に接する樣な氣になれるところがある、吊紐は水色を用ゐて、目立たぬ樣にして盆面を生してある。

打方は波ヒに砂を掬ふて、先づ兩岸の形を打つ。羽を使つて、岩石の屹崛たるところを描いて形を整へる。それから波ヒで飛瀑を描き、羽



で勢を見せ、玉ヒで古松を印し、霞板に薄く砂を掬ふて、岩石の裾をぼかして、羽で岩石及瀑頭を綺麗に拂つて見切つて仕舞ふので、打方には別に違ひはないもの丶、最初に留砂の手數を施すだけの事である。留砂は各流とも傳授ものとかいつて秘して、技の進まないうちは、授けない事にしてゐるのである。それ故留砂の盆でも打つてあると、奥傳以上の腕前の人、人の師たるを得るものとしてあるのである。その位であるから圖面は概ね淡彩としたのが多いが、總て其術が枯れてゐるから、何れも何處やら味ひのあるのが多い。

第二、床飾「稲毛の海岸」

盆面下手は白砂遠く亘つて、左手に捨石二三を粧點ひ、右手砂洲の海中に突出せるあり、すべて波靜なる遠淺の景、波打際よろしく、水神の鳥居、遠く房州の連山を水平線に見切り、白帆二三點ほの見ゆるところ寛濶なる夏の海面、何れも清涼の味を含ましてある。

打方とて別に新な趣向もなし、技を弄んだところはないが、所謂淡泊打上げて、涼味を持たせるところが手極なので、靜波も春の波とは、少しく趣を異にしてゐるし、下手の粧點も成るべく濃厚からぬ樣にと、省略を旨としてゐる。

第三、留砂、吊額式「海上の不二」

圖に示す樣に、浪の上に遠く不二山を見せたぎり、別に一物もなく、只白砂だけの技巧であるが、怒濤天を摩するとでもいひさうな、勇壯で宏大な景致、繪畫でもなか／＼凡手の企て及べないところ、しかも白砂のみを使つて、逆巻く浪の、潮の花ともいふべきところに、十分の力を用ゐてあるだけ、あとは盆の地黒を利用して見切をつけてゐる。纔に二尺の盆の中に、この天地の宏大な現象を見せて、眉に粟を生ぜしむる趣向、夏向の壁飾としては、至極適當なものかと思はれる。羽と、匕と、霞板とを使つての細工で、よくもこの雄大なものが現せたと、自分は感じたのである。

打方も別に他と變つた事はない。匕で概略浪の形、不二の恰構を拵へ、羽で浪頭など、その人の腕次第の力をあらはして描出すので、あとは霞板で薄く白砂を撒き、全體の化粧をする、それから上手の見切を、羽で綺麗に拂つて、地黒を見せるのである、これも矢張留砂の法を施しておかなくては、砂が留つてゐません。

この頃見た盆のうちで、先づこの三種が、夏の趣向からいてふも、技巧からいふても、衆人の眼に留つたものらしく、十人が十人好きさうに思はれる。

鵠沼の半日

佳人の奇遇

花散里

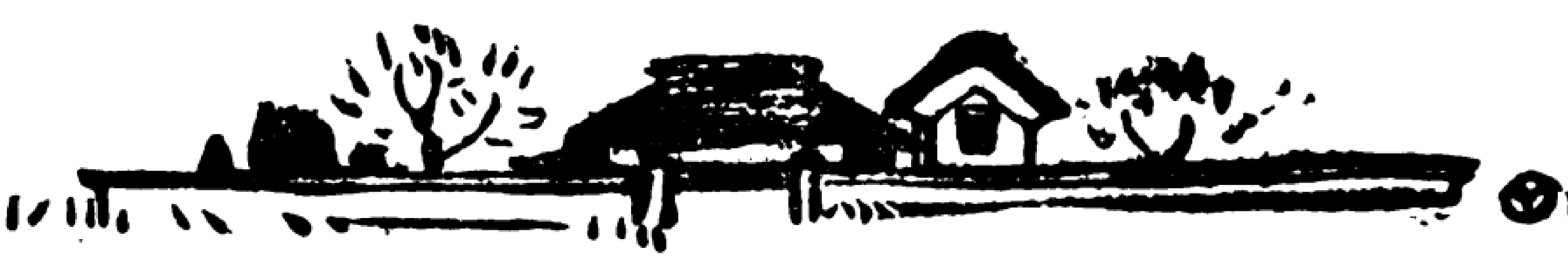
戀ひこひて夜毎々々の夢に入りし、あゝなつかしき鵠沼のあたり、そこに住みます未だ見ぬ友を、いよ／＼今日は訪れまゐらせんとて、空の漸うほの白む頃床をすべつて端ちかく立つ。仰げば淡き曙の色、光かすけき星いくつ、昨夜の御玉章にぎりしめて「あゝ萩香さん!!!」と我にもあらで叫ぶ途端に鉢のひなげしがハラ／＼とくづれた。

萩香さんには榛原のレターペーパー、縫子さんにはリボンにしませうと昨日出てとゝのへた御土産の包みを再び用も無いのに解いたり閉けたり、ゆくての希望に胸の小鼓は高鳴りして……

着替を終るや手をついて御挨拶すると

「オヤもう御出掛け？、お忘れものゝない様にね」と衿かき合せて娘様も玄関まで送り出て下さる。

「まあ嬢子様は御飯もめし上りませんで」



青葉にかをる初夏の風をセルの単衣の衿に浴びて乳母の聲は背に聞いた。此處本郷の片はとりから新橋までの朝の路を辰吉が俥の韋駄天走り、ガラ／＼ッと勢よく梶棒おろすや時計を見るとまた七時パチンと蓋して帯にはさんで、さて發車までの三十分、あゝどうしやう、じれつたい….

「何をそんなにソハ／＼してるんです？」

ポンと背をたゝかれてびつくり振り向くとまあお人のわるい川上先生….

新しい帽子のツバに手をかけて流行の背廣に鍵りチョッキ、反り身になつて目顔で笑つてゐらつしやる「え？」はア私のヴァイオリンの先生、名高いかたぢやア御座いませんか、あらどなた、エヘンなんて妙な咳嗽ばらひ遊ばすのは……。

「は、一寸鵠沼まで參ります」

「いよ／＼遠征と御奮發ですか、あの評判の萩香嬢でせう？、まあ折角爪の垢でも煎じて飲まして貰つてゐらつしやい、や、失敬」

スタ／＼行つておしまひになつた。をかしな方….でも實際あの先生は何から何まで御氣がまはるんだから恐れ入つてしまふ

わ。

待つて待つてまちぬいて漸く列車内に腰え下ろすや私の魂は再び何處かへ飛び去つて、沿道の風景も眼に入らぬ。あゝ今日おめにかゝるその君は……艶美しき高しまだ？、前髮ゆらぐルイず卷？、每々誌上でおなじみのお母樣やら縫子さん、または御汁粉鐵瓶事件以來頓みに名聲高まりし幽婦おきよさんなどの面影もあわかかうかと走馬燈の如く胸をめぐつて。

大船、大船……驛夫の聲に驚かされてハツとばかり、新橋から此驛まで一時間中の道程を、外面も向かずひたすらに默想に耽りし我が上を、乘合の人々は何と見るらむと、今更らしく見めぐらせば、室内には、薫香くゆらす洋人の一群とボートに御精の出る御隱居連れ、餘念もなく雜誌に見入る紳士の貴人、誰も怪しむけしきも無いのでホツとひそかに胸なでおろす。隣りに席を占めたりし一本中(中尉)の海軍士官も横須賀線へ乘り替であらう、短い鬚をカメ／＼させて、プラツトホームへ下り立つた。

あゝもう次驛はいよ／＼藤澤　そこには薫香さんが迎へに出て居て下さる約束………。

五分――七分――、茶店の軒先たかくつるされた色手拭の端



が見えて、今し汽車は靜かに藤澤停車場へ横はつた。

君やいづこと求むる彼方、白丈長の高島田、スラリと立てる美しき君の。ツトばかり步み寄つて

、「あなた綾さんでゐらしつて？、」

「薫香さんなの？、まあ……」

見交はす眼と眼、結べる手と手、あゝ何から申し上げやうやら御話は山々と胸に積もりながら、慕ひまつりし其の君に願ひ叶ふて初おめもじ、嬉しさに感極つて頓みにはつとく言葉もない、薫香さんと私との初對面の幕は斯うして切つておとされた。

「よくゐらしつてれ、御遠方を……」

「御言葉に甘へて早速と……。迎にまで出て頂いて恐入りますわ」

語り合ひつゝ構内を出た兩人は折よく來合せた鎌倉行電車の一隅を占めた。

かれ／＼ひそかに我が胸に描きまゐらせたりしそれにも増して美しき君よ、つゝましやかに面を伏せて長き御眉しろき頰、ローマンチツクな瞳の色、印象の强い御面ざしだと思ひました。

「この電車は隨分ひどくゆれますでせう……上下動左右動……」

「才槌頭におでこの額？、萬作踊りの殿様がお見えにならないぢやありませんかほゝゝほんとに野菊さんもヒステリー御全快後は大層浮かれてゐらつしやるのね」

「陽気の加減かも知れないわ、それこそ、あの何とか――馬づかひも華やかな…でしたつけねえ」

語る間もなく手鍋沼、松林の間に電車を捨てた両人は白足袋の爪先にかわいた砂地をふみながら、パラソル開いてゆる〳〵歩む右も左も小松原、松のみどりが長く伸びて路の辺に咲く名無し小草にも趣ふかし。

「まあ、あの花可愛いこと！スヰートピーに似てますのね」

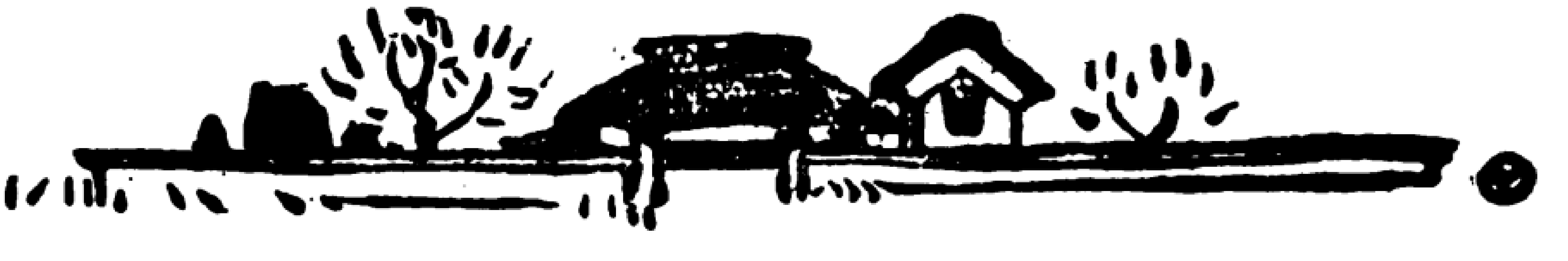
別荘らしい家の土堤に咲いた優しい花を、見返りがちに私が云ふと

「え、あれ濱豌豆つて云ひますの、しほらしいのね」

天に咲かば永久の生命よ鄙の子の
　手にふれぬ幸ほげや野の花

スヰートピーは平和の花、それにも似たろ濱豌豆よ。永久に、永久に、濱の平和を語りて咲けや、

「ねえ萩香さん、いつも〳〵御作には魂ぬかれて拝見してますのよ、ほんとにどうすればあんなに筆がおまはりになるの、お羨



しい……」

「いやよ綾さん……」

鬢のほつれ毛かき上げながらニツコリなさる。

「想ひ出多き函嶺湖畔…さぞ御楽しかつたでせうねえ、私も去夏は中禪寺湖畔の涼しい夏を過しました」

「まあさう？ほんとに湖畔つて好いものね、私の行つたのは富枝さんの家よ」

「御作の中の菖蒲様…あの方よく存じ上げてるのよ、少さい兄のクラスメート、有名な三島彌彦さんとも御親友でね…」

かたみがはりに語りつ問ひつ、十何丁の単調な路も束の間に過ぎていつしか萩香さんの御住居に着いた。

「まあ綾さんどうぞこちらへ。あらそんな所にゐらつしやらないでズーツとこちらへお通り遊ばせよ」

「まあようこそ。お待ち申して居りました、まあ綾子さんどうぞ」

華やかな萩香さんの御聲を絡つて御母様の落付いた御もの言ひお手づから座蒲團をすゝめて下さる。

見渡せば、見る目はるけき松原つゞき、蒼翠大葉の幾片うかぶ

蓮池の汀には引きぞわづらふあやめの葉をかり、花ちかき池の辺室近う、空には一片二片の綿雲が、まぼろしの如く浮んで居る。

「まあお静かな好い御住居で御座いますこと」

天與の鬼才に加ふるに、この自然の佳境に在りて詩想練ります萩香さまのお襟しき……と額の汗をぬぐひも敢へず眼の前にくりひろげられたこの天然の繪巻物に見とれて居ると、

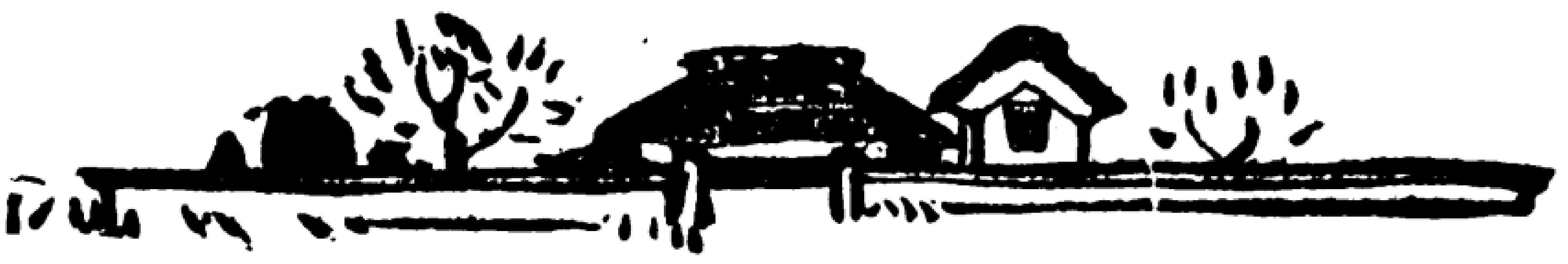
「いゝえ、どういたしましてあなた、住みなれて見れば別に珍しいとも存じません、それに松が成長ちましたので以前とは眺望がすつかり變りましてね、此地の松はみどりが一尺にも伸びますの、それがブラリと垂れ下りますもので先日おばけ松だつて大わらひしたので御座いますよ」

お母様の御言葉のきれめを今度は萩香さんが引取つて

「以前には此室に坐つて居てよく江の島の棧橋を渡る人が見えましたのよ」

御茶をいたゞいてから御居間を拝見と御願すると気軽に立つて案内して下さる。

「ホヽヽヽ大變な所で……。それでも今日は片付いてる方なので御座いますよ」



御母様が後で笑つておいで遊ばした。

さまで廣くは無いが小ぢんまりした明るい御部屋、開け放した御縁先には葉櫻の影がゆらりと落ちて。

皆様！皆さまは去春卯月八日の夜、萩香さんから松村さんへの御たよりの一ふしあれ——花がちら〳〵ふつて來る、うちのは八重櫻、楊貴妃といふの、いろの濃い大輪でみとれる程艶な……とあつたのは未だ御記憶に新でせう？これよその楊貴妃櫻……。

月かげ霞む春のおぼろ夜、散ればかつちる花ふゞきを硯の海にいくひら受けて、月あかりに筆走らする美しき人のさまがそゞろまぼろしと胸に浮ぶ。

こなた丸窓の下に据ゑられたるは、これなんめり洛陽の紙價爲めにたかめらるゝ萩香さまの、御作の編みいださるゝ御文机、よみ反古もりし手文庫や野薔薇をいけた一輪ざしが置かれてある。

沼川様が御心づくしの一葉全集も見えました。

繪の具皿にはおさつの遺骸、そしてバナヽケーキの空箱が硯箱の御代勤などゝいつやら萩香さんは御書きになつたが此の心地よくとり片付いた室を見て私はほゝゑみを禁じ得ませんでした。

（以下次號）



古事記の歌

與謝野晶子

日本文學を修めるのに何から讀み初めたらよいか、と聞はれる度に、私は第一に古事記、次に萬葉集を勸めますが、古事記は古代史を研究する書物として面白いのみならず、歴史を潤色して神話とか物語とかに作り替へた立派な文學書ですから、國民として是非讀まねばならぬ物だと思ひます。私は本誌主筆のお勸めに從ひ、先づ古事記の中の面白い歌を撰んで御話致し、次に萬葉集にも及ばうと思ひますが、古事記には秀れた女詩人の作が多いと云ふ事も、本誌を御覽になる方に興味があるだらうと存じます。上古には貴族の女の資格として歌、音樂、紡織、美貌の四德を備へる必要があり、歌の贈答の出來ない婦人は同族との交際も婚嫁も出來ない所から、自然競うて文學を修むるに到りましたが、其遺風は奈良朝平安朝の貴婦人にも盛に行はれて居りました。貴婦人ばかりで無く、古事記の歌の男子の作者が凡て天皇、皇子を初め皇族大臣等の高貴な人々であるのは、當時に於て、宗教、政治、文學、藥方、戰術、音樂、卜占、是等の諸道諸藝に通じてゐるのが皇族や貴族一般に缺くべからざる資格でありましたから、當然秀れた詩人が其階級に多かつたのでせう。

何れの國の文學も詩歌が先に起つて居りますが、我國も其れに洩れないのは勿論、古事記の歌で想像すると、文學の榮えた時期は後の奈良平安兩朝を俟つ迄も無く、既に上古に於て一盛も二盛もあつた樣に考へられます。古事記の歌と聞いた丈では、單純粗撲な漁夫牧童の口すさみ、謂ゆる民謠の如き物に感ぜられるでせうが、中々さう言ふ野蠻な俗謠體では無く、當時の

文明を代表した貴族の彥、姫が蠶衾に起臥し、五彩の摺衣を著け、赤玉青玉を首にも手にも飾り、鍍金の劔を佩き、槻の木の弓、鵠の羽の矢を負ひ、天の瓊鉾を執り、銅鏡に向ひて化粧し、螺鈿の大和琴を彈き、赤の曾保船に乘りて青海原を往來し、月明き夜の歌垣に相思の情を述べ、險しき山坂の戰ひに將士を勵すなど凡て折に觸れたる實感を歌ひ、其歌の形式は感想みづからが有つてゐる節奏の儘に何を並べたとでも云ひませうか、自由に長短句を交へて、後世の樣に五七とか七五とかの音數の約束が未だ嚴重でなく、然りとて自然の詠歎に全く任せて技巧を輕視したかと云ふに、當時の修辭法である枕詞、對句、頭韻法、疊語法などを用ゐて隨分人工的の修飾を加へてあり、而も自然に佳い諧調を成してゐます。平安朝以前の歌は凡て今の樣に讀む物でなく歌ふ物でしたから、決して聽者の耳に快い樣にと云ふ用意を疎かにしては居りません。

感情の實際的な點、形式の自然な點、其れから物事の觀察や形容に作者特有の觀方喩へ方をして詩人の個性を確に出してゐる點、大山曠野に立つて歌ふ如きゆつたりした氣象に富んでゐる點、短歌が少くて長歌が多い點、是等は平安朝以後の詩人が吝々した箱庭風の都會にのみ居つて、紋切型の花鳥風月の感想を古臭い技巧で繰返して許りゐる、貧弱な机の上の作り歌に比べて、非常に優れた特色を有つて居る事が解ります。之を思ふと、上古の『神』とか『姫』とか尊稱する皇族や貴族は、皆一面に於て當時の立派な新派歌人新體詩人であつたのです。

私は各々の歌の出來た由來に就て成るべく史實を尋ねて解釋し、古事記の文學的記述のみを信賴しない積です。又歌の解釋に本居氏などの先哲の意見に從はぬ新しい所は、大抵良人の創見を借りました。

○素盞嗚尊作

八雲立つ出雲八重垣。妻籠に八重垣
造る。その八重垣を。

誰も知つてゐる歌ですが、之が歷史に載つてゐる初めての歌ですから御話致します。素盞嗚尊は出雲と朝

鮮とを往來し、朝鮮の一地方に王として君臨し、彼地で崩ぜられた方ですが、未だ御若い頃、朝鮮から出雲に歸られた或時の事、湊に入つた御船の上から、戀しい妃の住んで居られる山邊の宮を望み見て、なつかしさと喜ばしさとに此短歌を御詠みになりました。上古の風俗は一夫多妻でしたから、尊にも多くの妃と多くの皇子とがありました。名の知れて居る妃は奇稻田姫一人ですが、古事記では此姫と新しく御住みになつた時の作としてありますけれど、其れは確だとは申されません。

「八雲立つ」は澤山に雲の棚引くことと。「八」は八つの意もあるが、又八重、八島の如く澤山の數を示す意もあつて、彌生、彌平、彌次郎兵衞、などの「彌」も當字こそ違へ、同じく物の多いこと。此「八雲」の場合は後の意味です。次の句の「出雲」と云ふ地名の「出づ」に對し、澤山の雲が立ち出づる、と洒落て云ひ掛け、枕詞に置いた丈で、此句は歌の意味には何の關係も無いのですが、古人の解釋では八色の美しい雲が立つ意だなど〻馬鹿げた事を云つて居ります。

「出雲八重垣」の「出雲」は、後世は國の名になりましたが、初は狹い里か郡位の地名です「いづも」と云ふ言葉は和泉國の「いづみ」と同じく泉即ち淸水の出る場處と云ふ意味であるのに、漢字を假りて國名や地名を書く時代になつて、前の「八雲立つ、出づ」と洒落た枕詞に因んで「出雲」と云ふ二字を之も洒落て當たのです。

「八重垣」は柴とか蘆とかで厚い垣を結ひ繞らした立派な宮、即ち妃の住んで居られる宮のこと。歌は此句で一度切れる。

「妻ごみに八重垣造る」の「妻ごみに」は、牛を入れて置く牧場を牛込、駒を入れて置く牧場を駒込と云ふと同じく、妻を入れて置く爲に、と云ふ意。歌は此句で二度切れる。

「その八重垣を」の「を」は、今の「かな」や「よ」の意味に當る古語。

全體の意味を詞を補うて平たく云ふと、「あれ、向うの山に出雲の里の戀人の家の八重垣が見える。わが戀

人を住ます爲にあの樣な立派な八重垣の家が出來て居る。あのなつかしい戀人の家の八重垣かな」と思はず躍り立つて喜ばれたのです。句を幾度も切り、八重垣と云ふ詞を三度くり返してある技巧が、驚歎歡喜に滿ちた心持をよく現して居ります。

「妻」と云ふ詞は、後世の樣に正妻のみに限らず、すべて戀人に對して云ふ詞です。尊の作で傳はつてゐるのは此一首丈ですが、此歌の巧な詠振で推すと、雄々しき尊の他の一面は優しい叙情詩人戀歌の作者として秀れた方であつた事が想像せられます。

○大國主尊作

大國主尊は素盞嗚尊の皇子の一人で、天孫瓊瓊尊が未だ伊勢の高天が原から九州へ降り給はぬ以前に、出雲朝廷の君主として偉大な勢力を有つて居られ、祭主(宗教家)政治家、元帥、醫王、是等を兼ねて其々功業を建てられましたので、大國主、大名貴、葦原猛男八千矛神、美國魂など澤山な立派な尊稱を世人から奉つて居ります。若い時は多勢の兄弟達に嫉まれ給ふ程の美男子であり又人好のする方でありまして、從つて多くの美しい貴族の女を戀人として居られ、戀の歌が又非常に巧であつて、神武天皇と共に上古に於る第一流の新體詩人です。嫡妻即ち正妻に當る妃の須勢理姫は矢張素盞嗚尊の御女で、大國主尊の異母妹です。古代には同じ母の兄弟の結婚を嚴禁した丈で、母が異へば自由でありました。此須勢理姫は國史に現れた最初の女詩人で而も新體詩人でしたが、非常に嫉妬深い人で良人の尊も常に之には困られたらしく想はれます。越(今の越前、越中、越後)から出雲へ殖民してゐた大族の領地高志國(昔は今の郡ほどの地を一國と云ひました)の主の女沼河姫と尊と戀をせられた時、須勢理姫が餘りに劇しい嫉妬をせられるので、尊は居たゝまらずして、多勢の近臣や兵士をつれて大和の方へ上つて行かうとせられます。須勢理姫は手も附けられない怒り方で、良人に對し勝手に遊ばせと云ふ權幕です。其時の大國主の宮居は弓が濱にありましたが、尊は旅裝を調へて門前の濱邊に出で、「片御手は御馬の鞍にか

け、片御足は其の御鐙に踏み入れて」將に出立せんとする時、須勢理姫を顧みて次の歌を歌はれました。

射干玉の黑き御衣を
眞悉に取りよろひ、
沖つ鳥胸見る時、
羽たゝきも之は適はず、
邊つ浪磯に脫ぎ棄て、
翡翠の青き御衣を
眞悉を取りよろひ、
沖つ鳥胸見る時、
羽たゝきも是も適はず、
邊つ浪磯に脫ぎ棄て、
山上田に蒔きし茜舂き
染木が汁に染め(し)衣を
眞悉に取りよそひ、
沖つ鳥胸見る時、
羽たゝきも是し宜し。

愛人やの妹の命、
群鳥の我が群れ往なば、
引鳥の我が引け往なば、
泣かずとは汝は云ふとも、
山處の一本薄、
項傾し汝が泣かさまく、
朝雨の狹霧に立たむぞ。
嫩草の妻の命。

初の一聯十五行は、今日から考へると大變に呑氣過ぎる樣ですが、自分は旅裝として何の着物が似合ふかと思つて三度磯邊で衣を着替へて見た。而して茜で染めた赤い衣が一番似合つたから之を着て出立する、と云ふ事が叙してあります。「射干玉」は射干の實で、色の黑い物です。「沖つ鳥」は鴨、鷗などの水鳥の總稱。「羽たゝき」は水鳥が羽ばたく事。「邊つ浪」は磯に打寄する浪。「磯」はいそのいを省略した古語で、荒磯をありそと云ふと同例。「脫ぎ棄て」は當字の通り脫いでうつちやる事。「染木の汁」は染物に用ゐる木草の汁。此

聯の意味は、射干の實の色に似た黒い衣を鄭寧に着飾つて、水鳥がする樣に胸を見乍ら、其水鳥が羽ばたく樣に兩方の袖を振つて見たけれど、之は似合はないから、浪の寄る磯の上に脱ぎ捨てゝ置いて、更に翡翠と云ふ鳥の色の樣な青い衣を念入に着て、又前の樣に袖を羽ばたいて見たが、之も似合はないから脱ぎ捨てゝ今度は、山の高地にある田で探して採つた茜を臼で舂き、それで拵へた染物の汁で染めた赤い色の衣を着て袖を振つて胸を見ると、之こそ大變によく似合わい。と云ふのです。

さて次の第二聯八行になつて、初めて須勢理姫に向ひ、君は其樣に女らしくも無く剛く腹を立てるが、愈愈自分が遠き旅路へ往つて仕舞つても悲しくは無いかと優しく念を押して姫の反省を促されました。「愛人」はいとしき人、戀しき人の意。從兄弟と云ふ詞も之と語原が同じです。「や」は優しい氣分を現す助辭、只今の口語にも「婆や」、「乳母や」など用ゐて居ります。「妹」は母にでも姉妹にでも戀人にでも總ての女に通じて用ゐる代名詞「命」は只今の殿下、閣下、殿、樣と同じ敬稱で、御事、おん事、の意です。み事と云ふと解りかねるが、お事とか、誰樣おん事とか云へば芝居などで現に用ゐて居ります。「尊」と云ふ當字は皇室の直系である最高の貴族に用ゐ、「命」は旁系の貴族其他一般の敬稱に用ゐる習慣になつてゐます。「引鳥」は空遠く飛んで引去り見えなくなる鳥。「山處」は山邊の地又は山里の意。大和も筑後の山門郡も皆同じ意味から附いた名です。「泣かさまく」は泣かんを延した詞。「嫩草の」は若草の樣に若く優しき意。

此聯は、初に「なつかしいわが妻よ」と須勢理姫を呼掛け、群鳥がぱつと立つて飛去る樣に自分が多くの人と群をなして旅に往つて仕舞つたならば、又空遠く引去る鳥の樣に消え去つて仕舞つたならば、君は跡に殘つて何う感じるであらう。今こそ涙などは流さないと心强く君は云ふけれど、屹度山邊に淋しく一本ある薄の樣に君は泣くであらう。而して其薄が朝降る雨の露に濡れて立つて居る樣に涙に濡れて心細く立つてゐ

る事であらう。君は然うは感じないか。あの若草の様に懐しい我妻よ。と畳みかけて、しんみりした詞で問はれました。優しい感情と云ひ、珍しい形容の詞と云ひ、なんと面白い歌でせう。

古事記には此次に『事の語り言も。此をば。』と云ふ句がありますが、此は此歌を語り傳へて貴人の前で歌つた後の語部などが、『習ひ覺えた儘に此歌を申上げます』と云ふ意味で添へた句だと思ひますから省きました、之に答へられた須勢理姫の面白い長歌は次號に述べませう。



活きた人格の感化

米國文學士　田添幸枝

女子教育といふ事は規則づくでは出來ません、規則と云ふものは女子の德性を感化する上に於ては、何等の効力なく、冷酷なる牢獄の裡には決して温かなる人情の發露することはありません。要は只だ精神の靈化といふ點にあるのでございます。

尤もこれに重きを置くものには基督敎なり佛敎なり國粹保存なりがあつて風紀の紊亂せる社會に清新健全なる氣風を皷吹しやうと努めて居ります。併し宗教主義、國粹保存主義の敎育が果して今日の世に適當か何うか甚だ疑問に思ふのであります。既に流れ去つた過去の歴史を以て、新時代の女子を導く事が出來るものでせうか、

人は片時も時勢と離るゝことは出來ません、同じ時代に住み、同じ人生に活き、互に相携へ、互に交通してこそ人は向上するのです、之を導く者は實に活ける

人格でなければなりません。一人の活ける人格の感化は、無數の聖賢の遺訓傳說に比して、數十倍の價値があります。故に敎師は先づ自身が時代人格の活ける模型であらねばなりません、そして女子の心中に潜伏せる道念を知らず識らずの間に引き出す强い力を有し、日常の行爲の間に生徒各自に心靈上の感化を與へ得る程の人物でなくてはなりません。道德の體現即ち實踐躬行は、實に敎師が生徒を導いて行く唯一の方法であります。

尙學校は活ける一個の小社會でありますから、敎育者が右の如き人物であると共に、生徒自身をも一個の貴い人格を有する責任者として生活せしめなければなりません。即ち生徒各自をして、學校てふ小社會の光榮ある一分子たることを意識せしめるのであります。斯くてこそ學校は單に智識と技能とを敎ゆる所ではなくして、更に高尙なる人生々活の實際に觸れたものとなるのです。その結果、生徒の依賴心を改めて、自治自營の精神となし、陰鬱の性を矯めて、共同助成の心、博愛慈悲の精神とすることが出來ます。

要するに敎師は、先づ生徒の心中に潜める靈性に火を點じなければなりません、學校はまた生徒をして責任ある人格として生活する機會を與へなければなりません、敎師の側に於いて斯ういふ見識を持して生徒に臨んだなら、生徒は必ず一個の人格を備へた人として人らしく生活するに至るでありませう。

今や女子に對して極端な文學的の敎育法が施されて殆んど病的と見ゆるまでに發達して居りますＰされば目今の急務は、冷靜なる科學的智識を與ふると同時に、精神の靈化といふことに一層重きを措いて、貴き人格を意識せしめ、發達せしめ、併せて生活の保障を授くるにあります、之れが時勢の要求であらうと思ひます。

戰ひの世に處する堅實な頭腦

井川天籟

夏日の光のまぶしきを、緑色のカーテンにて遮る窓下で、某名士は次の如く語つた。

社會は眞の學校であり、人生は眞の敎育である。せせつこましい、でも敎育の型に嵌つてはいけない。われわれは無限の大きさの型を求むべきである。

女々と言ふが、女よりも何よりも先づ人となるべきぢや無いか。頭腦の人とならなければならぬ。頭腦だ、一生の總ては頭腦だ。男は堅くつめたい頭腦、女は柔くあつたかい頭腦が要る。

けれど髮が空いてちや駄目だ。充實して居なくちやならぬ。

では頭腦は如何して造るかといふに、いろんな方法がある。その中でも、最も有力有効で、お手輕で、しかも行の深い手段は讀書である。殊に地方では、讀書は思想の大半をつくる。――どんな書を讀んでもよろしい。けれど讀まれてはいかぬ。女はよく身も魂も讀まれることがあるから、これは殊に注意が要る。

讀書の自由は尊重すべき絶對の權利だ。どんな書を讀んでも差支へは無い。あらゆる思想、あらゆる宗教、あらゆる道德の中を切り拔けて行くべき現今の世の中だから、出來得べくんば、あらゆる書物を讀むべしである。けれど生命は短く限られてある。こゝに於てか選擇の必要が出て來る。而かも選擇の鍵は、自分々々の掌中にあるのだから、心して開かねばならぬ。

史傳、地誌、物理化學書、博物書、哲學論などみんな面白くて有益だ。靑春の血に情熱のペンキを浸して書いたやうな詩集に、わかい胸が夢の色に染るまで讀み耽るのもあだでは無い。神經過敏の敎師のうちには、兎や角けちな理窟をつけたがるものもあるか知れんが、小說だつて讀んで好い。好い所か大に讀むべした。甘い〳〵ものも食べなくちや活きては居られまい。それに實際おいしいところもある。けれど消化しなくちやいけない。食傷したり胸が支へたりするやうな、そんな不健全な胃ぢや、堅實の思想を組織するに足る滋

養分は取られない。

全體若い女に小説を讀ませちや不可なんて、そんな狭い量見で廣い世間が渡られるものか。若い女だからつて讀書の自由といふ尊い神聖な權利を侵害されて好いものか。

人生は、人生を味ふにありだ。さうだらう。

お菓子を貰つて、甘いやら辛いやら何が何やら解らずに頬張つて呑み込んだつて、つまらない話だ。若い女が他へ招ばれて行つた時なんかには、よくそんな經驗をするだらう。…赤い顔をして、お菓子をおちよぼ口へねぢこんで、モグ〳〵させて、ハンカチでおほうて……。が、實際、噛んで〳〵舌の上で味はつて見なくちや、貰つた甲斐も無いと云ふもの。人の生命だつてさうだ。お茶漬でさら〳〵掻きこむのもおも白い。ゆるりゆるりと味はうて食べるのも結構だ。けれど眼を白黒させて丸呑みにして仕舞ふのには、少々勿體無さ過ぎる此一生だ。

際涯も無い人生の廣野！　大道が坦々と一直線に馳つて居る。大きい小さい支路岐徑が曲りくねり蜿りのたくつて縱横無盡に野を貫いて居る。學校はその大道を行くことを敎へる。けれど世の中は大道許りを進んでゆく様に都合宜くは出來て居無い。其時に一歩踏みはづしたら直ぐ迷ふ様では困る。が、いろんな書物を讀んで見ると、次第に其路筋が分つて來る。

小説は讀んでも好い。どんな小説でも好い。眞實の自然主義だらうが、誤られたる自然主義だらうが、ロマンチックござれ、クランツク御座れ、懷疑派でも、耽溺派でも、毛嫌ひせず、片惚れなく、どんな思想にでもおもう様觸れて見るがいゝ。けれど取つ掴まつては往生覺束無し。

小説だから何だからつて恐れるものは卑怯なんだ。弱者だ、精神の弱者だ。あの湖は、大川小川の淸い水濁つた水さま〴〵の水を合せ呑んでは、いつもスツキリと澄んで居るぢや無いか！。いかゞはしい小説を讀めば墮落するとか、懷疑的の小説を見ると小生意氣になるとか、何かしらぶつ〳〵世迷言をいふやうだが、


大英國皇室
撰拔御用品
HONI SOIT QUI MAL Y PENSE
DIEU ET MON DROIT
VINOLIA
ヴィノォリヤァクリーム
皮膚をやわらげ
艶麗たらしむ
ヴィノォリヤァ白粉
無鉛優良にして
清粛たらしむ
ヴィノォリヤァ石鹸
自然美を發揮し
決潤たらしむ
ヴィノォリヤァ歯磨
口中を
清潔にし
爽快
たらしむ
VINOLIA POWDER
ヴィノォリヤァ會社 倫敦

女（ぬの三）

女(ぬの四)

世界無比……最新發明藥

あざ

入墨は廿日 ほくろ そばかす、なまず いぼは拾日

目に必ず美麗に除去すること保險附新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて美質を完うせよ來館者へ天然の美質は山の如き全治者の感謝状及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なます、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす）着金即刻小包郵送す

●らい病根治新劑

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多研究を重ね數千患者の實驗に徴し苦辛經營の末今回始めて完成發明したる最新藥にして其效力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無效舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絕し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

藥價送料共壹劑 五圓拾錢特別製 拾圓拾錢

●毛の必ず生る確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徴したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぽうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、其他に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮着々と發生する特效あること確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はゑ藥とは其效勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉石混同視すること勿れ

藥價特別製分五圓卅錢▲大瓶貳圓卅錢▲中瓶壹圓廿錢

女（ぬの六）

●奏效確認 美容新劑 やせる藥

本劑（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徴したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顔赤くほてり。のぼせ症。卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脫し美容健康を保ち程よくやせる特效藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇效を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻送藥す

●美き聲の出る新藥

▲藥名……ウエーヌス

▲聲美くしくして…淑女は窈窕たり ▲聲麗しくして…男子は威嚴あり

▲聲は人格を高尙ならしむる要素なり…謠曲家、演說家、音樂家、藝人は聲音即ち其人の生命なり。發聲藥は古來甚はだ多し然れども其の確效あるものは恐らくは疑はし。獨り此「ウエーヌス」の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり。「ウエーヌス」は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑なり。特別製分を服すれば直に充分なる美聲を發すること確證す。

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓廿五錢

腦病を根治し記臆力を增進する靈劑

滋腎回春 記臆增進丸

（藥價）七週分四圓五拾錢五週分三圓六拾錢參週分二圓三拾錢壹週分八拾錢（送料各拾錢宛）

本館は獨逸人醫スクリーボルト氏の新處方に基き醫學的の元理に徴し多年實驗の上其奏效確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば腦病、神經病を根本的に根治し精神爽快智力活潑となり記臆力大に增進し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特效ありて如何程の健忘者記臆力缺乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記臆力大に增進すること誓て確證する所なり論より證據實試一番速に其卓絕顯著なる奇效を知れ

以上六藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

前田雪子女史抄譯

家庭小説 小姫君

慈愛深い父母の膝下で、嚴格な家庭の教育を受けて生育つた、最と睦ましい姉妹の姫君は、浮世の戀愛を夢む時、父母に由つて定められた婿君を嫌つた。奇才に富み、頓智に長けた妹なる小姫君は、花もうら羞かしい十七歳の年頃に、その機智を遺憾なく發揮し、嚴父慈母が豫想した婚約をがらりと外させ、日頃仲の好いお友達なる令孃を媒介して、孰れも滿足、しかも幸福なる二つの婚姻を成立たせた手際の鋭敏な所、ナイーヴな所、是れ本書の主眼併せて善良な家庭の有樣も窺はれる。

洋装四六判
總クロース南京綴
紙類約二百八十頁
正價四十五錢
郵稅六錢

侯爵母堂 前田朗子君題歌 法學博士江木衷君題詩
伯爵 柳原義光君序文 三輪田高等女學校長 三輪田眞佐子君序文
中川愛水君著

天覧臺覧

模範夫婦

齋藤松洲畫伯装畫
菊版二百頁 装釘雅麗
定價金五十錢
郵稅六錢

本書の題目先づ以て奇なり、之を閲するに及んで、其事實の奇にして、文章更に奇なるを覺ゆ、柳原伯爵の序文に曰く思ふに容易ならぬ深き因縁に依つて、夫婦は結合さるゝものなるべきも、この夫にしてこの妻、この妻にしてこの夫、この二要點の具備する事は、最も稀なりといふべきなり、本書記述する所の夫婦は、夫は維新の先達として、殉難せる勤王家にして、而もまた家庭に於ては、夫として其行狀に毫も間然する所なく。婦は女子教育勃興し、而もその操行の範とすべきもの稀なる現時に於て、婦徳を完全に納行せる教育家なり、實に「似た者夫婦」の好典型にして、此夫婦を鑑とせば、夫たる道、婦たる道を學ぶに於て遺憾なしと予は確信す、夫婦相和して家齊り、家齊ふて國治まる、然れば本書は夫婦及やがて夫婦たらんとする人のかならず一讀を要すべきものなるべし云々とあり。

大取次 東京堂〇前川文榮閣〇北隆館〇至誠堂〇文林堂〇東海堂〇林平〇上田屋〇三松堂…………其他全國有名書店にあり

發行所 東京市京橋區南鞘町十一番地 服部金文館

（其の七）

中元大賣出し

七月一日より

特見切均一賣出し

本品に限り景品券呈し不申候

伊勢崎銘仙紺かすり　三圓九十五錢

木綿かすり(紺)(白)　一圓五十五錢

景品くじ引券

御買上高五圓毎に一枚呈上

日本橋區通旅籠町(電車、小傳馬町御下車)

大丸呉服店

郵便注文　地方係　商品目錄書送呈仕候

外賣係　市内迅速に御用命承り可申候

電話浪花(八三三)(六六三)

(女ぬの八)

そんな事で堕落するやうな奴はよまなくても堕落する奴だから、宜しく壓制の縄で縛つて、深窓の檻といふやつへ投げ込んで、女大學の猿轡でもかませて置くべしだ。

實際多く深く讀んだものの方が堕落することが少なくて、却つて自覺無く自信無く唯獨りを守る者が心の砦を攻め落され易い。



世間は活きてゐる。生きて行く世の中だ。人生や家庭は、學校の形骸や、化石したやうな教育とは少し扱ひ心が違ふんだ。木魚叩いて山寺に住むのなら、机に噛りついて教場で暮せるものなら、そりや世間は太平無事、桃源の晝寢の夢に黴の生へた餅の皮を剝くのも、ずゐぶんと氣晴らしだらうが、さうはいかない。

結局、人間と生れたからには、お互ひ男でも女でも世の中の酸い甘い辛い苦いをよく味うて、苦いと言うては顏を蹙め、辛いときには涙をポロリ〳〵こぼすのも妙、甘つたるい口直しには、酸い味もオツですわと、生涯を幅ひろく底深くして行くのが肝腎だ。

それには、氣象を充分しつかり持つて居ないと、飛んだ破目に陷る。小說をよんでそれに溺れたり墮落したりするやうなものは、人生の試驗に落第は目の前。煩惱を斷つには鍛へに鍛へた刀で無くては駄目である。浮世に處するには、練りに練つた精神が必要だ。山林に身を淨うするのならいざ知らず、活きて動く世間に女一人を立派に立てるには、生容易しい事では無い。しかも樂みは其處にある。

清くして侵されざる、確固として動搖せざる自己を、胸の奥深くしつかと離さずに思ひ緊めて居れば、どんな事をしても好い、どんな本をよんでも好い。

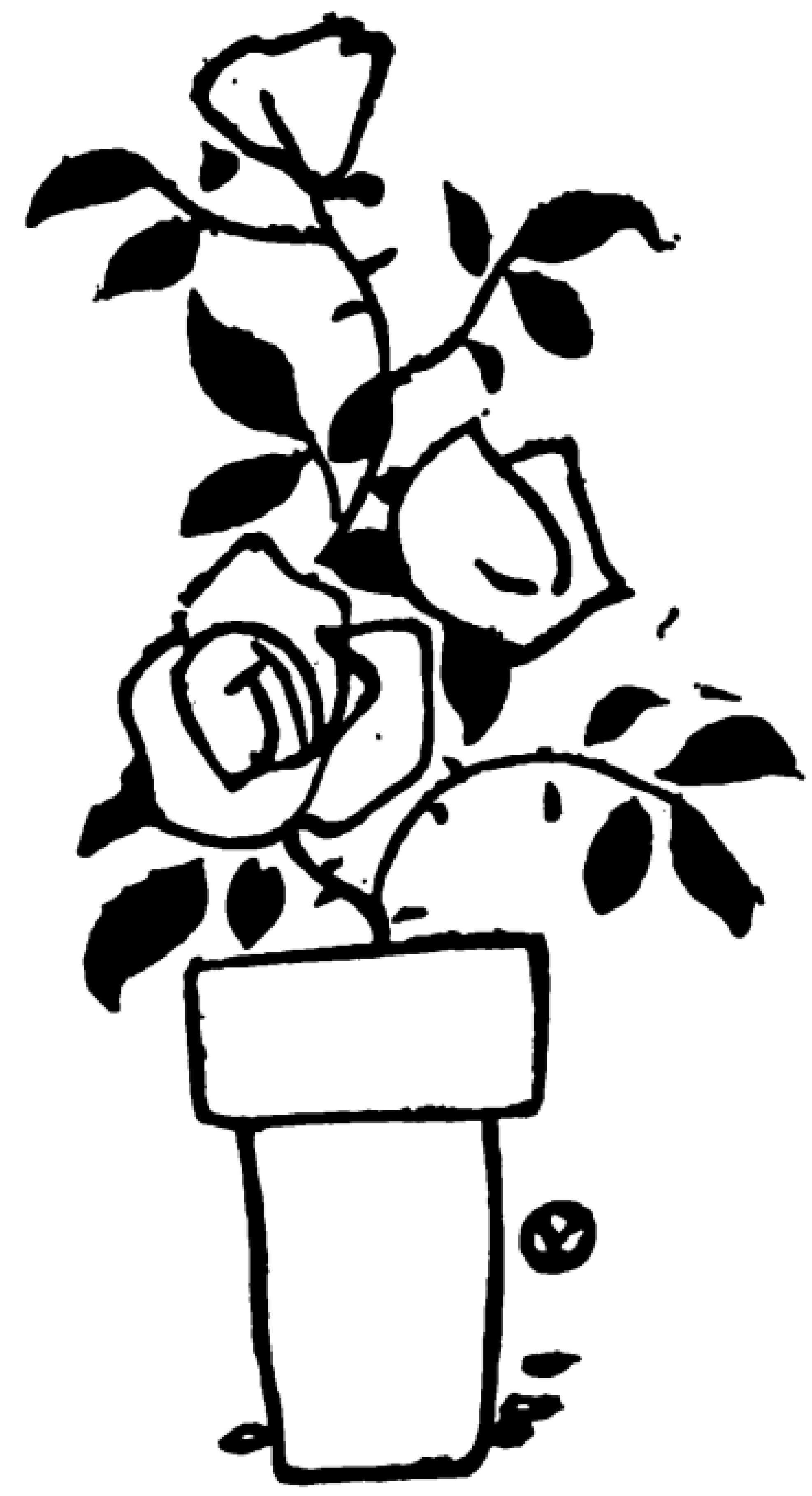
要するに「囚はれざる自己」を、總てのものゝ上に高く置いて、古い文句だが、萬事を達觀すべしと。

併し、あらかじめ「囚はれざる自己」の置き場をよくよく考へて、終生の悔を貽さぬやうにしなければならぬ。先づ何よりも人としての自己、次に女としての自己をよく〳〵考へ、其の上、國民として、社會の一員として、女學生として、家庭の一人として、何として、彼としてとさま〴〵の條件、境遇、運命が四方八方からエイ〳〵と押し合つて居る中央に、ピツタリと力の中心が取れ、シツクリと焦點の合つた、動かないほんとうの自己の置き場があるに違ひないから、そこを見拔く事が肝腎だ。

天晴れて空蒼い日、森に行き、靜かな樹陰に獨り立つて、深く心の底に耳を傾けると、「眞の自己」の權威ある聲の囁きが聞える。

若い黑髮を掠めて吹くはつ夏の風が、天地の胸から吐き出す薫り高い呼吸を送る時、わか葉の綠りは狹霧のやうに顏に降りかゝり肩に注ぎ落ちて、あたらしいある物が身體中に漲りわたる。

最早その時は醒めたんだから、胸に張りつめる新らしい生命に醉を輝して、眼を見はり面を上げて、恐れず迷はずたゆたふ事なく、人生の勇者となつて進んで行くべしだ。



盛夏の趣味

物集梧水

◎曠野の草いきれ

武蔵野の縁より眼を東北へ廻らせば、那須野が原あり、安達が原あり、宮城野あり、那須野が原は、彼の金毛九尾の狐の化せし殺生石に名高く、安達が原は鬼婆の物語に名高く、共に恐ろしや。

一歳、宮城野をゆく。平原渺々、草芊々、七月の日光は宛ら白熱瓦斯の如く中天より射おろし、草は皆な毒氣を吐かんとす。百合、撫子の如き優しき花は唯だ只管に頭を垂れて萎れ、どくだみ、梶の葉の如き怪しき草は、萎れながらも私かに天日に呪いんとするさまあるに似たり。

見渡す限りの平野、人影なく、我れ一人脚袢草鞋がけにて扇を使ひながら行き行く。息塞りて眼眩き、霍亂に斃れさうなり。

くさいきれ人死に居ると札の立つ　　蕪村

夏の野を法螺吹いてゆく道者かな　　牛石

◎古城址の白雨

一歳、彦根の古城址に登る。

此の邊、殘りの壘、崩れたる壁、そこに八重の葎は生へ茂りぬ、夏木立彌が上に繁りあひて、日光も暗きばかり、辿りゆけば、漸くにして天主閣の礎に出でぬ鼓子花の蔓、石崖に這ひかゝり、三々伍々咲ける其の鴇色の花を見れば、儚き夢の、假に現世にあらはれたるかと覺えし。

此の天主閣は、古へ妖怪出でけりと言ふ。薄暗きこ

と云ふばかりなし、手探り、足探りに、辛うじて最上の高閣に登る。窓より外面を眺むれば、佐和山青く顔前に對し、雲の峰、簇々として湧出す。

　殷々として遙かに雷鳴の聲あり。

　夕暮や禿げ並びたる雲の峰　去來

　ごほ〳〵と雷神遠し蟬の聲　几董

　天主閣を下りて外に出づれば、早や雲の脚迫り來て涼風一陣、大豆の如き雨はら〳〵と落ち、涼風荒べば白雨これに誘はれて來り、大地に穴を穿てと、篠茅よりも繁き銀箭を射りに射る。

　見よ、天は晦瞑、地は暗澹、風叫び、雨躍り、雷神頻りにはためきて閃き〳〵天地の間を咆號す。有らゆる生物は、雨蛙の子に至るまで等しく沈默を守り、天地を擧げて悉く雷神の指揮に從はしむ。此の少時の光景異に壯美の極をつくしぬ。

　白雨霽れて虹霓半天に掛り、雨蛙鳴き、蟬鳴き、鴉啼き、彥根の古城址は驟雨一洗の後、更に千古の色を帶びて聳てり。

夕立の霽れゆく峰の木の間より
　入日すゞしき露の玉笹　後鳥羽院

夕立の名殘の露ぞ置きまさる
　結ぶばかりの庭の夏草　式乾門院御匣

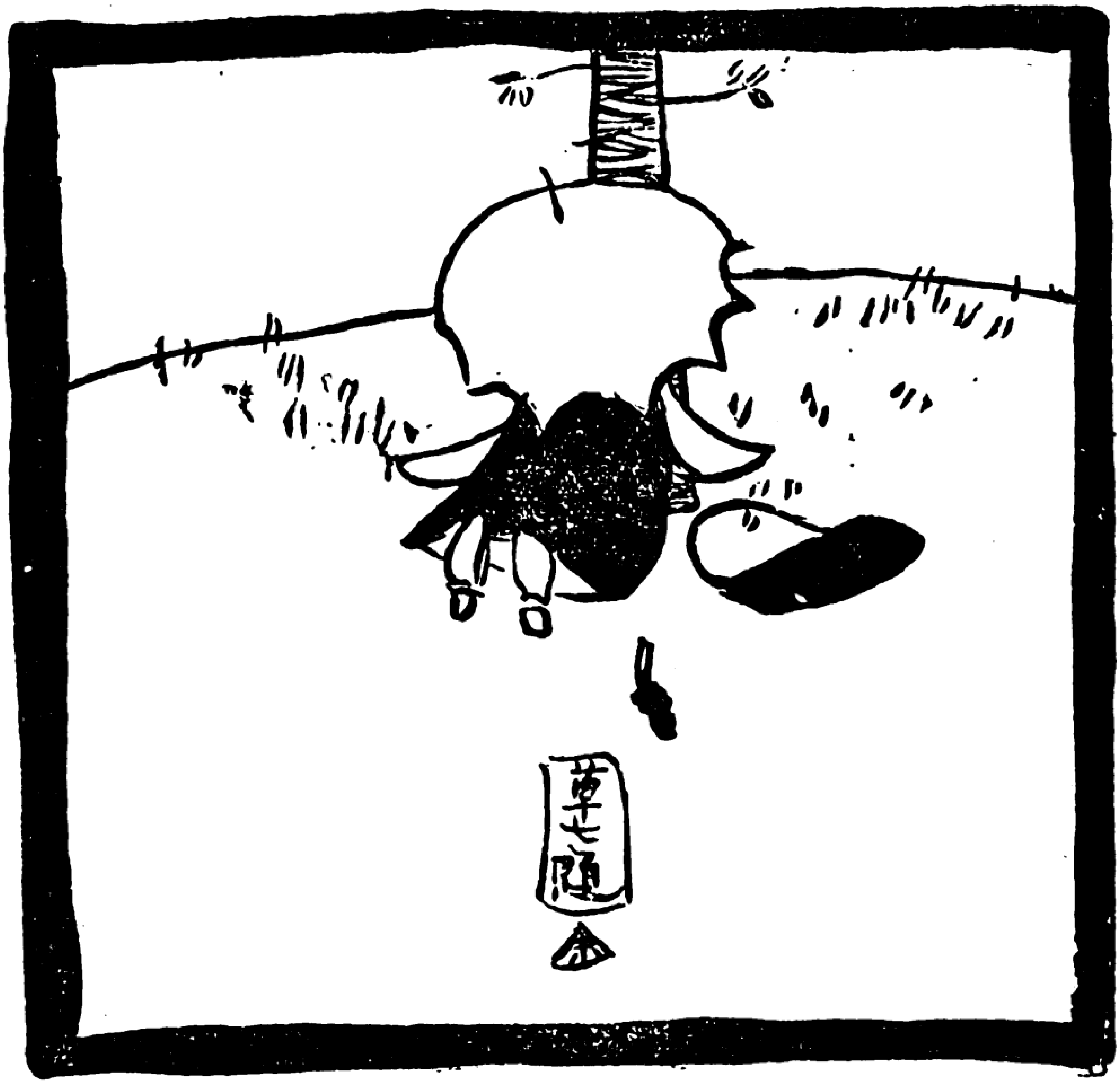
◎村の七夕祭

　今も尙は世に面白きは村の七夕祭なり。今宵は星會の夜とて、牽牛、織女の二星が、一年に一度の逢瀬を樂みに相逢ふ夜なりと云ふ。此の傳說は遠く支那より來り、我國の古歌に之を詠ぜしこと甚だ多きを見ても早くより此の傳說の傳り來りしを知るに足るなり。此の夜、鵲飛び來りて翅を擴げ、牽牛、織女をして天の川を渡らしむとぞ。庭前に机を置き、瓜、果物を供へ香を焚き、五色の絲、梶の葉などを供へ、又、五色の紙に文字を書きて竹の枝に繋ぎて、此の兩星を祭るなり。斯くすれば書を巧みに、針仕事が上手になるなりと云ふ。

天の河淺瀨白浪辿りつゝ
　渡りはてねば明けぞしにける　紀友則

外には五色の紙連りに夜風に戰ぎぬれど、屋内には一家團欒し、一杯の濁酒に顏打赤むる男子もあるめり。夕顏棚の下、蚊遣火ほのかに煙りて、行水を捨てし跡に蟇のそ〳〵と這ひ出づるなど、平和な夏の夕べに滿ちみつ。

誰が植ゑしともなく自然に生え出でし月見草の、今を盛りと咲けるに、吻長き蛾の飛び來ること繁く、空には蝙蝠の飛べるさま面白し。



夕顏や醉うて顏出す窓の穴　　芭蕉

蝙蝠に手許もくらし油賣　　北枝

◎古院の蓮池

東京の不忍池は蓮花多く、古へより名高き名所なれども、四邊の空氣に一種の俗味を帶びたるは、甚だ惜むべし。蓮花の性は元と出世間的のものなれば、些かの塵埃をも止めぬ古院舊寺にて見るもの最も淸く、最も美しきが如し。

嘗て京都の黑谷に棲

みぬ。此の地すでに東山の麓に在りて、法然上人の舊蹟地なれば、塵外の淨域たるは云はずもあれ。

拂曉、數百級の磴を下りて、古池の畔に立つ。浮萍色緑に池面を領し、其の間より大なる靑傘を抽出し、更に其の間の所々より純白の寶珠を捧ぐ。曉風そよろと吹き來れば、彼の靑傘も亦たそよ〳〵と戰ぎぬ。此の風に依りて夜は明けたるらし。

遙かに勤行の聲を聽く。忽焉として古鐘の響を聽く。突如として脚下に魚の躍るを聽く。我が知らざりし間に、何時しか彼の純白の寶珠は旣に開きて花臺を形づくりてありき。

蓮葉の濁りにしまぬ心もて　　僧正遍照
　なんかは露を玉とあざむく

蝦蟇と化して夏日荷葉に棹さゝん　　几董

◎蟲干日記

未だ若かりし頃、東京の片邊に住みぬ。

靑天の續くこと十數日、赫奕たる日光は宛ら玫瑰の如く輝き、昨日は一昨日より熱く、今日は昨日より更らに熱く、屋根には瓦白み、大地には龜裂を生じ、空中には些かの水分も消し盡しぬ。蟲干には最も好き時なり。

多くもあらぬ衣裳、道具など取出し、緣の靑簾捲きあげ、風に當てんとて、座敷をば所せきまで散したるさま、古着屋の如く、また古道具屋の如し。

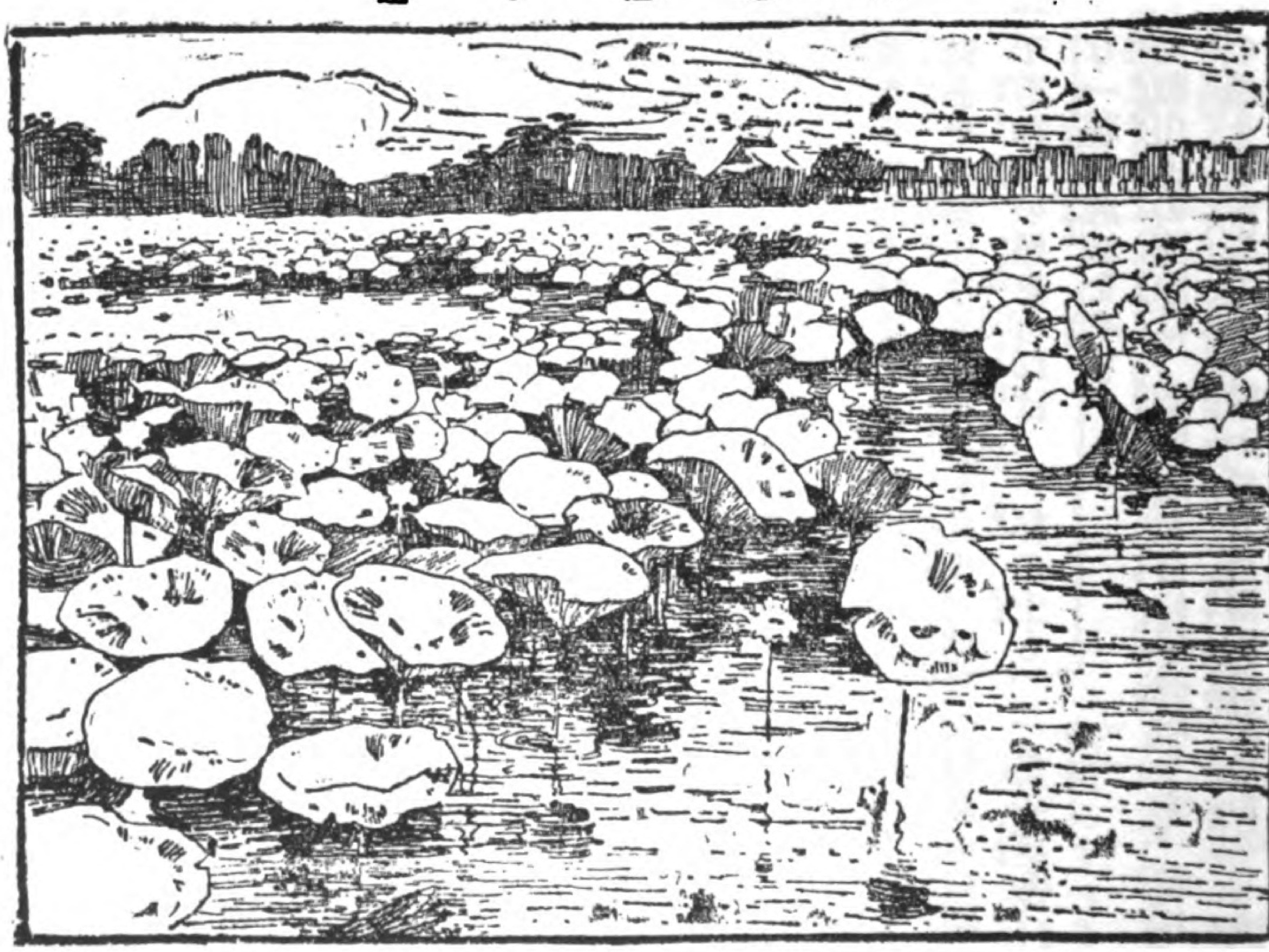
庭前に百日紅あり。長き夏日を唯だ紅色と咲きぬ。日は過ぐれども、更に其の色變ることなく、每日々々良くも彩ろはぬもの哉。萬年新造の其れかと覺えて、淺猿しき心地す。其の傍らに小さき花園あり。向日葵、檜扇など二三本植はりて、黃色き大なる花、熱苦しく赤き花を着けたり。沓脫石の緣には、此にも亦た小さしとは云へ、暑き夏日に怯めず臆せず咲ける松葉牡丹あり。良くも斯く揃ひて熱き花の咲けるもの哉。

庭の片隅に小さき畑あり。紫玉の美果を味はんとて茄子を植ゑしかど、皆な小さく萎けぬれば、却て芥溜より這ひ出でし南瓜の芽の爲めにその領土を奪はれぬ

此の南瓜にも劣らず呑氣なるは糸瓜なり。最初は白瓜と思ひて植ゑたりしが、蔓の伸ぶるに從ひて何となく其の樣怪しげになり、葡萄の棚をば易々と占領し了りて、今は麥酒瓶ほどの奴を五六本ぶら〳〵とぶらつかせたり。彼の南瓜は惡女の深情、執念く何處までもと追ひゆくが如く、此の糸瓜は、何の藝能もなき食客が何時かずる〳〵べつたりに他家へ養子に辷り込んだるに似たり。具さに觀察すれば、各々皆な異なれる素質と異れる性格を發揮してそこにいふべからざる趣味を見出す。

午過、花蓙を敷き、籠枕して仰向に寢る。軒の風鈴、風なければ音もなく、籠の蟋蟀のみ頻りに鳴く。庭に簀ひろげて干したる梅干、强烈なる天日に射られて、强烈なる酸臭を發し、直ちに迫りて人の鼻を衝く。蠅の襲擊極めて激しければ、寸時も團扇を放ち難し。隣屋敷の大榎に、油蟬の犇と止まりたればや、ジユクジユク〳〵〳〵と汗を絞るが如く鳴きわめく。太陽少しく西に傾ける頃、夢より覺めて冷水を被り

不忍池の蓮



妹が持來りし一塊の氷白玉に、腸も引締まるばかりの冷味をあぢはふ。

時も早や梅に塩する暑さ哉　野坡
蟬鳴くや行人絶ゆる橋柱　蕪村

◎盂蘭盆會の夜

七夕祭には希望的趣味あれども、盂蘭盆會には一種の寂しき情懷あり。村落の子供等數多、苧殼に火を燃し、お迎ひ〳〵と叫びながら木下闇を走り行けば、亡父、亡母、亡祖父、亡祖母等皆な茄子や胡瓜の馬に乘りて來るなりと云ふ。亡き母者人の俤は、此の夜まざまざと其子の眼に映るなるべし。亡き父樣の姿も、此の夜、其子の眼に顯るゝなるべし。斯くて、老人も、子供も、相共に掌を合せて精靈を拜む。美しき情懷、寂しき情懷、千百の國を通じて此れ以上のものありや。

蓋し盂蘭盆とは佛說より出で、盂蘭盆とは倒懸との義なり。佛弟子目蓮の母餓鬼道に落ち、食物を喰はんとすれば、忽如として皆な火焰となりて喰ぶこと能はず其の苦しみ宛ら身を倒まに懸けられたるが如し。目蓮之を見て大に歎き、其の苦患を救はんことを佛に乞ひ七月十五日、食物を盆に盛りて餓鬼を供養し、茲に始めて其の母を救ひ得たりと云ふ。是れ盂蘭盆會の嚆矢なり。其の緣起は甚だ佛說的臭味激しく、寧ろ嫌惡の感あれども、今の迎火は言ふ可からざる美しき一種の情懷を含めり。

迎火や父のおもかけ母の顏　白雄
假の世のこれも一つや瓜の馬　甘茶

◎比叡山上の生活

京都の鬼門を鎭護せる比叡山は、山精水氣の相凝りて結晶せる靈山なり。加之も此山、傳敎大師開山以來一千有餘年の歷史あれば、一杯の土も、一塊の草も、皆な一種の趣味を有す。

比叡山上の凉味は、到底之を口にすべからず。啻に蚊の栖まざるにても、確かに五百兩の價値はあるなり

毎年、避暑の候、京阪の西洋人天幕を携へて登り、擅まゝに涼味を貪りてかへる。何ぞ其の生活に巧みなるや。

今を去ること數年以前、此山に登りて暑を避けしことありき無動寺の邊、最も佳なりしと覺ゆ。

千年萬年の老杉古檜、蕭然として天に聳え、鬱々として日光を遮す。谷深き所、草茂き所、白露水銀の如く綠の苔に浮びほろ〳〵と轉び離れて、これが絲より細き淸水となり、微かなる私語をなしつゝ流れ〳〵て、小さき瀑布となりぬ。



其の傍らに大なる青銅の琵琶あり。謹みて無動寺の辨財天女に奉つりしものならんも、其の餘りに大なるを如何にすべき

試みに半日の閑を無動寺の古堂に過せば、爽涼の氣骨に徹し、仙人的趣味を會得して歸るを得ん。敢て此山に登る者の爲めに言はむ叡山百合を忘るゝこと勿れ叡山鶯を忘るゝこと勿れ。幽草、蔭暗き邊に稜星の仄かに輝くを見れば、行きて之を採り、その芳烈なる香を嗅ぐを忘れずあれ。谿谷より谿谷へ轉々飛翔し、



大磯海水浴

その山谷に反響して玉の桔棒を汲むが如き聲を聽かば徐かに耳を欹つるを忘れずあれ。共に叡山に特種の誇りとすべきものなればなり。

山姫の瀧の白絲くりためて　後京極攝政太政大臣
織るてふ布は夏衣かも

山百合や齒朶の間より一つ咲く　白雄

◎海岸の逍遙

烈々たる天日、空に輝けども、夕べの涼しさは流石に秋の近きたるを思はしめぬ。

風なく、波穩かなる夕べ、鎌倉の海岸を逍遙す。白晝見たる赤裸の子も、短き白衣を着て跳ねまはり、いづれは何家の令孃なるべし、浴衣の裳裾つゝましげに取りて、砂地に立ち、徐かに夕映の雲の色を眺めぬ。尙ほ注意して見れば、若き紳士も、老將軍らしきも、貴婦人らしきも、學生らしきも、或は佇み、或は徐かに逍遙しぬ。此人達の面は皆な黑けれども、樂天の光希望の光に生氣迸らんとせり。嬉しきは海水浴場の夕

暮のさまなり。

徐々と巨人の迫り來ると見れば、彼國にも稀れなるべき西洋人なり。葉巻の煙紫なるを啣へつゝ悠然として立止り、彼方の夕映の色を靜かに眺め入る。

赤き空は樺色に變じ、樺色は更に黄色に變じ、畢に淡々たる灰色に歸するや、人々の蹤は自から動き出で砂を踏む音のみ夕闇の中に繁し。

鎌倉を去る日なり。松並木より横に入りたる草原を歩む。低徊去るに忍びざるは、十餘日相親める土地なればなり。

遥かに轟々たる波の音を聽く。その波に乘りて泳ぎたるも今日が終りなり。朧ろげに令孃の姿見ゆ。その喜ばしげなる俤を見しも昨日が終りなり。斯くの如くして避暑地に名殘を惜みて去る者は、大方の人皆な然らむ。思ひ出多き極みや。

夏草は茂りて人頭を蔽ひ、小さく白き花は綿の如く咲けり。機織蟲頻りにはた〳〵と飛び交ふ。その翅音の夢の如きを聽き、その宙をかすむる影の夢の如きを見れば、人の子、などて涙なからむや。

されば此地に餞す。永久に變らざれ。

日本に無い女の職業

米國に於ける婦人の職業中、未だ日本に無いと思はるゝものは、大工、鍛冶屋、電車の車掌、同運轉手、巡査、夜番、探偵等でありますが、巴里には辻待の馬車の馭者に婦人がありまして、是れは男子よりも客扱いが大變親切であると云つて評判が好いさうです。其他亞米利加の統計表に出て居る職業別を見ますと、職業の數が三百三あります、其中で婦人の一人も從事して居ない職業は九つしかありません、あとは皆男子のやつて居ることで、女子のして居ないものは一つもありませんが、只女子の方が人數が少ないと云ふばかりであります。其外の國は何う云ふ有樣であるか、委しいことは今分りませぬが、最近の調査に依ると、英吉利では工場に働いて居る婦人の數が三百五十萬人、佛蘭西では同じく四百萬人で、工場の勞働者は、英吉利も佛蘭西も共に亞米利加よりは多いのであります、尙ほ私が茲に婦人の職業と申すのは、工場に働くと云ふやうな比較的下等な職業ばかりを云ふのではありませぬ、專ら腦髓を使ふ高尙な職業も入れて居るので、婦人の銀行家、婦人の仲買人、婦人の大學教授なども入れてあるのでございます、斯樣な工合で、男子の働く範圍に追々婦人が侵入して來る、これが今日の世界に於ける婦人問題の有樣であります。(安部磯雄氏)



表面から見ては分らぬ病的性情の良人

ちか子

時々雲行險惡しいお聲の漏れるお隣家の奥様が一日私の宅へお越しになつて、何かのお話の序に「男の嫉妬する程うるさいものは有りませんよ」とつひお口がすべつたのを機に、旦那様がと私はすかさず尋れました。

奥様は其にほやかな眉をつとおよせになつて無言のまゝ大きく合點遊ばした。

まさか、と私がわざと打消すのを奥様はお頭を横に振つていゝえ、事實、こんなこと僞を申上げられるものですか、隨分ひどいのですよ、おはづかしくてお話も出來ない様な事ですけれど、あゝやつて毎日お役所から歸りますでせう、そしてもし私の洋傘の置場でも變つたり、下駄が玄關に脫いであつたりでもしやうものなら、大變ですの、己れが居ないとすぐ出歩くだの、何所を歩いて何して來たどの、相手めつけて歩くのだらうのと、それは〳〵お話しになりませんよ、女中達の手前もあるのに、一向お構ひなし、それが貴女外出だけならさう喧しく申すのならいゝのですが、吳服屋が來ても悉皆屋が來ても男でさへあれば大變、全然車夫の家庭より甚いのですかられ。



とつく〴〵おくやみなすつた。旦那様は法學士でお髯美しい紳士、奥様の容姿だつてさほどでもありませんがね、どういふものでせう。

それから又夫の同窓で只今○○○○○の參謀をお務めの方があります、クラスでも有數の才子で濱野さんと云へば皆さんよく御存じですが、又濱野のミツセスと云へば評判になつてる位の奥様、何故さう評判になつたかと申しますと、濱野さんはどう云ふものか奥様を非常においぢめなさるさうで、現に私どもへ御夫婦でお越しになつても一度だつてお二人仲よくお歸りになつた事はありません、何だ牛見たいな體してとか、先に歸れとか、もう貴様はいらぬとか、初めの間はお口だけですが後からはお手が出る、私達もお氣の毒で一生けんめいでお止めすといふ風、奥様はそれでも決してお怒りにならない、にこ〳〵受け流して居らつしやるのですが、にこ〳〵なされはなさる程旦那様はお荒くお出になる、さすがの奥様もお手が出ると終ひにお泣きになる、お泣きになると旦那様は勝ちほこつたと云ふお顔でお機嫌がなほります、奥様はまだ十九だとか、それは〳〵、お美しい方ですが、どうしたんでせうこんな風で、と云つて心から奥様がお憎いのぢやありません

時にはおのろけを仰る事もあります、感心なは奥樣、いやなお顏一つなさらず旦那樣の御出世をのみお祈りなさる。

私は思ひます、この旦那樣なぞが所謂近頃耳にする否歐洲諸國で專ら流行する「サヂスム」家ではあるまいか。

――愛人の苦痛を見て一種の快感を覺ゆるといふ――

其輝いたお眼、微笑を絕たない口、胸豐かな參謀肩章、意氣に氣どつた短劍姿の君を見る時、誰が斯くの如き性情の方だと思ふでせう。

皆さんうつかり遊しては不可んよ、武夫さんといふ可愛いゝ方を生んだネヴヰーにも ちよい〳〵かういふ方もできるのですから……。

今お一人は、これは私の親友の夫君です、大變な奥樣思ひでいらつしやると申せば何の異議もないのですけれど、友は時々私に悶々の胸を訴へます。

「私こんな苦しいこと初めて、甘えないつて叱るんですもの情がうすいからだなんて、勝手なこと云つてはぐづ〳〵いふのです、三百六十日朝から晩迄顏つき合せて居なくちや滿足しませんですもの、さういつも〳〵甘つたるく出來るもんですか

衣物だつて何故れだらないかつて云ひますけど、欲しいものがあれば被服費の方から買つて行けるんですから わざ〳〵買つて頂戴なんて手ひき袖ひきしなくつても濟んですもの、それもれ少しお金目のあるものなら 私だつてあれを買つて下さいまし位いひますけれど其云ひ方がまづいんでせうよ、味がない女だ〳〵つて一日に幾度かのお小言です。女中も一人ならず居るんですから、もう二十歳を越した私がたと甘へ得る性だかつて見つともないぢやありませんか、新婚當時から今迄このお小言で三年も鍛えられても甘へる事の出來ない私、もうあきらめて吳れたつてよさゝうなものですけれど、ます〳〵盛んなりで私もうこの頃はうるさくて苦くつてたまらないですよ。

兎に角、人はさま〴〵性はさま〴〵、女に計りもヒステリーだの養ひがたしだのとお口の惡い殿方の內幕、ちよと垣間見てかくは皆樣へ……。



▲瑞典では婦人に被選擧權を與へた結果として、二名の婦人が市會議員に當選した、同國では最近數年間、婦人が自己の地位を高むる爲めに運動した効空しからずして、今や婦人が社會の表面に活動する機運となり、官公吏と成つて、官省府市に勤めてゐる女子も少くないとのこと、

青年男女を持てる父母長上の警戒

警視廳の注意人物となつた男女學生の一群

私は今法科にゐる某大學生から現今暗黑方面に働きつゝある側の女學生の狀態を聞きました、これは實に恐るべき現象で眞に世の父母長上たる人の警戒すべき事柄だとおもひましてこゝに其大略を記します、尤もこの話の中には不敏なる記者の眼にも多少針小棒大に話された事實がある樣にも思ひますが、全く根無草とも思ひませんから。（覆面記者）

▲學生帽の見分け

大學生曰く「僕は實際その方に趣味が無いから深く詮索しやうと試ふ氣もなかつたのですが、女學生の從妹を澤山持て居て、その友達との談話なぞを聽く機會が多いので幾らか女學生の消息が分つたやうな次第なのです。幸ひに僕の從妹やその友達の内には墮落したものはなかつたのですが、それでも彼等の談話を聽てゐると或點に於て男學生も跣足で逃げ出すくらゐなのがあるのです。僕は或夏伯母やお茶の水に通ふ從妹といつしよに鎌倉へ避暑にいつたことがありますが、從妹の友達が始終避暑がてら尋ねて來て盛んに快談をやる。しかし何ぼなんでも僕が側に居ると遠慮して普通のことばかり話して居ますけれども僕が部屋へ引込とサアそれから喋々げら〳〵とやり出すのです。僕の部屋は從妹の部屋と隣り合て居たから手に取るやうに聞えるのですが大抵男學生の品定めで持切です。彼等はあらゆる學校の制帽を良く觀察したもので吾々が見ても一寸紛らわしい徽章でもチャンと見分けて居ます。明治と早稻田とは同じやうに稻が抱合て居る徽章で中の文字が一寸違ふだけですからパンドーが掛つてゐるとどつちだか分らないのですが、それでも彼等は一目

で分るのだ相です。さうして何中學生は意氣だとか野暮だとか、何大學生は程が良いとか氣障だとか云ふ評語を一々各學校の學生に加へ、それぢやア貴孃は何々學生に思召があるの？などと云ふ揶揄から始まつて追々烈しくなると隣室で聽て居ても居たゝまれないやうなことまで喋舌つて居ますが、新案の熟語或は英語位で巧みに秘密を語り合ふから普通の母親ぐらゐ聞てゐたつて何を話してるんだか分りやアしません。

▲名刺を男の袂へ入れた女學生

男の肩を持んぢやアありませんが、男學生の裏面は見掛より內輪な大人しいところがあるのに比べると、女學生は菩薩のやうな顏をしてる癖に却々圖々しいものですな。僕はつい一ヶ月前の日曜日に、友人と上野へ買物に往くのに家が東西隔つて居るから淺草のオペラ館で待合すことに約束したので、僕は往つて見ると友人は未だ來て居ないから一人で卷煙草を吹かして居ると隣席にマガレツトに巾廣のリボンを掛け上品な服裝をした十七八の美人の女學生が坐はつて居て段々僕の方へ擦り寄つて來るから、工合が惡くなつて少し前の方へ席を更ると彼も又前へ進んで相並びました。而して僕がベンチへ左腕を掛たら彼は彼の右腕を掛て手先を僕の手の上に置たので僕は屹と顏を見てやりましたら彼は流石に恥て側を向て了いました。その內友人もやつて來て直に上野へ行き買物をする際袂を探ると某高等女學校生徒、何町何番地產婆某方寄宿と片書した名刺が入つて居たので友人から幸福者と肩をたゝかれたのでしたが、僕は歸宅してから向後を警むる忠告手紙を無名で送つて置きました。

▲間が惡いから五錢損することがある

電車の中で男學生を揶揄ふ女學生がありますナ。僕は此間學校へ往がけに薩摩原でタイガー連らしいのが五六人乘込で僕の腰掛てる前の皮へブラさがつたのですが、一人が僕の顏をジロツと見ては他と何だかコソ

コツ嘲いてげら〳〵とやると、又他の一人が同じやうなことをやる、此方に連でもあれば好かつたが生憎一人ポッチでしたから間も惡し、腹も立つて一つウンと取つしめてやらうかと思つたんですが、急込むと國訛が出るから餘計に笑はれちやア殘念だと思つて我慢してしまいました。ナアにこんなことは珍らしくないので時としては間が惡いから五錢損して途中で下りて了うんです。こんな種類の女學生でも商人風の青年には鋒先を向けぬやうですナ。僕は時々家の用事で商人風を爲て電車に乘ることがあるが、そんな時には彼等の視線が少しも向はぬやうです。

▲滿座の中で學生を遣込んだ女學生

僕の友人にたゞ女學生をおひやらかして見るのが好なのがあつて、或時電車の中で隣席に腰掛てゐた女學生に一寸揶揄つたところがその女學生が衝と立て來て「貴君方は御帽章で何々學校のお方と推しますが唯今のやうなことをなさいますと私の迷惑は扨置き前途有望な貴君方のため、又貴校の御名のために非常に惜むのでございます。以來少しく御反省を願いたい。」と云つたやうな調子で滔々と遣込めました。友人も滿座の人から視線を集められて閉口したらしい、僕までも一緒にお談義を受て居るやうで大弱りに弱つたのでしたが、その女學生は二十歲位で師範當りの生徒らしかつたのです。

▲電車の中で書見する女學生

ハイカラな風をして電車の中でむづかしい教科書なんぞ見て居る女學生は墮落學生に注目さるゝばかりでなく、彼等自身も男學生の注目を期待するためにやるので、こんな女學生が誘惑に陷り易いと云ふことを聞きましたが、成程新聞位なら未しも代數とか物理とか云ふものを頭部のぐら〳〵動く騷々しい電車の中で見たつて實際理解が出來やう筈はないでせうから畢竟一種の虛榮としか受取ませんナ。又男學生の方でもこんな

大谷川　（日光名勝）



會見をやる者に往々油斷のならぬ連中があるんだ相です。

▲女學生をけなす男學生

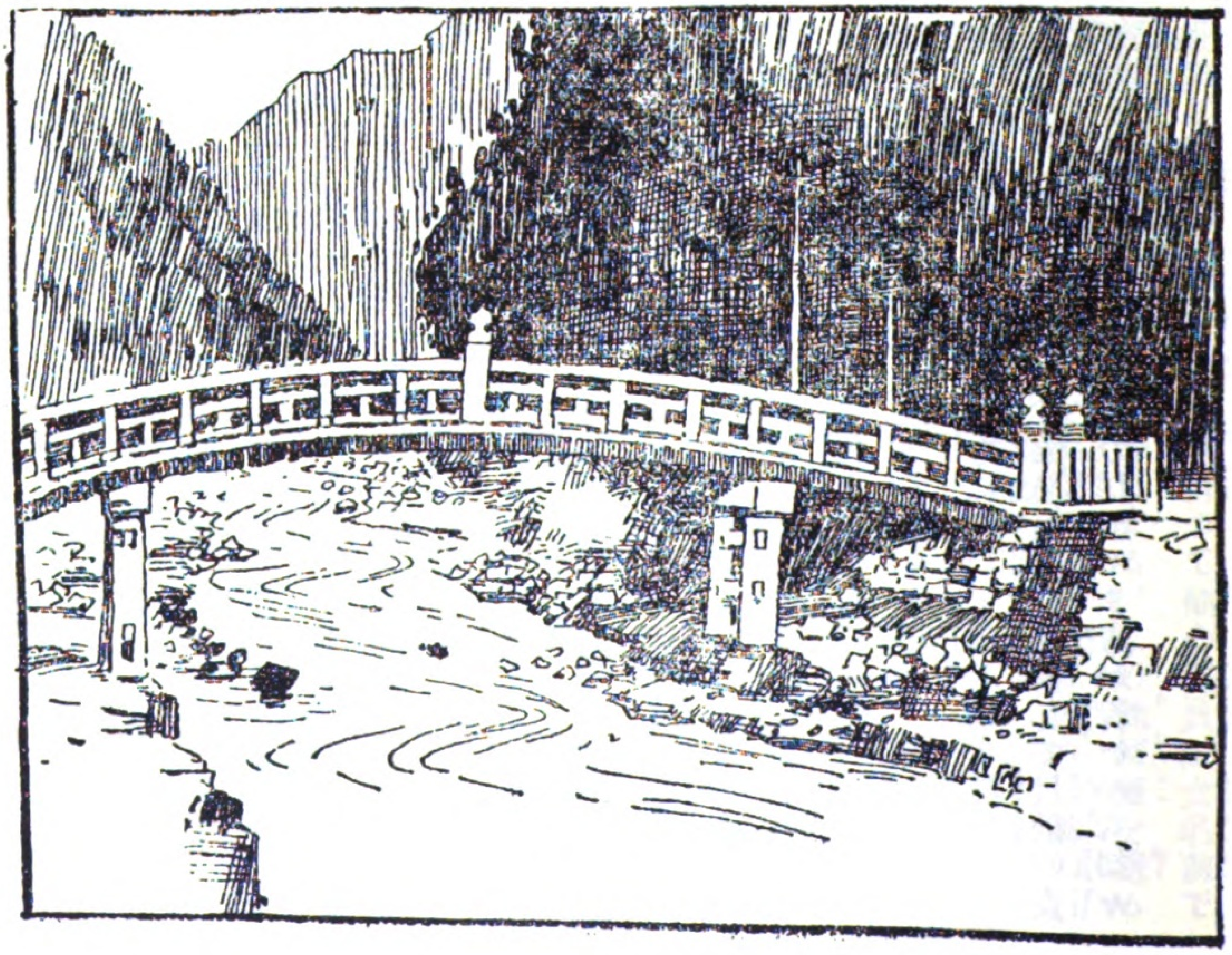
男學生が寄ると矢張女學生の評論が盛んにはじまります。妻に持つには女學生は眞平だ。生意氣でだらしが無つて主婦としての資格はゼロだ。學生生活を爲たものでなければ交際が下手だとか、はなし相手にならぬとか云ふけれど、そんなことは妻にしてからマスターの指導次第でどうにでもなるぢやないかと云つて女學生をけなす者もあれば、女學生に限ると云ふものもあつてこの議論が始まると互に眞赤になつて喧嘩をやるのですが、先づどうしても女學生びいきの方が多いのです。さうして口先で女學生をけなす男が內々非常に女學生を好てゐると云ふのは事實ですから可笑しいのです。それアまづ何といつても凡ての女學生は箱入娘より話を爲たつて興味があるし男學生の趣味に近接して居るのですから好くのは當然でせうよ。しかし妻

に貰つて見たらどう云ふものでせうか、青二才の僕等がいふのは生意氣だが僕の知己のうちにだらしのない女學生上りの妻君を往々見受るのです。一例を擧れば、買物をするのが大袈裟で商人の云なり放題にして品物の鑑定を爲ない。それから良人の衣類を買ふのに自分が今まで華美な若々しい風ばかり爲た癖が付て居るから良人の物まで馬鹿に華美なのを選んで職業柄に依ては大に人品に關すると云ふ始末、口が巧者な割に手足が動かないから家の中のだらしのないことお話にならんのです。尤もこれは僕の實見した範圍内で、諸君が一般にかうではないでせう。

△○○義團の組織

序に男學生の秘密を話せと仰るのですか。僕は御覽のとほり口ちやア亂暴なことを云つて居るが實際氣の小さい方で、例の○○義團の方に友人もないのですからその内幕は判然分らんのですが、此間友人が團體の連中を二三人引張て來たので物數寄に種々

神橋　(日光名勝)



聽て見ました。○○義團の範圍は市內市外八方に渡り頭數もなか〳〵多いので會員を各區に分派して繩張をちやんと定めてある。さうして甲の團體で目掛た女學生は乙の團體で決して手出をしない規約があり、各自この規約は嚴重に守つて居るところが義團の義團たる所以だとか云つて居ましたが名前は隨分振つたものですナ。會員は十七歲から二十五歲位迄の各學生で、過半は中學生、學生以外の者も少しは入會して居るさうです、一般入會の手つゞきは志望者の度胸試しと云ふのをやるので、先づ志望者に單獨で何處かへいつて喧嘩を吹かけて來させる、併し凶器を携ふることを嚴禁し、若し竊かに携帶した際には嚴しい處分をする。而して喧嘩が成功して手傷位負ふて來ても再び復讐に往て來たものは血判して入會を許すのださうです。會費は各自幾分か支出して居るが大體の運動費は女學生からの收入で維持して居ると云ふ話しでした。彼等が女學生を誘ふ手段の一二を聽ましたから御參考に一寸まをしあげませう。但し取次口調では面倒ですから彼等の談話調でやります。

▲暗號

義團の一人が電車の中で是ッと目掛る女學生を他に示す時には先づウー(ウーマンの意)と云て目配をする團體が立て居る場合には指令者が目的物の方を振向く又その女學生の態度と乘客の工合次第で近接して密かに握手せよと命ずる場合には指令者が或る手つきを爲て示す。この他種々の手段が皆暗號に依て傳へられるそれから虎の門のを「タイガー」と呼ごとく各女學校に仇名が附て居て觀察したものが他に暗示し手分して隨行することがある、女學生の分類法は化粧の仕方、髮の結方からリボン衣服の色合、地質、履物、携帶品の種類及び包の持方等に依つてやるのだが、研究の結果決して誤らない。包の持方にだつて各學校の流行があるんだから‥‥。而して乘換場所に待伏して目的の女學生の乘込だ車へ入込むのだがヤリ方が旨いから却々あらが知れないのだ。

▲回數券調べ

市外から通ふ女學生の私宅を探るのに定期乘車券で調べることがある。學生の定期乘車券には會社の方に住所姓名がとめてあるから車掌に賄賂を送つて調べて貰ふのだが、車掌は機を見て車中の學生一般の回數券しらべを爲て目的者の番號を記憶して置き、會社の帳簿でしらべて團體に通知する、已に住所が分れば降場の附近で待合して直接に當つて見るか或は無名信書を送つて見るのを手始めとする。

▲妨害物離間策

父親が會社の重役なぞで在宅勝である上に嚴重で娘の許へ來る手紙を一々調べると云ふことを豫知すると、この妨害物離間策を試みる、一例を擧れば團員の一人がその會社の給仕の服裝を爲て會社の頼み付の車夫に急用があるから御出社を乞ふと云ふ手紙を付けて車を持せてやる、主人はうつかり乘て出る。丁度その跡へ此方の手紙が着く時間を見計つて他の團員が女名前で投函して置くと云ふ手はずにする。この他信書を送る機會は各家庭の狀況を綿密に偵察して鵜の目鷹の目で探究して居るから大抵成功する。

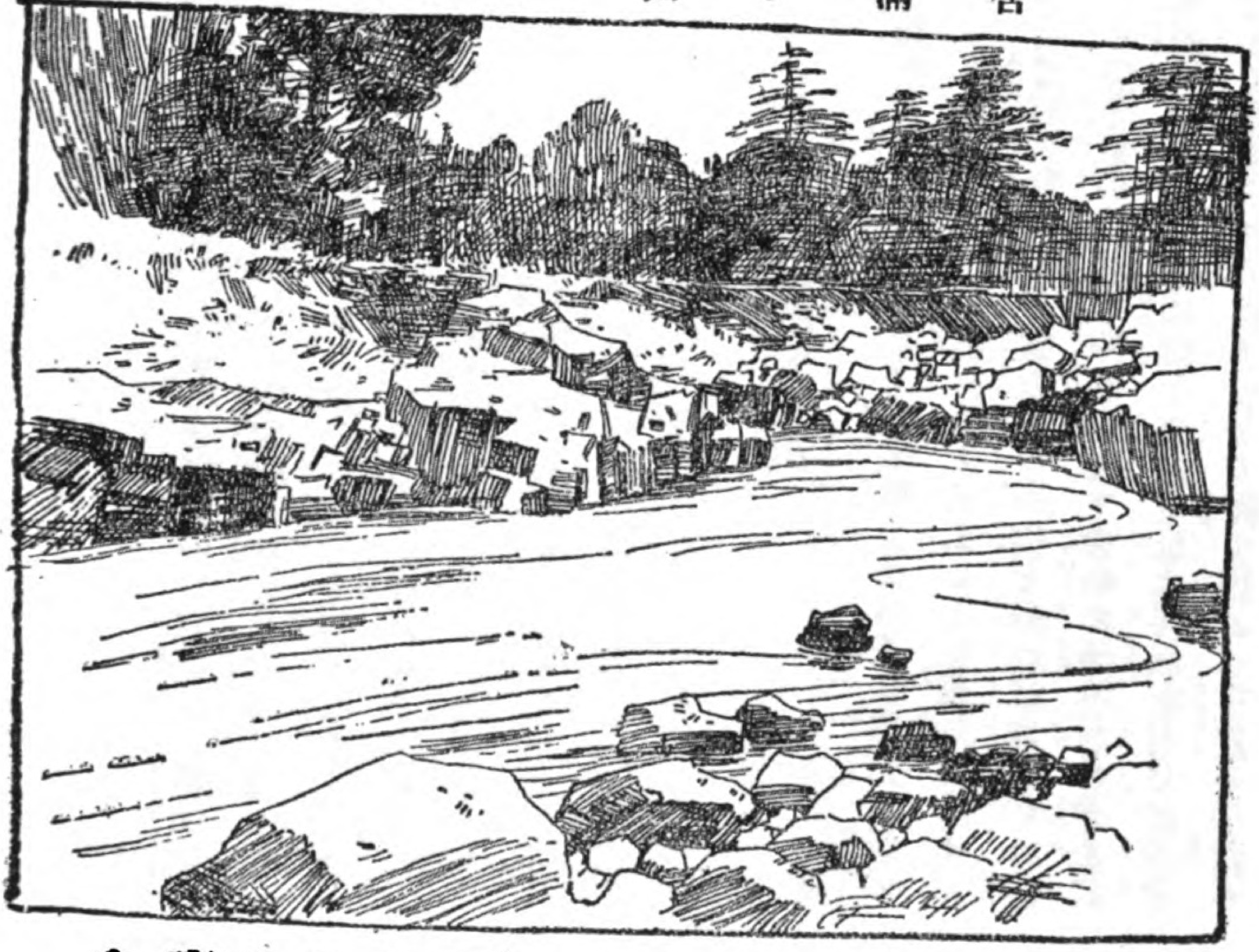
▲誘引の目的に差別あり

誘引の手段を執る前にまづその女學生の身分や性格を觀察し、内氣であまり交際もなさゝうなものは本人だけを虜にするに止まるし、富有でおきやんな交際好と見れば煽込でひろく友達の女學生を紹介させる、云はゞお先に使ふのである。

▲贈物に金を吝まぬ

當時の女學生はなか〱慾に拔目がないから交際をむすぶのには贈物が手段の一要素だ。身分良き女學生に向つても金を吝しまずそれ相應な指環とか襟止とかを送る、しかし成功のあかつきにはこれが倍になつて返るから妙だ。大抵始めのやり口は無名で「御尊名は

含満ケ淵　（日光名勝）



かねて何々紙上でとか貴校の某より承知、非凡な御才藝に敬服してゐる』とか云ふ風な讃辭をうまく並べた手紙を送り、文學上の交際を切望する寸志として物品を送るのだが、何れも目を着けられる位の女學生は虚榮に充て居るからうまく讃辭に釣込まれて内心ソワソワと悦び贈品や手紙は秘密に附して了ふ。實際こんなことを長上に言ふのは間が惡いに違いない。そこで此方では徐々と何日の何時ごろ何處で一寸拜姿の榮を得たいと云ふ手紙を送ると、彼等のある者は好奇心に驅られてひやかし半分に出掛るもあり、氣にかゝる贈品を返却して以後を斷らうと思つて出掛るのもある、此方では先方の趣味に投じさうな性質風采のものを選んで約束の場所へ向るのだが、隨分フエースの良い本當の貴公子も圏内に居るから身分ある女學生を誘ふのにも敢て困らない。で一度顔を合せた以上は辭を低ふし禮を厚くし彼等が辭するに道なきやうに仕向けて交際を結ぶ。

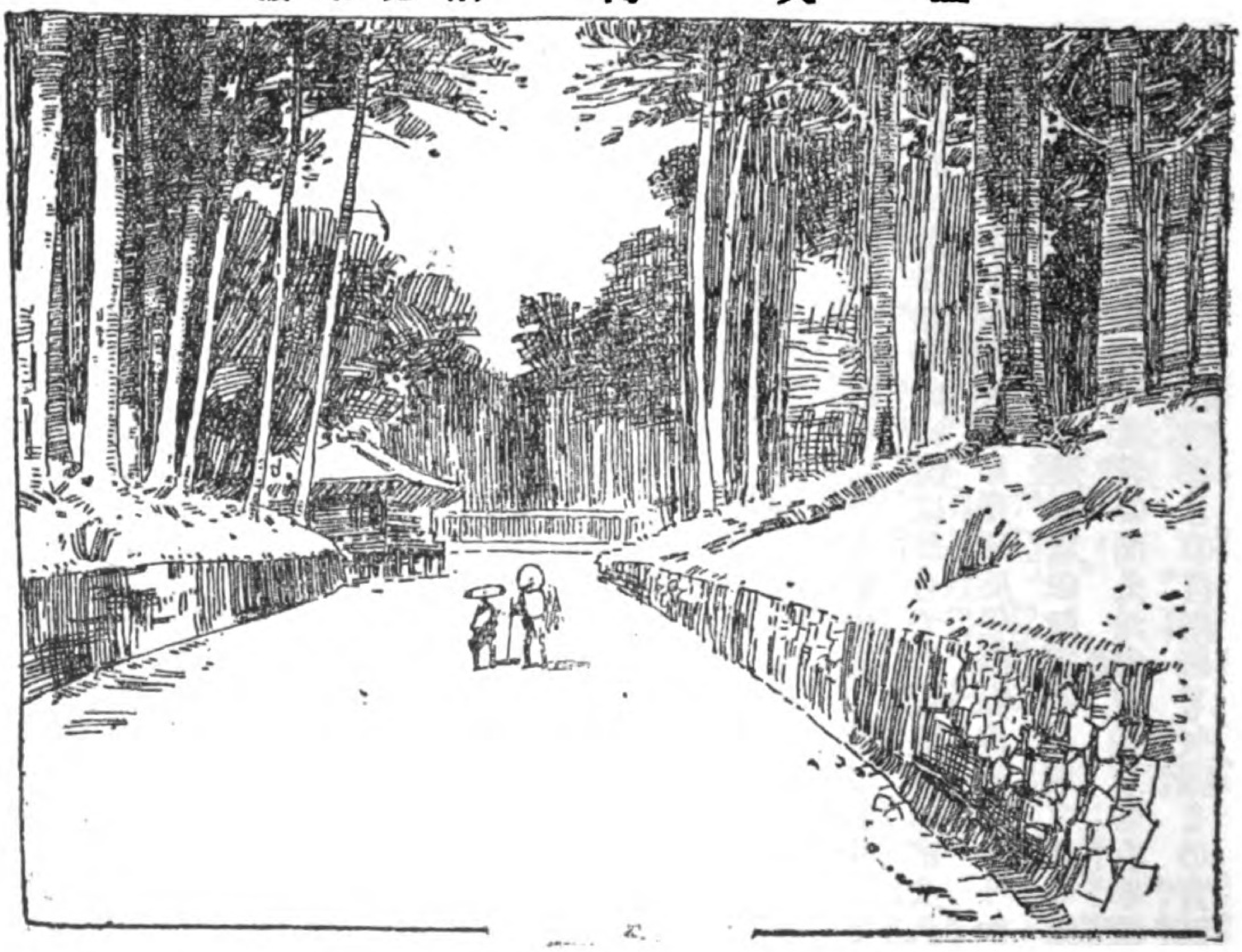
▲秘密手紙の方法

巳に交渉がついた女學生に秘密の手紙を送るのには彼の知己の婦人名前にして普通の私用文を書き、端書ならば印紙の下へ豫約せる符號文字で用件を書き、封書ならば各行の間へ薬品を以て秘密文句を認めて置くこれは焙り出しであるが普通の焙り出しと違つて火にかざして居る間だけ文字が紫色に現はれ、火から離せば直ぐに秘密文字を消滅して了ふので極安全なものださうな。

▲團體を困らした才媛

女學生から男學生へ贈る手紙が見たければ御好次第いくらでも見せませう。男學生に手紙でも寄越位のものは文章の頭腦もあるし筆も良い方で中には驚くくらゐのがある。此方でも團體の中から美文家能筆家を選んで書記に爲て置のだがこれまでに二度ばかり非常なのに出遇して一同弱つたことがある。確か有名な學校

二天門　（日光名勝）



撰科生だつたと思ふが、紫式部も跣足と云ふ才媛で大抵の者が見ても分らぬやうに纏綿の情を含んだ美文を能筆で書き流した工合實に惚々するやうだつた。書記の選手もこの返事には窮してしまつた。

▲恐るべき苦肉の策

義團連が一度附ねらつたら最後どんな妨害があつても手に入ることが出來る。横濱のある富豪の娘が東京の某學校へ通ふのに、抱えの車夫が毎朝停車場まで送りプラットホームまで車夫が包を持て來て汽車に乘る處を見屆け、新橋へ着くと親戚の車夫が車で迎へて學校まで送り、歸りもその通りに嚴重にやつて居たのまでも成功したのだがこの手段は虎の卷で會員外には話せない。又本人も案外手剛で家庭も厳しいと云ふのになると更に方法を轉じて會員の或者が適宜な場所でその女學生に無禮な振舞を加へるところへ柔道を心得た風采のいゝ會員が割て入て擬無禮者を散々に弱らせ女學生を助けて家に送り屆けるのを緣として家庭へ出入を始めるので、これは芝居がゝりの苦肉の策であるが往々旨くゆくから可笑なものだ。一般の會員の勞力の報酬は公平な規律が立つて居るから凡てがよく整頓して居る。君は墮落々々と云ふが實際家庭を遠く離れた學生で家庭を戀しがらず又此方に趣味を持たずに暮すことはむづかしい、必らず何れかに傾くのは自然である。若し兩方に冷淡で唯コツ〳〵と學んで居るものがあつたら、その學業の成績はきつとコンマ以下に違ひない。餘り喋舌ると天機を漏すからこの位で失敬する。

▲虚榮が禍の種

○○義團員の右の話を盡く信ずるのでは無論ありませんが、火の無き處に煙は擧らず、垣堅ければ犬入らずですから女學生諸君も充分反省の餘地があらうかと思ひます。彼男の云ふ所と私の觀察とを以て考へると失敬ながらパチルスは名の聞えた大がゝりの女學校に多いやうで、○○義團などの目指のも矢張この方面

たさうですから、世間に知れぬ無勢力な女學校生徒は先づ無難の方でせう。と云ふのも畢竟名ある學校へは地位財産ある家の娘が往く、彼等は如何に質素を奬勵したつて自由が利くからハイカラになる、その風が全校生徒に及ぼすといふ工合で自然他の注目を招くので全く虚榮の弱點に附込まれるのであらうと思ひます。何しろこの側の女學生は男學生の友人を澤山持て居るのが自慢なのですから險呑な次第です。僕は産婆學校の生徒なぞはどんなものかと探つて見たことがありますが割合に眞面目なものが多いです。これは露骨的に研究して空想が少いのと、境遇上の責任がある所爲かと思ひます。

▲危險年齡

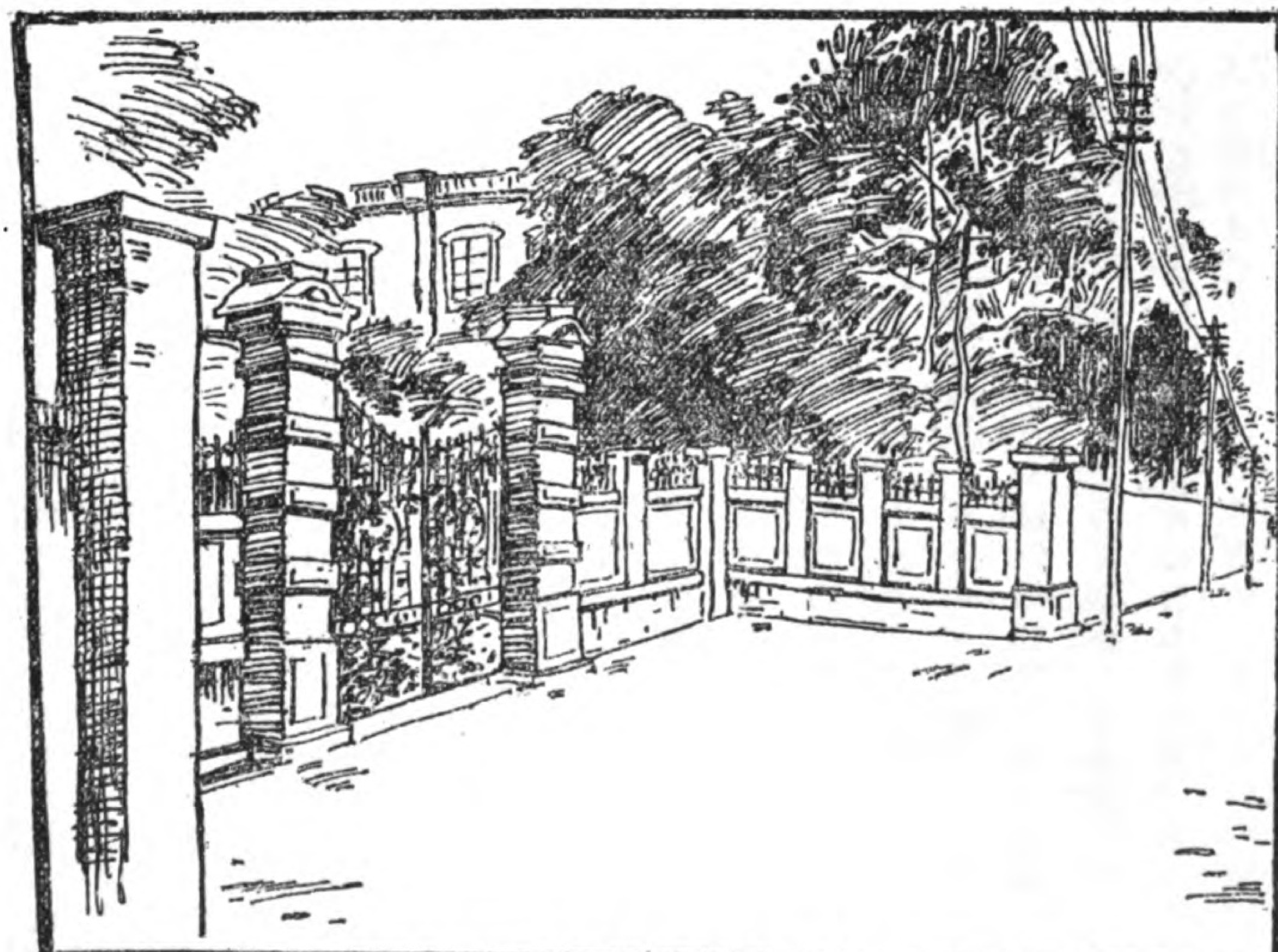
〇〇義團の會員に中學生が多い如く、材料となる女學生も矢張高等女學校時代即ち二十前のものが多く、そして大抵一時的の關係のやうです。二十歳以上になれば男女共相應に思慮も出るしおい〱責任も感ずるやうになるから一時的に騒ぎ立ては爲ない代りに實行する者は手段が巧妙で深刻なことをやるのです。手を附けるのに臆劫だから義團連も先づ度外に置く某學校の生徒なぞは、相類似した學校の男學生とテニス、ピンポン、歌留多會等の家庭的會合を利用して頗ぶる巧妙手段を執るのだ相です。凡て男學生の方は針程の事を自から棒程に吹聴する粗放な處があるから噂の方が大袈裟ですが、女學生の方は隱秘的で內實熱烈なのは實際のやうです。左樣ですな、禍は多く通學の途次に起るのでせうが、寄宿の方になりますと、より以上警戒すべきものがあるのです。なんでも可愛らしい同宿生徒にリボンを遣るのが契約の印と云ふことを聞きました。何れにしても最少し意志の力が強くならんことには……。倫理の講釋なんぞホンの機械的に耳を貸す位なものですから始末が惡いのです。試に土曜や日曜に活動寫眞館なぞへ入つて觀察して御覧になつたらいくらでも好材料を御認めになるでせう。

▲米國女學生を觀察した友達

僕の友人で可なり女學生通の者が渡米してから彼地の女學生にも野心を抱いて見たところが却々手を出す隙がない。その癖白晝若い男子と相並んで公然散歩などは爲て居るが、イザ結婚の申込となると遠慮會釋なく理由を述てキッパリと斷つて了ふ。一體理性の方が勝つて居るから情實に拘泥しない。尤も人中で男に靴の紐を結ばせる位の女尊國であるから女子の權利が強いためではあらうが、實際日本の女學生より意志の力が非常に強くつて腹がすわつて居る。それあ多くの中には躓くものもあらうが先づ概括した處で彼地の女學生には情的の過失がないと斷言されると云ふことを僕の處へ書て寄越しました。

初夏の風は海より麻の葉の浴衣の袖とパナヽを吹きぬ

葉櫻の下こそよけれちら／＼とネ子の着物に光ながるる



土方伯爵邸（小石川林町）

ハーモニカ

内藤千代子



△

朝飯後、昨夜やつと書き上げた原稿を出しに行く。もう約束の日より三日後れて了つて……それに今度のは我乍ら氣に入らず、とても駄目だらうとは思ふけれど……。はがきを十二枚と二錢切手一枚買ふ、この代金二十錢也。

机の整理をして居ると、女學世界が來た。……封おし切つてペーヂすつとばして富枝樣の湖畔生活を見る。オホヽヽヽハヽヽヽこれを半頁でも失笑だきずに讀む人があつたら千圓ぐらゐな懸賞かけてよ。書いて了つた、富枝さん、こんな筆をもちながらしらばつくれて、今までイヤに私のことをおだて上げたりなんぞ……。嫉ましく憎しく口惜しいやうな念が胸一ぱいにつき上つて來た。

〇〇先生も随分な——千代樣のお針友達なんていゝかげんな事止して頂戴。〇〇館の娘さんだなぞすつぱぬくと、銀杏返しにでも結つた意氣な女を連想する。富枝樣は美しい女學生さん、いま本郷の學校にゐらつしやるのよ。

才筆！　富枝樣は一種の豪傑だと思ふ。流石の兄樣も妹さんにあつちやたまらない、オホヽヽヽ切れない鉋につかまつてゴシ／＼一生懸命のお姿が目に見える樣だ。あの後に兵古帶をちよきんと結んで……。この兄樣つてば、まだ學校に御在學の時分、ある日御友人の丘さんと二人で、自轉車借りて上野の山へ出かけたんですつて。すると丘さんの方は上手だから、兄樣ともすればおいとけぼり……夢中になつて後を追ふ。とう／＼屋臺店に衝突して婆さんをすつとばし、調子にのつて先へ走り去つた丘先生は、不忍池にころげこんで了つた。

ホヽヽヽ擬うつてるわれえ、痛めた腰をさすりさすり、そこらに散亂した駄菓子なんか拾ひあつめてやつと、あやまつてる兄樣の樣つたらは……オホヽヽヽヽ。

それからね、兄樣は菊の露程もに醉ふやうな下戸なので、みんなが面白がつてゐる時無理やり、ビールをコップに半分ばかり飲ませたら、まるでどろのやうに成つちまつて、随分もてあまして、俥に相のりして、やつと下宿へ送りこんだもの、心配で心配でたまらないから丘さん、翌日柿を三十個持つてお見舞に行つたんですと。

兄樣ケロリとして居て、話ながら兩人でその柿を食べ始めたところ、

丘さんは指を鳴らしてゝ、メスがよく使へないので、苦心惨憺やう〳〵一個を剝ぎ終つた時、兄さまもう二十三個食て居たつて、まさかれえ。ほんとに私も兄様が欲しい。あつたらどんなにうれしいでせう。女。：妹…：靈ちやんなんかしやうがないわ。

獰猛、素敵、は吉岡家の流行語だ。エゝ理由があるのよ？　私も大にあづかつて力あるけど……云ふとまだ富枝様に冷かされる。

「桑田」は大分猛烈なきめつけられ方、よく役場の書記や郵便局の事務員なんかに、こんな風の人のあるものよ。豚の油だか熊の油だか知らない、何でもピカ〳〵ゴミといつしよに頭の毛を御叮嚀に練り上げて、石炭酸だか片腦油だかそれともホルマリンだか、まさかそんなものぢやないでせうけれど、何でもツンと鼻へ來て、目がくらんでヨロ〳〵する様な香水を惜しげもなくふりかけ、十八金どころか百三十金もの金指環で、ピンクの絹ハンケチを振つて居るとこなんぞ……それこそ獰猛に素敵だわ。

尻香病――なんてうそばつかり。火鉢にいたづらするのは富枝様です、夢中になつて書いてる事がある。自分の事を兄様にかづけちやつて書きたくつて……あんまりひどいわ。どうも富枝様は油断がならない、兄様が晝寢してるとれ、帯へ大きな紙屑籠なんかくゝしつけて澄まアしきつて――あれ、もう申しません、申しません。御免、御免、……ホゝゝゝあの、早稲田の岸様によろしく。

靈ちやんの元祿袖の袷を縫ふ、黄八丈に鹿色の裾がよくうつる。夕方までに仕上げて、とせつせと針を運ばして居ると、午後二時頃何だかお隣人の高襟美人がお出遊ばした。雑誌向きだ。座敷へお通り遊ばしたが自分の名もなのらず、何のお話するのぢやなし、たゞ私を見にいらしたのかしら。失敬な。だけど如何にも品の高い人達れえ。お姫様と申上げても恥かしくない……、そのくせ服装なんか質素で……あのお揃ひの銘仙がよかつたつけ。

時計がとまつて了つたので、お道さんとこへ時間をきゝ合せに行く、桃割に白丈長、板じめちりめんの帯を結んで、今日は大層、令嬢風、店先で織物して居た。

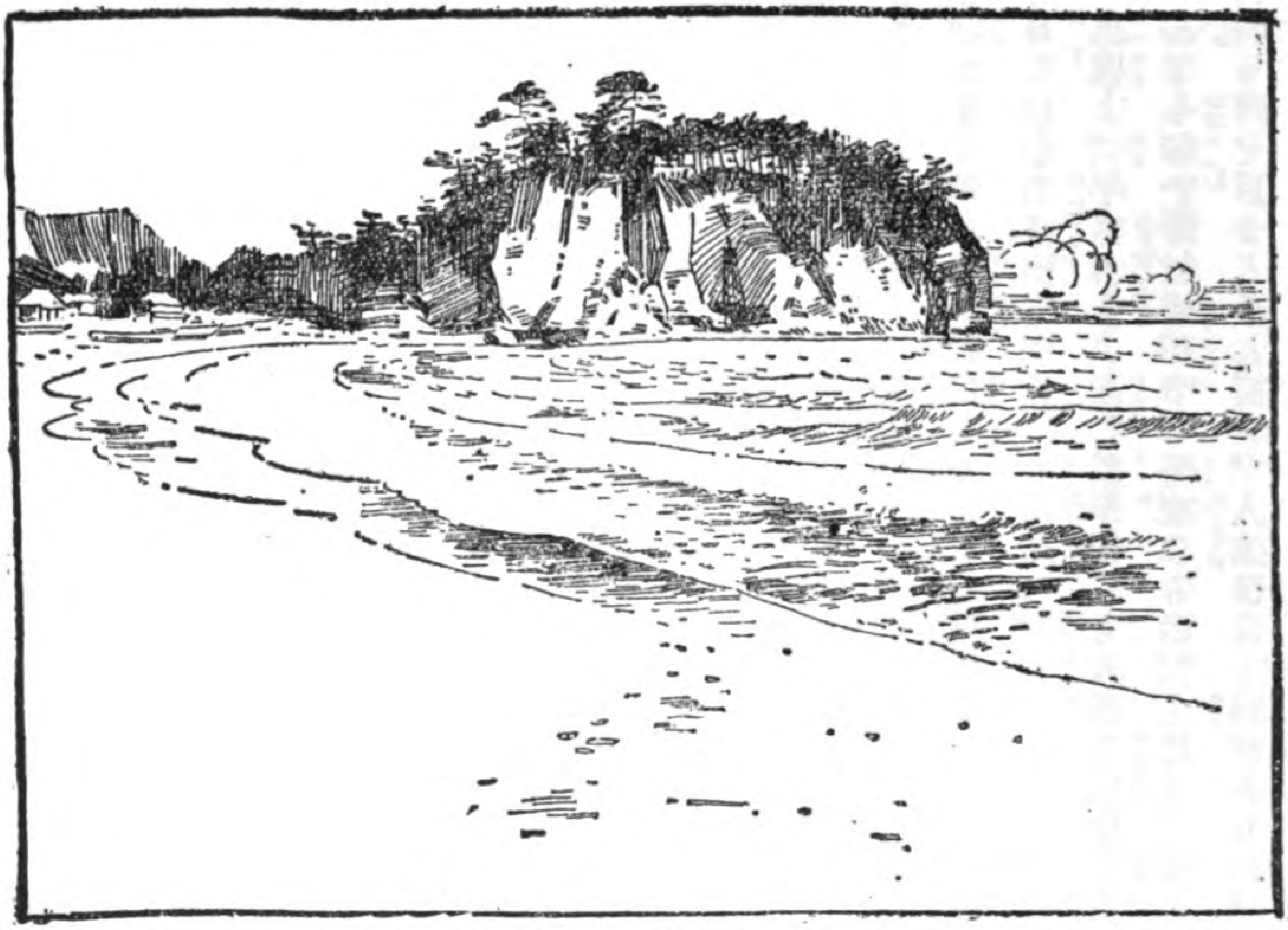
「あら、千代子さん、」と顔をあげて莞爾、引とめて例によつていろ〳〵な噂、私のこともこの人によつてこのやうに、みんなの口の端に上ろのかと思へば、あんまり氣持がよくもない。お道さんないつまでも此様鮮地の荒物店なんかに坐らせておくのは惜しいもの、玉のこしにのせ人はないものだらうか。

歸つて來たらきいてきた時間を忘れちまつてた。我ながら驚いた。あんまり氣が利かないから、いゝかげんに針を引まはしておく。

夜、富枝様に手紙書く。

△

「母様、私今朝對江館でね、藤村様にお目にかゝりましたのよ、」



江の島袖が浦

「え」
「けれどね、それは夢でしたの、」
「いやだね、千ちやん、眞面目くさつて‥‥。ホヽヽホヽ」

思ひあまつて朝飯食べながら云ひ出したら、母樣の笑ひに打消されて了つた。あゝあの夢？　耳に殘るは「內藤君？」と凛々しいお聲、昨夜小町の歌を云つて寢たおぼえもないに‥‥。

曉の夢は正夢だとか、貘よ、食ふな。

日課のお掃除、せつせと空拭かけて、靈ちやんの袴が釘に引かけてあると思つたら今日は日曜だつけ。

裁板を中にして、母樣と坐る叔父樣の夏羽織なんか一向張合がなく、厭で〳〵たまらない。

姉さま、髮を結つて頂戴なとリボンと打ひもを持つて來る、丁度いゝ、とらまへて厭がるのを無理に稚兒輪に結げてやる。思ひ切つての根上りに、巾廣の銀丈長を前でくんで‥‥可愛いこと、一入の令孃ぶり。と云ふと大層名手のやうだが、實は一時間半もいぢくつ

て居たので——あらまあ惜しい？少し根が右に曲つてた……。

ふと戀しくなつて、お晝休みに泉田様へ手紙を書くけれど途中で引やぶつて了つた。あゝ私、どうしても以前のやうな心であの方に對する事は出來ないのよ。去るもの日々にうとしと云ふも、年々に思ふ事の多くなりまさるゆゑ……。

三時にひよろりと東京から幸夫さんが見えた。二三日泊めて頂戴とのこと、いゝ喧嘩相手が出來た。いろいろお土產頂く。

母樣お茶をいれながら、

「幸夫さんの半年見ないうちに大きくおなりな事ね、どうしても徵兵ものですよ。」

「いゝえ、僕なんか駄目ですよ、心臟はよわいし、腦もわるいし……」

左樣よ、年中ぶら〳〵して學校へも入學ない樣な人飛んでもない藤村樣がやつて來たものだと思ふ、夢の御神も何を戸まどひしてか、人違ひにも程があるわ。

晩餐のお仕度には私も白の料理前掛胸高に、ノートを挾んで立ち出る。

花やかな空氣ランプの下、食卓をかこんで、四人が座につく。

まあ、幸夫さん、何處でおぼえるのだか、人ずれて居て口のわるいこと、猛烈だ。千ちやんの揚げたフライは生だの、どうもこのオムレツは素敵だの、さう云ふ口の下からパク〳〵ムシヤ〳〵。よつ程お皿を引たくつて了はうと思つたが、それもおだやかでないから蟲を殺して我慢する。今度は眼の玉の飛び出すやうなライスカレーでもこしらへてやらう、

わざ〳〵フオークの手をやめて、姉妹を見くらべ、

「ねえ、千ちやん。靈ちやんは美人だが、君あ駄目だなあ」だつて。さう云ふ御自分の御面相はどんなものだい。お平の……長芋ならいゝけれど、まるで蓋みたいな顏して居るくせに。

食後の運動にピンポンをやる、幸夫さんあまり落してばかし居て、愛想がつきて了つた。したら、ちや談

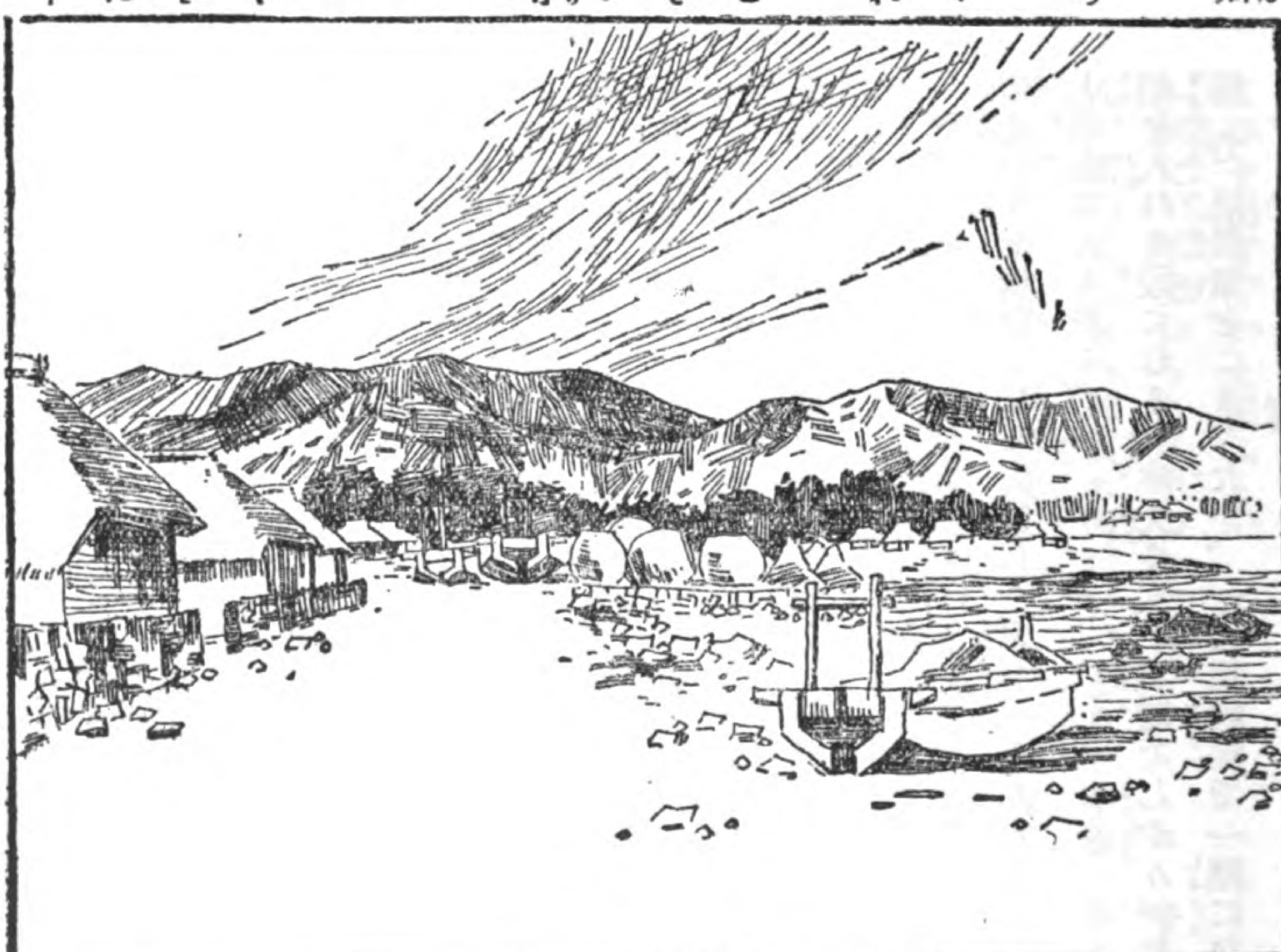
話會をやりませうよと靈ちやんの發言、尋常小學校辯論部の小辯士、お伽噺がお得意なのだ。

茶釜が歩く茂林寺の話、爐にかけられると足を生すやら、しつぽを出すやら、和尚樣が紙屑屋を呼んで、と談はます〳〵佳境に入ると、幸夫さん、コクリ〳〵とボートレースだ。白川の波や高かりけむ、大分ゆれがはげしい。ホヽヽヽ。

私、お座敷へお床をのべて上げたら、僕、一人でこゝへ寝るんですか、つて、えゝそれがどうして、ときけば、鼠がこわいんだつて。こゝの家には猫が居ないから。あきれて物が言はれない、仕方がないから私等の寝間との境の襖を開けておいて上げる事にした。

△

「千ちやん――」いきなり耳許で怒鳴られた。びつくりして目を開く。幸夫さん笑ひ出して、もう七時過ぎだぜ、千ちやん、よく眼の玉がとろけ出さないな、だつて、何です失敬な、昨夜十二時に寝たんですもの―



伊豆宇佐美の濱

―おゝまぶしい、ホヽヽヽまるで若杉君が近眼鏡とりあげられて了つたやうな眼つきだ。いゝわよ幸夫さん、いまにどうするかおぼえてろ…、今日からお納戸絣の袷に着替へる、肩上げをおろしてから九寸の袖が長過ぎる様に見える。

朝飯の時幸夫さん、手をすべらしてお椀のお味噌汁を膝の上にぶちまけて了つた。高ざーいとはやしてやつたら母樣に叱られた。

お辰さんがまはつて來た、久しぶりで高髷に結げる時流をおはぬ超然とした…などゝよく泉田さんに冷かされたが、私この髪が一ばん好き。銀簪きらりと、合せ鏡。相變らずよく出來た、島田にかけては、流石名うてのお辰である。後天神、前びつくり、ホヽヽ、寫眞を撮るなら後向き。

また幸夫さん

「ヤア、素敵だな、馬子にも衣裳髪形ち、よく云つたものさ。千ちやん、女振りが二割上つた、」

…もううるさいから相手にもせず。

午後から母樣とお柏餅をこしらへる、小豆をするやらしぼるやら、私はしんこのでつち方、すると幸夫さん此處へもふらりと出て來て、やあ始まつたね、僕も手傳つてやらうと坐りこまうとする。邪魔よ、幸さん何だ、ともう喧嘩ごし。母樣は笑ひながら、

「幸夫さん、丁度いゝこれをかきまはして頂戴。お鍋の底に焦げ附かさないやうに。」

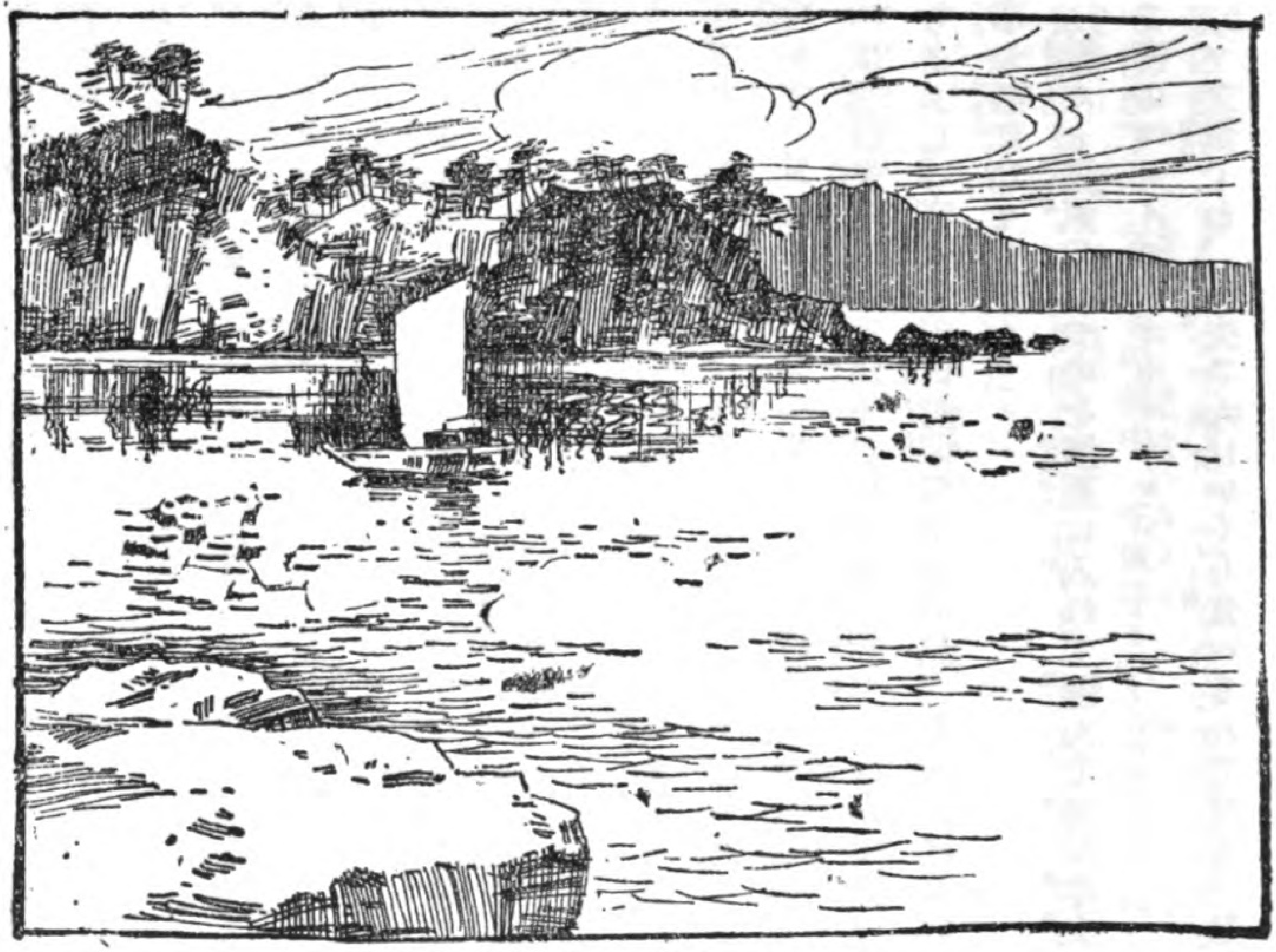
「あら、厭だ、幸夫さんにそんな事させて…、なめちやいけませんよ、指突きこむとやけどしますよ…」

「おき給へ、馬鹿にしてら。あ、熱ッ、」

プス〳〵餡がはね始めたので、あつゝ、あつゝと幸夫さん、へつぴり腰になつて顔をそむけてかきまはしてる。

やがて鍋を下した。母樣が、「甘いかね？」と一寸指の先で味を御覧になると得たり賢し、「どんなだい？」と幸夫さんもやる。

餡を入れる段になる。幸夫さんが邪魔でしやうがない極力退散策をこうじたが、一向無神經で一緒になつ



伊豆江の浦の景

て手を出す。かと思ふと、
「何だ、不器つちよな手つきだな。ハヽヽヽ、千ちやん、君のこしらへた奴あ何だい、まるで芋蟲のやうな恰好だ。やあ、餡が舌を出してら、きたならしい、」
「よくつてよッ」いきなり私はこしらへかけの奴を投りつけた、ピシヤンと頰ぺたに命中した。幸夫さん、靑くなつて立上る、
「アヽコレ〳〵何の事です、困りますね。千代子、お前がわるい？」「だつて、だつて、幸夫さん、男子のくせに臺所へなんか出しやばつて‥‥何の事です、權助？‥‥」何だ、幸さんのやつたのはみんな腹がやぶけちまつてるくせに、ブッと起つて部屋へ入る、丁度三枝様から手紙が來た。直ぐにお返しの筆執つて罫紙五枚ばかり書き上げて了つても、幸夫さんはまだ臺所で笑ひ聲がしてる。あんな事に趣味持つてる人なのかしら、かう云ふ男のマダムに成る女こそ災難だ。しきりに炊事の世話をやきたがつたり、衣裳の事などに嘴を入れたがつたり‥‥たまらないね、そしてそんな男に

かぎつて、自分の業務にはきつと拔目があるものよ、」幸夫さん伯父樣のおあとをついで、彫刻家になるのださうな。何が出來るものか。あの人が斯界の泰斗と仰がれる頭は、私だつて文壇に雄飛してるわ。中學の三年を三度も失敗た停電さん、それで美術國としての日本がどうだの、僕が洋行する時にはからだの恥かしげもなく大氣焰ばかり吐くから可愛い。私、兄樣が欲しいなんて云つたけれど、こんな兄樣なら願ひ下げる。私の机を引かきまはしたり、大切な手箱を開けて見たり、曳出しに富枝樣のおいてらつした「神を知る道」つて本があつたつて、クリスチャン、クリスチャンと冷かす。N樣に頂いた一葉女史追悼會紀念の一葉全集へは、「親愛なる妹千代子君に呈す。幸夫」なんて書いちまふし、富枝樣の口眞似ぢやないが、そのいけない事お話になりません。

濛々と湯氣の立つのを廣蓋に入れて運んで來た幸夫さんのスタイル、オホヽヽヽ。

マア驚くわ、幸夫さんはいくら食べるんでせう。なんぼ甘黨の私だつて、五ッ目にはウンザリしたのに……。お腹中胃袋なんだよ、きつと。横目でそつと散らばつた皮を勘定してたら、母樣ににらまれた。

はせくり返つて餡が流れ出て居るのを辯解して

「僕のアね、恰好に關はず餡が澤山はいつて居るんだからね、僕ア、自分のこしらへた分だけは、みんな自分で食ふよ。」

「お澤山召し上れ、けれど家ぢや胃散の買おきはございませんよ。」ぽん〳〵言つてやる。

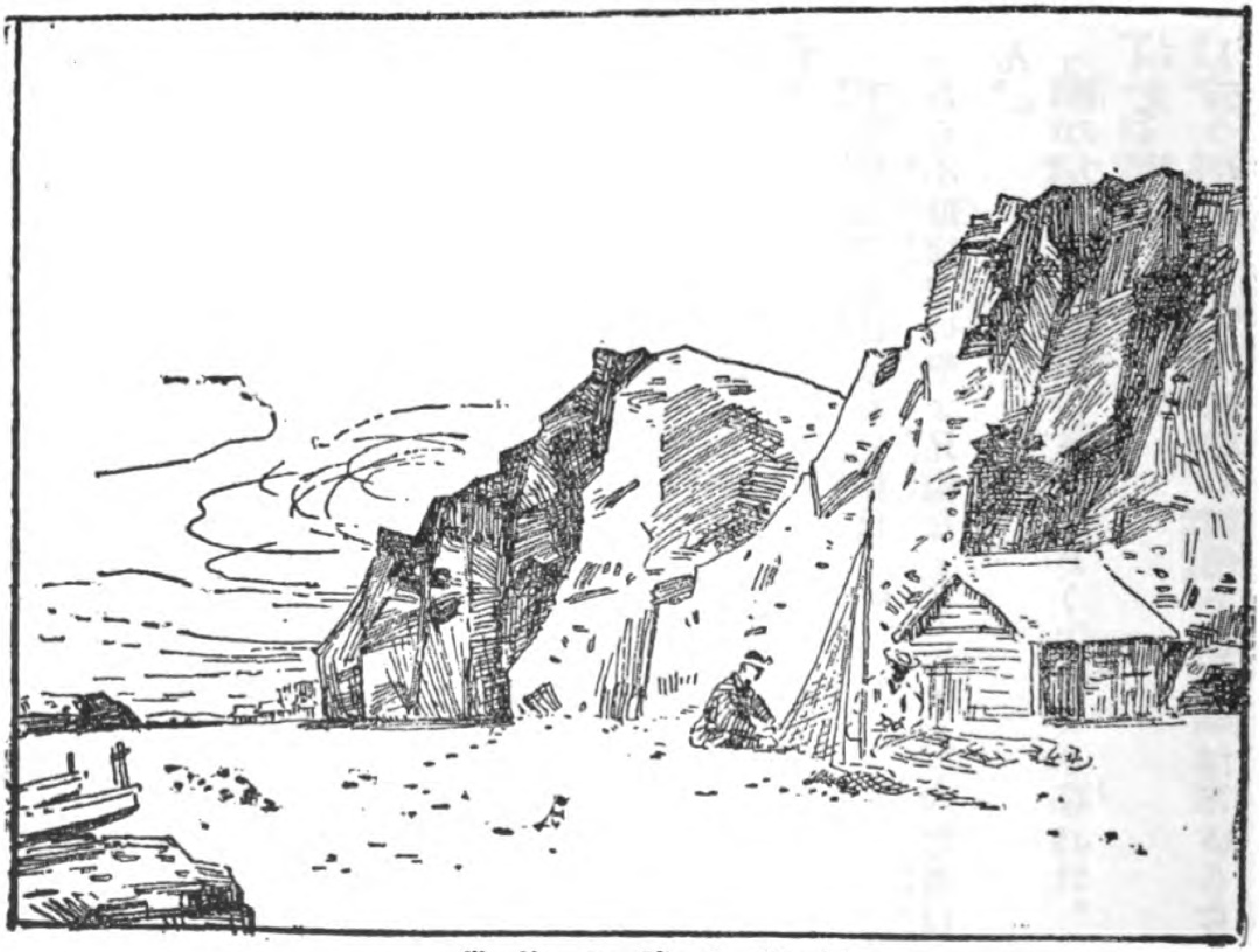
郵便局へ行つて歸つて見ると、お腹が出來て好い氣持になつたのだと見え、私の部屋でうたゝねして居る引ずり起さうとしたがふと富枝樣のいたづらを思ひたし、私もやつて見やうと鍋墨をとつて油でねつて、そつと忍びよつて、額へ大きな目玉と、序に赤インキでカイゼル髭を書いでやる。ホヽヽヽ、何にも知らずによく寢てる、少し口を開いてスャ〳〵と。素知らぬ顏で茶の間にもどつて雜誌讀んで居ると、ノコ〳〵起き出したらしかつたが、どうして氣のついた事やら、疾

風の如くこゝへやつて來た。こはくなつて私はハダシで飛び下り、大騷ぎの最中、「千代子?」と耳をつらぬく母樣のお聲。二人同時に振りむくと、幸夫さんの顏見て失笑だして了はれた。

幸夫さんやはらかい頭の毛をさか立てゝ怒りながら井戸端へ出てシャボンをぬるは〳〵、泡坊主の化物みたい……、けれどなか〳〵落ちるものですか。私は今一度おとかしてやらうと思つて、そつと玄關で幸夫さんの靴を穿かうとしたら、どうしても足がはいり切らないの。生憎そこを見つけられて了つて、ヤア驚いた驚いた、大足だなア、一たい何文穿くんだい?　私も負けては居ず、夢二式ですもの、十一文半よ。エ、ほんとに、と驚いて居て可笑しかつた。

夕餐前入浴。

寢しなに幸夫さん、脊中がほてる、ほてるつて。私、澄まして居た。ホ、、、先刻お脊流して上げる時、新らしいあかすりで力一ぱい引こすつたからなのよ、いゝ氣味だ。



房州白濱の海岸

明朝は四時半に目がさめますやうに、と人麿様に願つて、歌を三べん云つて寝る。ほの〴〵と明石の浦の朝ぎりに、島かくれ行く舟をしぞ思ふ。ほの〴〵と明石の浦の朝ぎりに……。

△

夜來の雨は心地よく霽れ渡つた。朝日に榮ゆる若葉の光り、空を流るゝそよ風、活動の氣に滿てる初夏の景象、私の胸は高う〳〵、痛い程に浪打つのである奔馬の形するやもゆる新緑。

隣家の小母様に招かれてお湯を頂きに行く。みだれ箱に帯をといて、するりと左の肩を傾けて着物を脱ぎ捨て、湯槽には菖蒲の束ねたのが漬つて居る。手に掬ひ上げて見ると、強い匂が刺すやうに鼻に沁む。

いゝお加減」透き通るやうな湯に身をしづめて、窓に玻璃越のさはやかな空を見上げながら、心行くまで茹つた。香の高い石鹸をふくよかな乳房のあたりへ塗る。

様と指先をよく〳〵みがいて、さてお化粧にとりかかる。クリームを薄く引いて、べたりと左の手にうけた白粉、右の手をそのまゝ耳の後から濃くつける、よくのびる。ぬり終へてからざつと一度洗つて、ぬれ手拭でヒタ〳〵おさへる、きれについたこと、ぱーつと上氣した頬の色、くつきりときわだつ生へ際、湯氣に蒸された鬢がはつとふくれる。

小指の腹で眉をふきながら、手拭くわへてお湯どのを出る。

お定まりのお柏餅で叔母様とお茶頂いた。まア、苦いお茶、含むやうにして眼をつぶつてやつとのどへ通す。

「千ちやん、今日はお兄様は？」

「あら小母様、いやよ兄様なんて……あんな茶目るん、」

「あの方、御親類ですか、」

「えゝ従兄です、」

と云つたが、もう小母様の顔色でわかつた。いくら獨ま

でも從兄でも、若い男なんか來て居ると直ぐ目をつけられるんだわ、だから私、幸夫さんなんか大嫌ひ、兄樣だの許婚だのつて、大に人格に關するわ。早く追ひ出しちまはなければ何と評判されるか知れやしない。母樣、お師匠樣の許へ御祝儀に行つておいで、と被仰たけれども、厭で家にグヅ／＼して、あゝ一昨年のお節句は……と思ふと悲しくなつた。たのしい團欒……津村の牡丹見……、妙さまはもう可愛い丸髷姿になられたとやら。齡は私より上だつたけれど、あんなに――一ばん幼く居らした方が――。

古川へ釣に行つた幸夫さん、二時頃お腹を空かせて歸つて來た。

あんな汚いどぶつ川の鮒なんぞ、澤山釣つて來たら散々いぢめて、自分に料理させて困らしてやらう、と待かまへて居たんだのに、大きな魚籠の中のぞいて見たら、一寸五分ばかりのが三ッ!! あんまりアヂが外れてだまつて了つた。

それでも幸夫さんはそれをしらやきにして、絲に通して、軒へぶら下げた。いつもの泥坊猫が來てとつて了へば面白い。

誰からともなく待つた便もなくて今日も暮れた。

△

午前紙雛。

十二時頃から○○町へ行く、撮影のためだ、うるさいから幸さんには秘密、どんなに撮れたかしらん、椅子に腰かけて本を讀んでる七分身、きつと少し首を傾げて居てよ、あの、羽織の紋が……見えてるでせうか、私、うつしつけないから駄目、寫眞は嫌ひなんだけれど……今度だつて厭だつたけれど……再びは來ぬ花十八の春姿……などゝ云はれて見るとまつたく其通りだから、後の紀念？ これでも昔は角帽騷がせた事もあるなんて……ホヽヽヽヽ。

白粉を買つたり、雜誌店をひやかしたりして、夕方歸宅。竹田夫人からお手紙が來て居た。まア赤ちやん生れて……男のお兒？ おめでたう、よかつたわね、

うれしい。定めし可愛い兒でせうねえ。ホヽヽヽまだ生徒でお出の若い父ちやまのお顏はどんなものだらう。あゝ私も近くに居るなら、直ぐさま上つて抱いて上げるのだけれど……。

八日目の夕つかた、N樣と今一人、同じく法科の△△樣とおよろこびに來て下さつたの。お兩人とも白い服着た看護婦に抱かれて無心にねむる子供を見て、嗚呼可愛らしいな？　とそれよりお言葉はなかつてよ。私、ほんとに嬉しかつた……」

などゝあるあたり、初々しいお奥いゝえ、母さま姿がまざ／＼と目に浮ぶ。

あゝ、御縁で不思議なもの、まだ三月に足らぬおん變り、お目に掛つた事もないのだけれど、何だかこの方はおなつかしくて……きつと優しい活潑な當世風の夫人よ。二十一と云へばまだ／＼ねえ。富枝樣なんか肩あげしてるわ。

春風渡るスキートホームの中に、世にもうれしいたのしい幸福を一身にあつめ給へる羨しさ。私お祝ひには何を上げやう？　今度上京したら何をおいても、きつと／＼と靜ちやま――名は靜雄――抱きに上ることよ、抱かせて頂戴よ。

幸夫さん明日は歸京と云ふ。妙なものね、流石に名殘惜しく、今まであんまりいぢめたのがすまないやうな氣もする。つい優しく、

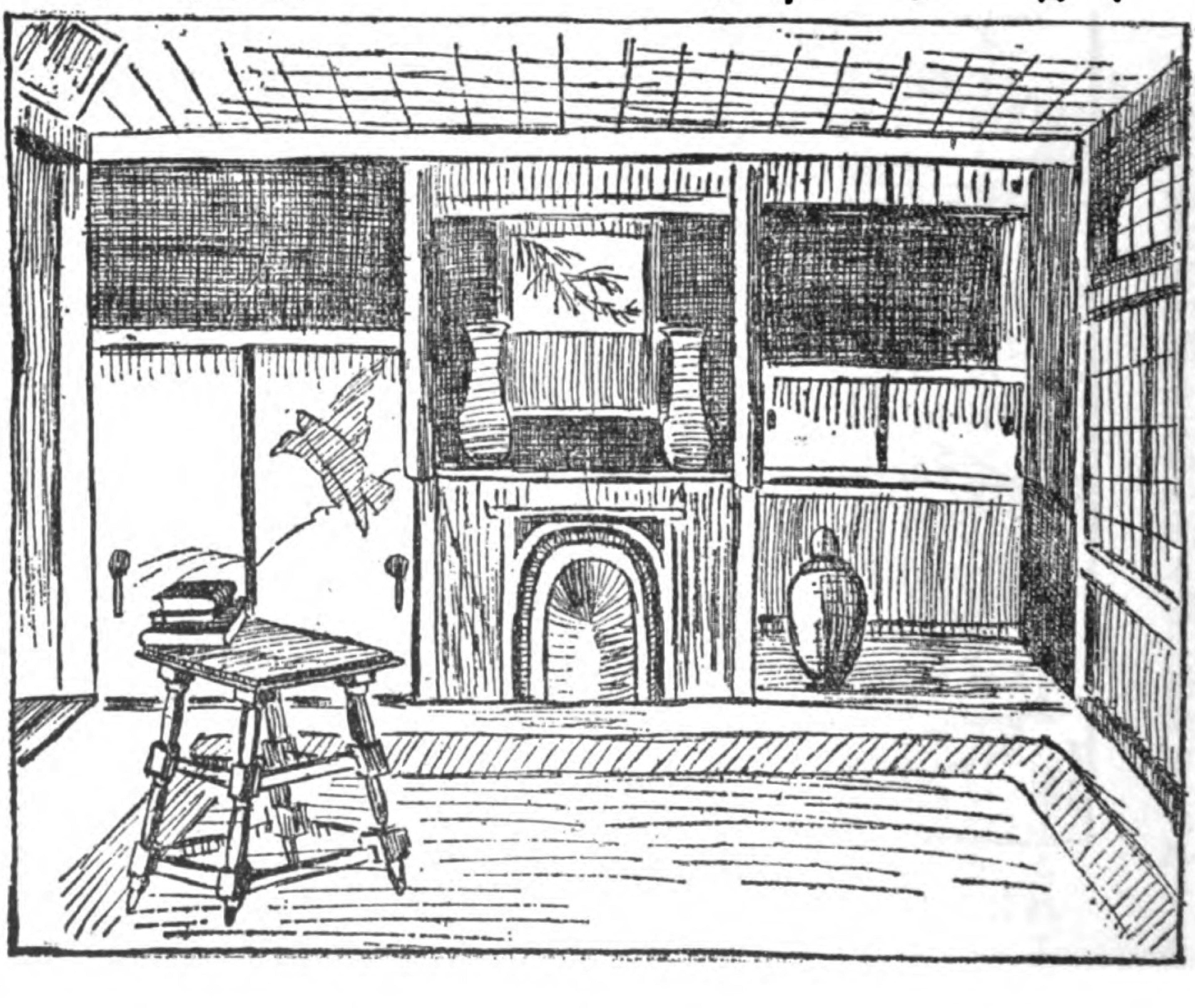
「ねえ、今夜はお別れに何か面白いことして遊びませうよ、」と云ふと「あゝそれがいゝ。カルタはどうだ、お得意のカルタ!!　僕もこの正月には隨分やつたよ杉原君がね、幸夫君のカルタときちやア獰猛な勢だ。東都若葉會の重鎭たる僕も少々驚かざるを得ない、あらゆるカルタ會のレコードを破つたつて……」

まつたくよ、幸夫さんのカルタと來ちやア、誰だつて面喰はざるを得ない。自分の札が出ると二枚送る、人のをぬけば三枚、「むべ山」はどうだの雪月花が何だのそして我黨の最も爪はぢきするところの、引つたくりつかみ合ひ、などの蠻的行爲をむしろ得意になつて、カラッ騒ぎばかり。いくら私がカルタ狂でもこんな人

となら眞平、まつぴらだ。
晩餐後、部屋へはいつて竹田夫人へのお祝ひ狀書く
鳳雛の曲‥‥新體詩を？　と頭かゝえて考へたが駄目
茶の間では大分賑かだ。
「そよぐ橄欖風かほる、瑞枝の春にあかつきの、光り
こぼるゝ木下蔭‥‥千里の力こめて湧く‥‥」
あら、幸夫さんはいゝ聲ね。始めてきいてよ？　今
年の寮歌知つてるかしら‥‥煙に似たる花がすみ‥‥
我知らず、机をたゝいて小聲で歌ふ。
靈ちやんが走りこんで來た。
「姉さま。幸夫さんがね、姉さんを呼んで來給へな。
デツカンショーでも合せませうツて‥‥」

○南瓜の田樂

南瓜を縦に二分位の厚さに切り魚焼用の金串に刺し南瓜の兩面には胡麻の油を塗り餘り强からぬ火で兩面より好く焼き練味噌を刷毛にて兩面より塗り火にてざつと炙り味噌の上面の少し乾きたるとき串より拔いて皿に盛る味噌の加減は味噌百匁、砂糖五十匁、煮出し一合を混ぜて摺り裏濾にして火上にかけて好く練り生玉子一個を割り入れて更に練る。



金子子爵夫人の居室





船の新婚旅行

高村貞子

急ぎの旅なれば新橋より押つゝけの昨日廣島につきて今日また宇品から船に乘つた、名は△△丸と云ふのである。

何時の間に定められて有つたのか甲板に上るとすぐにコスメチックで漆の如くつや〱と髪なで付けた氣のきいたボーイが此方へと案内をしてくれた。

其處は甲板のすぐ下で食堂の側の一室だ、部屋はさして廣くは無いが眼のさめる樣に美しくよく整つて居る、正面には大きな姿見が有り其下に洗面器が大理石の臺の上に乘つて居て其他にタオル、水を入れた水晶の樣な瓶などが塵も止めず光る樣に掃除せられてある。

其側には箪笥が有り、小さいテーブル迄備へられて主待ちがほに、室の片一方には雪の如く白い布を以て覆はれた寢臺が上と下と二重に有つて郵船會社の印を染め拔いた柔さうな厚い毛布が扇の樣な形にたゝまれて置いてある。

船の室程不精ものに取つて重寶な所は無いだらう、壁には電氣を通じた押ボタン迄付けてあるので指一本でボーイも呼び寄せる事が出來る。

何時の間にか自分の手荷物を初めとして信玄袋まで棚の上に順序よく並べられてある已に出帆に間も無いと云ふので見送人を呼ぶ聲が頻に聞える、甲板に上つて手欄に寄つて下を見るとさつき乘つて來た小蒸汽に見送人は皆のり移つて聲をあひづに今綱をはなした處で有つた、アヽ、自分も今一度あの船に乘つて歸りたい歸つて今一度のんきに母や妹と遊んで見たいとゝんでもない時にとんでもない事を考へる、船が遠くなるに

従つて何とも云へぬ心細さ。

已にして種々様々の思ひを乗せた我船も亦スクリウーの音聞え初て今し宇品の港灣を出ようとして居る。緑したゝる宮島あたりの山々水に浮いて又一しほの眺も此四五日來のつかれ耐へがたく、今より少時の運命を此船にまかせたる身の、俄にがつかりして一まづと休んだ、柔いベットの上に身を横へたのはいゝが、ドッ／＼と頭に響く機關の音が誠に不愉快である。

折柄ボーイが小さな盆にカステーラとコーヒーとを持つて來た、皆様は食堂で召上りたれど、貴女様は此方の方がお宜しからんと氣をきかして呉れた處は誠に嬉しい。

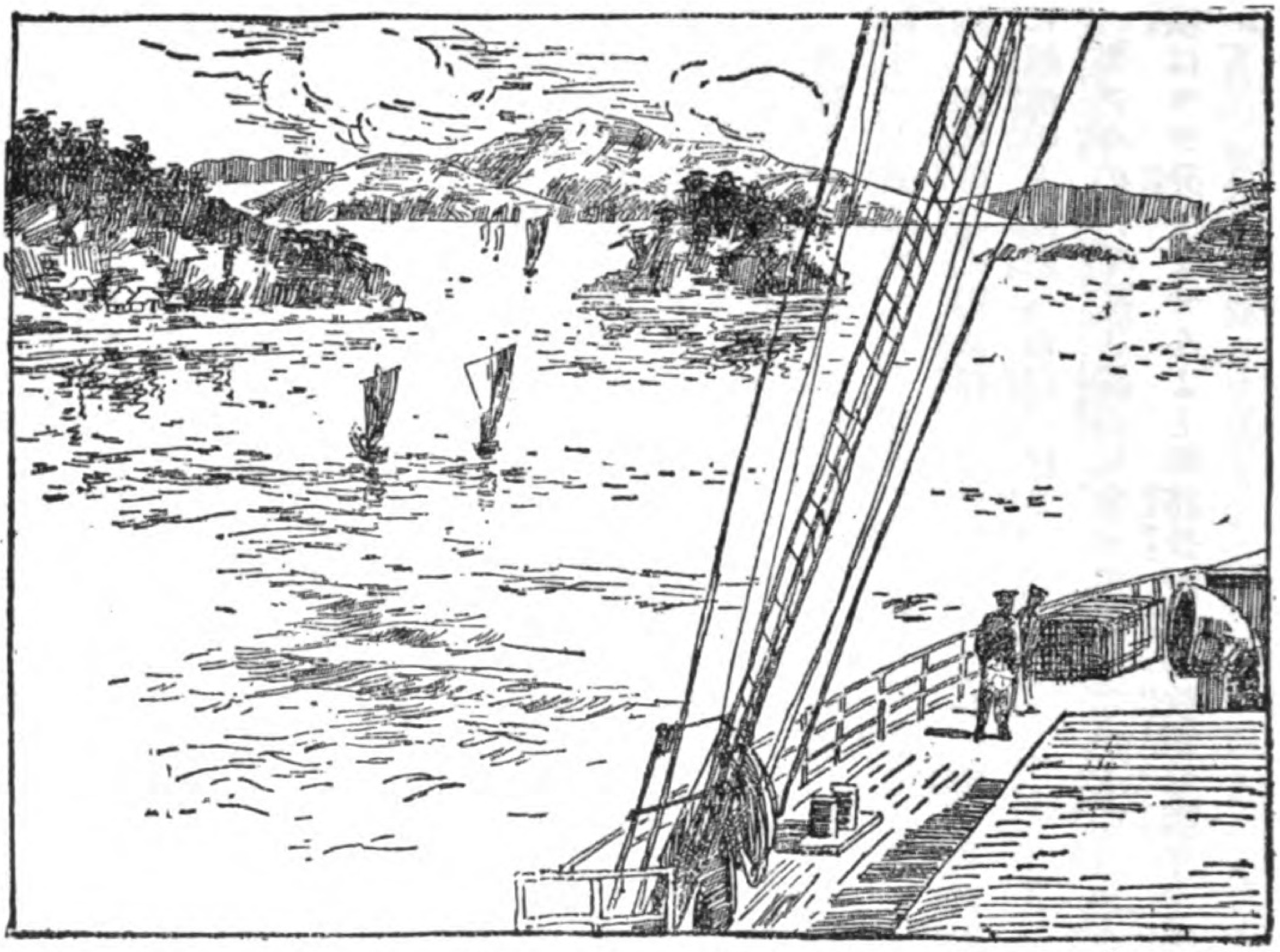
かねて包んで置いた二圓の紙包をやる、之れは船が荒れ出した時よく世話して貰ふべき鼻薬である、そんなもの私共は決して戴きませんと口では辭退しながら手は何時しかポッケットの内にさし込まれて居る、門司に着くのは何時かと聞けば、夜の内なれば彼地を出帆は明日の午後になるべしといふ。

食堂では主人を初め遼陽に行くと云ふ年若い士官三人茶を呑みながら何か盛に話をして入らつしやる。

ボーイが出て行つたあとテーブルの上のコーヒーと菓子とを眺めて自分は思つた、ア、之れが寄宿舎時代の自分で有つたら、モー、疾くに平げられてしまふのだが今ではもう見たゞけで澤山だ、喰いしんぼうな人も見惡いが、食慾の無いと云ふのも何となく不愉快なものである。

丸窓、と云へば誠に風流だが實は直徑一尺位のガラスを張つたのぞき窓だ、其處から鷗の飛ぶのがチラと見えた、舳にあたる浪の音ザブン／＼と、すぐ頭の上の甲板で實に此邊の景色はいつ見ても宜いですなあと云ふ聲につい釣り込まれて例の窓から外を眺めると何と云ふ處か判らないが向ふ岸がつい眼の前に見えて手が届きさうで、緑色で包まれた島々の間を船はまるで疊の上でも行く様にスーッ スーッと通り過ぎて居る。

今しも夕陽は西の空一帶の雲を彩て錦の如く、山の



瀬戸内海

麓は淡くかすんで谷間の家から一條の煙が上つて居る景色は何とも云はれない。

まして自分は此母國をはなれて遠き海外へ今行かんとして居る矢先、萬感交々胸に迫つて何を見ても懐しい、悲しみの涙か、非らず、嬉しさ餘つての涙か、非らず、何故ともわかず此靜な夕暮の景色に對して、自然と涙が湧き出てはハラ／＼と膝に落ちた。

　海の面を黄金まばゆく彩りて
　　沈む夕日のうつくしきかな

俄に夕飯を報ずる鐘の音耳を貫いて夢の如き我から歸つた。

自分は食堂に出樣か、出まいか、ツイまだ忘れて此處へ持つて來てくれる樣に頼んで置かなかつたから困つた事だと考へ込んでぐづ／＼して居る處へ勢よく這入つて來られた良人が早く食堂に出よと云はれるのでとう／＼いや／＼ながらついて行く。

食堂は天井をテーブルのある處だけ細長くガラスを張りつめてあるので誠にあかるい床には赤茶色の絨氈

を敷きつめ其眞中に細長いテーブルが置いてある、入口の壁は一面に大きな鏡になつて居て廣いテーブルの上は皿類、ナイフ、フオーク、などが行儀よく並べられて熱帶產の植物の青々としたのが鉢植になつて綠の影を後の鏡にうつして居る樣は實に心地がいゝ、ボーイが四五人靜に控へて居る、まるでホテルにでも行つた樣。

ふと氣が付くと自分はまた船に乘り込んだまゝの姿で居る、食堂に出るのにこんな風をして居て失禮にはあたらないだらうかと氣が咎めてならぬ、上等室に女は自分一人客は凡てゞ八九人しか無い。

事務長が主人役で正面に坐り、自分の前には一等機關士だと云ふツマトーゼ式の大きな人が居る。梅、福壽草などの鉢植が眞中に並べられて春を告げ顏に航海中とは思へぬ程の穩さ。

サア今の内ですよ澤山に食べて置かないと明日の今頃はモウ分りませんよと事務長が例の快活な調子で云ふ。

船の食物は贅澤だボーイが運ぶ皿の數々、少しづゝで止して置いても却々食べ切れない、モウあとはライスカレーかオムレツかハムエツグ位なもので有りますが何を持つてまゐりませうかと云はれても、とても食べられない、丁度幸自分の部屋附のボーイが後に居たので向ふの方の皿に有つたバナヽを取つて貰ふ。

ナプキンをたゝんで自分の名を書き付けた紙と一緒に銀の輪にさして置く、之れは又次の食事の時に出して來るのである。

殿方の話は自分達には面白くない、ヤレ何處の藝者がどうしたとか別嬪だとか、歌がうまいとか、そんな話でなければ理窟ッポイ理學とか物理とかなどゝつまらないからテーブルの上に有つた折本を少し見て部屋に歸る。

何時しか美しかつた夕榮の西の空も暗と變つて星が金の砂を散らしたる如く、室の中には美しい赤色のガラスの花の中に電氣がついて居る。

ベツトの下の鐵管に湯か、蒸氣か通つて居ると見え

て二月の寒空に火鉢も足袋もいらない位にあたゝかい。

長椅子の上に仰向に寝ながら、アヽ樂な航海だ、宿屋に居るのとチットも變らないねえとお云ひなさる、サッキ食堂で奉天へ新婚旅行とはシヤレて居るねえと同僚の方があたりかまはずにおつしやつた時にはほんとにきまりが惡るかつたが今斯うしてホネムーンにも等しき旅の間に追ひ〳〵と氣の落付くに從つて希望多き將來や、新に造るべき家庭を如何にして拵へようかなどゝ語り合ふは實に幸福な事である。

此幸福なる吾等を乘せて舟は相變らず走つて居る、船員の甲板を行き交ふ足音も次第に少なくなつて十時を報じた時に床についた。

耳をすまして聞くと食堂では二三人がまた碁を圍つて居る音がする、良人と同僚の〇〇さんはまだビールを持つて來いとか何とか云つてボーイを困らして入らつしやる。

夜中にふと眼をさますとベットの下で何かコソ〳〵



船の一等室

と音がする、驚いて起き上つて下に下りるトタンにつるつると鼠が足の處を走ッて逃げた、こんな處にも鼠が居ると見える。

あいにくにも便所に行きたくなつた、乘船してからドサクサにとりまぎれて忘れてまだ何處に有るかも聞いて置かなかつた、時計を見るともう十二時になりかけて居る、ボーイはもう寢てしまつたかどうか一つ呼鈴をならして見ようと起き上つて例のボタンを押して見る、感心にまだ寢もせずに居たと見えてすぐに來た之れを敎へてもらつて行くと自分の室の隣にまた二ッ客室が有つて其次ぎに割烹室がある、中には白い衣服を着たコックが三人でまだ働いて居るコックと云つても却々素人には出來ない、食パンも、茶の時に出すカステラ類も此處で燒くのださうだ、おまけに洋食の嫌いなものは日本料理まで注文するのだから面倒くさい此處を通り越すとポンプが備へつけて有つて丁度井戸端にあたる處らしい、ポンプからは眞水が出て來る樣だ、其次ぎが浴室と書いてある、其次ぎの戸口三ッに便所と書いてある、這入ると内から錠をおろす樣になつて居るが凡て西洋式で、何だか心地が惡くてゆつくりとして居る事が出來ない、さう／＼に飛び出して歸つてまた寢た。

二度目に眼がさめた時には今迄聞えて居たスクリユーの音が俄に止んで甲板を彼方此方走る靴音が荐に聞える。

此靜かな海に難船や、暗礁に乘り上げるなど云ふ事もあるまいにと安からず枕を上げて良人を起して聞くと門司に來たのだらうとの事で不安の念も消えて急いで起き上り窓からのぞいて見るとまだ早いとは云へ近くには火も見えず、門司とはこんな處かと思つて居るとナニまだ港の中には這入つて居らぬので暗いから港の入口に夜あけを待つて居るのださうな。

早く夜が明ければいゝと考へながらまた眠つてしまふ。

三度目に眼のさめた時にはいつしか船は港の中に這入つてモウ錨をおろして居た、見れば青々とした山が

すぐ眼の前に見えて海の上は大小の船で一パイになつて居る。

ボーイが湯を持つて來て呉れたので顔を洗ひ髪などとき付けて甲板に上つて見ると、中國と、九州の陸の相せまつて居る處はまるで兩手がとゞきさうに思はれる、此間を小蒸汽が常に往來して居る、此處では午後の三時迄時間が有るので一寸下りる人が澤山にある。

船の横側の大きな戸をあけるやら、甲板の板を上げるやら港へ着いたら船は一通りならぬ混雜をする、荷揚げの掛聲や、荷物を揚げる音がつんぼになりさうだ。

食事の鐘がなつたので食堂に行く。

洋食も食べて食べられない事はないが、何十年來食べ來つた米飯を全く廢するはいやだ、やはり日本人は日本食に限る、慣れたら同じ事かは知らないが自分は三度々々は眞平だ、オートミールのどろ／＼したのやライスカレーも鼻につく、晝飯から日本食にしてもらう事にボーイにたのむ、開けない事を云ふ人だと笑つて居るかも知れない。

食後は用も無いので又甲板に上つて安樂椅子に身をゆすりながら方々を見て居ると、若い女を三人乘せた小船が來た、何だか素人の樣には思はれない、大連あたりに出稼ぎに行くのでは有るまいか、欄干から見て居ると、船員と頻に云ひ合つて居る、上から想像すると船に乘せまいとして居るらしい四十許りの女を連れて來た男の人はプン／＼怒つて居たがとう／＼一人だけ乘せてあとの二人は大きな風呂敷包をかゝへたなりで又船で歸つて行つた、よく新聞に出て居る淫賣婦などの類では無からうか。

欄干を傳つて三等室の入口の方に行つて見る、一種心地の惡い匂がして來たと思ふのも道理、此處はまるで芝居の追込みの樣で廣い板の間に筵を敷いて其處に大勢が雜居して居る、其中を見ると何とも云はれないいやな氣分になる、大きな男があぐらをかいて居るかと思へば其側に女房らしいのが寢て居る、子供が泣い

て居るやら、光線もろくに這入らずして薄暗い、さうさうに自分は元の甲板に歸つた、あんな處に長く居たら病氣になる、彼方から見ると此處はまるで別天地の樣に思はれる。

例の若い士官達は小蒸汽に乘つて行つた、風が强いので側の休憩所に這入つて見ると棚に小說本が澤山に重ねて有つたので二三册貸してもらつて室に歸る、する事が無いので時間が長くてほんとに困る。

晝は注文通りに部屋に日本食を持つて來る、何と云つても御飯よりいゝものは無い、刺身に吸物、甘煮、鱠、燒肴までついて居る、鳥の骨の付いたカツレツやバタくさいビーフテーキはたまにはいゝが毎日はいやだとつくぐ思つた。

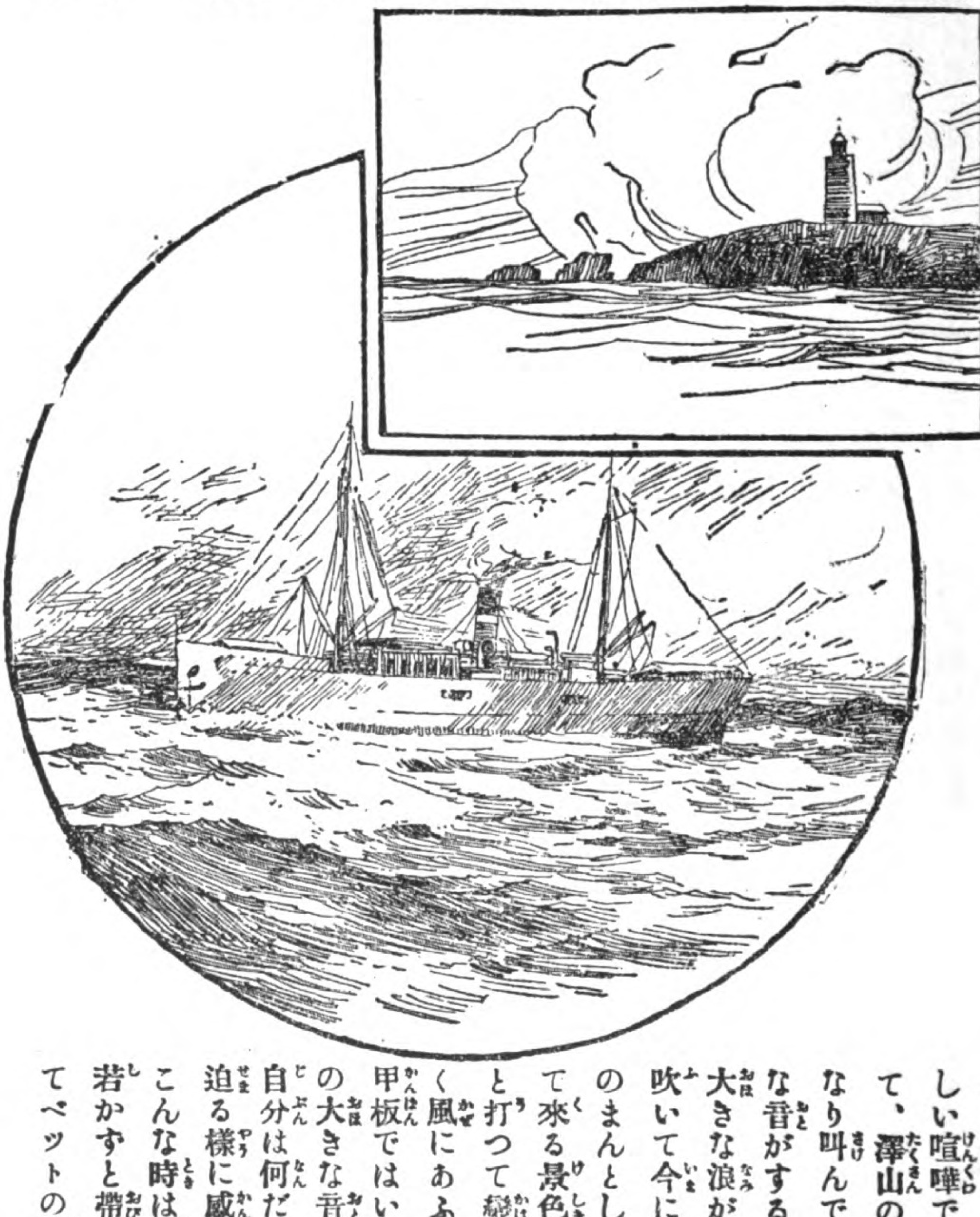
かねて頼んで置いたので、暫時するとお湯に召しませと云つて來る、早速行つて見ると此處も西洋式でおまけに鹽湯だ、其側に小判形の大きな盥に眞水の湯が入れてある、鏡や、石鹼も備へてある湯船は例の横に細長いので壁から二ツ鐵管が出て居て一寸ねぢると湯でも水でもすぐに出る樣になつて居る、内から錠をかけて居るので誠にのんきなものだ、かれこれ三四十分もかゝつて出て來る、大變に長風呂だねえと良人に笑はれる、別に磨き立てゝも居なかつたのですが何でも時さへ立てば宜いと思ひツきりゆつくりして居たのですものと、云へばそんな云ひ譯はしなくともいゝと又笑はれる。

やがて時計を見ると三時になりかけて居る甲板ではガラぐと錨をまく音がし出した自分は此音が大嫌いだ頭の中へ響き渡る樣に思はれる、暫時で夫れも止むと、ボーと鈍い出帆の汽笛がなつてスクリユーは動き初めドツぐと船が搖れ出して來た、狹い門司の水道を通つて行くと、まるで兩方の山や、人家は後に走る樣に見える、九州の方の陸がまづ見えなくなつて、船は長門の岬を陸に沿ふて走る。

人家も次第に少なくなつて何となく寂しい崖の上に燈臺が立つて居る、下には打寄せる浪が雪と碎けて海は次第に荒くなつて來た。

燈臺守と云へばすぐに物凄い、寂しい物語が想像せられるが大抵は場所が然う云ふ處にあたつて居るからだ、此處でも周圍には人も住んで居ない樣に見える。

やがて此陸も後に過ぎ去つてしまふと云はずと知れた玄海灘にかゝるのである、今迄はまるで池の中を通つて居た樣だが、だん／＼と物凄くなつて來る、沖の



玄海灘の荒波

方を見ると何か恐しい喧嘩でも有つて、澤山の人がうなり叫んで居る樣な音がする、黑い大きな浪が白泡を吹いて今にも船をのまんとして向つて來る景色は今迄と打つて變つて荒く風にあふられて甲板ではいろ／＼の大きな音が起る自分は何だか胸が迫る樣に感じて、こんな時は寢るに若かずと帶をといてベッドの中にも

ぐり込んで頭から毛布を引かぶつた。

船は次第にゆれ出して甲板で大きな聲で玄海灘に來たぞと叫ぶ、頭痛がして來たと思ふ間に胸がむか〳〵とする。

夕食を持つて來た、膳の上にはいろ〳〵の御馳走が乘つて居る樣だが見るのもいやだ。

指にさして居る指輪迄がうるさく氣になつてならない。

食堂には相變らず人々の集まる音がする、例の事務長は人の苦しみも知らず顏に愉快さうな聲でヤー皆さんの內で落第者は誰ですかと叫ぶ、トタンにドット笑ひ聲が聞えた、が客は五六人より集まつて居ないらしい、事務長初めボーイなどは實になれたもので平生と少しも變らない。

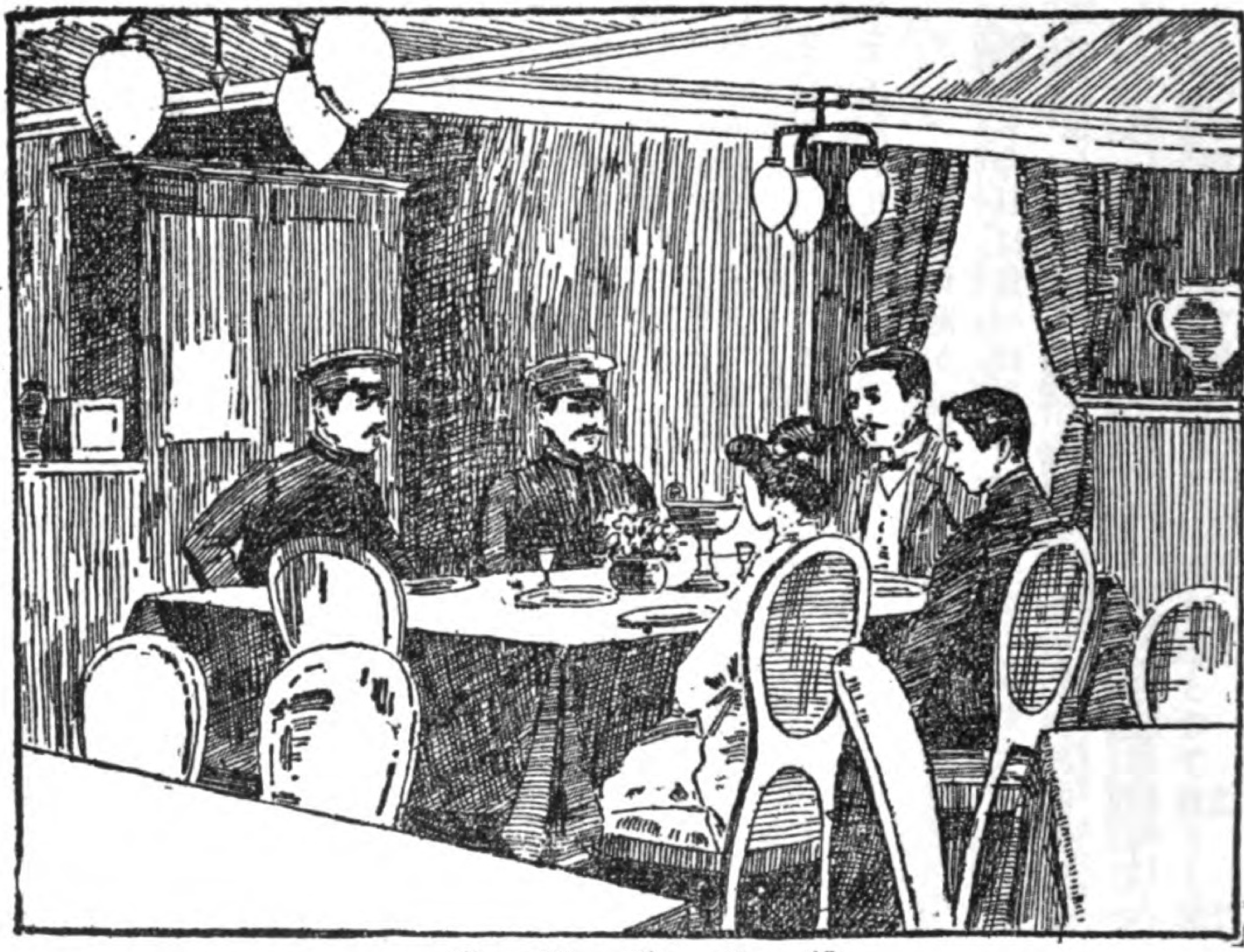
何時の間に眠つたのか音に名高い玄海灘もいつの間にか通り過ぎたと聞いた時の嬉しさ、世に玄海灘と云へばすぐに怒れる浪は天に逆まきとか何とか云ふ形容詞がすぐ出て來る樣に思つて居たが、いつも然うとは限らない、寢て居る間に通り越す樣な時も有るのだ。

もう大丈夫だと聞いて俄に勇氣が付き、よろめく足をふみしめて、ベットから下りたが頭がぐら〳〵して便所に行くのもやつとだ室を出て自分の樣な意氣地なしの人の爲だらう壁にはどこでもつかまる事の出來る樣に手欄の樣なものがついて居る、夫れにつかまりながら漸くの事でコック部屋の前迄來ると中から自分の室のボーイが丁度出て來て。

今朝は何か召し上りませんかと聞く、お粥でも出來たら少し拵へて下さいと賴む、其實少しも食べたく無いのだが、女と云ふものはあんなに意氣地の無いものかと思はれるのがいま〳〵しくて。

やつとの事で用を達して室に歸つた、道で逢ふ人が皆自分の顏見ては弱いナアと云つて居る樣に思はれて恥しい。

一度お起きになつた良人は又眠つておしまいなさつた、其暇に髮を結つてチャンとして居ようとだるいのをこらえて鏡の前に立つて見る、何だか元氣の無い顏



船の談話室

して居る。さつき自分が便所に行つた留守に入れたと見えて鏡の下のねぢをひねるとお湯が出て來た、顔洗つて薄化粧迄すると少しは氣分もよくなつて來た、一寸甲板へ行つて見て來ようと衿卷をして上つて行くと例の若い士官さん達は早くも上つて居て手に望遠鏡を持ち頻に向ふを指しつゝ話をして居る、見るとすぐ眼の前にまるで牛の寢て居る樣な形の島が浮き出した樣に橫つて居る。

船がゆれなくなつた筈で船は今朝鮮の島の間を走つて居るのだ。

昨日夕暮に長門の陸をはなれて以來遠くに隱岐や對島が見えると良人が云はれた時も起き上る勇氣も無くて通り過ぎたが、今眼の前に手に取る樣に磯に寄せては返す浪の音より外には何も聞えさうもなき、家一軒も眼に入らぬ浮世はなれた處に一寸上陸して見たくてならぬ。

幾千代の今も昔も變りなき
浪に眠れる沖つ島山

と腰折一首。

籐の安樂椅子に身を寄せてしばらく眺めて居たが、今の島の過ぎ去つてからは一層さびしく一匹見えてさへ何だかなつかしかつた鷗もあたりに見えなくなつて風がいやに冷めたく身にしむ、ふと氣がつくと海の水の色がきいろく濁て居る、さつき軍人が此邊が黄海だと云はれたが、道理で名の通りだ、濁つて居る處から考へるとどこからか黄い土が水に交るにちがひない。

ボーイが御飯を召し上りませんかと迎ひに來たので其まゝ下に下りて行く、軍人達は元氣なもので寒いのに外套も着ずに三人で面白さうに輪なげをして居る。

室に歸ると良人は今顏をお洗ひなすつた處らしい煙草をふかして入らつしやる。

テーブルの上に膳が並んで居る、自分の好な隱元の砂糖煮も今日は食べたくない、玉子の半熟と、粥少し食べて止しにする、玉子の半熟と云へばなれない人にはむづかしいものだが今食べたのは感心に黄身迄ほんとうの半熟になつて居た。

あゝ早く明日になればいゝ、人間も忙しければ忙しいと小言を云ふが、馬鹿に暇なのも亦困る、忙しい内に樂しみがあり、希望が湧いて來る、希望のある身は何を見ても愉快なものである。

くだらない講談や、宮本武藏の物語本も讀み飽きてモウ何も讀むものが無い、荷物はほどくのもおつくうでいやである、廣島で餞別に貰つた菓子箱をあけて見る、中は森永製の美しい小かいお菓子がつまつて居るこんな時には、色々の香や、果物の味の變つたのを交せたのが一寸慰みになつて好い、人に物を贈るにもよく其人の場合を考へる事が必要だ、同じ價格のものでも今あけた箱の中から蒸菓子や羊羹のこつてりしたものが出たら少しも有難くないが、あつさりと胃にたまらない目先きの變つたものは誠に嬉しい、子供など連れて長い旅をする人に贈るには誠に適當なものと思ふ

午後からは流石の士官さん達も退屈したと見えて三人揃つて遊びに來る、室が狹いので自分はベットの上にあがつて話を聞く、例の大事な菓子を出したがなかな

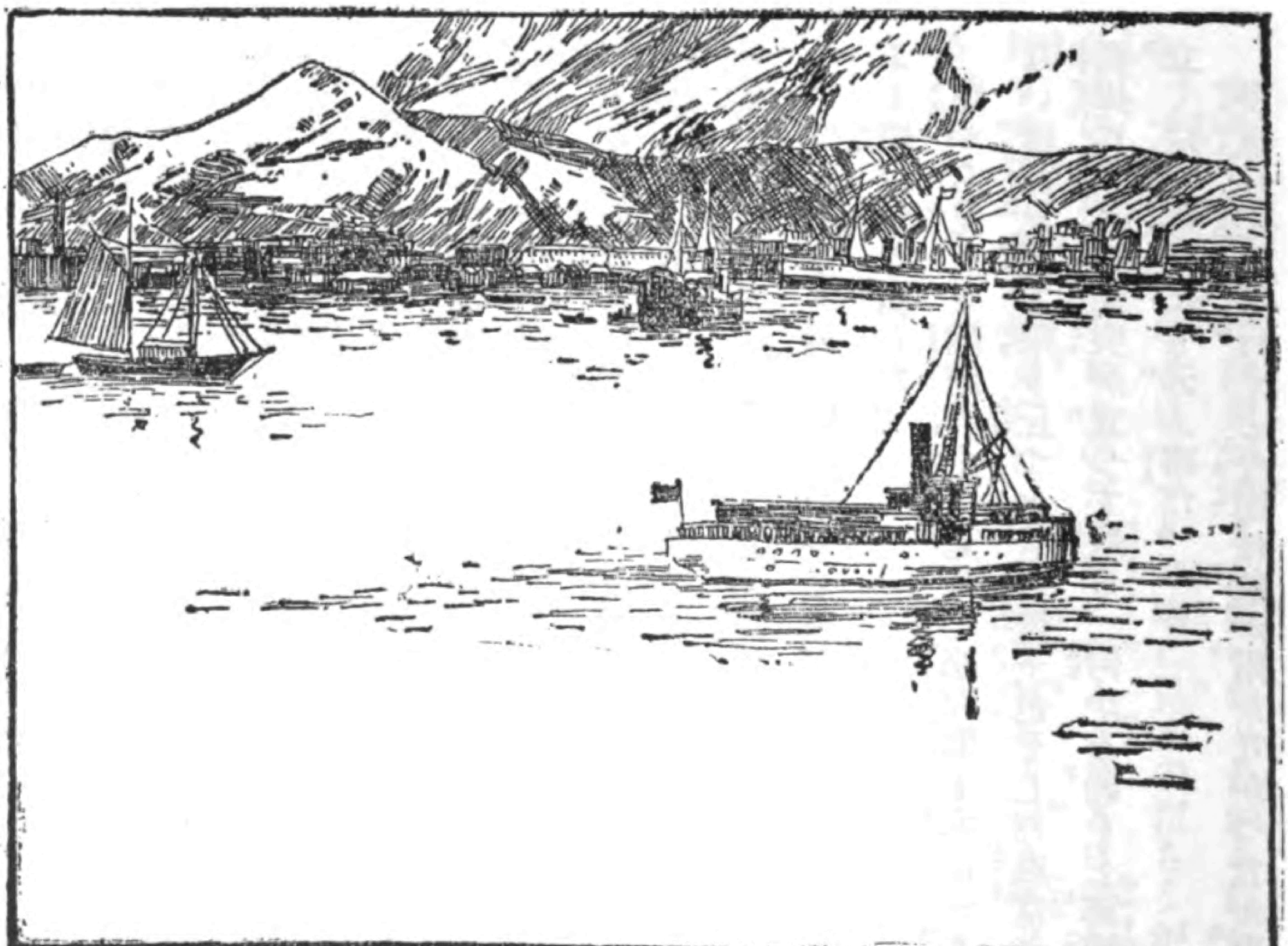
か之位では足りぬ、あちらに着く迄とつて置うと思つたカステーラ迄出してしまふ、話は次第に盛になつて來る、士官學校に居た時分の亂暴だつた事御飯時の意地のきたなかつた事や、初めて少尉になつた時の得意さや、戰爭に行つた時の苦しかつた事、愉快だつた事、論賞の不公平な事など夫れから、夫れと話のつきる時が無い、終には手品迄初まつて來ると云ふ騷ぎ。

お陰で何時の間にか時が過ぎて、夕飯の鐘のなる迄恐ろしい船に乘つて居る事さへ忘れて居た。

夕飯には刺身、茶碗蒸、鮑魚の酢づけ、口取にはきんとんに、だで卷となにか添へてある、ふだんなら大かた平げるけれどもあとが恐ろしいから思ふ樣に食べられない、食堂は相變らずナイフやフオークの音と、話とで持ち切つて居る。

今日もまた浪にうきねの日もくれぬ
　あしたまたるゝ我思ひかな

思つた通りの事を三十一字ならべてよろこんで居るやつとの事で日が暮れたが、早く大連に着けばいゝと



大連着港

夫ればかり待ち遠い。

何處からともなく尺八の音が起つて來た、大かたあの軍人達にちがひない、軍人と云へば只武骨一片の樣に思つて居たがなかく然うで無い、彼の八代大佐が日露戰爭の時に艦上で吹かれた事など思ひ出されて時に取つて誠に興がある、餘韻細く消えかゝつては又續く音色は所謂泣くが如く怨むが如くとでも云ふので有う、殺風景な機關な音も爲めに打消されて只笛の音のみがさえにさえる、己も笛を出して價けば好かつたと云ひなさる、マア尺八をお吹きなさるとは少しも知らなかつたと云へば、ツウ人を馬鹿にするなとお笑ひなさる、武士と云へば何だか堅苦しい人の樣に思つて居たが今のお方はなかくしやれた人ばかり一しきり尺八が止むと今度は食堂で蓄音器が歌ひ出す、ボーイが皆の慰みに出して來たのだ、ソツと部屋の入口から覗いて見ると二等室からも女の人が二三人聞きに來て居た、こんな事でとうく九時過ぎたので床につく。

夜中に目を覺して見ると又船が搖れ出して居る、大方大連の入口に來たので有う、夫れからうつくとして居ると四時頃にやつと止まつた、門司と同じ事で港の外に夜の明けるのを待つて居るのだらう。

ア、嬉しいと思ふとモウ寢て居る氣もせず起き上つて荷物などをまとめる、暫時の旅の宿りでも別れとなると何だか名殘惜しいボーイが食事のつけがきを持つて來た、一人前が僅かに三圓餘りだ、船などでは外に樂しみが無いので食事にはなかく重きを置てある、天長節や、紀念日には二十幾種と云ふ品數が出てとても食べ切れるもので無いと云ふ事だ。

ぐづくして居る間にやつと夜があけはなれたと思ふと船が動き出した。

窓から見ると陸が近くに見えて來た而も木は一本もない樣だ見渡す限り丘つゞきの壁土色をした處ばかり海岸に大きな煙突が立つて居る、何かと聞くと露國が立てた發電所だと云ふ事だ。

甲板に上つて行くと今迄は氣が附かなかつたが朝風

が身を切る様に冷めたい、生れて初めてこんな冷めたい風に逢つた、寒中の東京のから風が冷めたいなどゝ云ふが夫れ處ではない三枚も四枚も重ねて居る綿入を通して肌にしみ渡る様な氣がする。

誠にお氣の毒で御座いますが檢疫がありますからしばらくこゝでお待ち下さいと云つて來る、どんな事をするかと氣味惡く思つて居ると、あちらにも、こちらにも一かたまりづゝ船員も、船客も集まつた、ボーイ連中迄白い前掛をしたまゝ並んで居る、ボーイ長が滑稽な顔付で眞面目くさつて氣を付けッと呼ぶあとからドッと笑ひ出す、誠にのんきらしい人々ばかり。

休憩室から事務長の先導で勿體らしく出て來た檢疫官二三人何か書いてある紙片と顔とを一寸見くらべてヅッと行つてしまう、モウ宜しう御座いますと一人の船員がニヤ〳〵笑ひながら云つて行く、何だ之れでおしまいかと皆言ひ合した様に顔見合せて、各々にそゝくさと部屋へ歸つて行く。のんきな士官達も上陸の準備に冗話もせずサッサと行つてしまふ。

あんな事で人に病氣が有るか無いかゞわかるだらうか、尤も三等客などはモッと叮嚀に見るのだらうが、此邊の檢疫はらくなものだ米國に行く人などは向へ上陸する迄に眼の檢査だけでも四度有ると云ふ事である。

モウ上陸しても宜しいと云ふのでおなじみになつた船員や、同乘の人々に別れを告げて再會を約して陸に上る。

大連の棧橋は誠に見事なものである、四千何百噸の船が石がきの側に横づけになつて僅に二間位の橋ですぐ陸に上れる様になつて居る、行李や、手荷物皆運ばれて漸くの事でよろめき出た、汽車のレールがすぐ其處に來て居て荷物などが山の様に積である斯くて三日の航海を無事に終つた、こんならくな航海は少ないと船員が云つて居た。

混亂せる我國の禮法

◎我國に於ける禮は、今日は凡て過渡時代にありて、最も複雑面倒なり、例へば朝廷に於ける禮法は先づ立禮にして主に泰西を模せられたるものなるが、吾々の家庭に於ては、西洋館あり、日本間あり、西洋館にては立禮を用ふれども、日本間にては疊ありて座蒲團出づ、火鉢もあればストーブもあるといふ有様にして一軒の家にても斯の如く多様なり、禮を習ふものは是等の凡てを學ばざる可らざる故子供などには氣の毒な程なり、

◎又足袋にしても、學校にては靴を穿き足を外輪となし、歩行するにも一歩々々足を上げ引摺らぬやうに敎うるに反し、學校より歸れば宅のお婆さんなどは之を咎めて内輪に摺足といふやうに敎うるといふ有様なり、

◎婦人の禮服の如きも、先づ朝廷に於ては洋服若は袿衣袴なるが、袿衣は朝廷以外には決して用ひらるゝ事無きを以て、結局公の禮服は洋服に歸着する事となるが、サテ編上靴の紐を日本の婦人が手もて解いたり結んだりするは如何なるものにや、又洋服を着て日本間に坐するゝは實に窮屈にして苦痛なり、左ればとて多くは白襟紋付を用ふれども、之にては朝廷に出る能はず、即ち我國にては朝廷に出る事能はざる服を以て禮服となし居るなり、

◎我國の最大禮服は十二單衣にして、朝廷にては之を衣と謂ひ皇族の御結婚等に用ひらる、之に次ぐものは袿袴にして其他に種々の制服あり、然るに實際に於ては前記の如く凡ての場合に白襟紋付を用ひ、一生の大禮なる結婚式にも、停車場に人を送迎するにも、之を着用するといふ有様なり、是に於て泰西の人は日本の婦人に禮服ありやとの疑問を抱くもの往々あるに至るなり、是れ過渡時代なるが爲にして止むを得ざる現象ならんも、何とか一定したきものなり、(下田歌子女史)



一家揃つて壯健な理由

◎自分は長らく冷水浴を實行してゐるので、群馬の師範に在職中などは、十年間も毎日宅の後の利根川へ飛び込んだものですが、冷水浴で奇抜なのは他に澤山あります、あの重野老博士などは、若い時から今歳八十幾歳に至るまで、只の一日も缺かさず毎朝素裸體になつて鹽一合を水三合に溶かして體中を拭かれる、それから其水を新らしく更へて再び拭き、三度目には眞水で拭かれるといふ事です、又井上侯も大病前迄は毎朝水風呂に浴されたと聞いて居ります、

◎私のやるのは朝起きると直ぐ浴室で裸體になつて頭を洗つてから全身に浴びるのです、かうして私は冷水浴を以つて一つには意志を鍛錬して居るのです、實際冷たいからとか面倒臭いからなど云ふ爲めに屈しない樣な人間は何をしたつて成し遂げるものではありません、で永年試みて居る中に、體の方は無論の事、精神の力にも大分の効驗を認めましたので、今は自分は勿論家内中に遣らせる事にしました、小兒は總て三歳位から遣らせます、今頃から夏へかけて暖かい時季には、「私と一緒に浴室で遣つてさせますが、寒い時には家内がバケツを寢床の側へ運んで行つて拭いてやるのです、十五六歳以上になれば男も女も頭から浴びさせます私や家内の者等は、體中が諸君の顔と同じになつて居るので毎朝顔を洗はなければ氣が濟まないと同じに、之をしなければ氣が濟まないのです、朝一同が其を濟すと、今度は皆で深呼吸をする、夫れから朝飯ですが、宅では昔六年以來麥飯を遣つて居ります、此三つで私の家庭では健康を贏ち得て居るのです、（青山師範校長瀧澤菊太郎氏）

公徳心の美しい實例

◎英吉利の公園には制札などは一つもありません、それで春先になつて美しい花が庭一杯に咲いて居りましても、花の枝は勿



論草花の一片すら手折る人はありません、さうして處々に鳥籠のやうな大きな紙屑籠が置いてありまして、お辨當を包んで來た紙屑や、空折などを入れるやうに備へてありまして、皆不要物を此處に入れて路傍には何一ツ落ち散つて居りません、其清潔で心地の好い美しい公園を見る時は、それよりも美しい國民の心を思ふて、私はあゝ羨しいと感じました、又ある片田舍に行きました處、公園と云ふ程ではありませんけれど、草花などを植付けた場所があつて、そこに一ツの制札がありました、けれども其札は日本の「可からず札」とは少し違ひまして、その札の表には「皆さん何うか此場所を美しくするやう助けて下さい」と書いてありました、私は日本の公園の「可からず札」と心の中で思ひ比べて、何と云ふ上品なことだらうと思ひました、飜るに佛蘭西に行きますと、矢張り日本のやうな「可からず札」例へば「花を手折るべからず」、「此壁に落書す可からず」などゝ云ふ制札を所々で見ました、是等は皆要するに其國民の公徳心を表示したもので、學校に於ても教場に於ける生徒各自の公徳心には、始終注意して居りますが、家庭に於ても、母親たるものは此點に深く〳〵注意せられたいものであると、私は切に感じました、

◎厭な感じを人に與へないと云ふことに就て、面白いお話があります、私が學校で教へて居ります十五六の生徒に向つて、僕

員の時間に「禮儀とは一體何でせう」と問ひました處、人に惡い心持を起させないことだとか、行儀を亂さないことだとか、種種の答へが出ました、其中の一人が夏は人と相對して坐つたとき對手におゝ暑いと云ふ心を起させず、又冬はおゝ寒いと云ふ心を起させないのが即ち禮儀でございますと答へた者がありました、あまり奇抜な答へでありましたから、一堂の生徒が一時に皆笑ひました、併し私は決して笑ひどころではない、精緻な答へであると申しました、 私は多分此生徒の禮の解釋は西洋人の感化を受けたものであらうと思ひました、(三谷民子女史)

家庭の花壇

◎大仕掛の花壇は随分花が入用なもので、何處の家にも造ると云ふことは六ヶしいが、然し一坪位のものなら左したる費用もかゝらないから、一寸庭先などに設けたら面白からうと思ふ、普通地面より五寸位の高さに土を積で、周圍を芝で圍ふ、形は庭の模樣にも依るし、又各人の嗜好もあるから、角形なり圓形なりそれは自由であるが、花の植付けは充分注意して色の配合を誤らぬ樣にせねば見榮えがせぬ、又成るべくは花で一の模樣とか、又はある形を現はす樣にしたら面白からう、

◎今眞美しく花壇を飾つて居る花は、大抵秋播きもので、溫室に育てたものか、又は球根類である、從て春の花壇は比較的に手數と費用が要るが、然し秋の花壇は容易に出來る、春の花で培養の易なのは宿根球根類で、ヒヤシンス、チユーリツプ、アネモネ、水仙等が主である、花壇の縁には雛菊が可いと思ふ、之れは宿根であるから手數が要らぬ、又パンヂー等も面白い、春の花壇は此等の花を中心に仕て作れば随分立派なものが出來る、



◎秋の花は春種子を下すのであるが、大抵七月目から咲き初めて、十月末位まで絶えず續いて咲くので、秋の花壇は中々賑かである、先づ素人に簡單にして出來るものは、百日草、みぞ萩、天人菊、貝細工、ペチユニヤ、 松葉牡丹、金魚草、美女櫻、 葉鶏頭、サルビヤ、コスモス等で苗床に直播て置けば充分なるものばかりである、

◎肥料は一寸面倒であるが、但し一二回施肥すると結果が非常に違ふから是非夫れ丈けは必要である、素人に都合の可いのは油粕で、之れは日陰に水と交ぜて腐らして置いたのを使用ふ唯一寸注意しなければならぬ事は種子の善惡で、普通草花の種子は一年以上も經過と發芽せぬから、充分信用ある花屋から買ひ入れる必要がある、(東京府農事試驗場技手)

不言實行の躾方

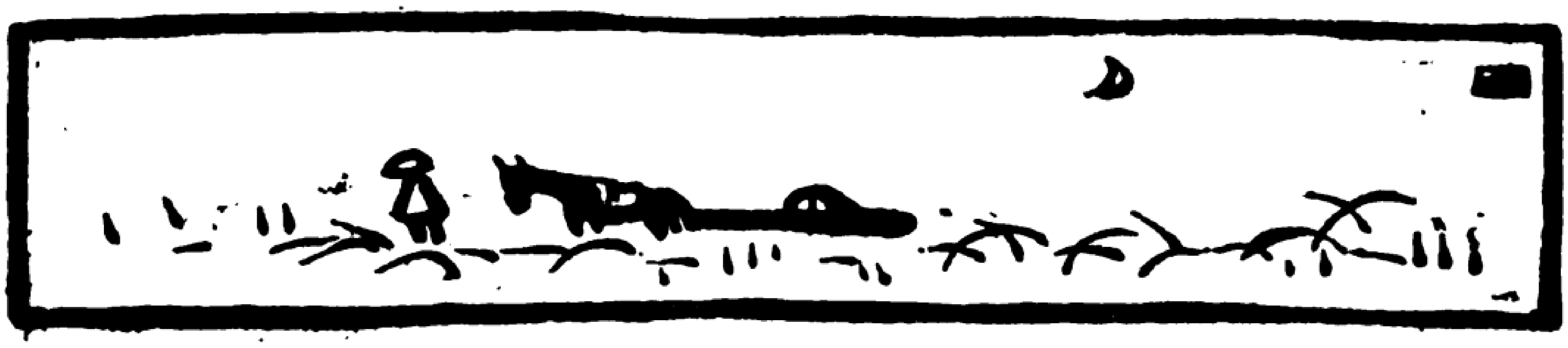
◎今の親はどうも子供を玩具にしていけないと思ひますよ、小

さい腰に縮緬の華美な着物を着せて小さな胸に餘るやうな帶をさせて喜んで見てゐるなんて、寒心に堪へないではありませんか、倅の元道にも子供が四人御座いますが、一切絹物を着せない主義で、洋服一着とあとは木綿物ばかりですよ、外出の時には洋服ばかりですが、もし日本服を着せるならば矢張身分に應じたゞけの物を着せなければならず、絹物を着せるのは經濟の點からいつても、又子供の精神に及ぼす影響の方から申しても私共は絶對によくないと信じますから、極簡單な洋服ばかりに致して居ります、

◎それから學校の復習などの事も親は決して構はないやうに學問は一切學校でして貰ふやうにしまして、宅では成るだけ遊ばせるやうに〳〵つとめて居ります、學校から歸りましても餘り机の前に長く坐つてゐます時には、外へ出して遊ばせるやうにしますが、子供は反對の行動を取りたがるものですから、その時は一寸加減がいります、よく子供に勉強しろ、何をしろと八ケましくいはれる親があるやうですが、あれは子供の心理を知らないのでせう、私の宅では皆が不言實行の主義で御座いまして子供にもかうせよ、あゝせよなんて事は餘り申しませんが、それでもいつの間にか見覺えて、女中などにも、子供が皆同情があつて、それ〴〵優しい性質を持つて居ります、

◎それから世の進歩につれて、どうも先祖を尊ぶといふ美風が段々廢れて行くやうですが、私は子供にはどうか其美風を失はないやうにしたいと存じまして、私共では神道ですが朝々神棚にお水を上げるとか、何か變つた珍しい物のあつた時には先づ神にお供へをするといふやうに、私なり元道夫婦なりがして見せて居ります、そして月々一二回は一家揃つて青山の墓參に參る事に致して居ります、親を大事にしろとか、國に忠義なれとか、たゞ形式的に敎へても左程効果のあるものと存じません、兩親が自ら其事を行つて見せるのが一番いゝと思ひます、

◎又子供のまだ幼少な時には。お前は女だからかうしてはいけないなぞと、女といふ事を頭において束縛するのはよくありません、自然に男女の區別のつくまでは、同等の無邪氣に育てなければなりません、幼少な時から白粉をつけて遣るとか、色々飾つてやるやうにしますと、どうしても子供はませて早熟します、早熟はやがて早衰のもとです、人は捨てゝ措いても、自然に熟する時には熟するものですから、それに人工を加へて、早く熟させる必要は決して御座いません、どうか女學校を卒業する迄は出來るだけ無邪氣に出來るだけ子供らしく育てたいものです、（三輪田眞佐子刀自）



今様 枕の草紙

きよ子



○心細げなるもの

年とりし女の僅の毛もて結ひたる髪。昔も今も變らぬ樣にて役所などに勤めたる男の頭白くなりたるに、朝早くより汚れし洋袴穿ち、汁滲みたる辨當袋もち、とぼ〳〵と行く。容貌よき女のこれも惡し、かれも好しからずとて、結婚の申込多く斷りたるに二度三度は世話せんと言ひ來し人も愛想つかせ、より來ずなりたるに、母親の我老先等の事かき口說き、我身も、ふと廿歲過ぎ居たるに心附きたる時はさすがに心細し。またいつ迄も子なきも心元なく、たとひ子多く生むも皆女にて姑等の言ひ嘆くに何となく氣づゝなく、今度こそはと思ひし子も生るればまた女なりけるはいと心細き心地す。子飼の雀の餌食はずなり腹ふくらませ、眼閉げ居たる。

○もどかしきもの

京都の電車。急須の口塞りて茶出でぬ。我子の物覺惡しき。とろゝ汁造らむとて擂鉢に薯入れてするに、擂木に力入るれば、鉢をどろ〳〵して動き出すに、倩動かぬ樣氣つくれば思ふ樣に薯のすれぬは、もどかし。また急ぎの物縫ふとて針に糸通すに、その針目怪しう惡しくて思ふ樣ならぬ、あるは打急ぐまゝに、ふと針一つ取り落して疊の上撫で、縫物の此處彼處、押へみれど、とみには見あたらぬ、いみじくもどかし。

雨戶の戶袋に治り切らぬも、もどかし。

寄宿舍にありし頃なりけり。ある夜、隣の部屋より使來て、今夜Kの君、催眠術がけ給へば、是非來よと

言ふに「催眠術は毎日教室にて—」と言へば、使の君笑ひつゝ、兎に角來よと、の給ふ。さらばRの君と一緒にて行かんと言ふに、否、否、一人にてと、意味ありげに云ふに、少し怪しと思ひつゝも、使の人に隨きて隣の部屋に赴きつ。

廊下の戸開くれば、机等皆傍に押しやり、眞中に電燈一つ薄暗くつきたる見ゆ。妾の出で來しを見て、居合す人々そと顔見合せ笑ひ給ひしも、妾の何となく氣味惡しげにするを見て、Kの君眞面目げなる顔して「催眠術にて何か治したき癖もをはすや」と問ひ給ふに「日頃笑はるゝ吃音の癖を」と笑ひつゝ言ふ。Kの君は「そはいと理なき事也」とて、椅子に坐れとの給ふに、其樣にしたり。

さるに舍生の一人の、にこ〳〵と水盛れる二個の茶碗持ち來て一を術者に、一を妾に渡すに「今迄聞きしこともなき方法よ」と訝しがれば、Kの君「こは新しき方法也、怪しと思はば其道の書物見給へ」と言はるゝに、「さる事もありや」等、半ば疑ひつゝも言はるゝまゝになしつ。

術者「左の手に茶碗持ち右の手にて妾のする通りせよさすれば術にかゝる事いと速也」と言ひて、いと嚴なる顔して、右の手にて茶碗の水ひたし、それにて糸底撫で、再び己の顔撫で給ふに、妾もその通りしたりかく指に水つけ、糸底撫でゝは顔撫で幾度も同じ事繰り返せるに、如何せしぞ、傍の一人急に笑ひ出したれば「なぞ、」と横向くに、其顔見て一同わつと噴き出しつ。妾は氣まり惡しきに、ふと柱なる鏡見れば、こはいかに、我顔に墨、黒々とつきたり。見れば妾の持ちし茶碗の糸底には墨ぬりたるにこそ。いとゞ口惜しかりける事共也。

○小さきもの

二人世帶の釜。繪の美人の口、女學生の辨當いと小さく、めれんす等につゝみ、提げ行き給ふ見れば、一日の料に足るまじと怪しく、況して寄宿舍等にて、燈火消えし後、舍監の君の目忍びてお薩など恐ろしき所

り物し給ふ人とはいかで見ゆべき。

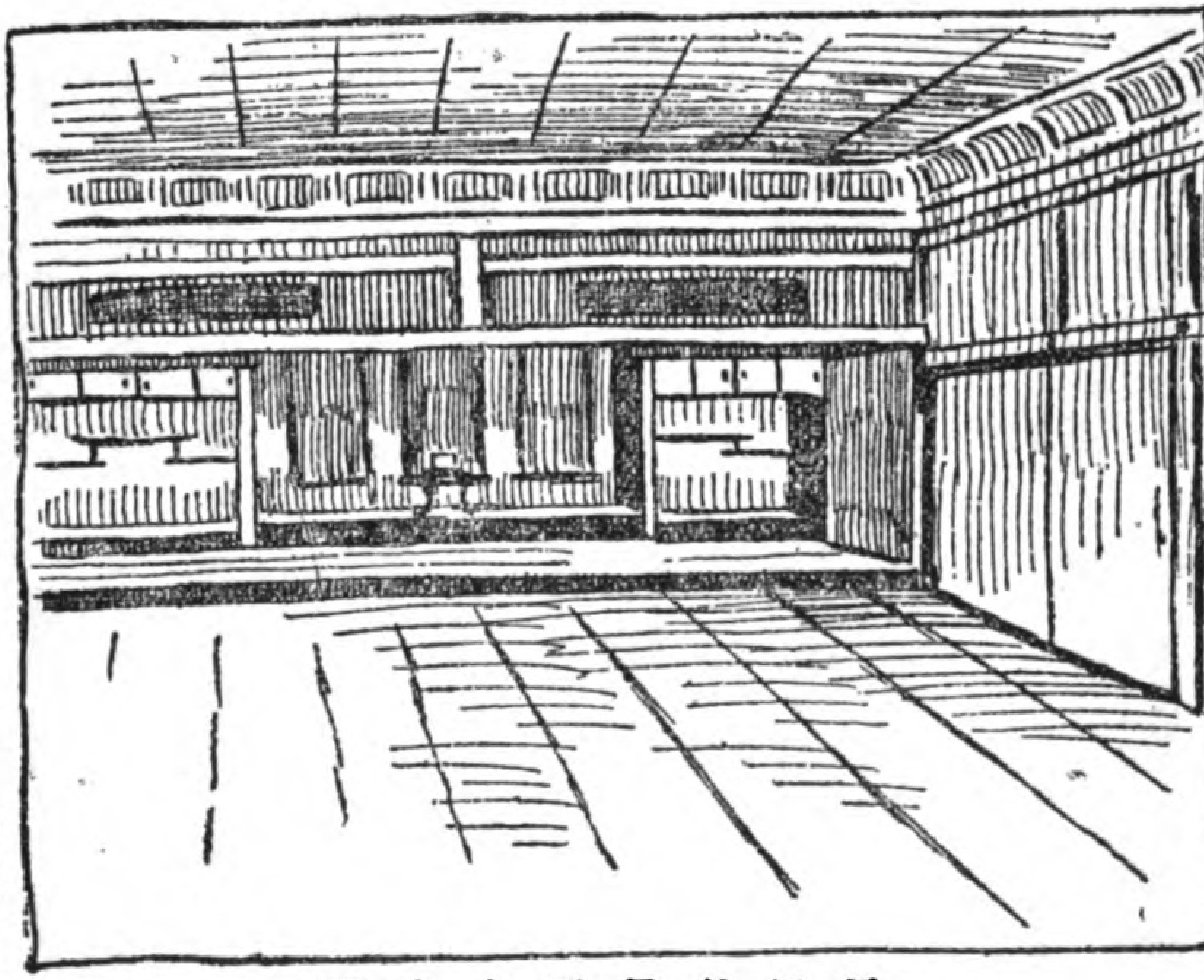
○何となく似つかしからぬもの

若き女の眼鏡かけたる。大女の小男を夫に持ちたる。女の謡曲まして、謡曲は體の爲になる等云ひて見る人毎にすゝめ、己も一管に勵みたるはにくし。

ポケット論語、ノート論語。

ポケット孟子、いづれもすさまじき中に、懐中女大學こそ今の世に似つかはしからぬ心地すれ。

その外日本文の羅馬字にて書きたる。ペンにて書きたる女の手紙、況して菫色のインキ等使ひ！？多く打ち、而も漢字、假名遣あまた誤りたるは何となく女の身に似つかしからず覺ゆ。



黒田侯爵邸大廣間

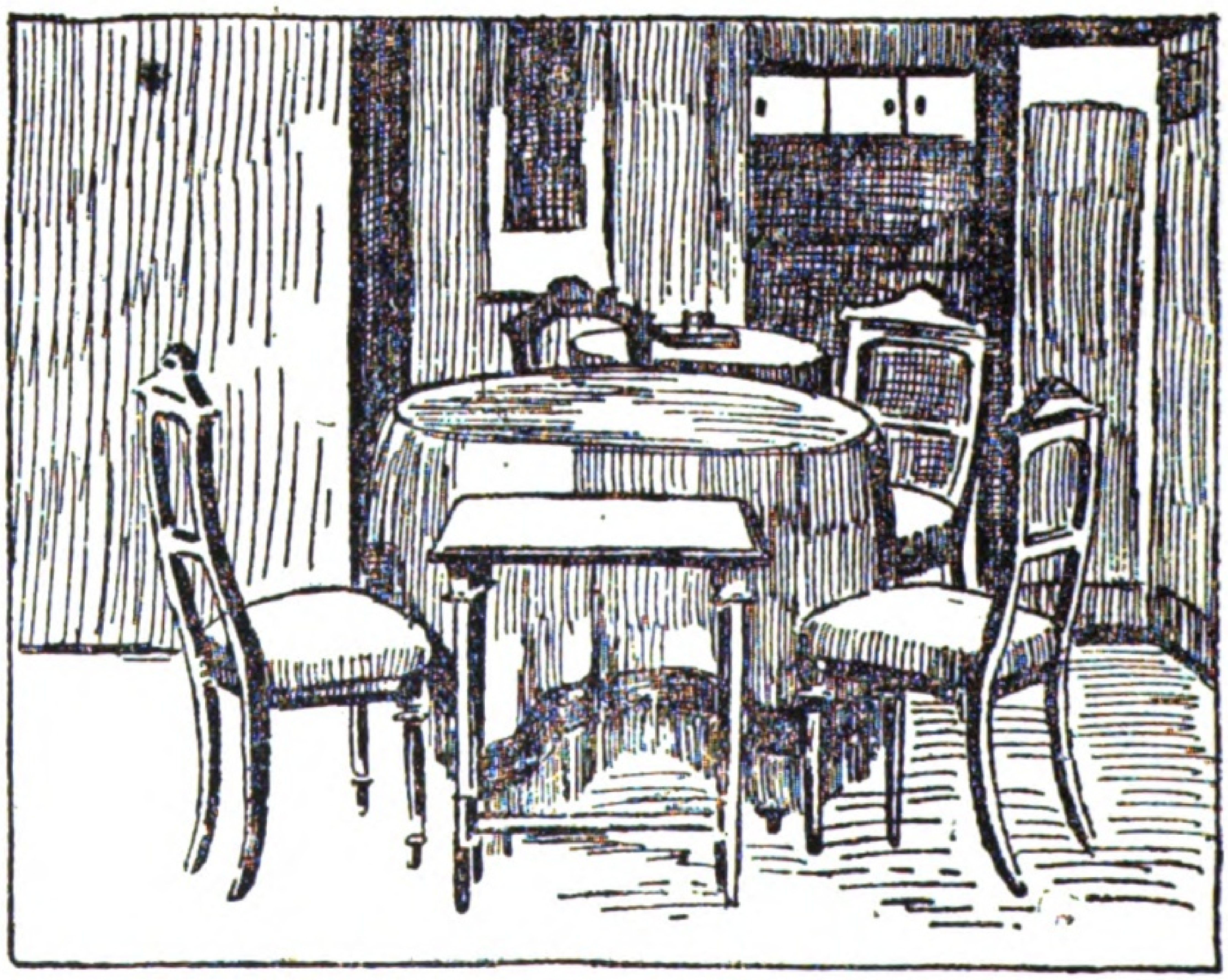
○極り惡しきもの

茄子など買ひて歸る途すがら包より一つころ〳〵とところび出たる。我顔に鍋墨つきたるを知らず見る人のくす〳〵と笑ふに此處？　此處？　と袂にて押ふるに何とも云はで、ひたすらに笑ひこけたる時。

すゞろなる事に、はしたなき夫婦の爭ひ初め、言ひ募りし果は、妻なる女、袂顔にあてゝよゝと泣き出し「もうかゝる家には居じ」など心にもなき事云ひ嘸夫の驚くならむとて一日許り我里に歸り、かならず男の尋ね來るらんと心待ちに待ち居たるに、さる事もなく、さ

ればこそ氣兼なれば久しくは里にも留り得ずやむなく戻り來て我家の裏口より入るに、夫は知らず顏にもてなしたるなどいとゞ極惡しかりなん。

されど一人者にて日頃我妻を思ひ崇むる男ならば、かゝる折いみじく周章て騷ぎ、心當りの家それとなく人もて伺はせ等し若し見當らずば「いかゞせし事ぞ。自分も少し言ひ過したり」等我頭を挙にて打ち、悔み歎きさては「思ひ迫りて身投等せしに非ずや」と思へば、起ちても居ても其事のみ氣にかゝるらんよ。さればとてせん術なければ一人にて竈たき、菜作んとすれど鹽の所在も明ならず。しみ〴〵其人の有難味も分りし頃軈て妻の歸り來ぬれば、死せし者の戻りし如く打



二條公爵夫人の客室

喜び、先の爭の事も打忘れ、緣板の上にこぼれし炭の粉など拭ひ居る女に「さう働かずとも此處に來て話しせよ」等言ふはいと目出度し。

なべて優しき夫ぞよき。旅先よりは何子樣など書きたる繪葉書よこし、歸りには土產持ち歸る人。また來客等ありて夜更くるありても「忙しき目させて濟まざりし」等一言きけば心ゆく心地すれ。

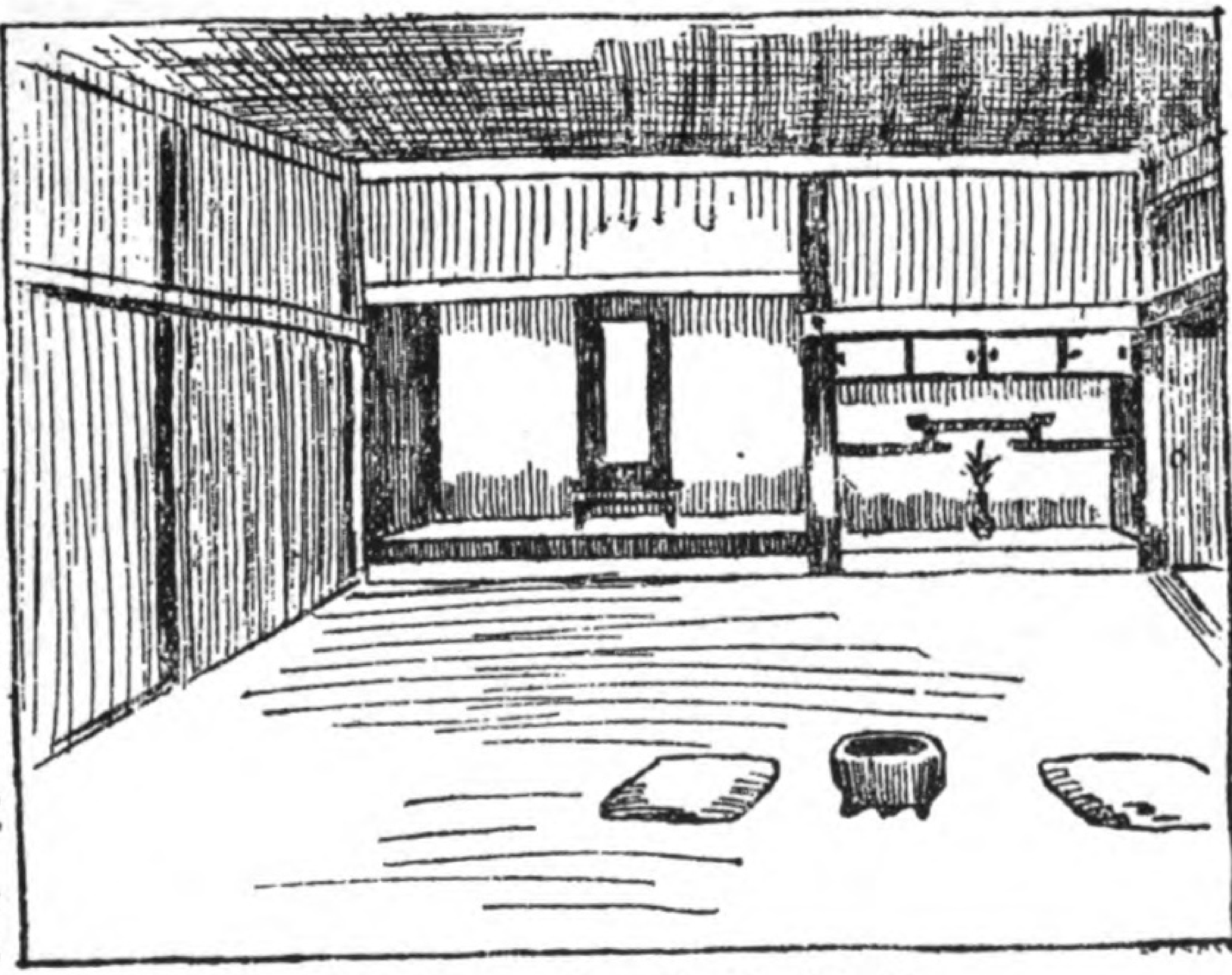
されど人よき夫もよし。暮し向の事は打任せらるゝにぞと我身の春着等新調せしに、そを見て「新らしく造りしか」と言ふに、何となく誠、こたへにくかりしかば、

「いえ、古きものを染め變へて―」と哀げに云へば、只打頷きたる。さて四五日經ちて、「思はぬ收入ありた

れば是にて新らしきもの新調せよ」等云ひて呉れたらば、いかに嬉しからん。されど世にはかゝる夫はなし。

夜ふけて歸らぬ夫いとわろし。そをあらはに恨むるもはしたなければとて、態とよき火おこし湯等沸らせ、下駄の音すれば直に玄關に出で慇懃に迎ふるに、當り前の樣なる顏したるはいと興さむ。まして翌の朝「昨夜は何處へ」ときくに「復も宴會也」と云ひたる。あるは「お前達の知りし事か」など不興氣に云ひたるはにくし。また夜遲く出迎へられて何となく極惡しげに何とか妻の機嫌杯とるは、其外にての振舞も思やられてそかし。

○かたくなるもの



阿部伯爵家の客間

さゝえの殼。

女子教育家、中にも田舍の女學校の校長いと頑固也。袖長き衣着れば、「あなたは勤儉ならず戊申詔書の御思召にそむくと知らざるか。リボンは一寸より巾廣きはすな、頭に飾などは不用の費なり。

髮には香油つくるな、水にて梳けば足れり、白粉ぬるな。男に戀すな。品行を正しくせよ」など規則いみじう造りたる。偶伯父より封書など來し折、男名前にて怪しければとて、天地の覆りたらむ樣に騷ぎ給ふよ。

百姓の手の皮、

增俸は墓なきもの哉。ふと其事の新聞に出でしより心も外に悦び合ひし若き同志などの、妻は指環買はん君の脊廣も月賦にて物し給へとすゝめ、萬事召使なくては不行

文藝倶樂部第十六巻第拾號増刊

講談落語 情話競べ

全一册洋装菊版
紙數三百二十頁
口繪木版寫眞版豐富

正價二十五錢
郵税二錢五厘

七月十五日發行

東京 博文館

口演者氏名

△柳家小さん　△猫遊軒伯痴　△一龍齋貞山
△眞龍齋貞水　△錦城齋典山　△春風亭柳枝
△三遊亭圓右　△大島白鶴　△神田伯山
△三遊亭圓喬　△西尾麟慶　△三遊亭小圓朝



題して情話競べといふ、古今の美人が身の上の物語は、收めてこの一篇の裡にあり、一夕短檠の影仄なるの處、此書を繙き玉へば、艶姿百態の美人は君が眼前に髣髴し、或は泣き或は笑ひ、その聲訴ふるが如く、咽ぶが如く悲しむが如く怨むが如く將また樂むが如く、情緒綿々として盡きざるものあらん、切に愛讀を祈る。

（その二）



涼しさうな青葉の巻！　夏休みの讀みものとして、有益で趣味の多い青葉の巻！

少女世界 第五卷第拾號 增刊

△口繪

△花かご（西洋愛らしい少女の三色版）（外に寫眞版八ページ）

記事

△少女對話 めぐりあい　巖谷小波

△休暇中の心得　女子高師 篠田教授

△少女訓話　第一高女 市川教諭

△少女雜感　沼田笠峰

これは記者が最近に感想十餘項を記したもので訓話もありスケッチもあり笑話もあり感心な話もあるといふ有樣而して皆少女に關したものばかり

△少女小説三篇△歸省物語△休暇日記△女學校日記△クラスメート△誌友だより△少女讀書會△金澤少女會△北陸旅行記△青葉のかげ△女學校入學試驗問題△短文和歌俳句。

▼…東京…▲ 博文館 ▼…本町…▲

少女世界 青葉の巻

洋裝菊版紙數百廿八頁
口繪石版 寫眞版澤山

正價拾錢 郵稅壹錢

七月十五日發行

（三〇三）

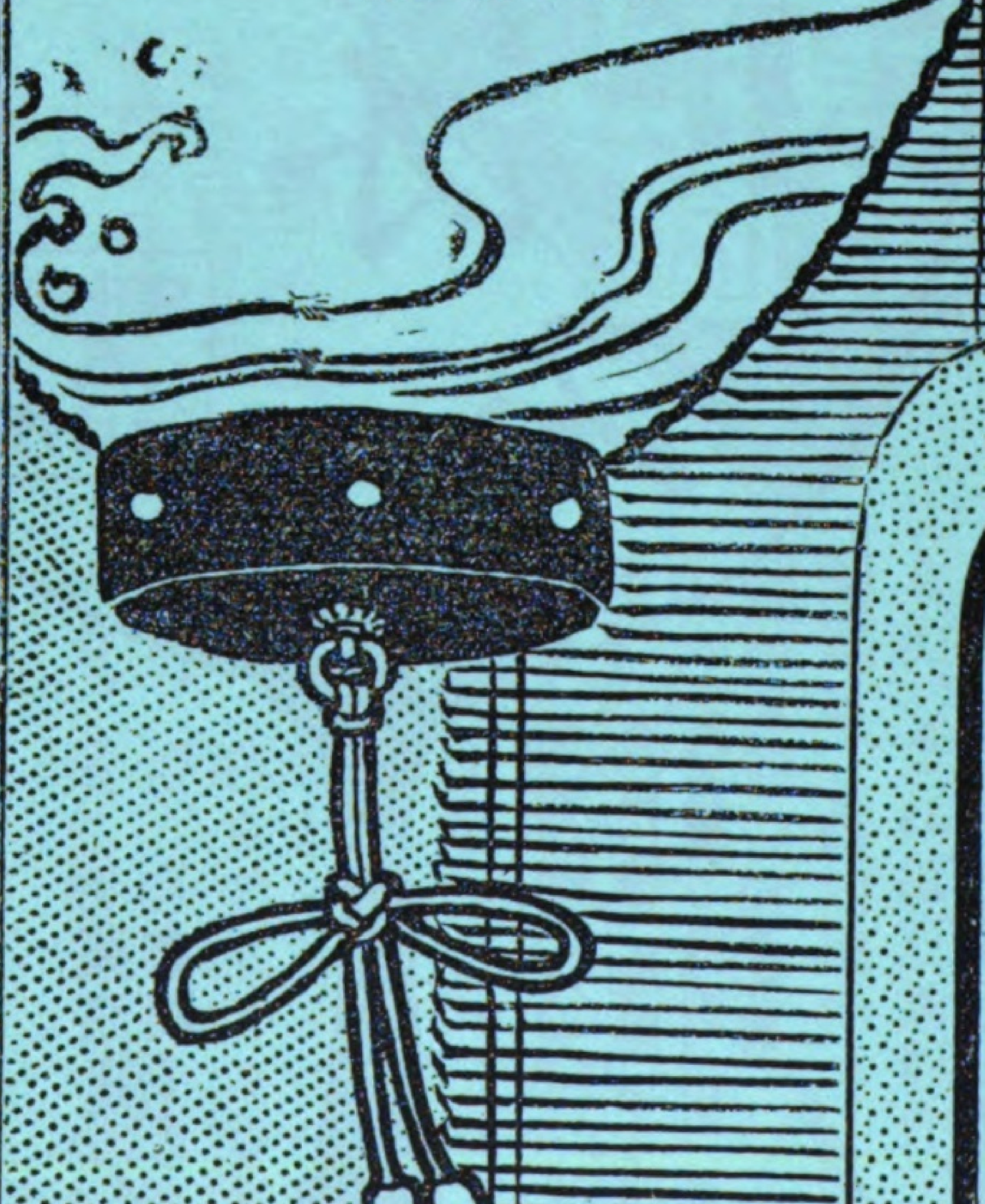
第十六卷……第九號

文藝倶樂部

菊版本文三百二十頁
口繪精巧木版數十度刷錦繪
婉麗なる三色版寫眞版數頁

正價二十五錢
郵稅二錢五厘

七月一日發行



時正に盛夏の候に入る、山間に暑を避くるも可なり、海邊に汗を洗ふもまた妙ならん、しかもこの時一服清涼劑の携帯を忘るべからず、吾が文藝倶樂部七月號は即ちこの清涼劑なり、內容の奈何に清新なるかを見よ佐藤紅綠子作脚本「母」を卷頭とす、子が作劇の手腕は編者の喋々を要せざるべく次に泉斜汀子作小說「孤兒」勝間舟人子譯小說「森の火」福田琴月子作小說「叔母さん」を載す、讀者は送迎に遑なかるべし雜錄以下の活社會、演藝界、長廣舌、忙中閑、百花園內の懸賞俳句、狂句、句相撲、情歌、端唄、小品文、一口噺、滑稽問答、雜題等例に依て例の如く賑はへり。

東京本町
博文館

（その五）

少年世界 第十六巻第拾號 増刊

夏休み

七月十五日發行

洋裝菊判
紙數百卌六頁
口繪石版寫眞版澤山
正價拾錢
郵稅壹錢五厘

暑中休暇の讀み物として、此の一冊を少年諸君に捧げます、内容と外觀の豐富にして美麗なことは、左の目次で其一斑を御覧下さい・

記事の重なるもの

◎忘れぬうち……さゝなみ記 桂舟畫
◎一少年の東海道無錢旅行…………手記
◎わが故郷……………木村小舟
◎暑中休暇を迎ふ◎記者と或愛讀者◎大鯨小話（某砲手實話）◎銷夏新遊戲◎涼み臺談話會◎樂しい會合

◎表紙『月光』……太田三郎
◎口繪『海風』……杉浦非水
◎寫眞 海、瀧、川、湖の絶景數十種



東京本町 博文館發行

下田歌子女史校註 ● 小本天金上製頗美本 定價金卅五錢郵稅四錢

最新刊

ポケツト女大學

本書は女學界の名家下田歌子女史斬新なる詳解を加へし唯一の女道訓なり之を以て家を整れば和氣靄々春風堂に滿つるの家庭を造り得べし。又女子の修養に資せば帝國婦人として愧ぢざる賢母良妻たるの實を全ふし得可し。斯く明快に内容の眞意を昧ひ得るは當代に絕無なり敢て一讀を推奬す。

東京婦人會 學編

花嫁の準備と実務

菊判洋裝 全一册 價五拾錢 郵稅六錢

婦人界許して曰く 本書は内容を二編に分ち第一編に於ては婦人と家庭と題して婦人の天性と身分、家庭より生ずる種々の關係、結婚前後に於ける心得一般を細說し、第二編に於ては嫁入先の區別と對段の注意と題して、醫師、商家、裁判官、軍人、學者、官吏等と夏人となるべき人の身分地位によつて其妻として夫れ〴〵心得べき特殊の修養を細說して居る實に嫁入前の婦人にとつて此上なき好師友たるのみでなく一般家庭に於ても日常の侶として座右に置かば其益する所蓋尠少でない、記者は七身を以て近來の好著述であることを斷言するに憚らぬ。

日本女子大學教授 白井規矩郞先生編 ● 價送料共六拾錢

新撰五十進行曲集

夏期娛樂最適當

發兌 東京市神田錦町 振替口座三四〇九 二松堂書店

產科婦人科專門 醫學士 北畠孝夫先生閱

最近

婦人病心得

子宮病 自宅療法

無代進呈（但送料貳錢を要す）

目次（婦人病の總論◉血の道（ヒステリー）の原因病理及び自宅療法◉神經衰弱、貧血、萎黃病とは如何及其療法◉しらちながちの病理及其根治法◉月經時の手當月經諸病の療法◉姙娠の原理、受胎すべき場合姙婦の攝生、つわりの養生法

女の一番つらい病は。子宮の諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齡の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて、素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて。生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である◉著者は多年の實驗と。最近の學說を基礎とし。（婦人病者の心得）と題し上記の各項に分て丁寧親切に詳說せり◉病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ

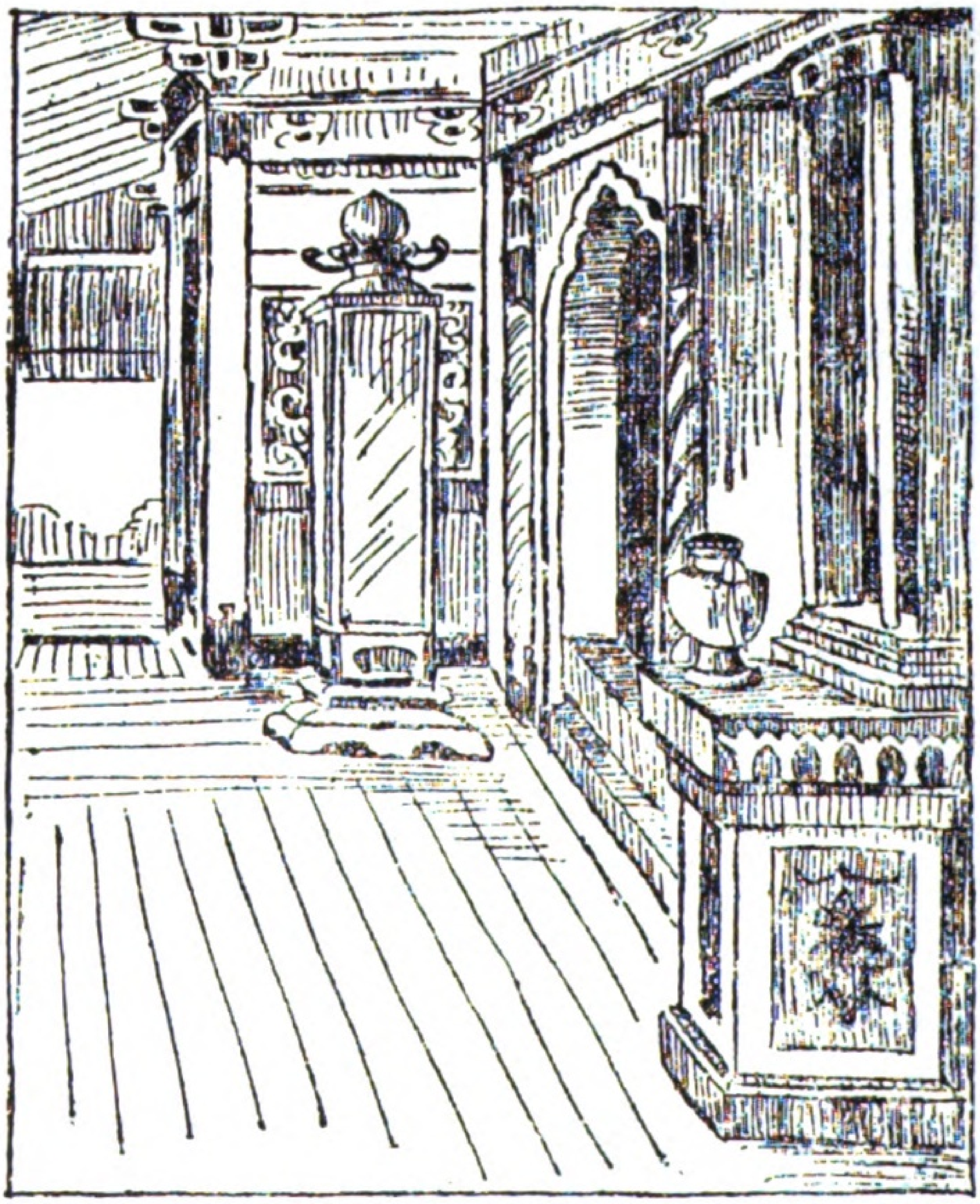
●當分の内無代進呈す送料貳錢封入至急申込まれよ

發行所 東京築地新榮町四ノ一（電話新橋三六〇一番）笹岡省三

屆なればとて下女等置きしに、增せし高は思ひしより
も僅にて、あるもなきも同し樣なる。たゞ苦しさの前
よりも增せしはいとゞ曲なけれ。

○見苦しきもの

主人の座蒲團の破れたる下女よく叱る女。小供の筒袖の、涕拭へば怪しう光放ちたる。何も見苦しき中に勝手元の清からぬこそ甚じけれ、大瓶の水汲めば底より塵滓多く浮び出で、流の水はけ穴は塞りて、飯粒靑菜などむさげに溜り居たる。さては鍋釜、茶碗等使ひしまゝにて、物つきたるを重ねたるに、夏なれば蠅多く飛かひたる。あるはふと戸棚など開くれば、怪しの香さとして、夥多並べたる鉢には何とも知れぬ汁等殘りたるは日頃のつゝしみも思ひ知られていと見ぐるし。若き女の晝寢もまた見ぐるし。



大倉邸美術館の内部

夏の眞晝、道行く人もなく、たゞ蟬の聲のみかしましき頃、家中いと靜なるに小兒の添乳するとて手枕して乳含ませ、其日の新聞四つに折りて見等するに、すと簾打動かし吹き行く風も心地よく、いつしか新聞の文字の雲の樣見え氣も遠くなりつ、肱つく手の、しびれたれば少し動かせしと覺ゆるに、身は遠く限なき雲の中に落ち行く心地となり眼瞼の自と掩ひ來るを覺えつ。——ふと眼開けば、日早西に傾きて庭の塀の半ば陰と成り居たる「あなうたて、寢たりと覺し」などつぶやき

つゝ、ふと傍見れば、添乳せし子の我より先に匍出し何處へか行けるは流石に恥かし。

ましてて其子の聲きゝつけて行くに、そを姑の守し居たる、我身の起き來たるを見て其人は知らず顔に「よく眠りしや」等言葉に針含めて言ふに穴あらば入りたき心地こそすれ。

○頼にならぬもの

秋の空と男心と云へと天氣豫報も頼にならじ。改正假名遣は何時また變るや計り難ければ頼にならず。伯母の親切、日頃「何時なりとも心配あらば來よ」と云ふにそを眞に受け、いざと云ふ折相談かくれば人事の樣に云ひなしつ。あるは一枚持ちたる勸業債劵の次の抽籤に千圓當らば百圓は進ぜん。思ふ物買へよ、等云ひたるは頼もしからぬぞかし。また他人の陰事云ふ人に我秘密うかと話したるも覺束なし、「此事は君にのみ話し參らせむ、堅く秘密守りてよ」、等云ひつゝ一人一人と廣ごり行くよ。

○今は役立たぬもの

伯母の與れたる珊瑚樹の根掛。結婚後の英語、在學當時は、何々の君は英語の天才あり等人も言ひ己も信じ、ゆく／＼は英文學者として獨立せんと迄思ひし事もありしが、いかなる運の廻り合せにや今は竈の前に燻る身となり、只時々友どちとの昔語りに「かゝる事もありしよ等想ひ出すもいと哀なり。





町娘の一日

待宵草

今日も空はカラリと晴れて一片の雲もないまるで秋のやうだ、此頃は本當に陽氣なお天氣許り續く。時には春雨でも降ればよいと思ふ、人の心つて勝手なものだ。

朝早くお濱さんが來たので、母樣は久し振で丸髷になすつた。何と云ふのか知らないけど心持根の低い粋な形、ぐつと出た髱なら鬢なら本當によくつて、矢張り商家の人には束髪より日本髪が可いわと感心して見て居ると母樣が

「お前も結つてお頂き」と仰有る。

「厭ですわ私、明日學校が有りますもの」

つて云ふと

「まあ一日でもいゝから結つて御覧よ」

「本當にお孃樣、彼麼に能くお似合遊ばしますものを……」

とお濱さんもとも〲勸めるので、遂々結げて貰ふ事にした、明日直ぐ壞すのに島田は惜しいから桃割にして、丈長は赤が可愛いゝつて云ふけど私は矢張り白をかけて小梅の銀簪をぐつとさす。鏡に向つた顔が別の人のやうに見える。

「可笑しいわ、私見たいぢや無いことよ」

といふと、母樣が

「見馴れないからだよ」と仰有つた。

朝飯を終へてから糸織に着更へて、行つて參ります、と家を出た。

春の日が麗かに萬物を照らしていかにも氣持がいゝ青々と萠え出た若草を踏んで、コバルトの洋傘くるくる廻し乍ら行くと、十分も掛らない内に先生の御宅

へ着く。もう床しい音が洩れて來るので、誰か知ら？と思ひつゝ玄關へ入つて見ると、薄色の洋傘と船底形のヘイカツタ下駄が有る。乾度吉井の奥樣だなと思つて稽古場へ入ると矢張りさうだつた。今日はまた、荒い何とかお召の袷に、亂菊模樣の繻珍を締めて、髪はお珍しいこと束髪にしてらつしやる。然し奥樣私大嫌い斯うして後姿を拜見してると別段の事も無いけど、前から見やうものならそれは〳〵……只今鼠が粉袋の中へ落たといふ樣な白粉の着け樣で、人でも食つたやうに唇一杯の紅、なまじお衣裝の佳いだけ目立つて可笑しい。そしてね覺のお惡い事つたらお弟子中で一番なのよ、一昨年の春からお上りなすつて、今漸漸高砂、最よくお休みなさるからかも知れないけれど彈いた後から直ぐ忘れてお了ひなさるのには感服の外ない。此麼お方にかゝつちや、先生も隨分辛氣だらうと思はれるわ。同じ奥樣でも平戸の奥樣なんかは本統に好きだ、何時もお品の佳い雲井形のお丸髷に遊ばして、縞お召か何かに博多のおみ帶キリヽと締めて靜かに千鳥をお彈き遊ばす時や、彼の凉しいお眼を伏せて三味線をお彈きなさる時や、もう〳〵震い付き度い程佳い。そして私等にだつて些少もお品振るなんて事は無いし……吉井樣とは同年で被居る相だが、吉井樣の方は三ツ位もお婆樣に見えるわ、平戸樣より此麼に派手にして被居るけど矢張りお顔の善惡ねえ……こんな詰らない事思つてる内にやう〳〵濟んだ、高いお辭儀をして歸つてらつしやる。之れからまた妙に氣取つてしやなりくなりと歩いてお歸りになるのかと、要らない事だが氣にかゝつてならない。

「お照さん、お髪がよく出來ましたね、一寸後向いて見せて頂戴」

先生が煙草を詰めながら仰有る。

「可笑しいんですよ先生、今朝お濱さんが來ましてね急に結つたんですもの」

「まあ本當によくお似合だこと、この次はお島田にお結げなさいよ！」

「でも先生、學校が有りますもの、此髪も明日壊しま

すの」

「えゝ、其麼いゝのを？まあ惜しい」

私だつて惜しいわ、けど仕方ない學校の校風だもの、一體誰が極めたのか知らないけど隨分詰らない校風も有るものだ、木綿の筒袖の外着るべからず、リボンや花束をさすべからず、髪はすべて束髪の事だつて。人馬鹿にしてるわ。然しこれももう僅一年の辛抱だ、來年の今頃は自由の鳥……。

河千鳥を習つて歸る。

午後から店が大分忙しい樣だから手傳つてお遣りと母樣の仰せ、畏まつて雜誌部へ出る。



文房具の貞吉と清三が何だか云ひ爭つてたが私が出るとハタと止めた。

「一寸、女學世界もう來まして？」

と耳元で優しい聲、見ると多田の若奥樣だ。

「毎度どうも……えゝ參つて居ります。けれどまだ配達に出て居りませんから、どうぞお持ち遊ばして……」

「ぢや頂いて參りますわ、それからあの、文章世界を今月から配達して下さいな」

「は、畏りました……有り難う……」

我ながら我が言葉に感心して見る、學校でこんな言葉を使つたら皆は何といふだらう？？

「おい〳〵、冒險世界はまだ來ないか」
中學の五年位だらう、滅法脊の高い人だ。人を馬鹿にした樣な言葉だが、冒險世界と聞いちやなつかしい。つい笑顏で、
「はア、まだ參りません。あれは五日發行で御座いますから」
と答へると、傍の一人が、
「見給へ、矢張り僕の云つた通りだらう」
と得意氣に肩を上げる。二人ともひしやげた帽子に二條の白線雪の徽章、すりへらした薩摩下駄、紺飛白の羽織、何だか一高生の樣で、吾徒の士！といふ樣な氣がする。二人とも乾度野球家だとひとりで極めておく。
大一番の丸髷に燃えるやうな緋の手柄かけた二十三四の美しい奧樣が入つてらつしやる
「あのゥ蘆花さんのやどり木有りますの？それから柳浪叢書を……」文學好きの奧樣らしい。
おや、學校の符章の樣だと思つたら矢張り我校の生徒、あら〳〵同級の田邊さん矢島さん細川さんだわあのお口惡連中に發見たら大變と思ふ間もなくドヤドヤと入つて來た。
「おや小野さんまあ」一番に口を切つたのは矢島さん
「お店番とは意外だわ」「本當にね」など〻田邊さん細川さんも負けず劣らずだ。傍には中學生や大學生も居るものを、小野さんの日本髮は始めてだの、想像通りよくお似合だの、斯麼に雜沓した處に住んでらしてよく幽遠な詩想が湧き出づるつて立花先生が感心してらしたの、先日貴女がお休みの時立花先生が、小野さんが居ないと淋しいつて云つてらしたの、今度の級會には是非貴女のお琴を伺ひ度いの、何のかんのつて小一時間もしやべり散してお歸りになつた。明日また學校で、小野さんの日本髮は素敵よなんて云はれるだらう。妙な人達だ、日本髮つて云へば氣でも違つた樣に大騷するんだもの、日本髮は彼の方達の親の敵か知ら？でもまあ、當世良人氣質一冊同妻君氣質三冊、夢二畫集三冊が賣れたから我慢しておかう。
電燈のつくのを待兼ねて、我役終りぬと部屋へ引込

む。

夕飯後は別に用事も無いのでお琴をさらつて見る。薄雪のひよくれんりのかたらひとといふ處、やどり木にあるので何となく懐しくつて何べんも彈いて見る。夕顔と、みつれんほと、道成寺と、越後獅子とをさらつたらすつかり忘れてゐたので止して、本箱から四月號の女學世界を出して來て讀む。この無名氏のスヰートホームは私乾度内藤さんと思ふわ。だつて筆法が殆どそつくりで、其上下女のおきよ、鵠沼小學校の本庄先生、母様おひとり、御養子、お十八で奥様、なんてもう〳〵乾度内藤さんに違ひない。女の手紙も大變いゝどうかしてこの方に逢へる法は無いか知ら？お目にかかつてお話が承り度いわ。あゝ今宵この朧なる月に遠く鵠沼漁村の君の文机の邊をも照らすであらうか、月よ、心あらば我がこの切なる思ひを美しの君につたへてよ…上原あや子様も才筆、私花散る里様つてこの方ぢやないか知らと思ふけど違つてるでせうか、京そんな様の京のさま〴〵を讀みては面白い。實際ね、自分の土地を間違つて紹介される程厭な事はないものよ、三月號だかに石狩伊都子様の、雪に埋れし札幌の市街つてのが出た時、私見たいなものでも餘りなと思つた。幌の字は原野と云ふ意味なのを風が强いといふ事だとか、四十年五月十日の大火を一昨年五月三十日だとか、美人が居ないとか、まあそれはいゝとしてあの大學生と女學生云々には餘り腹立しくつて雜誌を思はず投げ出した程だつた。三區の中でも一番風儀が正しいといはれてるのに甚麽事があるものですか――おや〳〵ひとりでおこつてる内に九時になつて了つた。もう寢ませう、と糸に床取らせる間を縁側に出ると、天地夢の様に霞んで櫻の花が絶間なく散つて居る。逝く春！といふ想がシミ〴〵と身にしみて、思はず涙ぐんだ、華かな少女の青春も遂に斯うして逝つて了ふのぢやないかと思つて…。

剛健の氣象を養へ

近來世間では大分家庭々々と云ふ聲が盛んになつて、一般の人が家庭と云ふ様な問題に就て深く且つ眞面目に考究しやうとする傾向のあるのは、誠に慶賀すべき現象である、又家庭と云ふ事に對して尊重を拂ふのも固より喜ぶ可き現象ではあるが、然し其と同時に、現今の所謂新家庭を組織しやうと云ふ人々の間には、其理想とする家庭の意義が、單に一家の和樂、樂しき家庭と云ふ様な意義に解されて居るのは甚だ面白からぬ傾向だと思ふ。家庭は單に和樂のみが理想では無い、美しく香のある花の咲き亂れた温室の如き家庭が決して理想の家庭であるとは云へない、若く美しい夫婦相携へて緣日に植木を素見すと云ふ様な事を家庭の理想と思ふと其れは大きな間違ひである。

家庭には勿論和樂と云ふ事が一大要素であるに違ひないが、家庭に於ては是非とも剛健の氣を養成して貰ひ度い。剛健の氣が缺けて單に和樂のみを目的とした家庭ならば、其れは決して理想の家庭と云ふ事が出來ないのである。夫婦共稼し一家團欒して居る時は出來るだけ家庭を圓満平和にして和樂を事とすべきだが、若しも夫が國家の爲め事業の爲めに遠く天外萬里の地に赴く様な事があつたならば、妻は獨り家庭を守つて夫の歸るを待つと云ふ様な覺悟を平素に於て能く養成して置く事が必要だらうと思ふ。昔にして從來の日本の家庭に於ては、此の氣象が古くから養成されて居た。然るに近來になつて新家庭を作らうと云ふ人の中には、軍人は戰爭に行くからとか、船員は絶えず航海をして一緒に家に居る時が少いからとか云つて、結婚を好ばぬ人がある様だ。和蘭の婦人に就て如何なる人と結婚を望むかと聞くと、如何なる種類の職業に從事する人でも宜いから始終離れずに側に居る様な夫と結婚したいとも云ふ。之れに反して英國の婦人は全く之れと反對で、事業の爲めには夫と共に海外にも出掛けやう、又家庭を守つて夫の遠征を待つ事も何とも思はない。此の家庭は將來日本の家庭に於ても是非保存して置度いものと思ふ。夫としても此覺悟は勿論必要で場合に依つては一身國家よりも重い事がある。況や我が事業の爲めには一家をも犠牲に供する覺悟が大事である。

私の家庭では、此の理想に依り剛健な氣象を養成する爲めに、兒童等は出來るだけ自然的に動物的に教育して居る。左様して稍や成長して身體が強健になつてから之れを人間的に教育しやうと思つて居る。即ち第一期は成る可く動物的に育て、第二期に至つて之を人間的、國民的に教育するのである。從つて名前の如きも私の理想通りに命名した。長女は私が北海道へ行つて百姓でも爲やうと思つて居た時に生れたので北見と云ふ名を付け、長男は虎之助、次男は熊三郎、三男は鶴四郎、四男は龍五郎と、總て動物の名に因んで命名したのである。（竹越與三郎）

薄命美人の面影

上原綾子

△多榮子の君

丁度去年のさつきなかば、若楓の梢から翠のしづくのしたゝりさうな初夏のあしたであつた、數おほきクラスメートの中でも殊に大仲好の多榮さんが今度柳田法學士と結婚してその任地桑港へ出立するといふので此の親友のめでたき首途を見送らんがため私も新橋さして俥をいそがせたのは、

石段を上ればいつもながらせはしない眼付をした人人の群で一ぱい、その人浪をすりぬけて待合室を覗くと友は丁度誰やらサックコートの紳士と言葉をかはして居るところ、めざとくも私の姿を見つけるや美しい瞳をあげてほゝ笑みながら走り寄つて私の手首を固く握り無言のまゝに二三度打ふる、私も強く握りかへした。

この間華族會館の御披露の時、ほんとに好く似合つてよと小聲でほめといた島田が今日はまたいつものハイカラなエレナ卷になほされて、あの細腰にふるひ付きたい樣な刺繡紋の袷、金齒をチラとみせてニッコリしながら、

「綾さんあり難う！いそがしいのにお氣の毒だつてね學校まで休んで來て下すつて……」

「イヽエ……あの學校でも皆さん御見送りしたいけれどまさか全級で出かける譯にもゆかないからどうぞよろしくつて、あの多榮さん良人は？」

「居てよ彼處に……。ね、綾さんこれで當分故國ともお別れかと思ふと何だか名殘惜しくてね、昨夜も獨りで泣いてたら柳田に笑はれてしまつたのよホヽヽ」

日常は快活な人ながら流石心細さうないろが口元にたゞよふ。

「良人がついてらつしやるぢやないの、しつかりなさいな」

ポンと脊中をかろく叩くと笑くぼをきざんで一寸時

計を出してみながら
「私これからまた皆さんに御挨拶して來なくちや‥‥一寸失禮してよ綾さん柳田にも會つて頂戴な」

やがて幾多見送りの人々にとりかこまれて車窓に立つた柳田氏夫妻、もう發車間際になつてまた多榮さんがさし招くので無言のまゝ近よる耳へ

「綾さん明後年は歸朝りますわ彼地へ行つても今迄どほりにどうぞね」

とさゝやいた友のこゑは思ひなしか濕んで響いた。

あゝもうあれから丁度一とせ、こゝ暫く消息の絶えたはもしや病氣にでも‥‥と案じ續けたのも蟲のしらせと云ふもので有つたらうか、昨日柳田學士から「異に突然の發病にて遂に云々」との手紙を受取つた時の私の胸は‥‥‥。

あゝわが親友多榮さんは知らぬ異郷に病を得、遂に異郷の幽鬼と化してしまつたのである、

明後年はとさゝやいた聲も、美しくほゝゑむだ瞳のいろもまだあり〳〵と胸に殘れど――夏を司る綠の精はことしも梢を彩りませど――あゝわが多榮さんはたとへいくたび年のめぐるとも、もう再び現し世に歸りきます時はなくなつてしまつた、永久にあの印象の强い風貌に接することは叶はなくなつてしまつた。

あゝなつかしきわが友多榮さんの御魂よ‥‥。あゝ多榮さんの「死」は果して事實にちがひないのでせうか‥‥‥。

△幸彦さん

從兄の幸彦も思へばその名に似もやらで世の幸うすき人であつた。一高に入學すると父母の家を遠く離れて出京て來たその人は、日曜毎にはかならずまた新しい白條柏章の帽子横さまに被つて缺かさす、我家へ遊びに來たものであつた。

時には靴擦れで痛いからとてあの制服姿に草履ばきでやつて來たこともある、また或る時は冬の寒空にそれは友人に貸してしまつたと云つてマントも着けずに出掛けたこともあつた。

そしてよくストームやコムパや、賄征伐など若々しい學生の寮生活の話をきかしてくれる。

私達姉妹が何とか彼とか冷かしたりからかつたりしてもたゞ笑ひながら受とめて澄したもの平氣の平左で「あした隅田の川風に、オールをとれば浪をどり、夕べ向ケ陵の上バットを振るへば敵ひそむ」



なんかつて蠻聲張りあげて景氣よく歌つて居る、さて蠻の字は奉るがそれでも向陵一流の好い聲なので妹などが

「從兄さんもつと何か唱つてよ」なんて首ッ玉へかぢりついてせがむと

「優ちやん、またかい？うるさいなア」つて言ひ乍ら佐渡節を出すのが此の人の十八番であつた。

「またかいつて從

兄さんこそ又佐渡節やるの？」つて云ひ返すと愉快らしくアハヽヽと一緒になつて笑ひこける、ほんとに元氣な青年であつた。

その從兄が去年の春フト風邪に罹いて肋膜を冒され暫くは湘南の濱邊に靜養して居たのが、もうすつかり快いとて九月の新學期からはまた元の自治寮に戻つて來たが、其の頃から何だか昔日の元氣は更に無い。

寮の小窓に身をよせて
夕陽のかなた故郷の
家路はるかに想ふかな
都の秋を來てみれば
風しづかなる向陵に
コスモスの花さきみだる、
秋の日薄き教室には
塗板そむるとつ國の
咳嗽しげき老師あり
げにや寂しき我がこゝろ
おもへば戀しふる里よ

ポケット日記の一端にこんなことの記してあつたのを見出したので

「從兄さんばかに懐郷病に罹つちやつたのね、伯母樣のお乳なんか疾つくの昔しなびてるでせうに……」とからかへば

「綾ちやんも仕樣のない人間だな、ナーニこりや出鱈目さ」

などゝ直ぐ話をそらして快活を強いて裝ふ樣がよそめにもわかる。まあ氣がゝりな、その頃からゴホンゴホンといやな咳嗽をする樣になつた從兄は今年に入つてよりはもうまるきり頭も上らず、到頭湘南茅ケ崎の病院で……。

「綾ちやん寮の夕べは何となく寂しいものでね、薄紫の夕雲のゆくへをながめながら北國の我家のことなど考へてると自然とあたゝかい涙が湧き出る樣だ」

一度病を得てより後の從兄はよくこんなことを口にする樣な人になつてしまつた。

あゝそれにつけてもせめては肉親の親兄弟にとりか

こまれて、あの北國の家でさめぬ眠に入らせたかつた……云ふて詮なき事ながらまた今更に思ひ出さるゝ。健康な頃にはテニスやボートレース、フートレースなどのチャムピオンメタルを澤山にふやすのを何よりの樂しみとして居たらしかつた、あゝ前途洋々春海の如き若人の限りなき希望をあの病める胸に秘めて、死なねばならぬ時期の近づいたのを知つた時、その從兄がどれ程落膽したことかと想へば私は今でも胸がつまる、



あゝ夜毎々々にまたゝく星よそれはみ空にゐます從兄の魂が何事かをかたる默示ではあるまいか……。

△御祖母樣

私の家の一族には老人が幾人もあつたが、わけて私は母方の祖母が大好きであつた、

それは生れ落ちるから御世話になつて永の年月同じ家根の下に起臥した爲めの親しみからでもあらうが御祖母樣の方でも亡くなつた幸査と私とは多くの孫の中でも殊に愛して下すつたと思ふ。

丁度私が八歳の秋のこと、宅から學校へ俥を持たせて急の迎に小さい胸をとゞろかせて何事かと歸つてみれば……。

高筋の御召に黒の御被布めして今朝まで

「綾坊や、早う歸つておいで」

とにこやかに笑つて下すつた御祖母樣の御眼は永久にとぢられて、今朝までさすつて頂いたその御手には最早ぬくみは通つて居らなかつた。

まあ何といふ敢果ないおわかれであつたらう、病症は腦溢血とやら

「お祖母樣はもう御墓の下に入つておしまひ遊ばすのですよ、よく今までの御禮を申上げて御拜をなさい」

と母に云はれて何が何やら譯のわからなかつた私がその時はじめて熱い涙をハラ／＼こぼしたことは今にもよく記憶してゐる、

まだ八歳やそこらの幼な心に「死」といふもの丶悲しみをしみ／＼きざみこまれたも其の時から……

お祖母樣は全く老人に似合はぬみづ／＼しい若やかな聲と瞳とを持つてゐらしつた。生田流の箏曲に堪能で、いつも離室の六疊で何の曲かしづかに彈じてゐらつしやる所へ學校から歸つた私達が「只今」と云ひにゆくと「お丶今お戻りか」と直ぐ立つて茶簞笥から乾度何かのお菓子を出して下すつたことも記憶えて居る。

今でも斯うして心しづかに眼とづれば、あのきれいにそろへた品の好い切下髪のお衿も、綾坊やとにつこりあそばすお目のいろなど、まぼろしの樣に胸にうかぶ

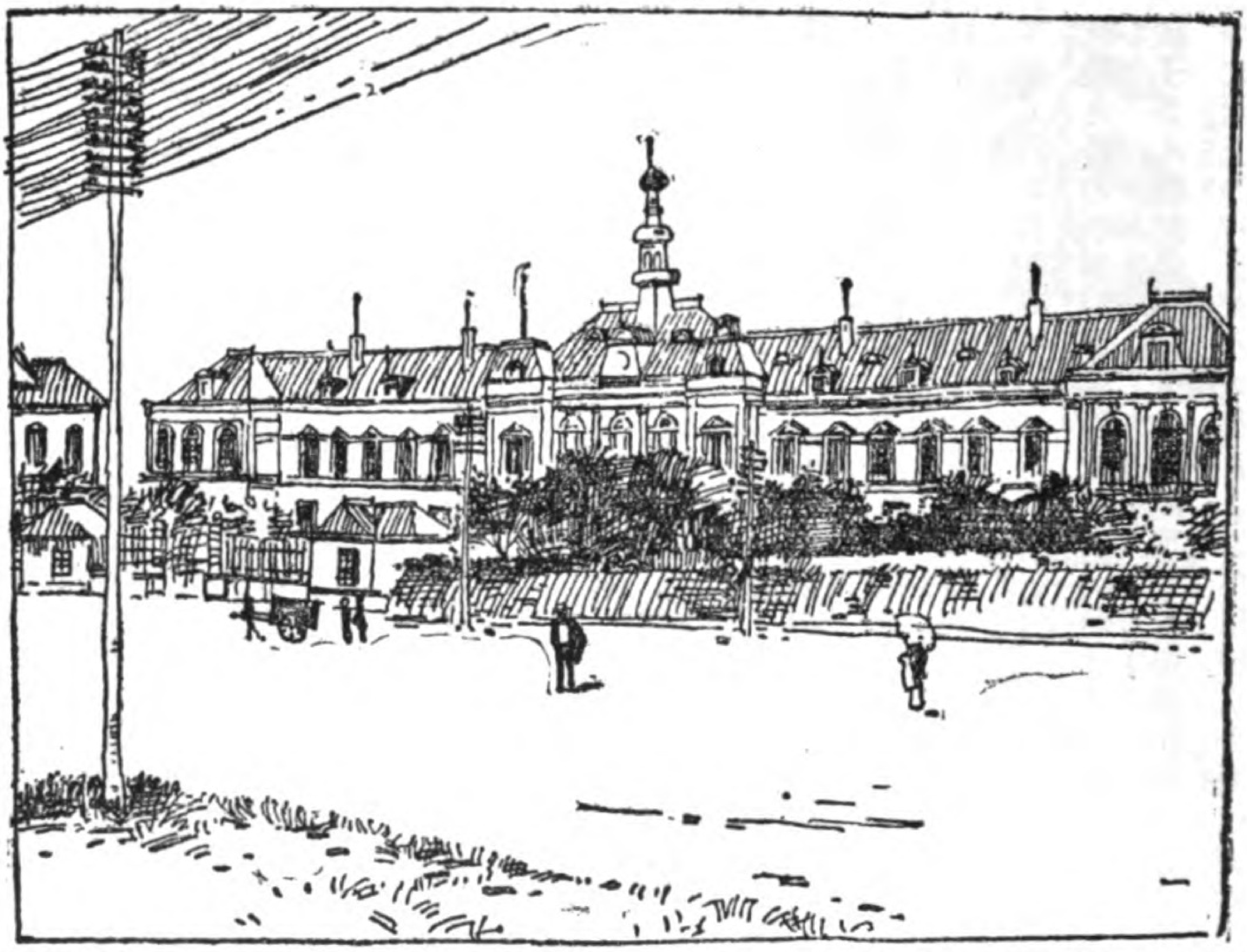
あ丶御なつかしき御祖母樣!!!

△室山先生

女學校の三年の頃までズーッと續けて御世話になつた先生、受持は英語でいつもねぢりたぼのイギリス卷とやらいふ前世紀式の御髪に、薄ねづみのお袴裾長にめしてゐらしつた。

生徒間ではすね瓢簞だの条八など丶綽名してまるきり人望は無かつたけれど、私は何故か、あの艶のない

東京府廳



額の皺をみると敗殘の人の憂愁を刻んだ印刻の樣に思はれて、心ひそかに此の老孃に對して同情の念を禁じ得なかつた。

されぱにや至誠は天にも通ずとか、精神的不具のこの妙にひねくれた先生も私ばかりは上原さん〳〵と特別に扱つて下すつた樣に思ふ。

ある時のこと先生が遂敎室で綾さんと口を辷らしてしまつた時（先生が生徒に對しては姓を呼ぶのが我校のきまり）など、級中の人が顏みあはせてニヤリと氣味惡いゑみを洩らしたと思つたら次の休憩時間には早速と

「英語試驗の延期請願運動委員長は上原綾子さんにお願いたしまあす、そして首尾よく成功の曉には委員長を胴上げして其勞に報ひまあす、報告終りッ」

なんかつてあてつけられたことさへ有つた。

日曜の午後なぞよく御隨行仰せ付かつて小石川の植物園だの品川の妙華園だのへ遊びに行つたもの、そんな時いつも先生は屹度外國の詩を聲高に誦して下すつ

た

惜しいかな先生の御聲はうるほひが無い、艶がない。

ある友が評して

「バイロンもハイネもあんな聲でうたはれちや泣くでせう、まるで店ざらしの干瓢の様だわ、干からびきつて……」

と云つたことさへ有る位だがそれでも私は矢張りよろこんで聞いた。

その先生が或る年の夏休暇中赤痢に罹つて急にあの世の人となられたと知つた時、私の驚きは實に何と云つてよいかわからぬ程であつた。

四百五十人の全生徒中、眞から涙をこぼしたのは恐らく私一人であつたらう。もう一遍ぎりで好い、あの友は干からびてると云つたその御聲が聞いてみたいと夜すがら泣いた、

其後九月の新學期が始つた時クラスメートの一人が

「綾子さん御愁傷ね、先生は乾度常にあこがれてゐらしつた天上のパラダイスをさまよひながら今頃はデイアレストたりし綾さんの上を護つてゐらつしやることでせうよ、私なんぞどうせ呪はれる方の筆頭だけど」

と云つた時、私は更に新しい哀愁をおぼえて、またも一人でさめ〴〵泣いた。

「ね、綾さん皆は私をオールドミスだと信じてる様ですけれどねえ……實は私は餘り早くからフリー、ライフにあこがれて親の側をはなれた爲め、今では却つてこんな寂寞な境遇に陷いつてしまつたんですよ、決して輕卒なマリエヂなんぞするものぢやありません、綾さん？」

といつやら先生の下宿してゐらしつた小間物屋の二階で戸外をとほる豆腐屋の淋しげなラッパをきゝつゝ先生がこんな事を口に出して云はれた秋の夕を思ひ出すと私は何故か悲しくなる。

先生の永に眠ります地は藤村の破戒で名高き山國の某寺。

嗚呼先生、星のさゝやきに綾の想ひを御きゝ取り下さいませ……。



夏の温泉場

河岡潮風

▲きのふ今日の宿の淋しさよ。わが隣の部屋に一家族ある外、二十餘の客室悉く風の吹きぬくにまかせて、樓上樓下沙漠の如き沈默にかへりぬ。五月は熱海の寂れ月、今やその時は到れる也。主人主婦憂色あり吾一人この靜寂を喜ぶ。

初夏やいでゆ閑なる眞晝時

湯槽にひとりこしかたおもふ

浪のおと聞ゆ、流れおつる水の音、細けれども胸に沁む響ならずや。溢るゝ湯の清きもうれし。魂ふらふらぬけ出で、宙にさまよふ心地。靑年より少年、少年より幼年、幼年より赤子の昔に遡る樣に思はる。多感多忙なりし前半生はお環のつくるなく思ひ出づ。更に多岐多事なるべき後半生の回顧はいづこに於てすべきぞ。臨終の病床か。冷たき名を刻みたる墓標の下か。（五月四日）

▲八王子の織物商二十八の男、烏森の妓しん子と馳けおちして、僕の頭上の室に宿る。夫婦と號して、女は二十歳を標榜したれど、僕は最初より怪しと見てとりぬ。果然、警察吏來り二人は引致されて、一夜をそこに明しぬ。これ五日の事、六日には男の兄、追手として來り、一と茶番あり。男は頭痛すとて煎藥して、之を覆へし、僕の枕頭に雨を降らせり。その心根を想へば腹立つるも野暮也。

かけおちの男は病みて女たゞ

男の兄の前に泣くかな

灯火は明るく照りぬ馳けおちの

二人うつむき涙す頬に

三日夫婦は早くも裂かれて、今朝、屠所の羊の如く

歸京の途につきぬ。尤も女は洒然たり。「女と云ふものは悪いもの。どの位、男の出世を妨げるか知れやしない！」隣室の主婦言ふ。借問す卿も女の一人ならずや（七日）

▲兆民居士の一年有半をよむ。死病にとりつかれても四方八方罵倒する元氣をゆかしくおもふ。

「一年中、諸君は短促なりと曰はん。余は極めて悠久なりと曰ふ。若し短と曰はんと欲せば十年も短なり。五十年も短なり。百年も短なり（中略）即ち我儕は暴れ虚無海上一虚舟」

人は死を恐る。而かも一人もこの手より免がれたる者なし。乃ち第二の手段として、夭折と、事業の中途で逝くを恐る。而かも往々此心配の無効ならざる不幸を見る事多し。僕も一時縁喜などかつぎたるも、昨今は何ともなくなりぬ。功成り名とげて死ぬる。もとより善し、中途にして死ぬる。またよし。たゞ行ける處まで行きたい。力のあるだけやつて見たい。それでもう滿足也。「行き暮れて臥すや野末の石の蔭、そこに小さき花を見し哉」とわけのわからぬものを作り「咲くもよかろし、散るのもオツだ。散れば流れる水の上」この二つを「シ」の字を「ヨ」とばかり云ふ、一法科大學生に送つてやりぬ。（十一日）

▲日本人は考へる事の嫌ひ也とはすでに識者の喝破せるところ。故に大發明なく、大哲學なく、大煩悶なく、大頓悟なく、大事業なく、大人物なし。行爲はオッチョコチョイにして、言ふ事は上滑りす、男子は片片たり。女子は淺薄たり。一等國民も絲瓜もあらざる也。

一日深く穿ちて考へよ。然らば眞理の泉に觸れん。一日の何十分かを沈思するは何人にも益あつて害なし。僕は毎朝新聞を閲するとき、思索を積む。大は萬國の政事より、小は市井殺傷の記事まで網羅せるもの新聞に若くはなし。これについて考慮を費すは云ふべからざる趣味あるもの也。（十二日）

▲白狀す。僕は中學の折數字最も不得手にして、答案ごとに苦みき。而して年三回の試驗には腦中を掻き亂さるゝ如く感じたりき。この事十年を經たる今なほ忘られず、寐苦しき夜の夢には。試驗前の煩悶、受驗

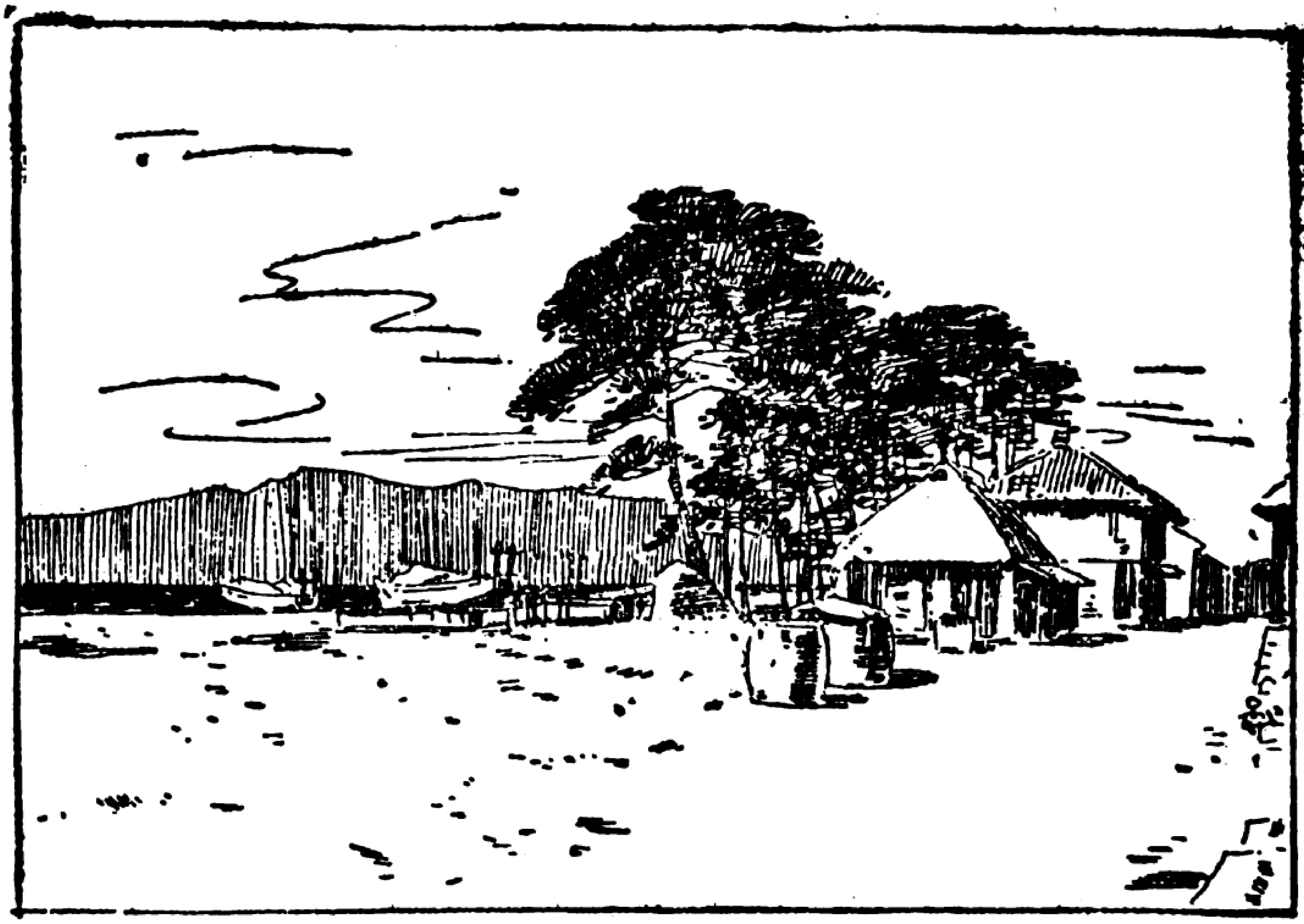
胸の傷む、成績發表上の心痛等をまざまざと見て、醒めてなほ動悸高く打ち、流汗しとゞなるを常とす。

寐ざめのわるき事して富みたる人名を得たる人。時々その爲めに悩まさるゝ夢を見ざるや否や。僞なき告白こそ聞きたけれ(十三日)

▲「小生は對病勝利者の一人として申上候。そはいかなる病氣にても氣丈のものには勝てぬといふ事に御座候、但、自己の事業に一生を向くる時は仲々永久戦と相成可申、世事に關する一切を放棄して養生節制に向け得る大膽こそ勝利の原因かと愚考仕候。聞く處によれば横臥の儀、筆を措かぬと云ふ兄の現況、眉を動かさゞるを得ず候。何卒世上と隔離して、仙人となりすまし……」

これ早稲田大學本部の某先輩の忠言也。同氏は腎臓

江の浦（伊豆中島の名勝）



病を二度迄わづらひ、養生一つにて恢復したるなれば此言も無理はならざらむも僕と病氣が違ふ也。僕の如きは無爲にしてあれば空で臼を挽く如く、臼自身を磨り減らして仕舞ふべし。僕はつねに滔々たる浴客が碁や謡をやる心を心として筆をとれり。内職と娯樂と一致するは、また幸福なりとせずや。忽ちノートにかきつけた三十一文字

頭だに胴離れずば片時も
ものなさずしてあられぬ
吾よ

宛然たる豐臣秀吉調と獨りはゝゑみつゝ(十四日)

▲「客舍伺ひ商」とて溫泉宿へ、名產品を賣りにあるく男の話に、同じ人であり乍ら、小さき宿にある時は申譯ばかりの買物をなし、大きな宿へ轉ずれば、法外の買物をなす。特に御婦人に此種多し云々。居は氣を移すとは正にこれ。（十五日）

▲田舍に迷信の流行する事よ。何とか樣、何天狗樣、何神樣と觸れ込み仰々しく、萬病一切なはらぬはなしと誇號す。而かも忽ちに馬脚をあらはせるもの少なからず、災難よけの何樣とやら信じて家產をフイにせし一老婆は、事もあらうに汽車の衝突に慘死せり。ある天狗樣の御神體を拜するに金五十錢。御經文の功德によつて、御廚子自然に捲き上るといふも、實は下男陰より繩を引くなり。祈禱して將來を豫言し得と云ふ一老人は、一二年前までは桶の箍を入れ替へあるく男なりきと。彼ら神樣をかついで得手勝手の放言をなし、たださへ營養不足の病人に毛物の肉一切を生涯斷つの證文を出さしめ、ミルクも飲ませず、玉子だけを許すとぬかしたりける也。一週間で全癒すと保證したる病人五週間でも快方に向はず、つひに逃げ出したるこそ笑止なれ。大枚の加持料と病人を苦しめし罪はつひに問はれずしてすみぬ。彼はじめ僕の病氣を祈禱せんと申し出でしも一喝してやりたり。思へば痛快なりしよ。（十六日）

▲頗るキタなき話を耳にしたり。河原湯と云ふは下等に近き人々のよく行く湯也。小さき湯槽にゴッタかへして二三十人づゝも詰めかく。鹽類泉なれば垢は底に沈みて泥の樣なり。これを食すれば體毒を癒すとて、爭ふて手にしやくひて飲むとかや。德川時代のいかもの食ひも跣足なるべし。此のテアイ醫者にかゝりてたま〳〵本復すれば、それを云はずして、湯垢の効を喋々する由。（十七日）

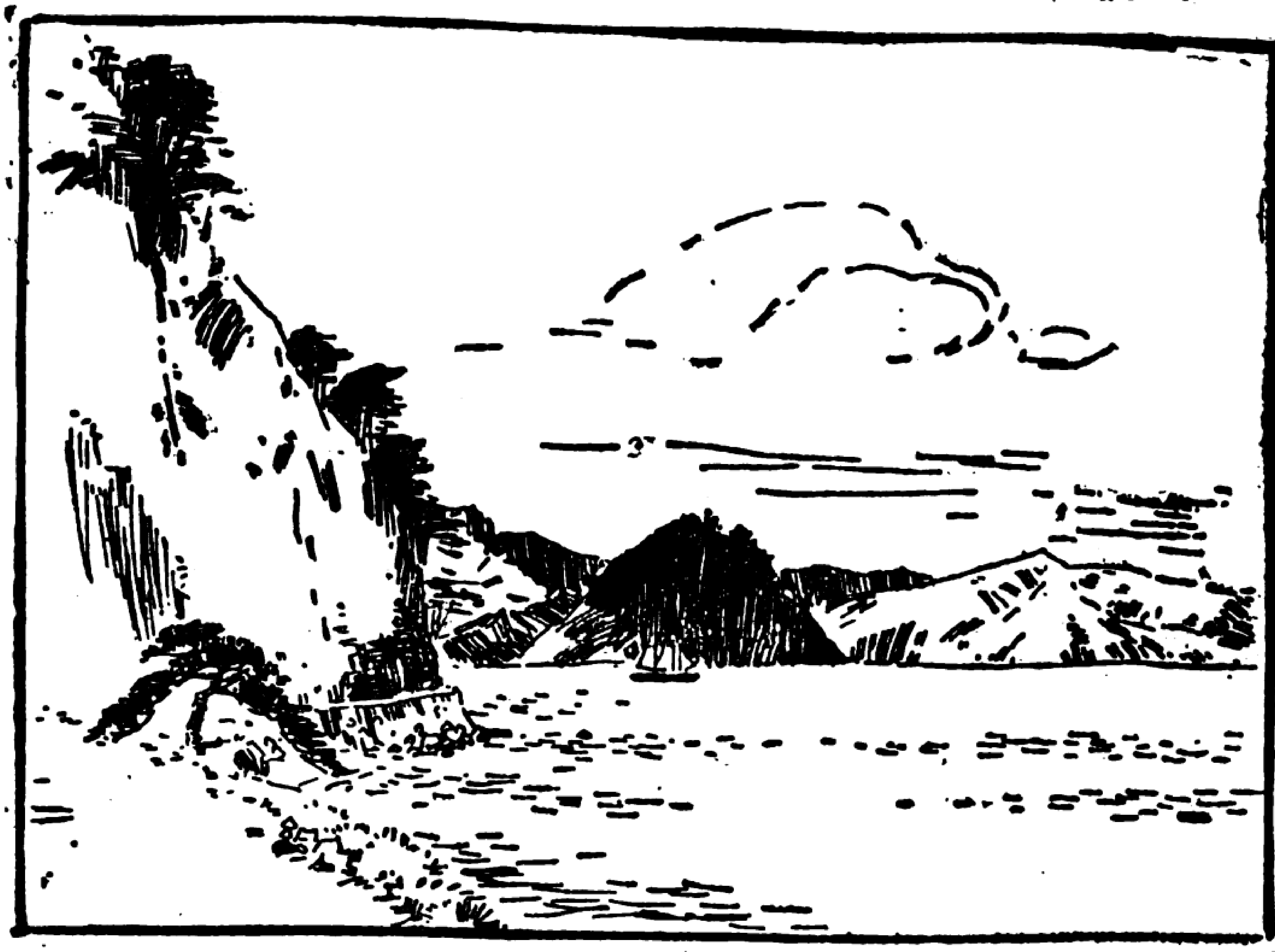
▲徒然に宿帳を見る。四十年一月廿日より始れる也。劈頭第一に早稻田運動部の五人組。

東京市牛込區早稻田、早稻田大學講師　安部　磯雄（四十三年）
同上學生　河野安通志（二十四年）
同上學生　牧田淸之助（二十二年）
同上學生　小林　勝英（二十年）

岡上寄生　安藤豊三郎(二十)

宿帳とてうつかり書けず いつ何時僕如き男ありて調べぬとも限らず、順々に見てゆくに、士農工商、稀に歐米人、清韓人あり、大抵似よつた惡筆なれば、これだけにては、どれが才子やら美人やら、不美人やらわからず。たゞ振つたものを拔き出すより外に法なし。

「福島屋に參るべきところ青木館は非常に勉強致す事道連れに聞候故」と詞書かいたる馬鹿者あり。挽物職三十四歲。而かも花のお江戸は淺草の住人也「東京市本所、高等小學校出身者」と名乘りをあげてかゝりたると好一對。



靜浦より淡島（伊豆中島の名勝）

一寸した珍名は「井上博文」「黒屋己年男」「初見勝子」「笹沃德太郎」「天明佐市」「穴水孫八」「橋巡捨藏」「種瀨すい」「小俣カク」「稲榮」薄墨もて「ぐんすぷるぐそらぷ、ろしやの國、ぺてるぷるぐ。二十二さい。▲▲治明四十二年六月十日」と春蚓秋蛇。のたくりまはせしあり、御自慢なるべけれど、▲▲治明四十二年は閉口頓首、日本人が外國へ行けば矢張この流の恥を晒すならん。

一行十二人の姓名年齡の

末に「備考男七人。女五人。此年齡合計四百六十一歳」と統計とりしは御苦勞と申すべし。

打ち見たるところ、最高齡は七十九歳の女。中には行年何歳と得意らしく認めたるもあり。

多くの中には一高生、加藤某なる人のペンの走り書なか〳〵美しかりき。その他大抵なぐり書きなり。

宿帳は要領を得さへすればそれでよろし。電話の番號やら族籍やら、旅行先まで記入するは無用ならずやある一團は五人の名を書いて、一同石材商二十一歳と記したる如き、眞僞はしらねど寧ろ此風にしたし。物事には深き注意を拂ふべきなり。片々たる宿帳にも數多の教訓を含む。(十八日)

▲僕は切におもふ。主婦及び主婦たらんとする婦人より去るべき三つのY。曰く嫉妬 (Jealousy) 曰く虛榮(Vanity)曰く殘酷(Cruelty)その代りとして採るべき三つのY。曰く品位(dignity) 寛大(Generosity) 貞淑(Chastity)

善良なる主婦には品位あらざるべからず、而かも虛榮に走せず、貞淑にして寛大なるべし。夫に對し妬心滿々、人に對し、苛酷ならぬ樣すべき也。これだけの德が立派に守られたら完全な淑女也。

世の婦人、人妻となるばかりにあらず。生涯獨身で押し通すもの多からん。これらの人々は、すでに男兒に服從を拒絕せるなれば、嫉妬なり、虛榮なり、殘酷なり、勝手氣儘に振舞つて、寧ろ强烈なる特色を發揮すべき也。(十九日)

▲東京者はろく〳〵金のない癖に金放れよしとは商人のみな云ふ處。次には北海道の人なりと。

所謂「客舍伺ひ商」の方から逃げ出すは、田舍者が大關。サーベルさげた連中が橫綱。巡査など泊れば、女中までが、油蟲!と蔭口つく。

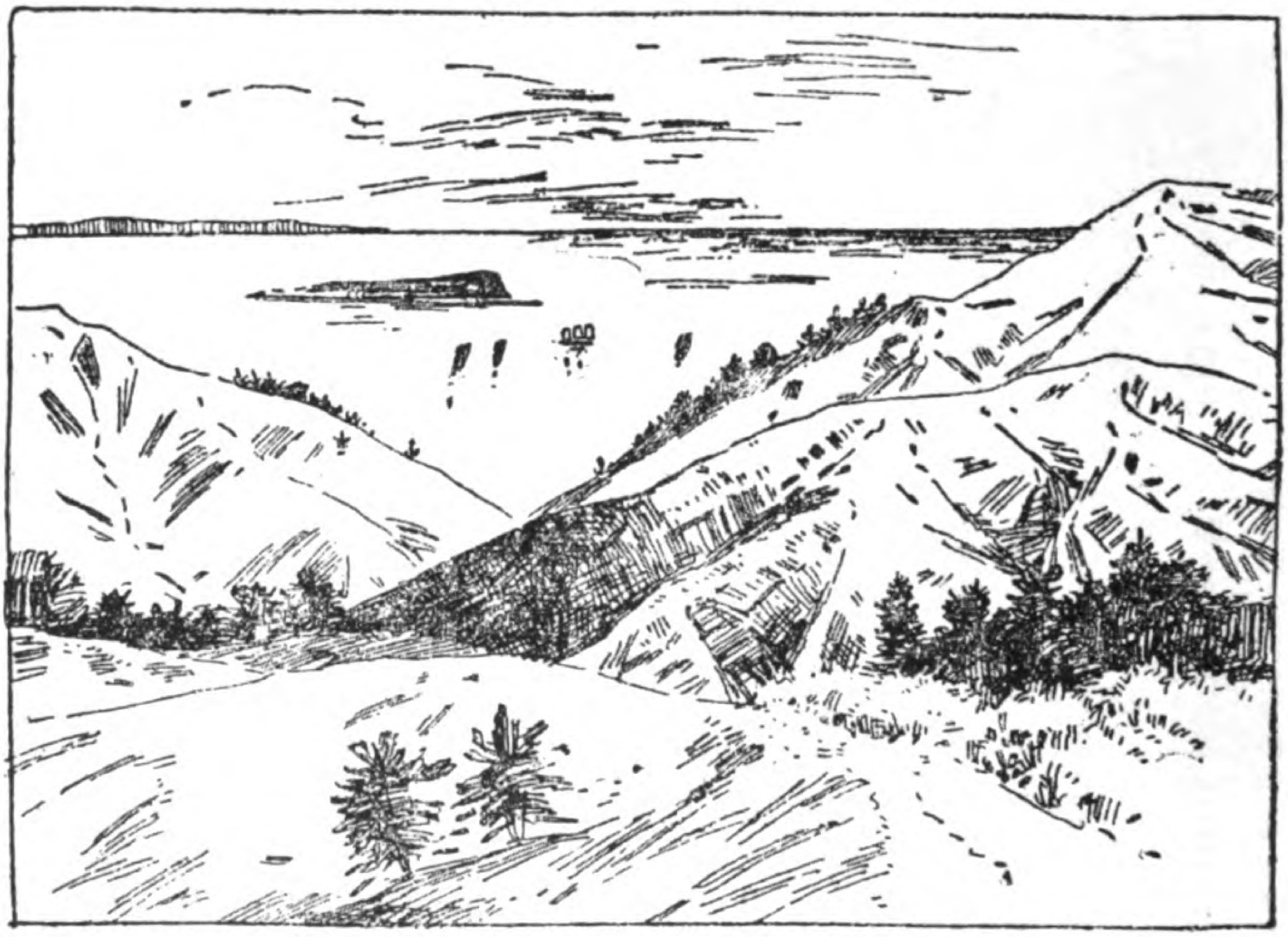
各宿にて一番長く滯在して得意とせる客を彼ら仲間にて「主」と稱す。樋口の辻本さん。富士屋の中村さん靑木の尾崎男爵。さがみやの小牧さん、而して靑木館の僕はこの邊の主と相場がきまつたさう也。(廿日)

▲ささの日僕に歌あり

母上の座にましまさばいたつきのなからましかば幸足るべきに病やゝ恢復したる今日、母上は三十里を遠しとせずして訪ひたまへり。げに親の子をおもふ心の厚さ、僅か二十餘日にして面やつれたまひけるは誰が爲。消えも入りたかりし。
病めるとき悲しめるとき母君のめぐみの更に深きをおもふ
されど京にありて歩めざりし吾の歩むを見ては、母上は幾分の滿足をおぼえ給ひし樣なり。すべての憂を忘れて別れ居し二十日を語りあひけり。

夜に入りて旅館の庭に飴屋が歌ふてたゝく撥音冴えて、田舍なまりの節をかしく、照手姫の事蹟をはやすに、哀愁の情むら／＼湧きて、宿より宿へ漂流してあるく、彼等の生活を想ひ、すや／＼寢入りたまへる母上の顏をうちまもりつゝ、何となく

熱海峠より見たる初島



吾影も淋しかりき(廿二日)

▲田舍の子供はヌーボー式に出來てゐれど、都會——特に東京の子供は、早熟にて智惠のつき方が早やすぎる樣也。五つ六つより十二三までは神童と云ひたき位の勢にて發展するも二十歳過ぎては美ん事凡人となるもの比々皆な然り。
隣の部屋の六つになる下谷の男の子、頗る悧巧。かのヌーボー式少年の知らざる多くの事を心得て僕を驚かす。萬龍のエハガキが來るや、眼さとく見つけて、『オイお前ゲイシャ好きかへ、俺も好きだよ』には冷

汗ぺつたり、書ものなどしてゐる折は、呼んでも〳〵も返事せざるを癖にさへ、

「河岡さんても返事がないよ。お嫁さんでも取つたのか。あんまりツン〳〵しなさんな。」

と凹ます。油斷もすきもあつたものにあらず、或朝の湯あがりに眞ツ裸にて部屋へ躍り込みたれば萬年筆のスポイトにて出べそへ水をかけてやりけり。

「何だい此野郎、三越で盗んできたんだらう！

と萬事が此調子、巡査の通る頃を見計かつて欄干より飛瀑十丈、大呼して曰く

「長い小便、五圓の罰金！」

僕はその聲をきくごとに、姿を見るごとに、二十年後を想ふて嘆息せずんばあらず。都會の母たり姉たるもの、飽くまでも子弟をマセさせぬ樣、ノンビリする樣に心がくべし。泰西の識者曰はずや。

「偉人は多く二十歳より二十五歳の間に完全なる智的發達を遂ぐ」と。いゝ氣になつて子供に智恵をつめ込む親達みたび省みるべき也。

▲一言一行、ともに賢愚をあらはすとかや。近來浴後の渇を醫せんとて頻りに林檎を剝かしむるに女中三人みなその爲す處異るも一興、甲女はまだ山出しのホヤホヤなれば、點々として赤き皮の殘れるを、小鉢にオツころがして持ち來る。實に論外也。乙女は心を除き四分して水に浮かせて運び來る。やゝ體を得たり。然れども丙女が、八裂されて水に漂ふ小片に、小楊枝刺して出だすには一歩をゆづる。同じ一個の林檎なるに中者はそれにも足らぬ樣に思はせ、後者は二個にあらざるなきやを疑はしむ。而して細裂されたれば食ひ缺く世話もなし、些々たる此内にも器用不器用はわかる也。茶坊主三成を見込みたる秀吉は流石にエラかりき。

(廿一日)

▲海原さしのぼる、朱色の丸き月。然り今宵正しく十五夜。窓は東をうけて山と海とを一眸に收む。電燈消して縁に端居す。黒く描けるが如き松、正面にあり。俗界お宮の松。月は今そのうへをさまよへり。

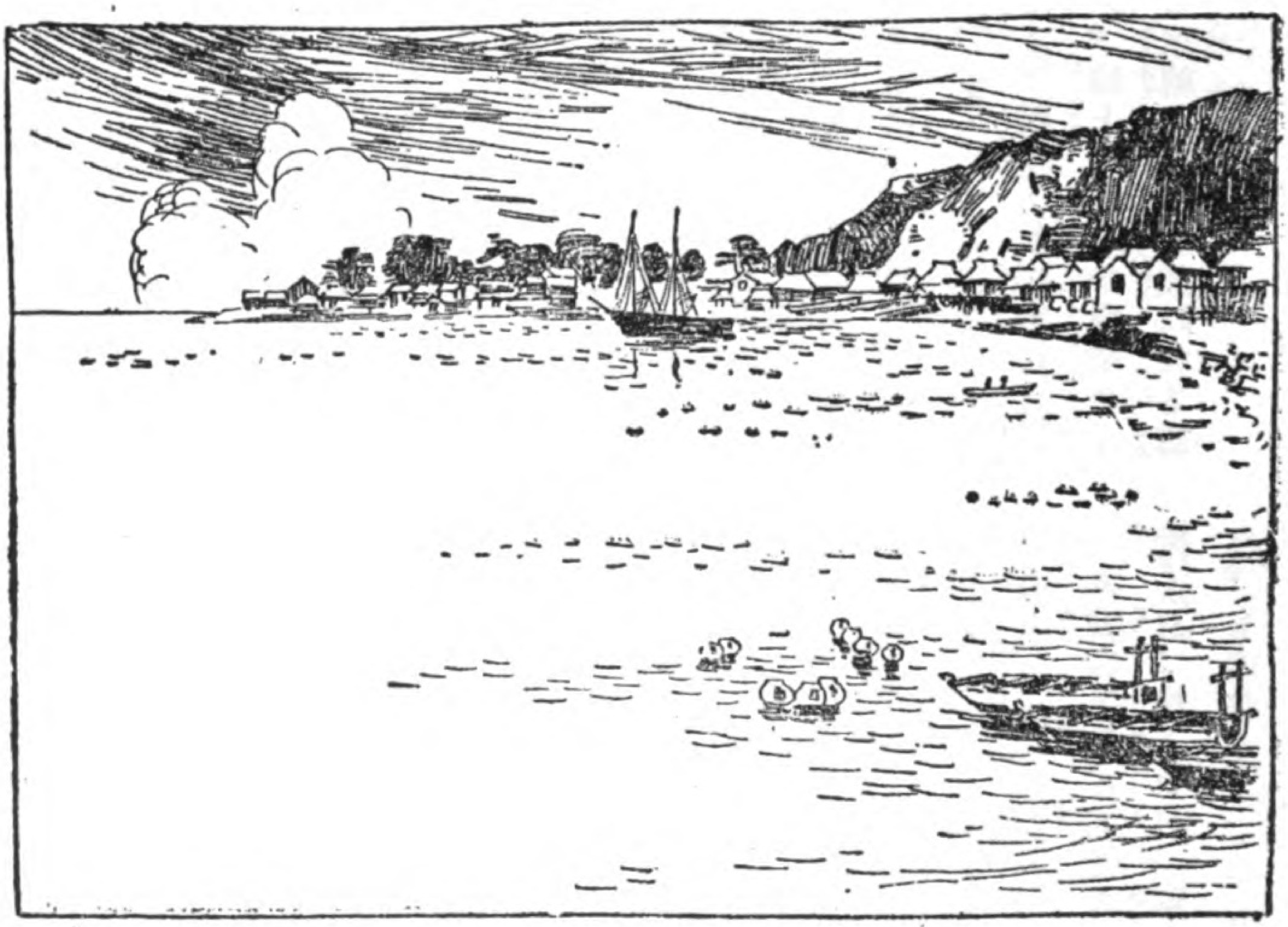
磨きたる銅板の色、凄まじけれど、未だ光なくて物に影なし。孤に金波も湧かず。たゞ蚯蚓しめやかに鳴くのみ。人など待つにふさはしき夕

ならずや。

山の海に迫りて聳くる處断崖百仭魚見岬と云ふ。故樗牛が、女詩人サッポーのリウカデアの險崖を想起したる處なり。その人去りて幾星霜、巖頭の一軒屋の灯火昔ながら新たに濤の響その時のまゝなり。また哀れなそとせず。

一つ〳〵町の家の灯は數を增しゆく。限なくランプの光を浴びたる一つ家の障子はその下のまどひも思ひやられてゆかし。こて〳〵と低き家かたまりて黑きは墓場の樣にも考へなさろ。自然の前に人の作れるものの醜くさよ。

月やう〳〵高うなり、光さやかになりぬ。海に金を鏤め、沖の初島は影の如く淡し。烏賊つる船のたく篝の四五點水平線に星の如くきらめけり。この火を望み見て、妻はわが背子いかにと思ふらむと詩人は想像すれど



網代

（伊豆半島の名勝）

四の漁村は子の多き處。貧苦にやつれし家婦は、執拗なる兒童を口ぎたなく罵りつゝ、何か食物でも横がじりにしつゝあるが眞に近からむ也。

ふと尺八の音、妙に聞ゆ。かなたの畑中に風流男のすさび、何の恨みか綿々として、斷えざる哀音、戀人を愁殺せん。月の顏のみうちまもれば、いつか吾に近づきし樣におぼえぬ。吾が心、塵界を離れて宙にあげられぬ。

歌もなくて一時間兀座せり。

樓上には、薩摩琵琶の崩れの撥音嘈々切々。これもたかし。あゝ耳背音樂のたしなみなき身は啞となりて眼ひとりあくまで清光を吸ひぬ。

（二十四日）

▲十六夜の月は血紅色に横雲を出でぬ。浪音ことに高き夜なり。昇るに從つて白く、果ては水の樣に澄みぬ。

例によりて電燈消して、寝そべつてあれば、窓をすべりて冷光上半身をひたす。物語めきたる風情。

しら／＼と月のさしこむ窓にねて

うつしみなどをまさぐりて見る(二十五日)

▲立待月は遥うして雲を離れたり。今宵は蒼き光のすさまじく海を射て、魚見崎に傾き、月にそむける萬物みな眞黒なり。月はかはれど十七日の月、曇りもせでお宮の松に風のおとなひおだやかなり。海より出でゝ山に入る月の旅路のあはれに興ある事よ。静かなりせば一夜を濱に吟じあかすとも名残つきまじ(二十六日)

▲夜、九時ごろ、御用邸前の柵にもたれて、彗星見ながら、心。天上を慕ふ。禁園の木立暗き間より、何の花の薫りぞほのかに來る。仰げば快よき其尾哉、光芒を曳いて數萬哩。群星宿燦たり爛たる間を貫いて天の一角を突く。あゝ測るべからざる宇宙の大よ。森厳なる謎よ。

あゝ偉大なる天界の漂浪者よ。虚空より虚空に天翔けりて砲丸よりも速かに飛ぶ。地上の名利や歡樂や小さくはかなきかな。あらゆる束縛と規則を放れたる彗星を羨みてありぬ。電、しきりに閃めいて、風冷やかなり。二十分を立ちつくせり。

いつまであるとも足は地を放れず、ハレー彗星とても一定の軌道を運行するを想へば、漂浪の生活なるものは世になきなり。僕は矢張僕の事務に忠實ならざる可らず。かく考へなほして部室に歸りぬ。

青年は空想の子、大人老人に到りて理性に壓せらると先輩すでに教ふ。僕の成人しつゝある也。白髪に近づきつゝある也。(二十六日)

▲「虚心平氣になれぬ人間は、いかに才學ありともまだ半人前のみ。大事にあたりて腰の砕ける事受合也」

「女？女に價値ありや。」反問す。男？男に價値ありや否宇宙萬物果して眞に價値あるものありや。咄」

「病みて健康の時の心を失はぬ者は敢て非凡人と云はざるも、凡人の群を抜けるものと許すべし」(三十日)

▲波おと聞く身となりてはや五旬、今日五月の暦を掲く日。快よき日。風薫る日。障子はづして、書を讀み。ものかく。

病人に對する同情

白百合

○病者に對する同情は病者ならではわかるまじ如何に御苦しからう御可愛想にと思ひ遣つても程度あり、大病にかゝりし事なき人に病む人の眞の涙は解されじ。
○人のなさけの嬉しき中に母校の先生より手紙と共に封じ込めて優しき野菊を畵けるカードに英字の聖句何れも先生自身の御筆、枕元近く絶えず置きて言葉の意味に力を得、師の有難き心に泣く。
○腹立たしき事なさけなき事、悲しき事、凡ての情を抑へて瞑目沈思涙と共に迫り來る思ひを拂ふの修錬は病者に賜はる神の恩惠。
○夜九時頃、ヨウダイイシラセヨ、と國よりの來電、良人は留守なり、かく返事せよと命ずるも、ものうく其まゝに打すぎて翌朝七時頃再度、ヨウダイシラセヨ、ヘンマツ、と。昨夜父母は一睡もせず明かし給ひ今朝は待堪へで再び尋ね給ひしか、子は親の思ひの半も思はじとか、ヘンマツの四字に千々の思ひのなさけこもれり。
○「御身の代りに我が命をとり給へと祈り居候」云々と母の手紙我は子の爲に生きんとあせり、母は我が爲に死を願ふ、ア、親なるかな〱。
○いつも我まゝを言ふ時「大きくなれば自分一人で育つた樣に思つて」と母はかこてり、今にこの子が成長の後同じ言葉を我れ思ふの時親不孝の罪は消るにや。
○鉛筆と雜記帳は病中無二の友、朝目がさめるや、鉛筆は？と探す。時々其の爲に體溫上れば、讀書の出來ない人にも困るが出來ても困ると看護婦の言葉、よしや四五分の熱は上りても筆に病を忘れ得るは慥かに幸福ぞと思ふ、是なくば病中の苦悶を何にかやらん。
○友あり、嫁して後良人の君と口爭ひしては乾度學生の我れに訴へに來給ふ、その度に「悔しいわね元は他人だのに」とこの友より三人目の子供生るとの通知あり。
○熱高く夢幻の境に今は世になき白髯の祖父莞爾とし

て立てり、唇動けども言葉は聞えず、只左右の手に上下を指す。天か地かの御心にや、アヽ主よ〳〵早く來ませ、備へはなれりとの信仰我にありや。もし御旨ならば生かしめ給へと追ひ縋る執着心の淺間しさよ、死は最後にあらず微笑みて死に度し。

○あせらじ、悶へじ、なき命ならば、如何に力をつくせばとて甲斐なきものぞと立派に觀念つけし身も傍へに眠る無心の赤兒の顏を見ては夜具打被りて咽ぶ。

○我れ十二三の頃日蓮樣が大好きにて靑玉の珠數爪繰りては高祖日蓮大菩薩等と唱へたり、病氣にて熱高き時は御經をきゝて眠りぬ、今もあの樣に、しは嗄れた量の深い一種特有の坊さんの聲で御經をきゝて眠り度しと思ふ。

○良人會社より女學世界を持ち返りて何か讀んで上樣との事、晶子樣の雜記帳を御願ひ申す。教育や文藝に關する御說がハイカラでなく氣障でなく落着いてきびきびして聞いてゝ胸がすーつと、すく樣、次ぎに內藤樣のを讀んで頂く、之は又、柏葉とやら彌生が岡とやら靑春の夢に憧れきつて、浮いた〳〵の大浮かれ、從五位樣とか箱根とか、若い娘の血の湧く御筆、餘りに自由にまわりすぎて、奧もなければ、餘韻もなし。潮風樣の御病中の日誌身につまされて染々御同情の思ひに堪へず。

○(我)　內藤樣はかるた狂と見えていつも、かるたかるたと御騷ぎなさる、あんな浮つ調子の人大嫌ひ。

○(良人)　御前だつて三度の御飯より好ぢやないか。

と同じ好きでも萩香樣はかるたを持て、若い男と騷ぐのが御好きらしい私はかるたがすきだから、一人でとつても面白い、遊び事でも何でもその中に眞面目がなけれや駄目だと思ふ、虞美人草の小野さんは學問がよく出來て沈着な人の樣だけど眞面目が足りなかつた宗近は快活な人だけど。眞面目だつた。

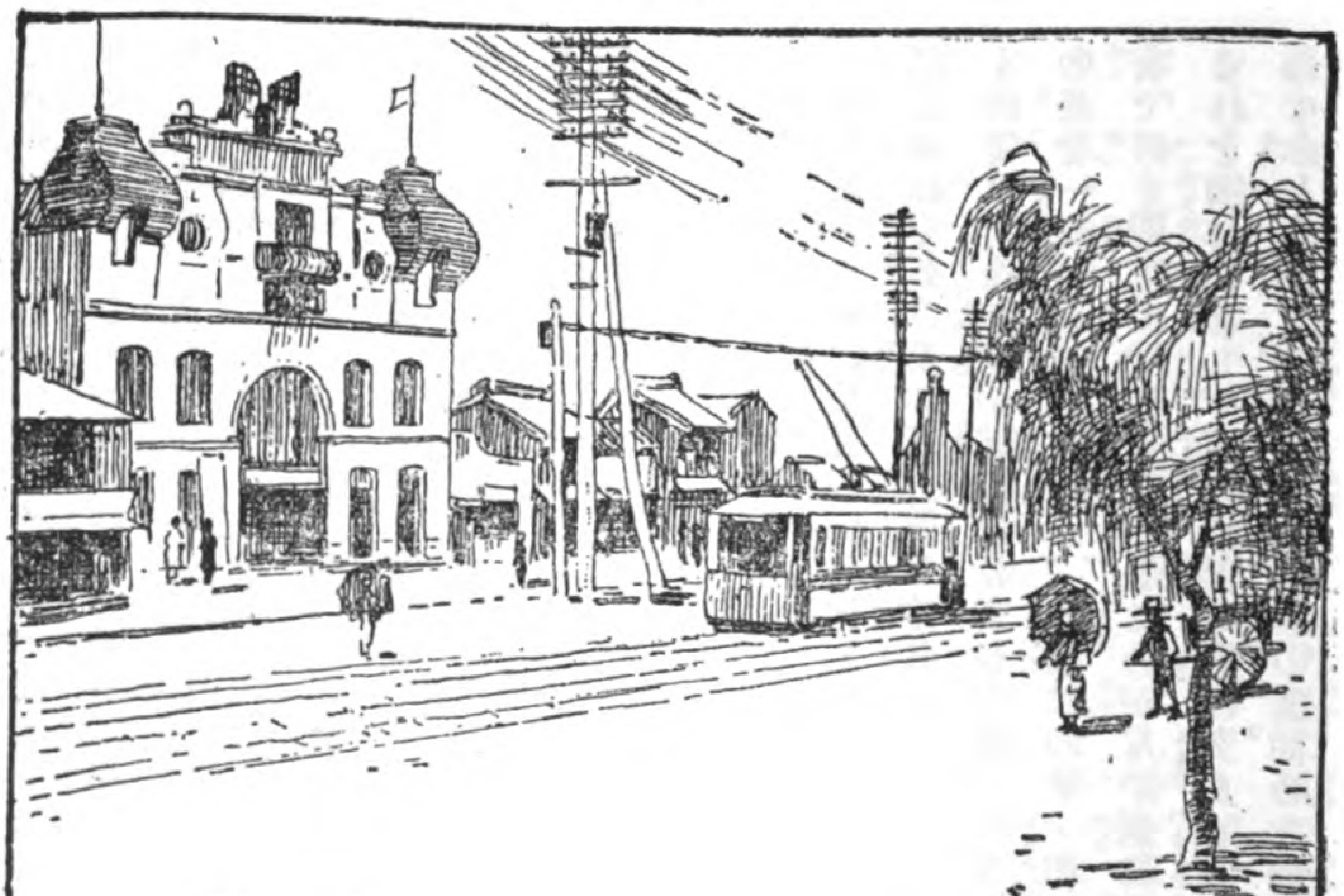
○今の小說を評するのに人生にふれてるとかふれてないとか、我はその樣にむづかしき事はしらねど、讀んで眞面目なると不眞面目なるとあり、夏目樣のはどの樣に人を笑はせても、終始一貫する處眞面目なり。

○我常に、青麥の穗と菜種の花を見度い。」と云ふ、或朝看護婦何處よりか菜種、麥、大根、豆の花をとり來りてかけ籠にさす、けふは一しほ可憐にも美くしく見ゆ、とりつくろはぬ處に野趣現はれて風情多し。

○久しぶりに新紙手にすれば、白馬會、太平洋畫會、の畫の批評あり、音樂會の記事あり、世は賑やかに面白き事よ。衣食の贅は願はねども身健やかにして、一生懸命に働き春秋二度の展覽會に畫堂の人となる事を得ば足る、と思へども優れたる作を見れば、この繪を畫ひて、洋風の應接室にでもかけて見渡しと、欲には限りなきものぞ、然れど、たうてい及ばぬ事を思つて見るは興深し。

▲買ひ物

或細君が食麵麭を買ひに行つた處が店の者の出すのは値段より怖ろしく少ないので、「是は大變に小さいぢやありませんか、」「否え貴女御持ちになるに重からうと存じまして、」細君は聞いて「ぢや玆へ代を勘定が御面倒でせうから少しにして置きます、」



上野廣小路

夏向の惣菜料理

桑原東浪

○鰯料理

今月は時候も暑く、何でも淡泊として、濃厚からぬものを好む様になりますから、其邊を考へて調理いたすとすると、日常のお惣菜向きなどは、チヨツト一工夫致さねばならぬ事となります。先づ手早いところは鰯などを種に使ひましたのがよろしからうと思ひます

その配合工合は、

向付　沖膾　　お椀　つみ入に冬瓜

お皿　フライに茄の鴫の子燒　　香の物

位にいたし、それに當座漬の香物でも排ひますと、見恰構の好いお膳が出來ます。

○沖膾

これは先づ鰯の頭を取りて開き、骨を拔いて細く剝み、平皿に移し、鹽をふりかけ、酢に浸しておく。別に大根擦をこしらへて固く搾り、味噌を磨つて裏漉にかけて、それを搾つた大根擦に混せ、砂糖を少し入れ好く攪拌し、先に酢漬にしてある鰯の酢を切つて、又それに混合せ、尚ほ芽生姜を細切にして、之に加へますので、出來上つたら、紫蘇の實を洗ひ、蟲などのゐない様に鹽で揉んでもう一度洗ひ、之を膾の上に撒掛る。割合は鰯二十尾に味噌百目、酢一合、砂糖十五匁位の割で、その他は見計でよろしいので、これで四五人前には充分です。

○つみ入に冬瓜

これも前と同樣に先づ鰯を開いて、皮を剝き、水で二三回ほど好く洗つて、笊の中に並べて水を切つておくのです。全然水が切れて仕舞つたら、布巾で尚ほ魚の身を一々押して水を搾り、爼板にのせ、出刃庖刀の脊で好く叩いて、筋立つたところがない様になつたらこれを擂鉢に移し、鰯三十尾に鹽十匁の割で、鹽を入れて念を入れて磨り、尚ほ味淋の煑詰めたのを二勺か

又は砂糖を十匁ばかりと、片栗粉五匁を入れて好く磨交せ、これに鶏卵の白味ばかり二つほど入れ、また磨交せて仕舞ふのです。この外に佛掌薯を茶碗に一杯ほど入れてもよろしいので、味が軽く口當りは却つてよろしいものです。

　これでつみ入は出來上つたので、これを椀の蓋を水で濕して、半月なり、圓形なりに、掬つて、鍋に少し鹽と二番煮汁で仕度してある汁で湯煮るのです。そこで別に冬瓜の皮を剝き、賽の目なり、そぎ身になり刻んで、好く茹でゝから、煮汁と鹽に醤油少しを加へて下煮をしておくのです。これでつみ入と冬瓜が出來ましたから、葛は猪口一杯に煮汁一合、醤油少量を注して解き、火にかけて攪拌し、葛が變つたら、以上の二品を椀に入れて、その上にかけて出す。

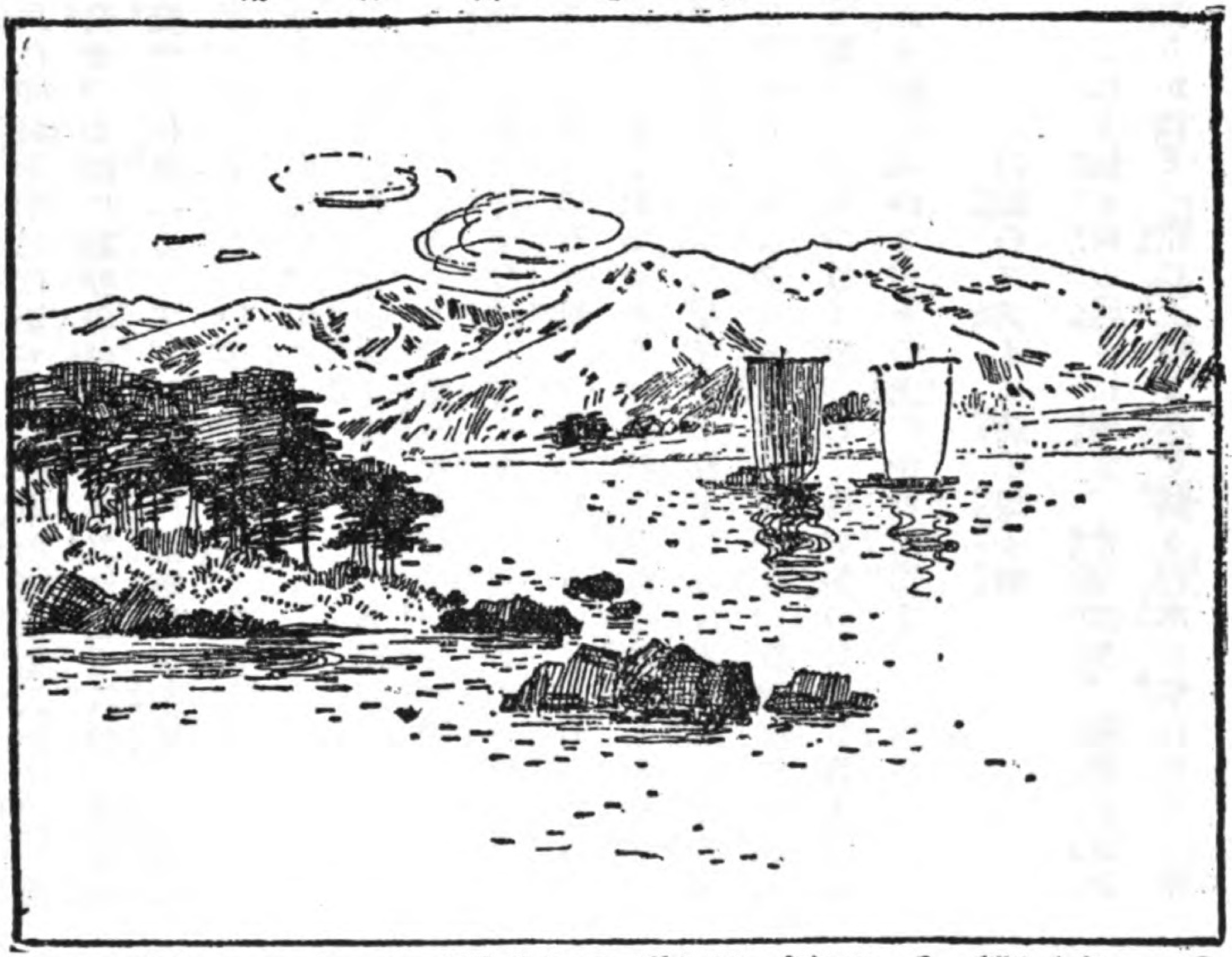
○鰯のフライに茄の亀子焼

　これも鰯を前の通りに開き、骨を抜き、極薄く鹽を振りかけて、笊に上げて水を切り、水が切れたら、布巾で一々押して水氣を拭ひとり、別に皿に並べて仕度をして置きます。それから米利堅粉でも、うどん粉でも、一旦水嚢で篩ひ、解加減はうどん粉を茶碗に八杯水三杯、鶏卵一個の割合で、卵を水で解いた中に、うどん粉を入れザット攪拌すのです。總て魚類でも、肉類でも揚げるにはうどん粉の解加減が大切なので、ザット攪拌した丈でよろしいのです。若し之を攪拌し過ぎますと、衣が粘りて足を引いて、味が落ちるものです。

　仕度が出來たら、油は椿でも、榧でも、オレフでも胡麻油でも關ひません揚げるには火加減に好く注意しまして、油に泡が立つて、煙が上つて來る樣であつたら、直樣材料に衣をつけて、鍋の片端から段々に入れて行きますので、材料を油鍋に入れたら、七輪の口を閉めておくことを忘れてはなりません。

　悉皆入れて仕舞つたら、七輪の口を開けて、火の氣を強くし、二三度箸でかへして、火が通つた樣子なら之を古新聞紙などの上に載せて、油を切つて仕舞ふの

富士山麓川口湖



です。

この鰯のフライに添へる茄子の鍋の子燒といふのは大振の茄子を竪に蔕ごと割つて、まづ庖刀で皮と身を離し、皮に瑕のつかぬ樣に氣を附けて切り廻すので、それから身の方の面に網目をつける。網目のついた方に油を塗り、金網にふせて強い火で燒き、狐色位に色がついたら、轉倒へして、皮の方を下にして燒きながら網目をつけた方へ、鰹の煮汁一合、醬油三勺、味淋三勺位の割合にして煮立て、更に鰹節をかき加へて煮詰めた汁を、二三度五分間おき位に續け樣にかけ尙ほ煮立つまでには六七度もかけて味をつけるのです杉箸が容易く通る樣になつたら、網からおろして、フライに添へてつける、二片位で澤山でチヨツト見榮のするものです。

總てフライとか天麩羅とか、精進揚に至せ、ソースをかけて仕舞へば何の事はない樣なものゝ、揚物類は何れでもお汁で滋味く食べさせるものですから、フライとは申せ、日本風のお料理の節は、天麩羅のお汁を

拵へて添へた方がよろしい様です。これは煮汁の加減が工合もので、折角の味を損ねて仕舞ひます、先づ松魚節の皮や白身や、腹の方を除き、正身のところばかりをかいて、煮汁を引き、漉してから煮汁二杯に味淋一杯上等醤油一杯の割にて煮立てたのに、擦大根を添へて侑めた方がよろしい様です。味は可成的薄いのが滋味く食べられます。

△茄子づくし十二種

一、松葉茄子

茄子の皮を剝き、四つ割にして、薄く身をすき、これを竪に細く線切にする。それから水を放しておいてアクを抜き、湯煮てから水に入れて、笊に上げておく別に鍋に煮汁と鹽、醤油を注した中に、前の湯煮た茄子を入れて味をつける。それに丼か何か少し深いものの中に鷄卵を割つて好く攪拌せ、煮汁を少し入れ延し前の茄子の上にかけて煮る。煮上つたら金杓子で掬つて盛るのです。

二、茄子田楽

これは茄子の皮をむいてから、木口切にし、鍋に油を引いて茄子をいため、少し堅い様であつたら、煮汁を少し入れて軟くなるまで下煮をしておくのです。それから別に赤味噌を好く擂つて砂糖を入れ、裏漉にかけ、味噌百目に砂糖五十目、味淋五勺の割で鍋に入れ火にかけて暫時煉るのです。味噌が出來たら、前の油でいためた茄子を入れて、火にかけた儘混合せるのです。薬味を擦し柚子をかけるのがよろしいのです。

三、茄子の南蠻煮

これは九州邊でよく拵へますお料理で、茄子の時分になりますと、膳部にキツト猪口か何かについてをりますが、別に大した事もないので。小振の茄子の頭尾を切つて、先づ油でいため、青唐がらしの極小さいのと、茄子二十につき煮汁二合、酒一合、味淋一合、醤油五勺の割合で、汁の煮詰つて無くなるまで煮る。赤

い大唐がらしならば四本位、青蕃椒なら二三十本位でよろしいので、煑上つたらば、花松魚節をかけて出すのです。

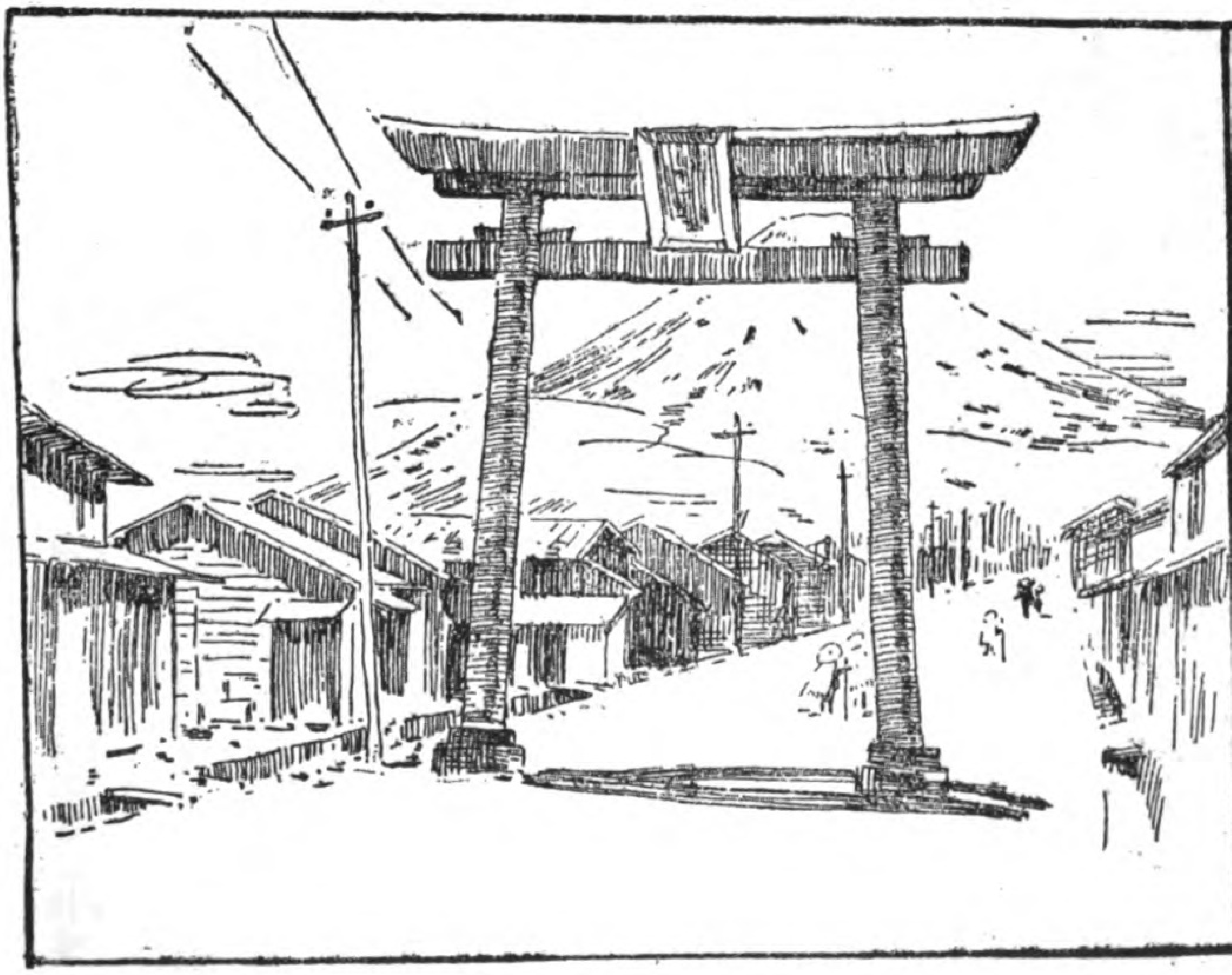
四、茄子のさしみ

茄子の頭尾を切り、湯煑、二枚の板の間に挟み、壓石をして置き、水が切れて仕舞つたらお刺身の樣に作りますのです。これは辛子味噌を添へて出すもので、味噌百目につき、砂糖三十五匁、酢八勺許入れて擂り、裏漉にかけてから、辛子を解いて混合せてこしらへるのです。

五、胡麻汁

皮を剝いた茄子を木口切にし、湯煮ゝから薄味噌で下煮をしておき、別に白味噌二百目に黒胡麻一合位の割合で、先づ胡麻を炒り、擂鉢で擂り、煮汁でゆるくして漉し、前の茄子にかけて侑めるのです。

甲州吉田の富士



六、茄の揚出し

皮をむき、斜に薄く切り、油で揚げるので、それをお飯皿か小鉢に取り、大根おろしを軽く搾つて添へる汁は鰹魚の煮汁二杯、味淋又は酒一杯、醤油一杯の割にて拵へたのを、火にかけて煮立て、別の小皿に注いでつけるのです。

七、茄子の山かけ

茄子の皮をむき、竪に四ッ割にしてこれを、又四つ位に横切にする、結局賽の目になる様に刻むので、水に浸してアクを抜き、湯煮てから笊に上げて水を切つておくのです。それから茄子を十としたら、煮汁二合味淋一合、醤油六勺位の割で下煮をして味をつけておく。別に佛掌薯の皮をむいて、擦子で擦し、好く摺つてから、先づ薯七十目と見たら、鰹節の煮汁五勺、味淋の煮汁一勺、醤油二勺の割で、摺り薯の中に入れて、好く摺り混合て、以前の茄子をお皿に盛つて、その上に薯をかけて出すので、この山かけは魚の身でも何にでも應用いたしますと、なか〳〵結構なもので、鮪の身を賽の目に切り味淋醤油に漬けておいて、この山かけをしたのを葱まより轉じて、トロマと洒落て名付けてゐます位、味は極めてお滋味ものです。これには蕨を添へます。

山かけの扱方は、薯をとるときに、箸を兩手に一本づゝ持ち、その先で左右から薯を巻き取ると扱ひ好いものです。

八、揚なすの味噌汁

茄子の皮をむいて、木口切にし、胡麻の油で好くいため、鍋に湯を沸しておいて、その中に入れて、油を拔いて仕舞ふ。それに別の鍋に味噌汁を立てゝおいてこの汁の煮立てから、茄子を入れて又煮立てるのですこの薬味には辛子をそへます。

九、焼茄子

これは誰方もお宅で、只今頃は好くなさる事ですが、お客様へでもお出しになるのなら、いきなり大茄子を燠灰に入れて焼いては、恰構が悪く、アクが出てゐませんから、味を落します。そこで丁寧な仕方は、茄子の皮をむかずに、頭尾を切り、竪に茄子の中心に串をさし、濡紙で包んで、文火の中に埋め、彼是十五分間ばかり經つたら、出して紙ぐるみに水に入れて、紙を取つて好く洗ひ、茄子を竪に割つて、皮をむき、尚ほ幾個にも竪に裂くのです。これに擦大根を添へて、皿に盛合せますので、掛るお汁は、別の小皿に醤油一杯味淋半杯、煮汁半杯の割で拵へたのを添へておくのです。かうすると同じ燒茄子でも、見恰構もよし、味も格別です。

十、奈良漬茄子の隔夜

これは奈良漬の茄子を、木口から薄く刻んで、水に放しておいて、よく搾つてから、花鰹魚をかければよいのです。尚ほ生姜を細に刻んで混せれば結構です。

十一、茄子の龜の子燒

まへのフライの添物にしてあるから略します。

十二、茄子の鴫燒

これも前の茄子の揚出しに似てゐます。たゞ油をバタを使ひますと味がよろしいやうです。その外は別に變りはありません。

其外まだいろ〳〵ある樣ですが、先づお惣菜なり、お客膳に付けられますのは、先づこんなもので、これを應用したら、又いろ〳〵お滋味ものが出來るだらうと思ひます。



お盆の精進料理

山家の賤女

高山の麓、鷲の羽音のしげき信濃の片山里の賤の女の手すさみ、元より錦衣たまふ都の方のお口には叶ひませぬなれど、只何となく鄙びたところがお笑草ともなれかしとて、聊かしるしまゐらするはお盆の精進料理、材料も器も皆くすみたるものばかりとおぼしめせ十三日精靈様御迎ひの晩よりはじめる。

一　素麺　すまし汁　薬味

二　向皿　あげまんぢう　茄子亀甲焼　黒芋の茶巾絞り

三　酢の物　酢蓮芋茎　阿茶羅冬瓜　紅生姜

(一)素麺はゆで方が悪いとあぶら臭く、過ぎると味を損じますからゆで方がかんじんです。まづ湯のたぎりし時素麺を投じ、ブッと沸立ちし時鹽ひと摘みを振り、火箸にてかき回しゆでるなり。鹽を入るゝはゆで過しても味を損せざる口傳、火箸を用ゆるは油氣を拔く妙法。ゆで加減を見るには一筋はさみて壁に打つけ見るに、ヒッツイて落ちねば湯だりしものゆゑ冷水に浸して二三回手を入れずして晒らして後、暫く水につけ置くべし。もし干饂飩ならば鍋のまゝ蓋して暫く蒸しおけばフックリ湯だりて味はひよろし。

さて汁は味醂醤油を煮出して冷せしものに、紫蘇の葉、茗荷など纎にうちおろし大根添へて薬味とす、尤も時節柄煮麺にせよとの御注文ならば茄子の纎きり茗荷竹など入れて煮る。

(二)向皿　精進を主として揚物にも玉子は容れず、めりけん粉に少しばかりの米粉を交せ、鹽を加へて衣としたるものにて饅頭を揚げ、殘りの衣で、南瓜、紫蘇の葉ゐん元豆など取てあげる、揚物濟して後、油を瓶へ戻してアトの鍋では直ぐに茄子の亀甲炙をこしらふ。

亀甲炙は中位の丸茄子を洗ひて其儘二ツにきり、皮目にあらく亀甲形に庖刀入れて揚鍋にてやく、上下に返してよし、火の通りし時、生姜醤油をさす。

里芋の茶巾絞は粒のそろひたる里芋十箇ばかり毛芋の儘よく洗ひ、竪に皮を剝きて四筋五筋皮をむき殘しおき、鹹目に醬油にて煮つけ、笊へ取り揚げ、冷ぬうちに手早く先にむき殘しおきたる外皮のみを剝くときは、そこは白くなり居れり先に剝きたるところはシタジが染みて焦茶色になり居れり、是を布巾に包みて堅く絞り竪に押へて後ち布巾を解けば、芋は形を變じて饅頭形になり居る、是れ茶巾絞りなり。

(三)酢の物附揚に里芋、こつてりとしたものばかりにて不向きゆゑ、新芋殻の酢煎とあちやら冬瓜を拵ふ。いもがらは青茎ならばエガライから、ゆでるとき山椒の實を二三十粒入れるとエガラミがとれる。まづ赤莖を生のまゝ皮をむき一寸程に切り、布巾にて水氣をしぼり、こんろに土鍋をかけて酢をたぎらし置き、その中にて酢煎にすると色澤よろしにへたる時、砂糖と食鹽にて味をつけるなり。

冬瓜は皮を剝き實をさり、うす加減に切り三杯酢に唐辛を一寸刻みこみて同じく酢煮し、皿に盛合はす。

△次の日

(1)御靈供　なら茶飯　味噌しる　朝漬

(2)向皿　花甘露芋　つけあげ　唐辛やき

(1)茶飯は大豆二三合ほうろくにていり盆にあけ、擂の底にてゴリ〳〵と押せば豆は自然にわれて、皮とれるなり。これを箕でヒダして悉く皮を去り、番茶をよく煎じ出したる中に鹽をすこし加へ、米と共に入れて御飯に炊く、香ばしくして一段の風味あり、お菜は何がなくも、味噌汁にアッサリしたるつけもの一片だにあればおいしく頂けます。

(2)花甘露芋小粒の六月芋を甘煮にし、細き竹箸を削りて先より五分程の處へ絹糸をゆひつけ、芋の眞中に通して糸を右に持ち芋と箸とを左の手にて崩さぬよう持ち、クル〳〵引き廻しながら糸を山路に使へば花形に切れるなり。芋は暫く鹽水につけて後煮れば身しまりて崩れず。

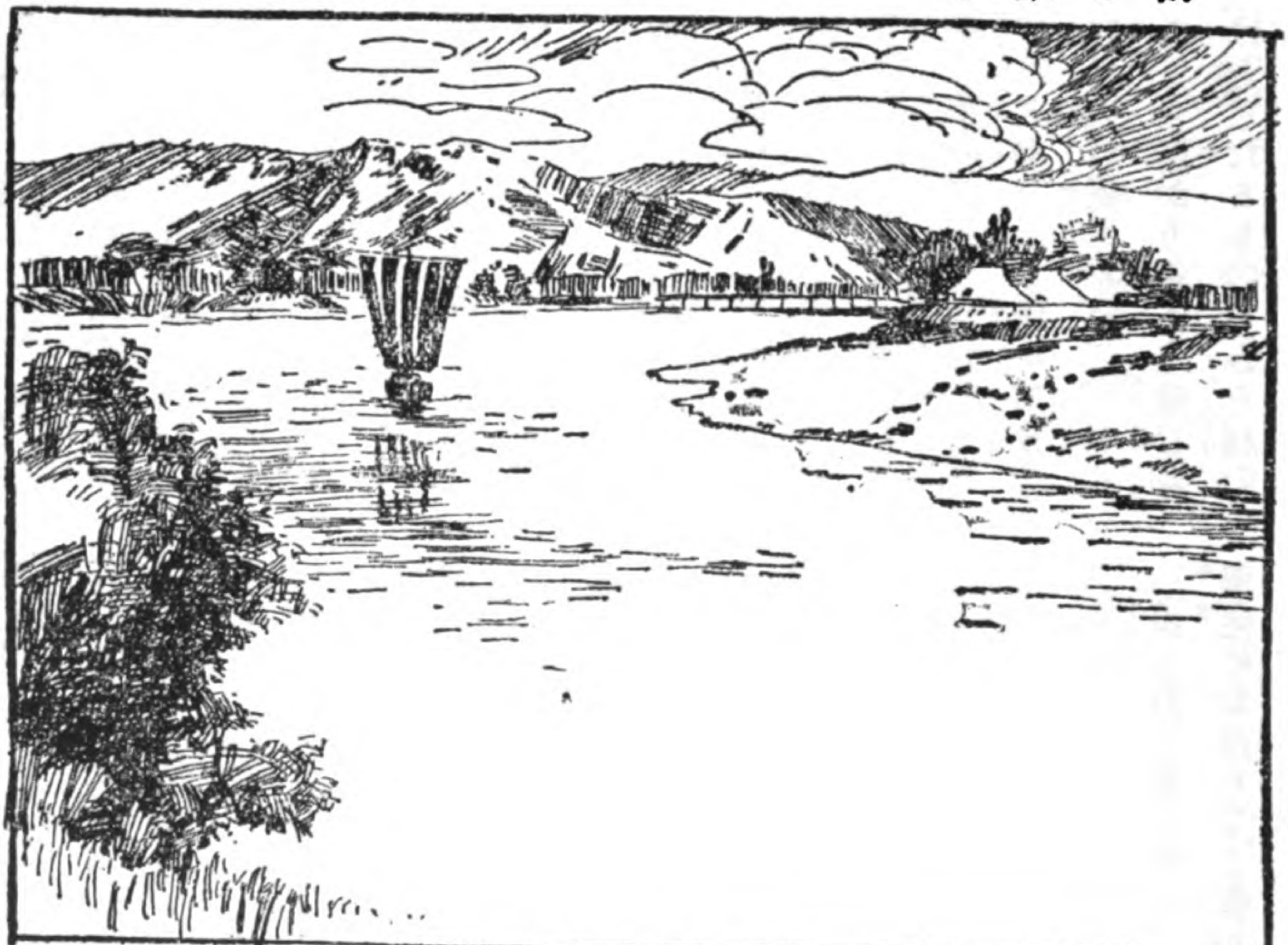
つけ揚は紫蘇の味、南瓜など昨日揚げおきたるもの

を取り合せて盛り添へ。
唐辛焼は青唐辛を竪に割きて實を去り、油で混合せたる赤味噌を詰め、しそ葉に巻き串にさして焼きたるもの。

△晩の献立

味の素
一吸物　椎茸の味噌漬　おぼろ昆布
二口取　茶巾いも　枝豆　灘なし

（一）椎茸の味噌漬は先日隣家に佛事のありし時平盛に添へし大椎茸、其儘味噌に漬け置きたるを繊に切て椀にもり、もづく昆布一と摘あしらい煮山椒二三粒をいれて吸ひ口とす。味の素



信州千曲川の上流

一ト匙落してザット沸湯を注せば、漬物の鹽氣と山椒にてあんばいよき吸物となる
煮山椒は山椒の實をとり、鹽水にてよく洗ひ生醤油にて煮つけて置けば幾年でも持つ、若し黴る氣味がある時は煮直し置けばよろし、煮つけてから水飴を入るゝもよし、黴ぬ妙薬なり。
（二）口取は裏の畑より枝豆をこぎ、葉を去り枝のままザットゆでゝ其まゝ盛り合せ、（餘りの二枝三枝はさやのさきをはさみきりて梅酢に漬け置く）昨日の里芋の殘り、粒のそろひしもの六七個をゆでゝ皮をむき布

巾に包みて絞り茶巾芋とす。鹽氣も味もなきゆゑ西洋辛子をときて燒鹽と共に一寸皿のかたわきに添へる手數かゝらずして上戸にも下戸にも向く御馳走なり。

瀧梨子は梨の皮をむき、横にぐる／＼とつとめて長く切れぬやうにむき、しばらく薄鹽水につけおき和かになりたる時、又もとの如く卷紙をまくやうにまきて小口切に細く切り、ふたゝび水に入れて體裁よく揃へ瀧の樣に盛り出す、三盃白をサラリと掛るもよろし。

△十五日

朝　白粥あんかけ　味噌漬胡蘿蔔
晝　牡丹餅、菊豆腐　燒茄子、瓜もみ

朝と晝はうち／＼ばかり、お靈供として先例によりて朝はお粥、餡には椎茸干瓢などの具をとも思ひしがソハ晩といひ明日のごちそうに必要なれば、儉約して只の薄葛あんをうまく加減し、漬物には味噌漬茄子と人參などあしらふ。味噌つけは人參をよく洗いて皮をむきたる儘、小出のみそおけに入れ置きなば二三日にて丁度喰加減に漬るなり。あまり漬かり過ると味ひ却てわるし。茄子は一旦鹽づけとしたるものをみそ桶の中に入れ置きなば日を經る儘、鼈甲色となりて味ひよろしコハ一二年たちしほど猶味も色もよろしきなり。

牡丹餅の拵へ方は、白米一升に餅米五合、夏のことゆゑなるたけ硬めに煉り、着けるものは小豆餡は腐敗しやすきゆゑ、青豆のぬたにくろごまの二色。

菊豆腐は豆腐を一寸四方位に切り、豆腐の兩方に白箸一本宛横たへ置き、下まで切りとほさぬ樣庖丁つかい、たてよこに箸を置きかへて切りおろし、ソット鍋の湯の中へうつむけに入れ、フク／＼と煮へたるところを網杓子にてすくひ上げ、切口を上に向けて椀にもるときは切口四方に開きて恰も菊の花の如し、其中心「シベ」となるべきところに、卸し山葵をおく、椀にしき味噌して出すもよろし、或は餡かけもよろし。

燒茄子は「ヒネ」て汁のみにも漬物にもならぬ樣なのを爐縁にてトン／＼と叩きて柔か目になりし時焚火に入れて丸燒となし二杯酢に花鰹を掛て生盛皿にとる。

瓜もみは常の如し、胡麻の摺たるをかけるか、又は海老のおぼろなど振かくれば見えもよく味もよし。

貨幣製造の話

石井研堂

冬子「おッかさん、五十錢の銀貨や、二錢の銅貨などはどうして作るのでせう、印版をほる樣に、一枚づゝ小刀でほるのでせうか知ら……」

母「それでは、二錢のお錢一枚をほりますにも、工作賃が一圓も二圓もかゝつて仕まひませうから、とても間に合ひませんよ。」

冬「そんなら、どうして作りますの」

母「昔の一文錢や天保錢などは、鍋釜を吹くやうに、吹いて——鑄物にして作つたのですが、只今のは皆型に壓しつけて作ります。

母「金、銀、銅など、こゝに地金がありますと、それを、ロールにかけて、強い力で壓して伸ばします。すると、丁度、伸し餅の樣に、薄い板になります。其の厚さは、ロールの間の明き加減で、厚くも薄くもなりますし、さきに三分厚さに伸したら、其の次に二分厚さに伸し、それを又一分厚さ五分厚さといふ風に、ロールに度々かけて、段々薄くいたしますそれから其の伸し餅みたいの地金から、ボール紙に打ぬきをかけて面子をぬく樣に、圓い型で打ちぬいて、仕舞ひます。すると、金貨、銀貨の形狀だけでまた繪も文字も無いのッぺらぼうの物ができます。すると今度は表型、背型——銀貨でいひますならば菊の御紋に金五十錢とある面の型と、龍や橫文字、年號などの有る面の型と、二枚の型、鋼鐵へ凹に彫ッた型がありまして、其の間へ前の無文のお錢を挾み、上下から強く壓しつけると、金銀は、金性が柔軟ですから、型の通りに細かい模樣がちやんと寫ッて仕舞ひ、それで出來上ります。

冬「銀貨の緣のギザ〳〵は、其のあとにほるのでせうか。」

母「それも、型について居ますから、一緒につきます。

冬「さう〳〵、銅貨にはギザ〳〵がなくて金貨銀貨に

ばかりそれが有りますのはなせでせう。」

母「考へてごらんなさい」

冬「考へても分りませんから、敎へて頂戴」

母「世の中には、隨分こすい人が有ります。支那人などは、一度自分の處へ來ましたお錢は、一々やすりをかけて、其の量目の少量をぬすみます。ですから周圍にギザ〳〵をつけておきまして、削り取らぬ樣に豫防がしてあるのです。ギザ〳〵の無くなつたのは、受取らぬと言はれても仕方がありませんから、自と盜まなくなります。併し、銅貨は削る者も有りませんから、ギザ〳〵をつける必要はありません。ロシヤの一ルーブルの銀貨などは、緣にギザ〳〵の無い代りに、刻印がぐるッと打ち込んであります。これでも、量目を盜むのを防げます。

でき上りました銀貨を、檢査する秤に、面白いのがあります。一枚づゝ自と出て來まして、秤に乘りますと、重さの適當なのと、輕いのと、重いのとが、三通りに分れて落ちるのです。

その他、一枚づゝ、眼で檢査する法なども有りますが、此の檢査は中々嚴密で、少しでも缺點の有るのは、又地金の方に廻して造りかへて仕舞ひます、併し、其の掛りの方は非常に熟練しておいでゝすから手の上へ、さら〳〵〳〵と一枚づゝ落して、其の響きを聞いたゞけでも、直ぐ不完全な點を發見する位です」

冬「なせ、昔の一文錢などの樣に、鑄物にしませんのでせう」

母「金銀などは、亞鉛をませないと、鑄物になりません。金銀の貨幣に亞鉛をまぜるなどはできませんし又、鑄物では、一分一毛の違ひ無く、千枚でも萬枚でも、皆同じく鑄ることが望まれません、又、型で推す方が、手早くできるからです」

冬「それでは、金貨や銀貨などは、少しも他の物が混らない純金純銀なのですか。」

母「いや、さうでもありません。金銀の純粹――混り氣の無いのは、柔か過ぎて、少し磨れますと模樣や

文字が潰れたり、少し無理なことをしますと、曲ッたり反ッたりして、千萬人の手に流通するものになりませんから、皆、他の金屬を混せて、硬くしておきます。金屬は、大抵、二色以上の物を混せますと合金といひまして、純なのよりは、其の質硬くなります。

で金貨は、金九銅一といひまして、一割が銅、銀貨は銀八銅二といひまして、二割が銅、一錢銅貨は亞鉛一錫四銅九十五の合金、白銅貨はニッケル一分銅三分位です。』

冬『銀貨などを潰して、簪だの指環だのにしますと、罪になるのですか』

母『罪などになりません。が、五十錢銀貨一枚が二匁七分、二割の銅を去りますと、潰して地金にして僅か三十錢ばかりの價きりありませんから、誰も潰す人はありませんよ』



初夏の淺草觀音

五月雨日記

美甘小夜女

……日、

昨夜は可怪しき夢を見たり。今朝起き出でゝ見れば咳出でゝ苦し、餘りに夢の辛かりし爲めか、寢汗かきたれば今朝は疲れ果てたり。

併かも曉方なればもしこれが正夢にもやと氣になる事夥し。

「厭な夢を見た事、奈何しよう。」と思はず獨言云ひつゝ床上げて縁に出づれば、

「どんな夢、そんなに氣になるやうな事なの。」

と姉上は優しく肩に手をかけ給ふ。

「ちやア無いですよ、そんなでも無いけれど。」

「もう氣にしなければ好いわ、眞實に此頃は顔色も惡いし、屹度奈何かしてゐるんだと私は思つてゐるの。」

「否、奈何もしませんのよ。」

「でも眞實に云つて御覽、ね。」と強く押ゆる樣な語調にて、奈何にも云はでは置き玉はぬやうな顔なりき。

我も幾度か姉上の胸にすがりて泣いて、打ち明けて、此の苦しみを去るべく姉上の優しきお言葉を伺はんかとも思いしが、終に云はずして了ひぬ。そは日頃より我の傲らしき心に對して餘りに恥かしき事なりしかば。

……日、

待たる文は來つ。世に果敢なしとてこれほどの事やある猶も一縷の望を掛けし我は愚なる者なりき、あゝ花散りて雨降りしきる淋しき夕べ。

……日、

昨日は實に慘ましき日なりき。思はんとすれども却却に思ひは消すべくもあらず。夜の目も合はされぬ許りにて、日頃より云ふ我も何も無くなりて唯彼の人の面影のみまぼろしの如く我が目に浮び浮びし時は我は泣きゐるなり。つくえによりて終日雨のみ眺めゐたり、細き雨の後より〳〵と切れる事なく降りつゝくを見てあれば、胸は唯譯も無く迫りて、涙はげに止度なき迄流れぬ。斯くありては、日頃の誇はいづくにかあ

る。良一様を從はせずばやまずと思ひし我が、知らず知らずに從ひたりしなり。最早や斯くなりては詮方なし我は何日までも〳〵憎き人を思ふのみ、思ひてわれは死ぬ可きのみ。

起き出でゝ鏡を見れば、顔色饑く迄青く、平生はをのが血色好きを誇る身に、淺間しと思ひたり。夜具にて押したればにや、前髪に可笑しき癖つきて、廂髪も今は見好からず、髪かくさへ物憂けれど、今日正午より上野の音樂會に兄上つれゆかんと云ひ玉へば詮方もなくて取り上ぐ。庭の若葉に雨ふりそゝぎ朝とても夕べのやうなる心地する日なりき。

午の御飯を少し早やめに食べて仕度にと立ちぬ。あまり化粧せねば姉上、兄上に可笑しく思はるゝもよしなしと思ひて化粧ひたれど、浮き立たぬ心のさまは顔色に出て、瞼目許り赤くなりゐたりき。何日もは我ながら妙じと思ひる着物きたりとて何やら色褪せたるが如く見えて、茶がゝりし博多の帶も左程までには思ひぬなり。車に乘りて着きし時は少し後れたる頃にて止むを得ず後ろの方にてきゝゐたり。兄上の强いて連れ行かんと云はるゝまゝに來たりし故四邊の人のみ目につきて、ピヤノもヴヮオリンも耳に入らばこそ。水色の洋裝せし人出づれば唯美しき衣なりと思ふのみなりき、萬一、憎くき人の此處に來てあらんかと眼鏡、頭の恰好、様子に、一々胸のみドキつかせて見れば、似くや似もつかぬ人々なり。昨日去りて京都の學校に歸りし人のゐる筈もなけれど、それにても、もしや〳〵と思ひしかど姿は終にみざりき。

四時と云ふにすみたれば外へ出でつ、車は歸して歩く事にしたり、雨漸く細くなりたり。

「之から直ぐ家へ歸つて了ふのも不滿らないから何方かへ行つて見やうかね。」

「奈何でも、兄様の好い方に。」と我は云ひぬ。此の儘にて歸らんか。夜までを如何にして過さん。姉上にあやしまるゝも辛く、さりとて强いて笑顔作りて語るは猶更なり何方へか行き疲るゝを待ちて寢るは容易からんと思ひて我は兄上の御言葉に隨ひて、とある料理

やへ入りぬ。物食べ度きにあらねど强いて兄上の前、仕ふナイフにはや胸は一ぱひになりて、兄上のしきりに話しかけたまふを、からくも受答しつ。

「イヤニ沈んでるなア頭痛でもするのかい。」と肉叉を持ちながら無遣作にといたまふ。



「否自分では奈何もないのですよ、でも可笑しく見えてっ」

「あゝ。」兄上心附き玉ひしかと胸躍りたり。

外へ出でし時は雨漸く强く、町町の家の灯火サッと大路に流れて何となく艶なる町の様なり。かゝる時我等が如き廂髪はうつらず、町の兩側の柳の緣漸く深く、

意氣な島田の襟からげて、裾ほら〳〵紅ほの見ゆる人ならではあはずと思ひり。彼方より相合傘の御誂へが清元の明烏ならん浦里が、とツヽリ節にて操れ進い樣我を見て振り返れり。憎き人とならば振り返らるゝもなか〳〵に嬉しかるべし。

「何か姉さん達にお土產を買つて歸らうか。」と優しく云ひ玉ふ。

「半襟を」と云ふ事になりて、我は二人の姉上に心を籠めて美しき紋ある柄を見たてたり。

「淸さんのはどれにする。」と少し派手なるをとり玉へど我は强いて斷りて家へ歸るさ。日頃より我が好めるをしり玉へる兄上は、花瓦斯の光美しき水菓子やの前に立ち留りて、林檎を數多求め玉ふ。

…………日、

憎き人よりの文は來りぬ。上なく細き女字にて誰がめにも男とは思へぬ程なり。懷に入れつ、上より輕く押ふれば溫たかき心地して、憎き人ながら限無く嬉し何故にわれはかくはかり未練多きぞ、捨てし人をかく迄に慕ふかと我乍ら恨めしき心地ぞする。慄ふ手元を强いて封押し開けば……あゝ唯達筆に京都に無事着となり。我は思はず、ビリ、と裂きぬ、胸のいえねば細々に裂きてまるめつ、姉上二人の居玉ぬを幸ひに部屋に入りて、火鉢の上よりマッチにて燃せば、薄き火のメラ〳〵と燃え上りて消えぬ。古き文も、リボンも半帖も、憎き人より貰ひし品物はマッチ幾度かすりてもやしぬ。部屋に異臭こもりて堪へ難くサッと障子あくれば、太陽を浴びてキラ〳〵と眩き迄に光る若葉、名も知らぬ鳥來て留まれり、靜かなる日なりき。

…………日、

思ふは愚なり、されど我は忘るゝ能はざるなり。靜なる夏の日に、白と黃の蝶舞いて……若葉に見え隱れしたり。床の上に伏して終日思ひ亂れたり。姉上の優しき看護にて此頃は稍や回復したるも一時は眉ひそめたまひし事もありしと云ふ。靜かに我が枕邊に坐り玉いし姉上を見て「あゝ神よ姉上にのみは何卒幸あらしめ玉へ。」とひそかに祈りぬ。

手輕に出來る子供の洋服

裁縫専門女子共立會　松江美佐子

此度は時節柄、少女の海水着を記す事に致しました、此形は八歳位から二十歳前後までの女子に用ひます、地質は、花色又は紺のネル、及び縮、小倉、キヤラコ若しくは、日本の浴衣地等を用ひます、尚折衿と袖口と帯とに飾テツプを一、二本用ひますなら綺麗で御座います、用布は十五六歳のために、二尺巾九尺七八寸二尺四寸巾で、八尺一寸を要します、そして此の用布で裁ちますと出來上りの丈が、二尺六寸、スカートの裾の平断が二寸位になります故、若し着丈を伸縮する場合には、スカートだけで、長くも短かくも致して宜しう御座います、尚飾テツプは、一本づゝ付ける場合には、七尺、二本づゝならば其の倍を要します、尚此服の下にはメリヤス製の猿股をはかせる方が宜しう御座います。

△形紙の拵へ方

此れは十五六歳の少女の寸法です、まづ左の通り縦横の寸法を見て、四角のものを拵へ、次に寸法通り各所の形を拵へます、それより、切れ地にて裁つ時の爲に、地の目縦、並びにワナの所は必ず形紙に記して置きます、尚スカートは、何處も眞直ですから、別に形紙は要しません。

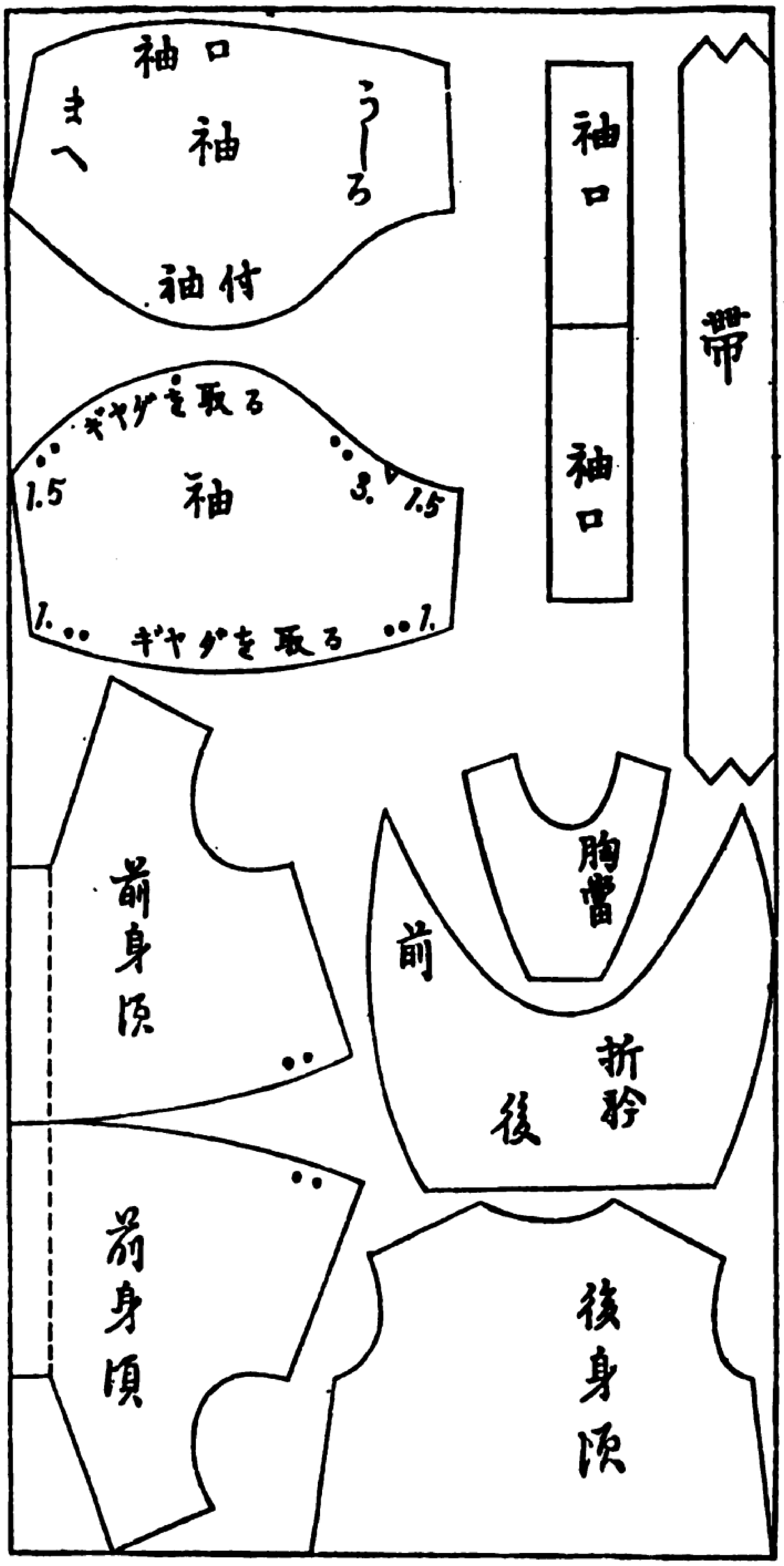
△切地に形紙を宛てゝ裁つ心得

右の通り形紙が出來ましたなら、鯨尺の中から巾のまゝで、先づ、一尺九寸五分の丈を三つ取ります、即ち此れがスカートになります、次に殘り切れ、即ち三尺九寸の切れを左の通り擴げて、ワナの處、地の目縦の印によく注意して、順に裁ちます、尚此の切れが二尺四寸巾、(即ちキヤラコなどの場合)ならば、先づスカートを二つ中取り、次に無駄の出ぬやうに、よく注意をして、裁ちます、そして裁ち終りましたなら、縫方に必要なる、ギヤザ、肩山の印、袖の切込前身頃の打合の印等は落ちのないやうに、糸で印を付けて置きます。

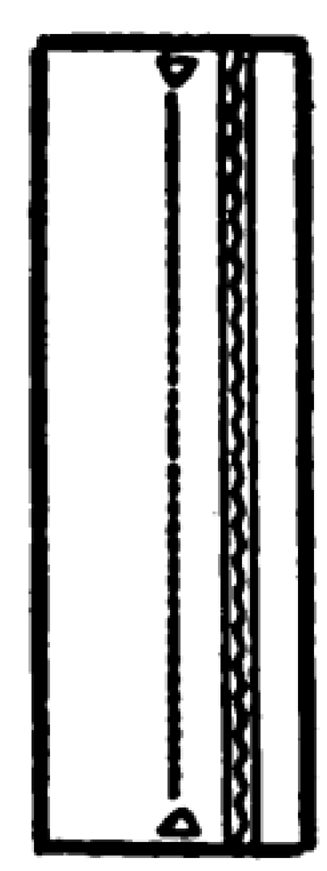
巾二尺、丈九尺八寸の布を以て、女子海水着を裁つ

圖。

但し並尺の内より、第一に、一尺九寸五分の丈にて二尺巾三布をスカートの爲めに裁ち切りたるものとす。

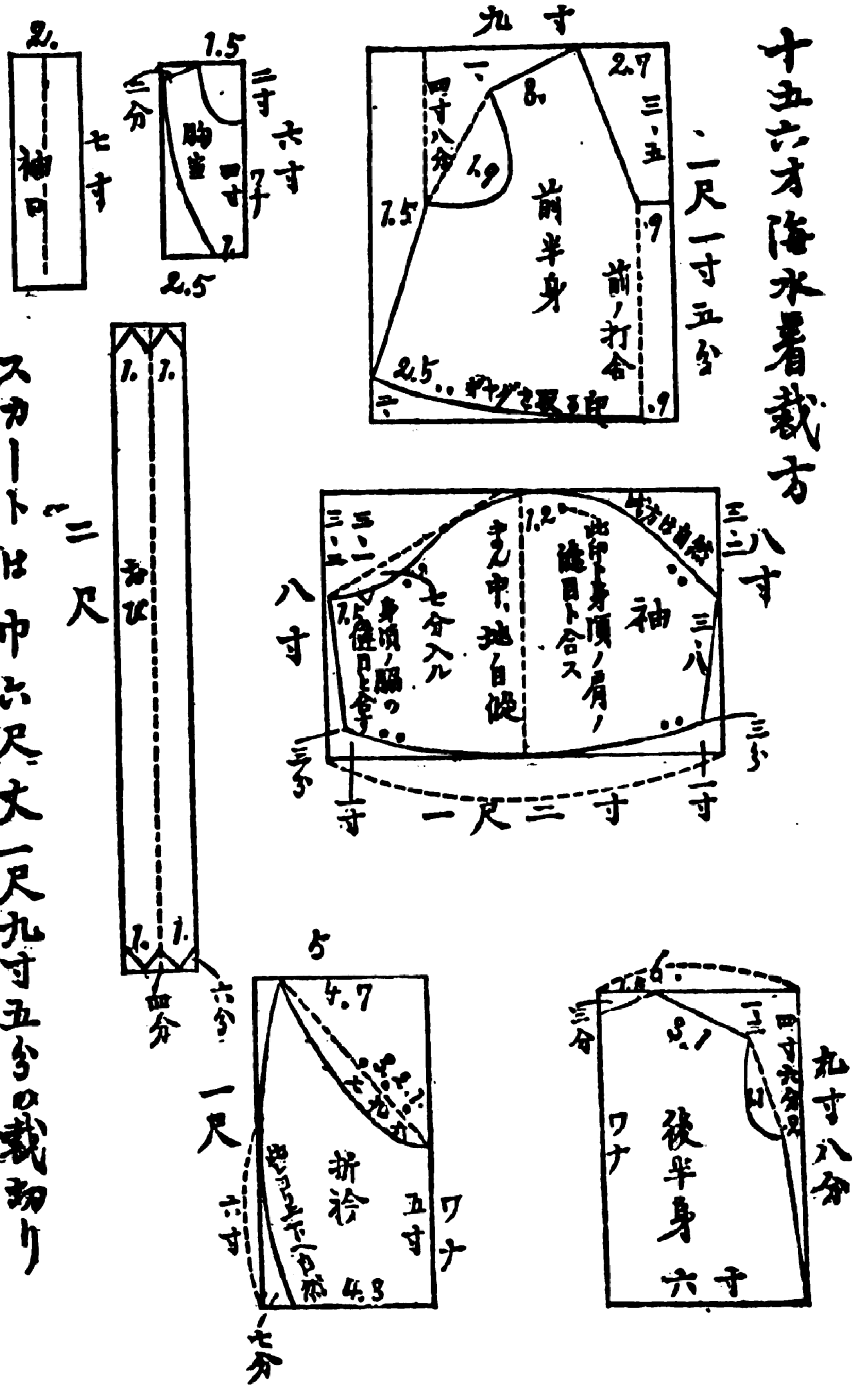


△縫方順序



先づ第一に、袖に袖口切れを付けます、若し飾チップを付ける場合には表になる方へ下圖の通りチップをつけます、夫れより、袖の袖口の方へ印から印までギヤザ縫ひをなし、袖口切れに合してちゞめ、此れを縫合し

十五六才海水着裁方



スカートは巾六尺丈一尺九寸五分の裁切り

折りは袖口の方へ向けて飾ミシンをかけ、次に袖を縦に折つて、袖下を縫ひます、但し袖口まで續いて縫ふ事、それより袖口は、半から裏へ折つてまくり付けます、次に、前後身頃の肩を合して袋縫ひになし、折は前へ向け次に折衿をつけます、此折衿は、外側三方に細き見返しをつけ、或は細き三ッ折になし、若し飾チップを付ける場合には、裁目のまゝ二分だけ表へ折つて、此端を押へるやうにチップを宛てます。

　夫より此折衿の眞中と身頃の後の眞中と合し、但し身頃の表へ折衿の裏を宛て、折衿の表を手前にして裁目を出したまゝ針をうち、じつけをかけ、別に、巾五六分の斜目切れにて見返しを拵へ、此を今の所へ一緒に縫ひ付け、縫代は身頃の方へ折り、見返しを放して押へミシンをかけたる後、見返しは裏へ折つてまつり付けます、夫れより前の始末を致します、此は、前身頃の、打合の印から、上下前共二分づゝ持ち出し、殘りの七分を裏へ折り、折衿の付け仕舞ひには一寸、はさみを入れて、矢張り裏へ折りミシンをかければ宜しい夫より脇を袋縫ひになし、袖を付けます、袖は、袖付の方にある印から印までギャザ縫ひをなし、身頃の袖付のあきに合してちゞめ、付ける時に、袖の山の印と、身頃の肩の縫目と合し、袖の切込と身頃の脇の縫目と合し即ち袖下の縫目が脇の縫目よりも一寸五分程前へ來るやうにして付けます、尚此縫代には巾五六分位の斜め切れでつゝみます、次に後身頃にクセを取ります。

　其の取り方は出來上り圖にある通り、眞後に八分の巾着ヒダを拵へ、次にヒダの端から、四分の處を山にして、兩方へ四分づゝのヒダを外向きに取ります、但し此ヒダはミシンをかけません只裾でしつけをかけて置きますると後の巾が八寸四分程につまります、夫れより前身頃に印から前の見返しの所までギャザ縫ひをなし、子供の胴廻りに合してちゞめ、全體を一尺七八寸に致します、夫れよりスカートの巾をはぎ合し、次裾を二寸二三分折り、三ッ折にして平絎をなし、次に前の眞中を四寸程縦に切りあけ、但しスカートは三

布の内、一布を前に即ち、前の眞中へはぎめの來ぬやうになし、兩方へ、前身頃と同樣。七分折つて(一寸切り込みを入れ目立ゝぬやうにまつりつけます、尚飾りの所は、上前を上にして重ね表へ見えぬやうにとめて置きます、夫れより、上部にぐるりとギヤダ縫ひをなし上の身頃に合してちゞめ、此と縫合します、此れも袖付の時と同樣巾七分位の切で包みます、次に胸當てをこしらへます、先づ外側三方をぐるりと細き三つ折りにしてミシンをかけ、内側即ち衿刳りの所は、細き斜め切れを見返しにつけて二本表からミシンをかけます、若し飾チップを付ける場合には表へ一分程折つて、つらぬやうによくのばし極端へ飾チップを付けます、夫より帶を拵へます、帶は





出來上り圖

飾チップの付く場合には、袖口と同樣表になる方のまん中へつけ次にぐるりを折つてしつけをかけミシンをかけます、最後に仕上げを致します、此れは、先づ身頃の折衿の付け仕舞ひにホックを一ツつけ其から下へ三つボタンをつけます、尚、胸當ては上の方へ左右に一ツづゝボタンを付け、身頃の折衿の下但し成るべく見返しの上へ縦にボタン穴をあけ、着する時に此をかけます、尚下の方へ今一ツづゝ付けても宜しう御座います、尚帶は、服を着した上で適宜にホックをつけます。

尚右之通り形紙の拵へ方を記して置きましたが、若しお解りにくい所があれば、お尋ねに應じて、お答へも致しますし、又年齢に依つて伸縮なさる事が出來にくければ、年齢を御申越しになれば、形紙に縫方の說

男を記してお受け致します、然れば代價が郵税共十七錢、いづれも女子共立會宛に御申込下さい。

●子供洋服夏期講習會

女子共立會では例年之通り、八月一日から十日間、夏期の講習會を開きます、時間は、午前と午後に分ち、午前は八時から十二時まで、午後は、一時から五時まで、會費は何れも貳圓で御座います、尙細目は、教授をなさる方々の爲には順序を定めてありますが、御家庭用、即ち各自のお子さんの爲ならば何でもお好みの形からお教へ致します、御申込は七月二十五日迄に本郷區駒込追分町三十一番地女子共立會宛御申込のこと

會御希望の方は講習中寄宿をなさる事も出來ます、開會中の食費は金壹圓で御座います。

美術思想の滿ちた家庭

先日南部伯爵家へ參りましたら、御座敷の裝飾が大層綺麗に出來て居りました、勿論夫人は教育も充分おありになる上、繪畫の御素養もお在りになりますから、室内の裝飾などは、總て夫人のお考へでなさるのだそうです、御床の間には綺麗な御繪の掛物が掛つて居り、下には羽衣の人形が飾つて御座いました、其掛物の繪の色合は、少し白い色に、桃色の着色です、其御掛物の下の置物の人形の着て居る羽衣は眞紅な衣裳です、掛物の舞樂の淡い桃色を眞紅な羽衣の色で受けて居るので、御床の間の裝飾が非常に綺麗に見えました、それから又御次の間には原敬氏から御土產に上げたと云ふ印度の蠟の塔、高さが二尺ほどあつて大層珍らしい御品です、それが玻璃の函に入つてありました、單にそれだけでは面白味が薄う御座いますが、其塔の周圍には印度人の人形が五人立つて居る、その人形の爲めに蠟の塔が一層榮えて、此塔の產地の印度のことなどまで想像されます、其上人形の着物と、塔との配色が誠に宜いのでございます、私は感心をしまして、夫人は美術思想が御在りあそばすから、御座敷が榮えますと云つて御褒め申したのでございます、又御家には、五ツ位の御孃さんが被居います、其御子樣が又御顏を見たばかりで微笑まるゝ樣な、可愛い御子樣です、天性の御顏も可愛いのですがその御召の色合が、此お子樣を一層可愛らしくするのです、丁度私の伺ひましたときは、紫色の御召に赤の裏の附いて居る袷の上に白い裏の附いた桃色の被布を着て居られたので、配色が宜しく、沈着いた中に華美な所もあり子柄を一層引立てゝ上品に愛らしく見せるのであります、繪畫を學ぶと云ふことは畫其物を巧みに畫くと云ふ外に、美術上の思想を養ひ彩色の工合を會得すると云ふやうな點に於ても充分學び得るので、此道から得た知識は他日人の生活をして最も趣味あるものと爲すことが出來ると思ひます、（跡見玉枝女史）

一年の產額八十萬圓の織物工場を起した私の苦心

栗原織物工場主　栗原いね子

栗原氏は本所柳島に大きな織物工場を有たれ百幾十臺の機械を置き、二百人からの職工を使つて、年々織出される織物の額が、八十萬圓にも上るさうです。而かも此の事業は御自分獨りで築き上げられたので、誠に感心な方でございます。

△上京して失敗續き

私は栃木縣佐野の在のもので可なりの生活をして居たのですが、一度嫁いだ夫に死別れ、餘儀なく三歳になる子供を連れて、加藤といふ人に再嫁しました。處がその夫は、いろ〳〵の不幸つゞきですつかり家產を失くしてしまひ、むしやくしや紛れに、東京へ飛出すといふ騷ぎ、僅かばかりの金を懷にして私等二人は明治十一年頃に東京へ參りました。で都會へ出て、何とかして失敗を取り返さうと百方奔走して見ましたが、思はしい商賣もなく、それに夫は極氣移りのする質でしたから、少し好いと思つて初めた商賣も直ぐに厭氣がさすといふ始末で、一年あまりといふものは、たゞブラ〳〵と居食の有樣でございました。

そのうち、携へて參つた金は追々に減つて心細さが增すばかり、すると尙夫は萎げて了まつて、迚も東京に居ては駄目だから又田舍へでも歸らうかといふ氣色でした。折角、田舍の地所まで金に更えて、東京まで踏出して居ながら、何一つ得ることも無くてどうして鄉里へ歸れませう。東京に止まつて一旗あげるには共稼ぎでも何でも厭ひませぬから、どうか氣を引緊めて、商賣を見付けて下さいと、或は賴み、或は勵ましましたが、根拔けのした夫には、もうその元氣もありませんでした。

夫がこの有様では、迚も是を頼つてゐる譯には行かぬと、私もその時つくぐ考へまして、その日から貧しい乍らも親子三人の世帯を私一人で背負つて立たうと決心いたしました。

それには幸、國に居た頃から機織に多少手覺えがありましたので、やはり田舍から出てゐる知邊の機織工場へ通ふことにして、どうかかうか暮も立ち行きましたが、後にはその工場から機を一臺借りて來て、自分の宅で、稼ぐことにいたしました。



△世帯を一人で背負ふ

私が働き初めると、夫も流石に氣の毒に思つて、子供の傅や、炊焚の世話など氣を付けて呉れました。

機を織ると申しても、その頃は未だ染糸の器械さへない時勢ですから先づ絲から自分で染めねばなりません、指の爪がすつかり染まる位にして、絲を染めて、さて機で織り始めるのですが、夜分など、洋燈は危險ですし、又經濟も許しませんので、例

の魚油燈の薄暗い光を頼りに、切々と梭を運ばせて居るのですから、その苦しさはお話になりません。

夜も更けて來ますと、連日連夜の疲れで、つい梭を持つたまゝ俯伏しに機の上へ仆れかゝつて、始めてハツと氣が付くことが度々でございました。

さういふ風に働いて、一通り呼吸を呑み込みますと女ながらに又慾の出るもので、思切つて器械を一臺買入れ、原料も自分で買込むことにして、織上げた品を自分が方々駈廻つて買取つて貰ひました。

利は利を生んで、軈て四五人の職工も置くやうになり、是ならばといふ氣も出ましたので、いよ／＼本所の若宮町に少し許りの家作を買受け、そこで基礎を固め始めました。

△涙を呑んで夫と離別

處で玆に圖らずも私の身に取つて一方ならぬ悲みが生じました。といふのは、少し以前から夫は他の仇し女に心を奪れて、私として實に忍ぶに堪へぬ亂行が募つてゐることを知りましたので、大抵の事ならば家の恥を思つて辛抱して居りますが、若宮町へ移つてからます／＼恥も外聞も忘れて、亂行が募るばかり、剰へ私が汗水流して稼いだ金も、だん／＼夫の手で減らされるばかりですから、私も家の爲、また子供の行末を思つては默つて居られません。涙ながらに誠心こめて諫めたのも二度や三度でございませんが、早私に厭いた夫の心はどうしても元に復すことは出來ません、女の細腕に年月憂き苦勞を厭はず働いて來たのは、唯夫の家が大事と思つたばかりであるのに、その夫は家を家とも思はれぬ日々の所行、迚ももう望みは無いと思ひましたので、或る日、私は「何卒今日限りお暇を下さい」と涙ながらに申出ました。

△再度土臺から築き上げる

いろ／＼のゴタ／＼がありまして、結局夫の望みでそれまでに蓄へた多少の資產は夫に任せ、私はたゞ百坪ばかりの家作と、機織の機械だけを貰ふことにし

て、別れましたのが丁度明治十九年でございました。永の月日貯へた資産も、夫の爲、家の爲を思つたらばこそですが、夫と別れゝばもう何の甲斐もない、どうせ辛い世の中に、女一人で働かうといふには、別れる日から死ぬる氣で働かねばならぬと覺悟しましたから、夫にとられた資産は決して惜しくもありませんでした。廣いこの世にもう誰を頼りにもせず、全く女一人で、また土臺から築き上げやうと決心した時には、我ながらよく健氣な心になつたものと全く涙が出る位でした。



早速、家作や器械を抵當に金を借りまして、漸く仕事を始め夏の暑い盛りも冬の寒い頂上も區別なく、糸染めから、織上、得意廻りまで、十の手があつても足りない仕事を、一生懸命に一人で切つて廻しました。

夜は一人の子供を相手に帳面付けをしましたが、子供も並ならぬ仕

事に疲れて、帳面つけながら、うつら〳〵と居眠りをします。それを勵まし〳〵して必ずその日の仕末はつけました。母子二人で何樂みに働いて居るのだらうと人樣はお思ひでしたらうが、私はたゞ女の一心でどれだけの事が出來るかといふことを世間に知らせる氣で獨り身の淋しさも、仕事の辛らさも決して心としませんでした。

すると世間は妙なもので、夫に捨てられた私の不幸に同情して、追々得意も殖えて來ます、栗原は女ながらに、商賣が堅いといふやうな評判も受けまして、四五年の内にそろ〳〵芽も吹き出しました。

間もなく日清戰爭になる、その時、私の考へ出した毛糸を割く器械から、圖らず仕事に一發展を來たしまして、店の名も多少世間に知れましたので、これは何でも自分を益すると共に、人樣の御便利も圖り末永くお引立てを願はねばならぬといふ考から、かの大島耕とか、綿風通とか、未だ世間の同業者の氣の付かぬものを織出して、多少御評判も得ました。

△艱難の跡夢の如し

その後更に發展をいたす積りで、只今の工場へ移りまして、兎に角今日の有樣まで、漕付けましたが、これも偏へに皆樣のお蔭と存じて居ります。

今から考へますれば、よくも女の身であれ程に出來たと思ふやうな、苦しみ、悲しみも當時はたゞ張り詰た一心に、自分が世に立つにはこの仕事の外に道はないといふ氣で進んで參りましたから、幸ひ間違ひもなく濟んだのでございます。

もう年齡も六十近くなりましたが、今日でも働かずに、靜としてゐる氣には成りません、働けるだけ働いて、動けなくなれば夫迄と思ひまして、此頃でも朝は必ず四時に起き一日、息子や嫁と筒袖で眞黑になつて働きますし、夜は皆の者がやかましく云ひますので餘儀なく九時頃に床へ入りますが、夜中に皆が寢靜まつた頃には必ず起き出して一度工場を廻つて火の用心を見なければ迚もおち〳〵眠れないのでございます。

衛生顧問

糸左近

胃弱の妙療法

問　幼少の頃、胃病に罹り、種々治療の末、治り候へ共、今に胃弱にて夏に向へば、食慾甚だ少く困り居候、何卒其の療法を御教示下され度。（駿河の胃弱女）（大和のお尋ね女）（東京の審投女）

答　療法中の第一は硬い軟いに限らず、都ての食物を故らに噛み下さないで、能々咀嚼してる中に、自然と食物が食道を通り過るやうになる程に、緻りと食べればならぬ。然うすると、食物が細く砕けるのみでなく、唾液が食物に能く浸み渡り、自然の薬即ち唾液中に含めるヂアスターゼなどが食物を半ば消化して胃に輸るやうになる。次に食事と食事の間を六時間隔て其の間に煎餅一枚たりとも食べぬとが肝要である。何となれば大抵の食物は五時間で胃より腸に移って了ふから、六時間食物を取られば、胃は一時間空虚になり、従って胃の筋内の働きは一時間休息し、食物の来るを待ち受けてる姿となる、故に食物が胃に入れば、又自然の薬即ち百弗聖や塩酸などが多く分泌して食物を速く消化吸収せしむるものである。右の外寒冷摩擦とて、冷水を腹部に注ぎて摩擦すること一日に二三回も行ひ、精神を愉快にし、適度に運動して居れば何等の薬を服まざるも、一ヶ年の中に治ること受合である。



慢性腎臓炎の原因療法

問　慢性腎臓炎の原因及び療法を御教示下され度。（播磨の山本ひろ子）

答　本病は仲々の重病にて迚も素人療治の出来るものでないが、兎に角摂生的療法等を簡単に述べておきませう。慢性腎臓炎の原因は感冒、肺病、湿地の住居、気候不順の土地に住つてる事、梅毒、麻剌利亜病、骨の化膿などの中、一因或は数因合して起るものである。又中には何の原因かわからぬのもある療法は薬物よりも寧ろ摂生が肝要である。第一に心身を安静にし、第二に飲食物を大に注意し、牛乳を一日に三合乃至五合も飲み、粥、スープ、淡泊とした魚類、鶏卵などを常食とし、脂肪に富める物、酸味の強き物、茶、咖啡、酒類及び辛き物、鹹き物を厳禁せねばならぬ。第三に発汗療法として摂氏四十度以上の温湯即ち普通人には熱過ろ位の湯に毎日二回も入浴し、入浴したる後、夜具を重襲して而も頸までフランネル様の物を用ひ温包し、同時に温い牛乳でも飲むと汗はタラ〳〵と流れるやうになる、之を行へば一通りならぬ効あるものだが、夏などであると、行つてる間が苦しくて堪らぬものであるから、此の場合には額に氷罨法を當てゝおくが宜い。右の様に注意して傍ら適當なる薬物を服めば大抵は治るものである、されど其の

薬物は原因に依ても違ふし、且つ診察せぬことなれば何を用ひなさいと云ふ譯には参りませぬ、宜しく御地の醫師の診察を乞はれたい。

遺尿の療法

■ 今年十四歳の者、寝小便の悪癖有り其の療法を、(日本橋の愛弟女)■ 十八歳の娘、寝入れば如何に起しても容易に眼が覚めず、それが爲か、月に二三度は必ず遺尿す、結婚を申込む人もあれど應ずる能はず、晝夜共其の療法を(麻布の其母より)(越後の長岡とめ子)■ 夜中三四度も便所へ通ふ、若し一度でも我慢して眠れば遺尿することがある、其の療法を(佐渡の近小女)(和泉好女)■ 今年五歳の娘時々遺尿致し候に付打擲致し候へども止まず候、其の療法を(尾張の青葉子)

■ 問は幾つもあるが、畢竟するに寝小便と近小便の療法を教へよと云ふに過ぎぬ。されば今寝小便の方より答へませう。抑も寝小便は何うしてなるものかと云ふに、其の原因に[illegible]、[illegible]背、妙齢女子の貧血、非常に勞働する者、年齢の幼い者に精神の刺戟を類々與ふる場合(例へば悪癖を矯さうとして灸をするが如し)幼兒は熱い灸を据ゑられた爲、大に恐怖心を起す所から寝小便するやうになる、斯うなると蒙昧なる親は尚更叩く、撲る、打つ、兒は益漏すやうになるのだ。酒類の飲過、果物の過食、腸の寄生蟲、其他種々の膀胱病などが原因となる。故



に療法は原因を考へて其の原因を退治するやうにするが肝要である。次に飲料は可成午後三時頃までの間に飲み、三時過ぎてからは更に飲まぬ習慣を養成すると、三時より臨臥までの間に排尿するから従って就眠後に洩すやうなことが無いやうになる。次に監督者たる人は、遺尿者の就寝後一時間半位の時に起して排尿せしめ、又拂曉頃に起して排尿せしめると大抵は床を汚さぬものである。次に營養に富んだる而も消化し易い食物殊に鶏卵牛肉などを多く與へて身體を強健ならしむることが間接に利益がある。次に灌水浴温泉浴も侮られぬ効がある。近小便の原因も大同小異であるが、其の療法も亦前者を参考せればならぬ。即ち飲料を三時までに飲みおく可きことも必要だし、營養を盛んにす可き事や灌水浴温浴なども必要である。而して近小便者は小便を耐へる習慣を養ふが宜い、然るに少し尿意を催す毎に排尿してゐると、膀胱の括約筋は僅の刺戟にも堪へられぬ習慣が就くものである、併し醫師に依っては耐へさせることを反駁する人もあれど、小生の實験では大に効があると信じてゐる。右の外に色々療法も有れど親しく診察の上ならでは叶はぬ。

鮫肌の療法

■ 鮫肌は全治せぬものに候や、療法有之候はゞ御教へ下され度し(韓國京城不幸女)

■ 第一に入浴を怠らず即ち清潔に皮膚を洗ひ拭はねばなら

ぬ。第二に肉食を十分になし、營養を良くすることが肝要である。第三に入浴は可成米の磨汁を沸して用ふるが宜い、古來冒ひ傳へてる療法は米の磨汁を沸して行水をなし、然る後酒を身體中に塗ることを一ケ月も續くれば治ると云々と、現今の醫學上より論じても大に道理がある。

素人に調合できる毛生薬

問　毎々毛生薬を御示教下され候へども売薬丁幾などを買ひに參りますと劇薬だからとて賣りませぬ、左候へば何卒誰にでも賣つてくれる毛生薬の調合法を御示教下され度。(大阪の生際淋)

答　鹽酸二、〇　レゾルチン三、〇　倔里設林五、〇
ペルサム油　一五〇、〇　アルコール　二〇〇、〇
右混和して一日二三回宛毛筆にて塗布

無害の白粉を製する法

問　衛生上無害の白粉だと賣つてゐる中にも矢張有害の物有之候由、就ては自宅で製する方法を教へ下され度。(神田の濃化粧女)

答　澱粉、麥粉、牡蠣(藥屋に賣つてゐる)炭酸マグネシアなどを單純に用ひられたら害は有りませぬ、殊に炭酸マネシヤを用ひた方が宜いと思ひます。

面疔の療法

問　メンチヤウとは如何なる原因から生ずるものに候や、及び簡單なる療法を御教示下され度(廣島の恐怖女)



答　皮脂腺(皮脂を出す嚢)汗腺(汗を分泌する嚢)は醸膿黴菌と稱する膿を作る所の黴菌が入り込むためである。療法はサリシル酸軟膏を貼り、其上を五十倍の硼酸水即ち硼酸一、〇瓦を溫湯一〇〇、〇に溶したる液に布片を浸し、其の布片で被ひ、繃帶しておくと大抵は治つて了ふものであるが、幼兒であると、時に依りては面疔の爲に腦膜炎を發し、危險な場合が有りますから、矢張醫療を乞はれたい。

縮毛の癖を直す療法

問　私は髮毛が非常に縮れてゐて如何にも醜く、之が爲め二十一歳の今日結婚もせずに居り申候、哀れな身を御察し下されて之が原因及び療法を御教へ下され候はゞ千金の賜物よりも嬉しく存候。(鹿島の縮女)

答　縮毛の原因は一種の黴菌が毛根に附着するのであらうとの說と、或は營養神經の障害からだといふ說とあるが、未だ確たる議論が無い、從つて療法も亦明かになつて居らぬ。が併し古來の俗說に依れば手拭を熱湯に浸し、輕く搾つたので髮毛を包んで蒸し、冷めた頃に又繰り返すこと一日に二度位行ひ、其の翌日は整然と結ひ、又一週間も經つてから又前日の如くに蒸すやうに根氣善く一年も續ければ治るとの事。今一つの俗說は漢方藥の甘草十匁を水一升程で煎じ詰め七合程になつた所で之を冷まし、之を以て洗へば直ると云々効あるか否かは知られど

も無害なることなれば試みられよ。

〔子宮癌の徴候〕■ 子宮癌に罹ると如何なる徴候を來すものに候や、心配なる兆が有りますから何卒御敎へ下され度。(上州の悲深女)

■ 其の初期に於ては醫師でさへも容易に診斷がつかぬといふ位であるから、斯る疑が有つたら、躊躇無く、一刻も早く婦人科專門の熟練なる醫師に診察を乞はれよ。兎に角其の徴候の一斑を言へば、白帶下が絶えず有つて時には出血を交へ、或は子宮部に疼痛を覺え、普通の子宮病者よりも早く身體が衰へ易いものである。

〔消化食物と不消化食物との例〕■ 消化食物と不消化食物といふことを屢々醫師より聞き申し候へども、然らば如何なる物がそれに該當致しますかと反問すれば常に狹い範圍で敎へられ、何時も不得要領に候が、何卒其の實例を數多く御示し下され度。(小石川の胃弱女)

■ 食物は野に、山に、將又海に、河に、其の種類は際限が有りませぬから、數多く例を擧げよと有つても、此の欄では迚も書き盡されませぬ。されば小生も矢張其の一斑を記しておきませう。消化し易き食物は米飯、味噌、とうふ、麩、ゆば、大根、蕪菁、嫩軟なる菜、鱚、かれい、鯉、鮎、せいご、鯔、鯛、かます、さより、幼雞の肉、半熟卵、犢牛の肉、鳩の肉、スープ、牛乳、牡蠣、などで、不消化の方は烏賊、たこ、蝦、蟹、さけ、鱒、まぐろ、鰻、あはび、蛤などの貝類、鶩の肉、豚の肉、野獸の肉、數子、てんぷら、煮豆、こんにやく、昆布、わかめ、海苔、未熟の果物、干物、熟し過ぎた野菜類、茸類、茶飯等である。が併し病者には前述の消化品中にも尚不消化物とせねばならぬ物もあるし、健康者には不消化物と稱ふる物も食べねばならぬ必要がある、杓子定規を以て推すことは出來ませぬ。



〔チブスの意義及豫防法〕■ 私の近所にチブスに罹り、入院する人が續々有之、何と無く恐ろしく感じられ候が、其の豫防法を御示し下され度、序にチブスとは如何なる意義に候や御敎へを乞ふ。(本郷の閑庭婦)

■ チブス病は熱の高いもので、其の熱の著しく高いのになると、人事不省になるものもあるし、或は精神がポンヤリとなる、其の有様を原語ではスターツス、チフホーザスと云ふ所からチブスと云ふ病名が出て來たのである。誰でも知つてる如く本病はチブス菌の傳染より起るもので、其の菌は日光や熱或は酸類に遇ふと極めて弱いものであるから、飲料水や飲食物は必ず煮て用ひ、器物や寢具などは日光に曝し、暴飲暴食などの不養生を爲さずに、胃を丈夫にしておくことが何よりの豫防法である。何となれば胃が丈夫であると、胃液中の鹽酸が適度に

殺せられ、誤ってチブス菌を飲み込んでも直ちに其の菌を殺して了ふからである。其他下水や溝を清潔にすること、蠅蟲の食物に止らぬやうにすること、床下などは濕らぬやう注意することも肝要である。又、腸チブス豫防注射液を注射しておくと一年位は傳染せぬけれど、其の價が甚だ高く即ち一回の注射料が數十圓なれば、富有の人には何でも無けれど、一般の人には言ふ可くして行はれ難い。

婦人と武術

問　お轉婆な事を御尋ね申しますが、私は今年十八歳でありまして、兄の擊劍柔道を稽古致しますのを非常に興味を以て見ます、それ故何うか教はりたいものだと存じ、父に相談致しますと、父は「婦人として之を稽古するは優しき心を殺ぎ且つ身體の健康を害する憂が有るかも知れぬ、考へ物だ、若し心身の爲に何等の害が無ければ師匠を自宅に招いても宜い」と申され候が、先生の御意見は如何で御座いませうか。（麹町の好武女）

答　武術を稽古したからとて、婦人の優しい精神を殺ぐなどの弊は決して有りませぬのみならず、却て高尚な精神になります、古より婦人にして武術に達したる者が數多あれど、大抵はお轉婆でなく、却って淑德を具へ、且人に對しても綢繆纏綿の情が有るやうである。次に健康を害するなどは以て外の謬見である、過度に行へば勿論害からうけれど、適當なる師に就き、適度に行へば筋肉の發達を促し、諸內臟を強固にするものである。而して婦人に有り勝の肥滿症を防ぎ、上部の充血即ち逆せ性を癒し、姿勢も立派になることは受合である。武術を稽古したことの無い醫師中には激烈な運動で、女子に適せぬなど非難する人もあれど、激烈に行れば如何なる運動も激烈になるが、緩慢に行れば如何なる運動も緩慢になる、要は唯適度と云ふことを守れば宜いのである。



日に燒けぬ藥

問　日に燒けぬ妙藥も有之候はゞ御教示を賜り度。（神田のおま女）

答　日光に逢へば燒けることの免れぬものなれど、海水浴などに行く婦人は、硫酸規尼涅を單軟膏と練り混ぜ、之を顔と手足に塗つて居れば防れます、が併し室内入つたら直ちに石鹸を塗けて洗ひ落さればなりませぬ。去りながら少し位日に燒けた方が却て立派で無いかと思ひますが、婦人の身としては然う思はれませぬものか知らん。

婦人問題談話會

去月三日午後五時、神田駿河臺寶亭に於て、第四回例會を催す、嘉悦孝子女史　三輪田元道氏、塗師谷貞敬氏、磨邊羅雄氏、下田次郎氏等の外婦女新聞福島四郎氏、婦人世界高信峽水氏、女學世界伊尾準氏出席せり、當日主として話題に上りしは、家庭主義と個人主義の得失及び調和の問題にして、三輪田氏の如きは頗る詳細なる意見を述べられしが、兎に角家庭研究者の協同一致して考究すべき問題と見られたり、其他色々意見經驗談等の交換ありたる中にも、幼稚園にて育てられたる生徒の成績に就ての話などは、大に參考となるべきものなりき。



いろいろの實驗

上達する習字法

兵庫　小池留子

字の下手な者は筆不精で書かないから益々書けなくなります、巧拙は先天的だなどゝ打捨て置かずに、一日も怠らず、自分の好いた御手本に依り、少しづゝでも氣長に習つて居れば、屹度上達するものです、(一度に澤山習つたからとて、效果の見ゆるものではありません)、私なども餘不調法でございましたが、昨年より一日も缺かさずに習つて來ましたところ、確かに進歩致しました、私の習ひ方は毎日半紙二枚づゝ習つて手本の一頁に一週間費します、即ち初め二日は透寫、次三日間は手本に依つて習ひ、其次の一日は手本なしで書き、土曜日には淸書致しまして、其を保存して置きます、このやうにして徒然の折などに淸書を出して見ますと、進歩の度が著しく分るので、段々興味が付いて少しの紙片でも拾つて習ふやうになり、案外早く上達いたします。(賞)

漆器と桐の簞笥

東京　とみ子

漆器の汚れを去るには、苛性曹達三匁と酒石一匁五分とを廿四匁程の水に溶かして、壜に貯へ置き、入用の時に水で薄めて汚れた品に塗り、五分程經つて軟かな布で拭ひ取り、水で洗ひますと、恰も新しい品と同じやうになります。又、桐の簞笥にシミが付いたり、光澤がなくなつたりした時には、軟い布に酢をつけて、叮嚀に拭き、後で蜜蠟を布に包んで擦ると、美しい光澤が出ます。

衛生的の麥湯

大阪　伊藤つや

皆さまの宅で、お麥湯をお用ゐになる時は何うなさいますが、私の宅では麥を煎る時に小豆を少し許り別に煎つて置き、そして麥も能く煎つて一緒に入れて用ゐますが、かう致すと大層味が宜しうございます。それから之を冷して置いて、砂糖か何か甘い物を入れて頂きますと、一寸旨しうございます。咽喉の渇いた折、又は冷つこいものが欲しい場合に之を飲めば無論衛生に宜しく、味も馬鹿には出來ません。

蠅追ひの新法

兵庫　中川たま子

蠅は五月蠅いばかりでなく、いろ〳〵病毒の媒介を致します、この蠅

の驅除法に付いて、去年お隣の方に教つた事を試しましたら、果して好結果を得ましたから、それを御紹介いたします。先づ藥屋で胡椒と牛膽とを買つて來て、胡椒五、牛膽一〇の割にして、其上へ赤砂糖を又一〇の割合で混ぜて、皿に入れて置きますと、蠅は辟易してソロ〳〵に退散して了ひます。

趣味のない人

三重　なでしこ

四月頃でした、知己の方から「花が咲きました、何本お遊びに」との御葉書を頂きましたので、早速妹を連れて伺ひました。通されたのは十疊のお座敷、障子は明け放されて、お庭の櫻は今まが眞盛り。私は春風に舞ふ花瓣を恍乎と眺めて居ると、妹が「姉さま、あれ牛若は」と申しますので、お床の間の方を見ますと、床の眞ン中に瓶端を置いて、櫻の枝がいゝ、、どつさり活けてあります。其れが爲めに掛物は半分しか見えなくなつて居りますが、その掛物が褪色をした櫻の下に牛若が笛を吹いて居る所の繪です。私には呆れました。何ぼ花が美しいからつて、這麼に並べられては厭になつて了ひます。而して配合といふ事に趣味を持たれぬ御主人や奥樣のお心までが見えるやうに思はれて、笑止に存ぜられました。

出臍を直した事

信濃　浦登野　百合子

私共の赤ン坊は臍帶が落ちた當時より、臍が栗の實大に出張つて、誠に見苦しうございました。然し生命には別條ないので放つて置きました所、或る醫療に心得ある人が見えて申しますに、此儘に棄て置く時は成長するに隨つて大きくなり、或は手術を要するに至るかも知れぬ、故に赤ン坊のうちに治す方が安全だ。最も簡便な療法は、硼酸軟膏（藥店にあり）を適當の大さに切り、突出せる臍を中に押入れて、其上に貼り繃帶するのです。かうして三四日經ては痒みを覺えますから、其時はアルコールを塗抹して古いのを剝ぎ取り、新しいのと換へる。之を怠らず約二ケ月間繼續すれば直るとのことに、早速右の通り行つた所、そのお蔭で今では普通のお臍になりました。

簡易な火止法

愛知　吉原初子

ランプに石油を注ぐ前に、極く少量の塩を油壺の中に摘み入れて置きますと、奇妙に火止に成つて、萬一粗相して轉覆かへしても外に火が移るやうな事はございません。先日も弟がひつくり返したので、駈け付けて消さうとしたところ、不思議にも直ぐ側の座布團にも燃え付かず、只だボツボツとしてゐる許りでした。毎夜でなくとも十日に一度位でかまひませんから、御子樣のおありなさる方や、養蠶をなさいます方は、是非ためして御覽なさいませ、誠に手輕な火止法でございますから。（寫）

海苔の揚物

近江　山上磯子

梅雨期に濕氣を食つた海苔は次の方法によると宜しく喰べられます。豆腐に壓石をかけて水氣を除き、海苔を一枚六つ位に切つて皿か何かの上に載せ、其上に豆腐の絞つたのを、竹箆樣の物でなすり付けて、海苔丈の形にし、其を胡麻の油の煮立せた中へ入れて揚げますと、丁度精進料理の鰻の蒲燒といふ體裁になります。之を砂糖醤油か何かで戴きますと、一寸變つて宜しいものでございます。

菜園の趣味

東京　北田うめ子

私は女學世界の四月號を讀んで、非常に園藝の趣味を感じ、早速キャベツと、トマトの種を求め、少し許りの空地を耕して種子を蒔きましたところ、一週間ばかり經ちますと、愛らしい二葉の芽が出ましたゆゑ、二寸程に伸びた所で夫れ〲植ゑ替へました、最初のうちは良人もそんな、ゝ、ゝ、いたづらとけなします故、私は一生懸命で米の研ぎ水やら、乾魚の水に薄めたのやらを肥料にしてゐるうち、漸く稍成育いたしまして、良人も之では何うやら物に成りさうだと申す樣になりました。私も張合が出て初めは一坪ばかりの處を三坪程に擴げ、外に茄子やら胡瓜やらを植ゑ付けたが、之又好結果で、今では立派な畑となり、その發育の樣を眺むるを樂しき日課の一つとして居ります。今年の夏は新鮮な野菜を食卓に供給することが出來て嬉しうございます。（完）

味噌の黴どめ法

津　村上小百合

味噌を瓶なり桶なりへ入れたら、その上に濡らして絞つた布巾を掛けて置きます。かうして一週に一度位、絞り替へては掛けて置きますと、一年經つても、二年過ぎても、大丈夫黴が生へません。

青松葉の効能

大阪　藤本ふた子

追々蚤が出るには閉口しますが、之を防ぐには大掃除の折、床板の上へ青松葉を一面に撒き、其上へ新聞紙を敷いて、疊を入れて置くのです一寸手數はかゝりますが、斯うすると不思議に蚤の出方が少うございます。

醋酸の酢

京都　横田あい子

私の家では酢はいつも醋酸の酢を使ひます。普通の酢は五日と保ちませんけれど、醋酸を蒸溜水で薄めて、少し舎利別を入れて使つて御覽なさい、一年經つても何ともならず、別段味も變りません。お魚なんか漬けるには却て宜しいやうです。

火を早く起す法

埼玉　若葉

私は火を起すのに、罐詰の空罐を用ゐて居りますが、非常に便利なものです、是は空罐の兩底を打ち拔き、其を起さうとする木炭の上に立て、中に火の種を入れて置くのですが、丁度ランプの火筒と同理に空氣の對流作用が行はれるので、火は忽ち起ります、若し木炭の下にも幾分火があれば、一層早うございます、

芥子の効能

東京　久子

炒る様な眞夏の日中、空腹に氷を飲んで氣絶したり、外出の途中、暑氣を受けて苦しむ事がよくありますが、さういふ時には直ぐ饂飩粉一に芥子四分の一を水で煉つたものを紙に伸して、胸から腹部へ一面に塗つてやるに限ります、そして必ず足が冷えて居りますから、蹠へ以上の二等を等分に交ぜたものを貼ります。かうして靜かに寢かして置きますと、醫師を待たずに直ります、醫者に不自由な田舍の方は是非、お試し遊ばせ、急性肺炎の應急手當にも應用出來ます、其時は何も交ぜぬ芥子を煉つて胸へ貼つて、醫者を迎へるのです。私の兄が是で苦しみました時に、この手當を致して戴いて、某博士に褒められた事がありました。

烏賊の甲羅

芝　しづ子

烏賊の甲羅を洗つて乾して蓄へて置き、毒蟲に螫された時、直ぐ之を細かく碎いて粉末にし、濡らして患部に着けますと、腫や痛みを感じる事が餘程少うございます、また血止にも効があります。ですから旅行又は登山などの節は携帯して居りますと、大層便利でございます。

木炭の臭氣止め

麻布　靜子

夏、臺所の戸棚を開けると、いやな臭ひがします、之を防ぐ爲に私は何時でも女中に吩咐て、次の方法を實行致させます。何でもない事ですから行つて御覽あそばせ、其は木炭の粉を皿に入れて戸棚に置くので、斯う致せば其炭がすつかり臭氣を吸ひ取つて了ひますから、決して嫌い臭を放ちません、但し時々新しいのと取替へて置くこと。

思ひも寄らぬ收入

信濃　ふじ子

こんな事を申したら、不自由の無い皆様はお笑ひでせうが、私は毎朝七輪に一杯づゝ、竈の灰を取つて置きます。又炬燵を仕舞ふ時も矢張青い灰を取つて、藁灰を入れて置きます、かうして貯めた灰を灰買にやりますと、思ひも寄らぬ收入があります、



和歌

佐々木信綱先生選

一等

○　美作　村上歆子

狂女は白薔薇をえて眠りけり音なき野邊の夕暮の色

評　神秘的なり音なき野邊の句もよし。

二等

○　伊勢　岩本淑子

いさゝかのことをも母に訴へしいとけなき日の我ぞ戀しき

評　女らしくやさしき歌。作者の人となりも思はれて。

二等

○　麻布　とみ子

桐原や雪に風ある夕ぐれをたつがみ亂し駒走り行く

評　桐原は信濃の牧場にて古き歌にもしばしばうたはれし所。雄々しき歌。

三等

○　宮城　沼倉馥子

栗の葉にさら〳〵と降る雨見つゝ歌想ひけり初夏の午後

評　歌も又さら〳〵としたる中に味あり。

三等

○　宮城　鈴木ちぎく

いつの世も女は弱し紅はらの花さく窓の雨の日を泣く

評　新らしきこゝろもちたる女の古き物語などひもときし面影しのばれて

三等

○　豊後　江口波津子

かしましき女の聲し木枯の港の町はわびしく暮れぬ

評　船つきの感じよくあらはれ居り。

秀逸

○　伊勢　岡田くま元

絹裏の袂にそよぐ朝の風冷めたく胸に流れ來るかな

評　女らしきをもて採る。流れ來るの句に欠點あり。

○　豊前　丸地しま子

若草の堤を行けどはてもなき我うきことはわすれかねつも

評 三句あたら白玉の瑕なり

○ 淺草 松本つる

なれやらぬ都の空やしみ〴〵と古里戀し夕ぐれの窓

評 いひさまはいかにも幼なけれど。靜なる地方より騒がしき都會にはじめて出でし女子の情あらはれたるをもて採る

○ 北米 ほし子

水樓の夕べの色ぞ靜なる睡蓮の花に白蠟の灯に

評 布哇より米國よりの投書月每に多くなれるは喜ばし

○ 茨城 鴻巣小ゆり

むらさきのあやめが圍む夏の井にしづかにうかぶ我笑顏かな

評 花うつくし。人うつくし。うつくしき歌。

○ 三重 大西千代子

雨そぼつ烏羽玉の夜を篝して漁り舟まつ丘の上かな

評 海邊の夜景一幅の畫

○ 三重 そさむ

さみどりの五月の里はにぎはし茶を摘む少女桑つむ少女

評 平穩に叙し去りたる中々に佳し。

○ 筑後 原田つる子

宵あらし海に向へる片町の屋每々々の灯を吹く

評 上句は畫のやうにて結句にいたりて急に夜の景になりたる嫌はあれど

○ 岩倉 斉川かめ子

榮ありし若きその日のしのばれてうらなつかしみ古き日記よむ

評 結句原作古き日記見る

○ 下總 綠子

をとめにて空しき戀も夢みてしわが家おもほゆ山吹のはな

評 當世の手に右左せらるゝはかなき女子の一生しのばれて

佳作

○ 埼玉 よし子

うつくしき夜はあくがれて歌のなき人にも似たる月み草咲く

○ 下總 片岡孤子

楡の木に肘よせて見る遠みどり榛名よ夏の上つ毛の山

○ 東京 しづ枝

郷よりすこしはなれし柏木の若葉の家に歌よみて住む

○ 東京 砂金ふく子

草刈い鎌なげすてゝ草原に一人いねたり夏の天地

○ 京都 三宅きみ子

鳴り止みし旗笛のあとの寂びしさやいたでに逃る陸府の夜のごと

○ 大阪 あい子

訪れ來し乳母に泣かれていとゞなほ戀しさまさる亡き姉君よ

○ 大阪 田中白椿

兆むきにこころもなほしておさな子を一人よみぢへ送る今日かな

○しめやかに小雨降る日はふるさとの母をしのびてむれやすからぬ　　豐後　吉耳靜子

○あぢさゐは人によく似て紫に今日薄色にうつりゆくかな　　美濃　梅子

○さみだれにぬれし若葉の色に似てやはらかくはた寂しき心　　麻布　加納とよ子

○新みどり茂るが中に君とふたり西のうたなど語らひにける　　岡山　廣岡敏子

○山百合の淡紅色の花びらの白うくづるゝ靜なる谷　　信濃　細山百合子

○背をひきて李の花の白く咲く六月の夜のあまき悲しみ　　本所　淺海芦の人

○故郷を出る日なりけりさみだれのしとゞに降りぬ若葉の上に　　本郷　雅子

○靜かに物を思ひぬ木苺の白き花咲く朝の小窓に　　横濱　吉川露香

○縁端にたてばなつかし靜なる戀草の家のまどの灯　　米國　村越光子

○夢さめて涙ぐみつゝまどおせば母あるそらに月かたぶきぬ　　群馬　松島ふく子

○おもふ子は芭蕉そよめく夕闇に散策してあり姉と並ひて　　小樽　金谷わか子

○薄暮時や北の大野は靄白うはての遠森しつやかになる　　美濃　酒井登美子

○何となく旅なる人の待たれつゝ卯の花に降る夕雨を見る　　大阪　白浪

○あかつきのみ空に高くたなびける雲は見ぬ世のまぼろしのごと　　肥前　中島松枝

○なつかしき友やいづこと夕暮の花散る窓に袂ぬらしぬ　　岡山　熊澤靜

○あゝ今日も暮れて行くなり夕陽のその一すぢのあかるみも見で　　岐阜　西郷芳

○月見草は黄昏の堤黄金して我れを呼ぶなり薄月映せば　　千葉　清流芳子

○聲高く歌ふを止めて若き子は風多出き夕空を見る　　千葉　加瀬紀久子

○行く雲に流るゝ水に戀ひつゝ筑都のかたを慕ひつる君　　紀伊　松島千枝

○遠つよの戀するかな桐の葉をわけてゆく紀路の夕ぐれ　　堺　さくら子

○大理石の階上る麗の二人の袖に燭かゞやきぬ　　鹿兒島　吉村豐子

○初夏やテニスコートのかたはらに三味線草の花ぞ咲きたる　　德島　紫陽花

○蝶の花なやめる窓にみだれ散りて酬ふる背やなき細緞し　　大阪　秋野萍子

○夜となれば何のなみだか靜やかに我頬ぬらしぬたちばなの花　　秋田　綠子

今日も又淋しき小道獨行く青葉若葉を屈樣すれ〴〵に

○　横濱　岡枝夫美子
わたたかき春は逝けり古里に一人さびしく物思ふ我

○　東京　石本長子
木草小屋麻黄の蚊帳にともし火の淡く残りて朝の露ふる

○　佐渡　渡邊とみ子
朝風しら露ふけばさみどりの若葉のかげにほとゝぎす鳴く

○　京都　こと子
山の井の百合はおもげに夏の雨を露しめる如なつかしむ如

○　本莊　美龍子
ゆりかごや静かに眠る静の子の胸のあたりの白き蝶飛ぶ

○　信州　深井伊智子
大濤圍堤の末にほの白う月は残れり啼くほとゝぎす

○　大和　操子
須磨の浦夕日に燃えて白帆まつ少女のかげを静かにゆりぬ

○　京橋　秋山千代
草月夜宴のもとなる短冊はましろき紙を慶みけり夢に

○　小樽　上原千代子
晴の野へにつゞきてもやまよふ彼中峰山はむらさきに見ゆ

○　岡山　藤津靜
何といふ美しき蝶ぞ何といふやさしき花ぞ月淡くさす

○　大阪　木岡米子
夢さ目のうら淋しさに物思ふ弱きむの子と成り果てし

○　豊後　菅原尾花子
つり晴や入江にそひしふるさとのをちの山々夕日影さす

○　東京　田中静子
たらちねのおくつきになくいたはしの少女子に散る木蓮のはな

○　東京　松野美榮子
風の音わだちの音に逃げさりし蝶戻りきぬ野路の花はら

○　横濱　小豆澤清野
しらしらと朝はゆらぎぬ小草のわだちの跡の水のたまりに

○　東京　石本綾子
水はなべて夜空に映し牛の啼く牧場のこみち露ふみ來れば

○　群馬　正木芳野
なつかしうよき香流れて南より夏來にけりとそよ風の吹く

○　大阪　森柾波瑠江
そのむかしうつくしと見し伯母君は七人の子に母とよばれます

○　栃木　波多野よし子
菅笠の鈴いさましく繭のせて麓の市にくだる郡人

○　下總　小島保子
故郷や亡き人愛でし扇子によう似し花の咲きてわびしも

○　牛込　つげ枝子
夏の月白みし石のかづ〳〵に河原なくなる川ぐまの家

○　尾張　榊原みれ
かたむける白帆の一つゆるやかに二見へかへる伊勢の夕海

○　新潟　高橋やす子
ハンモック涼しき風に我は寝て夕日の中に入り行く思ひ

○　京橋　秋山千代
ほとゝぎす草吹く風のほのしろき夜明の空に消えにける哉

○　本郷　松井時子
初夏や温泉の宿に君とゐてさびしさ知らず時鳥きく

○　横濱　月岡やすら

ゆたかなる春の光は市ゆくに野ゆくにみてりなまめかし日よ

○　福島　嘉壽子

笛の音に月かげさえて寂しき宵の夜を薫ずる蘭咲く小村

○　横濱　小豆澤しげ子

小女子のはかなき戀になきしづむさまにも咲けり白薔薇の花

○　常陸　しら露

朝ぎりに音のみきこゆ磯波のなぎさの松の影淡うして

○　群馬　松村秋子

山の宿霧の軒端に月さしてまろ寐ながらに聞く河鹿かな

○　韓國　川崎みつゑ

其昔父の渡りし舟路ぞと櫓の音さへなつかしくして

○　羽前　野口菊子

波風の荒きにたへぬよわき身の胸にはもゆる戀の炎もなし

○　高崎　清水貞子

雨ふれど四十路女の門付の日暮を行くが如く淋しき

○　大阪　田中千枝子

みほとけにかいいだかれて逝きし乳子は笑みて居るらむ親と慕ひて

○　栃木　片山武夫子

五月雨の降る日は戀し故郷のおやめ咲く家おもかげにして

○　四谷　戸田道子

名も分ぬ黄色き花に雨そゝぐ淋しき縁に物思ふ我

○　横濱　松尾文子

人氣なき社はさびて拜殿のくちし軒端に鳩のねむれる

○　信州　ちか子

思ひかれそゝろあるきの道盡きて一と株白し野茨の花

○　鹽釜　沼倉たか

亡骸の父を送りて行く山路鉦の絶間になくほとゝぎす

○　四谷　濱田秀子

病む姉が愛ちらしのまくらべにちからなく散るしら梅の花

○　福井　伊藤愛子

丸窓を細目にあけし人若し雨はこぼるゝ小はぎ白萩

○　金澤　芳江

遠近にたてし幟を見る每に亡き弟の偲ばるゝかな

○　福島　西野富美子

青すだれなかばかゝげて納涼す君が袖にえならぬ薫

○　莊原　山田ふみ子

ともすれば虚榮にはしる女氣の淺きに似たる紫陽花のはな

○　四坂　渡邊梅子

何にせむ心か知らず二十歲を花ちる水にうつしても見し

○　大阪　梅村愛子

我をまつなやめる人の手ずさひか琴の音聞ゆ松原くれば

○　山形　紫穗子

つばくらめひるがへり去りひるがへりまた來る朝のほの白き空

○　仙臺　南琴代

ほとゝぎす梅雨晴れのして月光の限なき夜なり海荒れて鳴る

○　中込　近藤美代

綠萠ゆる野末に立ちて瞑想に耽る乙女に夕月のさす

○　下野　露香

人事の繁にもあらず寂びし心戀ふ我こそうかれ



美文

雨の日の感

旅順 倭文子

昨日から雨は些もやまない、春雨の、五月雨のと感想を筆にした氣樂な處女時代が戀しい、朝から乳呑兒背にお襁褓の洗濯が一山、それ〲焙りに懸けて乾す樣にしてホツト一息、つく間もなく後片附に掃除でもうお晝、「母さん、只今」と學校より歸つた七歳の一郎は、鼻緒が切れて轉んだとこれは又胸から靴から泥まみれ、覺えず此雨にと叱りつければワツとばかり、ほんとに自分も一緒に泣き出したい樣が、叱つたものゝ又すぐ可愛想になつて、やつと、御飯で機嫌を取つた、子を持て知る親の恩、つく〲逝かれた母上の辛苦艱難を感謝せずには居られない、(一等)

乳母の里

東京 竹内富子

夕方から爺やの案内で、三保の明神樣へお詣りをする、鳥居を出て松林を濱の方へ一筋に行くと、潮氣を含んだ涼しい風が鬢を吹く、颯と梢に音がしたので、ふいと仰向くと、何時しか月が上つて、玉のやうな露が散る、羽衣松碑の邊りへ來た頃には、裾も袂もしつとりと濕つて居た磯風にせめられて、姿を亂した松の一木へ身を靠せて見上げると、月をまともに受けてすつくと立てる富士の崇高さ、裾のあたりは脊きし墨色の滲んだやう、振り返れば寄せては返す波がしらにたゞよふ船の此所彼所、飽かぬ眺めに恍惚として居ると、「奥樣、乳母やの里にも好い所ががんせうがな、私も二十歳の春、只一度江戸へ參りやしたが、其の時にお前さま……」、また語り出しては其當時を懷かしがる、(二等)

午後二時

芝 夕ほし

紋羽二重のお被布も黑、おみ帶も黑繻子、黑ずんだセルのお召しのお痛々しい事、侯爵樣が薨去遊ばしてから奥樣も滅切りお氣がお弱くおなり遊ばした、とは長年二位樣附のお冬さんのお話し、緋縮緬のお座蒲團に、お切下げのお髮をうつむけて、新聞を御覽遊ばしてゐらつしやる、……「韓國統監も、矢はり寺内さんがやつたか」とお獨り言遊ばして、「草よ、をるか」お呼び遊ばす、「ハイ」と心の花を唐紙の外へ置いて、お居間の敷居へ兩手をつく、「これを讀んでみよ」との仰せ、黑ビロードの胸側をおそばへすりよせて、「嗚呼長閑の鄕」といふのをよみ始める、二時を報ずるお食堂の時計が廊下傳ひにゆつたりと響いた、(三等)

母校にゆく

美作 水江新子

二年振りで母校の門をくゞつた、ドキ〲する胸を押へながら寄宿舍

の方へ行く、松の緑も泉水の水の色も昔のまゝに美しい、向ふから乳母車を押して、須川先生が來られた、「まあ水江さん、久しぶりぢやありませんか」、「はあ、先生、御無沙汰許り致しました」、互に挨拶――、

運動時間と見えて、皆テニス、ブランコなどに餘念がないが知つてる顔の人はみえぬ、私もクロッケーでは自那チナンだつた、あそこでよくしたつけ、森藤さん等と――、先生が「したかありませんか」と肩をたゝかれたので、びつくりした、音樂室からもれて來た床しいヴアイオリンの音が止んだ、とどん／＼大勢下りて來る、あ、三年の人達だ、「あらまあ、あらー」つて皆嬉しさうにこちらへ駈けて來る、私もなつかしさに駈け寄つた、(芳逸)

池の邊り

京都　黃菊

妙子樣と二人で家を出た、畔道には、すみれの二三輪がわづかに春の名殘を止めて、時々聞えるひばりの聲もあはれである、村の小さな宮に休んで、又坂を上る、都では聞きなれない蟬の聲がしきりに起る、色あせた鳥居に飾られた岩に腰おろし、歌思ひ乍ら歩の樣に下を見下す、木の間に池があつて、さゞなみが圓く輪を畫いて動いてゐる、妙さんをうながして汀にゆくと、青い蛙が澤山飛び出したので驚いた、二三歩進むと其所に居ためだかの群れは皆逃げた、又歩く、又逃る、今度は下駄を捨てゝしのび足に近よつたが、見ろと矢張り一匹も居なかつた、(芳逸)

淺ましい虚榮

東京　かつら子

「えゝ私のよ」と思はず云つてしまつた、アッと氣がついた時は既に遲い、皆樣は、もう「いゝ綺れえ」、「よく御似合ひなさりさうだわ」と感心してみてゐらつしやる、あゝ醜い女、しかも氣の弱い私が、今となつてどうして取消されやう、私は思はずまつかになつてさしうつむいてしまつた、よそからの頼まれ物をさも我物顔に云ひふらす、之を虚榮と云はずして何と云はう?、いくら、一寸も自分の物を離はないのが見つとむないつて、うそ迄ついて見えをはるに何及ばう我ながら淺ましい心になつたものだと思つてゐると、先生がはいつてゐらつしやつた、「オナいム桐です事、貴女のでせう」と云はれた時、私は何とも答へる勇氣はなかつた、そしていつも「よその方の?」つて皆樣のけいべつの目で見られるのよりは、餘程苦しいとつく／＼思つた、(芳逸)

妹の獨唱

京都　幸子

校長先生の、子供日興會の辭がすむと、柱にかけたプログラムが一枚はれられた、「獨唱森の歌、吉野鈴子」と筆太に記されたのを見てハッとする内に、妹は高い壇の上にあらはれた、美しくお化粧した顔に、黒い瞳がパッチリと、紫矢がすりの着物に、お下げの白リボン、海老茶袴にスラリと立つた可愛らしさ、拍手喝采が四方に起る、やがて先生の彈き出したピアノの音につれて、妹は、「森の鐘が」と歌ひ出した、美しい聲は廣い講堂に澄き通るやう、あちらでもこちらでも、いゝお聲ですれといふのが聞える、私の胸は嬉しさと、誇りにみちた、一番から四番迄滯みなく歌ひ終つた時は、拍手喝采鳴ろが如く、私の眼には涙が一ぱいたまつた、

頼もしき行末

福島　天野貞子

「兄様、一郎さんを何に遊ばすの？」、云ひも終らぬに、傍より「僕・大将々々」と肩そびやかし、「これにかう勲章さげて東京の叔父様の様な背のたかい馬にのつてれ」、一郎君の気焔未だ半ならざるに、二郎君「僕は、おばちやん、僕はれ、海軍の大将になるの。海軍がいゝや、ほらいつか見にいつたでせう、軍艦れ、あれにのつて世界中の海をツッ〳〵走るんですよ、面白いなあ――」、勇ましき二少年。あの愛らしき口にかく天晴なる抱負が未来をとく、父たる人いまだ語らず、先づ歓喜の色其の面にみなぎる、

不安の念

京都　京子

一匹二匹蚊のくるのを我慢して針箱持ち出て産衣に綿を入る、赤い鹿縮緬の表に岡嘉付いた小さき着物もう二ヶ月すれば役に立つ、どうか今度は男であつてほしい、又女かと云はれ度くない、あゝ思へば道行く中にも二ツ三ツの男の子が目に付て早く彼様に等と自分ながらをかしい、花子の時には十九の厄年に当つて、思ひ出してもゾッとする様なお産であつたが、今度も又二十五の厄年と思ふと、其当時がありありと浮んで不安の念がムラ〳〵と起る、

ねられぬまゝに

相模　婦美子

ねぐるしい、いやに胸がわく〳〵する、じつと両手で押へて落付けや

うとあせればあせるほど、気はそゝりたつ、目はいよ〳〵さえて、悲しい事、淋しい事、嬉しい事などばかりが、妙に頭に浮んでくる、ふと気が付いて耳をすますと、遠く近くさら〳〵〳〵、優き女神のさゝやくやうな水の音、あゝあの清いすんだ音、身は仙境にある思ひがする、広い河原の小石のかげにはかじかが可愛い声で鳴いて居るだらう、そしてお月様はほゝゑみながら川瀬を見いつて、入らつしやるだらうと思つて、又思ひにふけつた。

耳下腺炎

東京　夕顔

まだ生れて百日たつかたゝずの花子が、両頬が腫れて熱が高いので、お多福風かと思つて用心して居たが、乳が少しも飲らず泣いてばかり居るので、唯事でないと思つて医者へ駈け付けたら、これは耳下腺炎で、もう手後れになつて散らす事が出来ないとの事、手術などの経験のない其の時の私の心、顔の色迄蒼白めた、顔や頸筋などに傷持てる人を見ては身震ひせし程の私が、我身より可愛き此子に、しかも両耳に傷跡を残さればならぬかと実に身も世もあられぬ思ひ、やうやく気を取りなほして手術室へ行き、種々の道具の並べるを見ては、又々身の毛のよだつを覚え、手術の様は見るに忍びずして目を閉ぢて居た、

牛込見附

牛込　近藤美代

夕飯を終つて、あんまり暑いので母さんと一緒に散歩に出る、神楽坂を下り切つてとう〳〵濠ばたまで出てしまつた、濠を越して番町の方へ架けられた橋の上に立つと、遠くは小石川の方から、近くは市ケ谷

の方まで一目に見渡される、堀に沿ふた往來からは、明るい光りが幾筋となく洩れて、其れ等が皆細長い影となつて堀の面に映つて居る、其間を數知れぬ電車や人車が行つたり來たりして、其動くにつれて水面の影も遠く近く動いて居る、堀を渡つて來る涼しい風が頬を撫でゝは逝つて行く、

夜の輝き

東京　靜子

すぐ傍の田の中で、ギャー／＼と無數の蛙がないて居るので、つんぼでなくても少し聲の小さい話は中々聞えない、時に立つて見渡すと、初夏の夜の空なごりなくはれて、キラ／＼と光る金星の近くに、あれがヘレー彗星といふのであらう、月なき今宵は明らかに見える、晝間つみあらされた茶畑の間から、ゆるやかに吹いて來る風の香りも心地よく、足もとの細い流れの草間には、大きな螢が只一つ飛んでる、

涼しき眺め

尾張　榊原みね

笠守觀音に賣り殘したる金魚賣の、呼びもせざるに門くゞり來て、青葉茂れる柿の木の下へ水にぬれたる桶をおろすに、本氣強く斷るもあはれと思ひ、色好きを一番求めて、伊豫燒の白き水盤に入るれば、水の淺きをかこちてや、あるは清きを喜びてや、大なる尾打振り、鰭など見せて泳ぎ廻る、妹のあらば喜ぶらんに今は亡し、

音樂會

甲斐　はな子

廣い講堂、青いカーテン、立錐の地なき聽衆の前に、納戸[illegible]の袴胸高に、小林先生と共に一禮した時は、不安とはづかしさに鼓動が高まつた、やがて先生は伴奏するためピアノに向はれた曲はチーメーロー、：「…うづまく硝煙、飛び散る彈雨…」と唱ひ出すと、もう無我、心はナポレオン敗北の當時に走せて、只だ戰場の悲劇を思ふ、「運命つきぬあゝ佛蘭西」に曲は終へ、拍手の音に我にかつて壇を下りると、待ちかまへたクラスの友から、「まあ實によかつてよ」、「クラスの花よ」なんてさんざんおだてあげられた、

出帆

赤坂　齋藤紫桂子

青葉の小樽といへばなつかしい物の一つに思ふてゐた、此美しい港を○○丸は、今錨を上げんとして甲板上にはガラン／＼とあひ圖の音が響き渡る、送つて下さつた皆樣が最後のお言葉、「それでは氣をつけて、」と其まゝランチに、お移りなさる、いよ／＼之から一人旅と思へば、しみじみ心細さを覺えて、言葉もなく欄干にもたれてじつと見送る、後からふと注意せられて心づけば、船は既に白波を立てゝ進んでゐた、彼方に見えし中央停車場も微かに、夕日をうけた青葉の山も、波の碎くる突出た岩も、だん／＼遠くたそがれて行く、あゝかうして此船も一晝夜の航海をして、明日の晩には名さへまだ珍らしい樺太の港に入るのである、

汐干狩

芝　くに子

波しづかなる品海沖、ピチャ／＼と飛沫を打つ波の音さへも云へぬ心地よさに、船歌おもしろううたひながら海苔取場の間を漕いで行く、「さあここらでお入りなさい」と船人から敎はつておりる、もすそ高くしばり

上げ潮もあらはにそろ〳〵と浅瀬をわたる、幼い時手拭の両端もつて小魚捕へた昔が偲ばれて急に戀しくなつた、幾度か此處貝にだまされ小時間もかゝつて共は蛤五つ私はたつた二つ、いゝ加減に岸に歸り、取りたてのマルメのお刺身いたゞく、かへり路いそぐ眞帆片帆搾らぐ暮色につゝまれて得もいはれぬ趣、廿つの蛤を大事そうに持つて陸へ上ると、空にはもう星が二つ三つ輝いてゐる、

破れし我家

豊後　竹村きよ

豊後町のまちはずれ、小琴の調べ絶ゆる間もなき松野川の支流を前にこんもりとした森を控へて立てるさびしげの我家、夕餉の煙はかすかに立登り、破れたるまま垣の間よりは、黄ろい草花がほのかに見える、

あゝ彼のあはれげの我家、あの破れたる垣、かすかなる彼の煙……、務めの歸路うつとりとして此様を見つめた私の胸には、二年前の我家の焚、兄の失敗、父の永眠と、思ひはひし〳〵と浮かんで來る、

家事實習

美作　田鶴子

「まあ母様、こんなに澤山て」、「アゝみんなよ、青菜を男に見せるなつてれ」と仰しやる、お釜の蓋とればシユーンと勇ましい音たてゝ、ぐらぐらと沸えかへつて居る、斯んなのを沸騰と云ふのだなと一寸考へて見る、摘みたての若々しいよく揃つた菜をサーツとつかんで、サーツと入れる、蓋を締めて一寸覗いて鍋をさし込んだ、鍋てシユーンと沸え立つた様子、一度返して後、アラメの籠に上げた時、全く驚いた、あれだけあつた物が今は私の片手にでもらくに握られる、

夕立

牛込　寺村留子

涼しい風が吹いて來たかと思ふ、まもなく大粒の雨がポツリ〳〵とおちて來た、松があはてゝ引窓を締めてゐると、ピカリツと光つた、「アラ奥様」つて頓狂な聲を出す、ゴロ〳〵ツて響くとザーツと烈しく降つて來た、奥の縁側の隅に三毛が少さくうづくまつてうらめしさうに外を眺めてゐる、……誰か「早く〳〵」つてお玄関で聲がするので、驅けてつて見たら、マア驚いた、敏雄が、制服制帽のぬれねづみ……、あはれ好い男も、かうなつてはメチヤ〳〵だ、……すさまじい雷の響もだん〳〵遠退て、西の空が明るくなつた、

月見草

奈良　百合香

「明日は同窓會なのに、一日位のばしたつてもいゝんでせう」、「えゝ、行きたいわ私、けれどもれ、今日迄の御暇戴いて來ただけなんですもの、それもやうやくの事よ、そりやきびしい御家なの」、池に面した縁下の日かげに、月見草が咲いて居る、ふと目を花にうつした露様は、「私あの花大好き、淋しい花れえ、」と鶸色絹のハンケチまさぐりながらうつ向いたとたんに、桃割にさしたかんざしがスルリとぬける、長い睫に露の玉が光つて居た、露様には父様も母様もない、



書簡文

百合子樣へ

牛込　輝子

御手紙嬉しく拜見しました。仰の通り草坊も大層大きくなりまして、毎日々々村の子等とめだか掬ひなどして居ります。私は百合さんのお言ひの樣にマダム振るなんて事は絶對にありません。それはれ、私も在學時代には隨分ハイカラと自認して居た位ですから空想も相應に大きく、他日家庭を作つた時にはかうもしやう、あゝもしやう、見事理想の家庭を作つて、クラスメート中の羨望の的とならんなどゝ考へて居ましたが、だめ〳〵、空想と實際とは一致しないと云ふ事を、此頃始めて知りました。東京では今、渦卷とやら、辰卷とやらが流行るさうですが、そんな事は、私、蚊のなく程にも、感じなくなりました。學生時代に獨唱を賞められた聲で、守歌を歌ふ樣な仕末、其他は御推察下さいまし、私、すつかり世話女房になりました。

此夏は御歸省の由、よろづは其節に御覽遊ばして、お驚きになるともお笑ひになるとも、それは貴女樣の御隨意に遊ばせ。（一等）

心置なき友へ

越後　花散里

日比谷の感想を詳しく書き送れよとの仰せなれど、其を申上ぐることは、私、極りが惡いわ、何しろ寫眞を見た許りなのでせう、だから異つてやしないかと、そりや心配でしたの！　だけど式場に入つてから、きよろきよろ見る譯に行きませんので、じつと低頭いてましたの！　奧まつた室で仲人と二人腰掛けたの、こりやうまい、此樣の事なら何時迄でもよいと思つてましたら、ふいと前の襖が開かれて隣の廣間へ引き出されたのです。サア大變、幾十の目は私に集るのですもの、未來の夫は眞正面に居る樣子、御盃がすんで神前へ二人並べられた時は、胸がドキドキして何ともいへない感に打たれました、私は式が濟んで、休憩室に入つた時始めて、夫の顏を見ました。どんな顏つて、それ丈は御免なさい夫は私が式場に入る時すでに見て居たのですつて、女は損ですね（二等）

田舍より

長野　あや子

紗子さま、美しい繪葉書有難う。今れ、お隣のお咲さんに手傳つて貰つて田植のお晝飯運んで行つて歸つて見たら、あなたからの御たより、私ほんとに嬉しうございました。

仰せの通り、田舍は今が一番忙がしいのです、私も毎日盲縞の筒袖に白手拭の姉樣被り、やれ畑打ちの、それ草刈りだのと、追使はれて居ます。でも面白いのよ、私此頃は最うすつかり大悟徹底して、昔のやうに煩悶したり泣いたりしませんの。野良仕事に一生懸命になつて居るせいか、近頃はめつきり肥りましたよ、何卒御安心下さい。裏の夏桃が今年は枝もたわゝに實りました、暑中休みの御歸省時分に恰度たべ頃でせう、

早くお歸りなさいな、さやうなら。（三重）

避暑地より

東京　美國子

久敷御無音に打過ぎ候ふ間に、このむし暑さ、いかに暮させ給ふらむ。閑かまほしきは昨今の御左右に候、私共一行この地に止る月餘、日毎日毎吹く磯風を顔にして長く連る白砂青松を縫ひ、鷗啼く白波に身を冷やし、寄せ返る樣な舟唄に耳を傾はせなどして、此頃の暑さを忘れ居り候。鵜女の蒸籠に夏蕪の賑まるだしの可笑しかりしも束の間にて、今は私も之にひけをとらぬ程、眞黒に燒けて候。此間より皆で稲小濱の砂滑き處をあさりて集めし貝殻一籠、御目にかけ申候。暑さ厳しき都の夜を、この籠に枕守らして涼しき夢を結び給へかし。折かへし御手紙いたゞきたく、此方よりも又書れて。不備。（芳逸）

金瀧温泉場より

君代　岡美都子

途中無事にて只今金瀧館に着きました、御安心下さいませ。長岡停車場から一里の道を、ガタン〳〵人車に揺られて、湯野村に着いたのは、午後四時近くでございました。それから十綱橋を渡り、温泉浴場のある假屋町を過ぎ、うねりくねりの砂利道を、七八町行きましたら、岩を切り拔いた細道にかゝりました、岩からは、チヨロ〳〵と水が湧き出て、水晶の樣な滴が滴れる、其涼しさ心地よさ、何に譬へ樣もございません、此處を通り拔けますと、右手の川端ひが赤川温泉、すぐ行先の二階建りが金瀧温泉でございます、宿の軒下が赤川の流れで、耳馴れぬ瀬の音のいさぎよさ、琴の調べや尺八の音も、あちこちから聞えます。追て近邊の風景、風俗に就ての觀察を申上げますが、今日は只だ安着のお知らせのみにて筆を止めます。かしこ。（芳逸）

故郷の母に

東京　侗子

夏蠶を御飼ひ遊ばされし由、お暑き砌なれば一際お骨の折れることゝお察し申候、本年は桑の葉も大當りに候へば、夏蠶も嘸度御苦勞甲斐有之べくと喜び居り候、昨年より私の居らぬため、孫緑にも誠にも一方ならず忙しい思ひなさせ、申譯これなく候、夕立を氣遣ふて、忙しい氣に鎌研揃へて走せ行き給ふ御姿の偲ばれ候も、遠方の悲しさ、御手傳ひも出來ず、空しく故郷の空を眺め居り候。都の私、毎日涼枝對手に繪畫たる野に遊び暮し居る事いかにも勿體なく存候。涼枝も此頃は赤き草履を小さき足に結び付け彼方此方ヨチ〳〵致居候、愛らしき姿御目に懸け度候へども御養蠶中は却つて御邪魔と存じ候まゝ、やがて美しき繭の頃と樂み致し居り候、涼枝は只今庭の小松に差かゝりたる月に半面を照され、夢にほゝ笑み居り候。かしこ。（未逸）

避暑の宿

駿河　松永りう子

何かと用事に取紛れ、延引に相成り、お待兼れの事と存じ上候、御傳され候日より知人にも頼み心當り問合せ候へども、避暑のお宿としては

適當の所無之候ため、如何はせんと思案に暮れ居り候處、昨日知人の許より好個有之候まゝ、今朝私事其家へ参り、座敷の勝手など調べて、只今歸宅せしばかりに御座候。お望の如く位置は海岸にて、空氣も清く涼風前庭の青葉に吹流る樣などいと、住みよげに見受け申候。

海水浴も早や四五日前より始まり、都の方もちらほら見えられ申候、一日も早くお出掛け遊ばされ度お待ち致居候。

樺太へ

横須賀　小夜子

やう／＼氷の塊が流れ出したとか、餘程内地とは氣候がちがふで御座いませう。此方で想像する程でも無いと仰せられますが、遠く本島を北に離れた御地と思へば、矢つ張御身の上が案じられます。十分おからだを御大切に遊ばすやう祈つて居ります。

當地では御存じの通り、最早袷を單衣と着更へ、青葉越しに吹いて來る風を喜ぶ樣になりました。

御在宅中、根分けをなさいました夏菊は、唯今が丁度眞盛りで、裏の植木畑を飾つて居ります。朝顔の幼い二葉も朝夕の露に濕つてなか／＼元氣です。早く御航海をお畢へ遊ばして、お歸りになる日を待つて居ります。（六月二日認む）

汽車の中より

信濃　優梨子

汽車は今、越後へ這入らうとして居ます。黒姫、妙高の連山は若々しい初夏の装ひを凝らして居ります。

「冬だと此邊で立往生をさせられるんですな」と窓際の人が言ひました。私は汽車も家も埋もる樣な、雪の日を想像して見ました。

華やかな夕日が、金色の波を打たせて、日本海の眞中へ沈む頃、海邊へ出る筈です。

今夜は、荒波の音を聞きながら、磯近い宿に眠るのかと思ふと、たまらなく物凄くなつて胸が躍ります。

奉公先より母へ

甲斐　星野華子

つくしがた心にかゝる波の御おとづれ、嬉しくも、拜しまつりて、まのあたり御なつかしき御聲音を聞きし心地いたします。皆様御かはりもなく、ことに兄上御病氣御本復と承りて何より嬉しく存じ候。御仰せごと一々服膺いたすべく候。まことに、種々たへがたき事も候へど只母上の御ためと思ひ、しのび居り候へばむづかしき事もこれなく、其上此頃は仕事もおひ／＼手に馴れて、時折は好みのわざもいたし居り候。

これは些少なれど、よく働きし故ぞとて奥様より特別の御心づけに候へば、これにて何ぞ御好みの物なりと御求め下され候やう願上候。母上様だにまさきくおはさば、私ことは、苦しき事も苦しとは思はずに辛抱いたす覺悟に御座候、何卒々々御身ないとはせ給ふやう御願申上候。かしこ。

故郷より夫の許へ

伊勢　[illegible]子

今日は朝からお母様と一緒に、蓑笠仕度で田植に出ました。是からは益々忙しくなる許りで、手紙も落付いては書けないと思ひます。こなひだのお歌、もう、すつかり口癖になりましたよ。私あんなお歌を聞くとほんとに嬉しくて堪りませんわ。今度は屹度お寫眞を下さいまし。坊も大層可愛らしくなりました。あなた様が寄宿舎の寝臺の上で　我が子の顔を獨り色々に想像遊ばしては、抱いても見たいやうに居らつしやる時坊は母の懐に抱かれたまゝ、乳の房を離してシツカリ乳房にくつ付いて居ます。坊の顔！　其れはほんとにあなた様に生寫しです。今度お歸りになる時には、綺麗な着物を着せてお迎にゆきませう。

校友會の模樣を友に

埼玉　ひらさき

昨日の校友會はなか〳〵賑かでございました。在校の方々で對話だの活人畫だのをなさいましたが、それは〳〵皆さん御上手で被居るのよ、家康の時代の様な、そんな〳〵野暮な方は一人も被居りませんわ、プログラム御覧遊ばせ、田舍だつて中々振た事をやりますわ、私達のクラスでは廿人程しか御出席がないのよ、總りお召の御單衣に何とやら、私共には名も判らぬ様なお召帯、時計なら指環なら寸分隙かさぬKさん、それからお召物は劣つても、あのお容姿で十倍も美く見たら様、皆が澄して被居つてよ、あの方特有の鼻の先でフーンを澄してね　私共には秘々御挨拶も御座いませんの、大層な御權式ですこと、Kさんもお見えになりましたが、大變お痩せになつてあの肺病質らしい目が一際險しくおなりのやうよ、かく言ふ私は何うかと被仰るでせうが、私はすつかり百姓家になつて了ひましたわ、K様達のお友達で僕なんていへる柄ぢやないのですわ、さやうなら。

故鄕の姉に

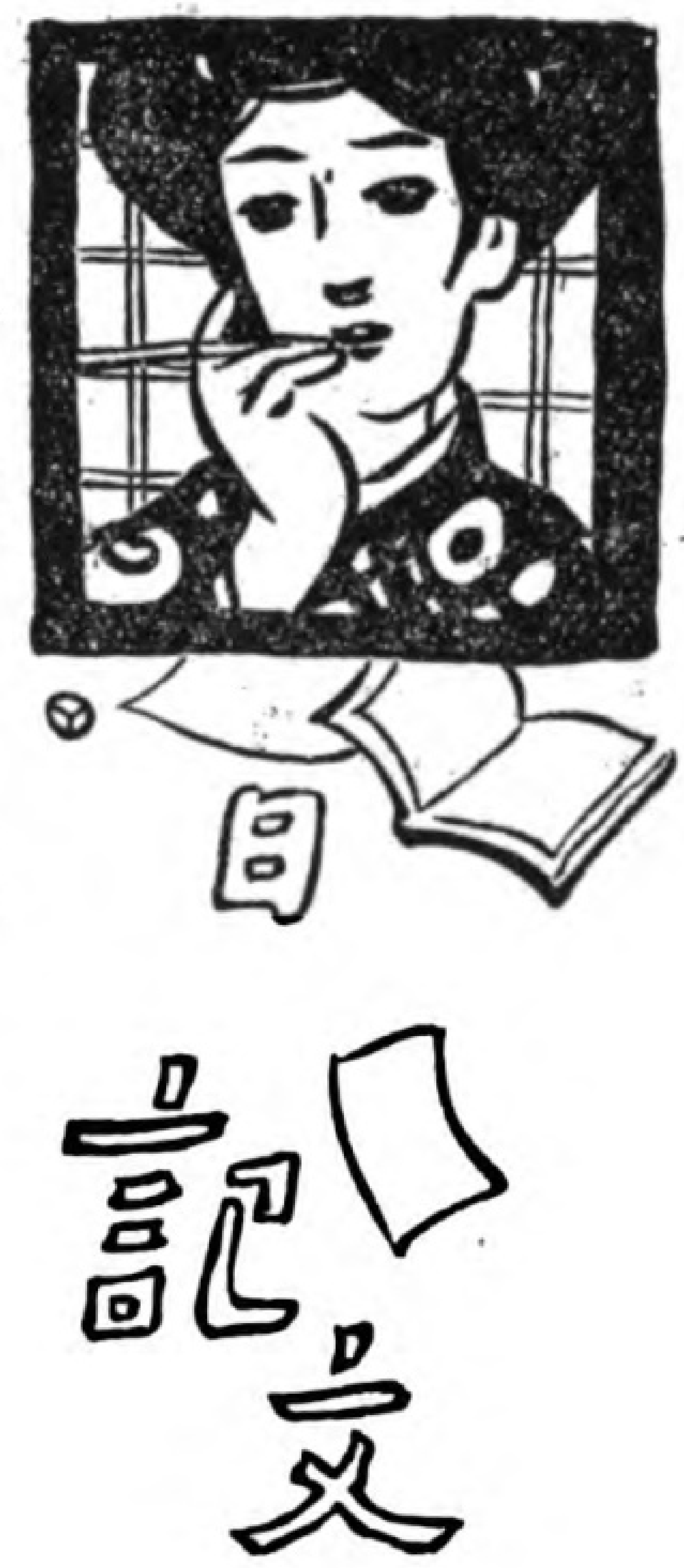
名古屋　高橋千代子

姉様、もうすつかり暑くなつて　毎日樂しく勉強致して居りますから。御安心なすつて下さい、初めのうちは寂びしく、心細う御座いましたが、此頃に寄宿舎生活が面白く愉快になりましたから、もう御心配には及びませんよ、満子は丈夫ですか、假名でかまひませんから手紙を書かして送つて下さい、それから此繪葉書はね、地久節の日開會した校友會の寫眞なのです、一組は田村のお菊ちやんに上げて下さい、あの子はさぞ姉さんらしくおなりでせうね、よろしく仰有つて下さい。運動部の遊戯は實に綺麗ですよ、満子に見せたいと思ひます、此次の日に御知らせしますから連れてきて下さい、直きに就眠の時刻になりますから、是で筆を擱きます。

出產を祝ふ文

島根　秀子

庭前の花菖蒲、今を盛りに咲き揃ひ候、昨日の朝方雨上りの葉を愛で乍ら、「大幡旗にも日本男子あり」の句を口吟み候折から、うれしき御報に接し、あなた様の御よろこびお察し上〳〵、殊に御男子御出生御兩方とも御健かに在らせられ候由　何よりのことゝ祝し上〳〵、嘸かし麻々しき坊ちやまと推し參らせ候　早速參上抱かせて頂き度候へ共、程遠くにめる身の思ふに任せず候、別品粗末乍ら差上候まゝ、御不斷着になりとなし被下度、何れ其内、御室坊ちやまにお逢ひ可申、積る話は其節緩々致し候先は不取敢お喜びまで。かしこ。



青葉の頃

福岡 眞砂子

雨が降る。黒塀の際の柘榴が美しい。今年始め、咲いた赤い花が、青葉がくれに二つ三つ。福岡でよく見かける景だ 門前を露ちや〳〵が通る袴の海老茶の色が懐しい。

青い土手が大分削られて赤くなつた。あの池を埋めてあの土手を平にして、電車の通る道にするとか、幾春か若葉摘みに樂んだあの土手、思出多い彼の池、昔の儘にしておきたいものを。

郵便との聲、受取つて見ると榮さんからの御便り、久々にての御文とて、雲間を洩れし月影を見る心地して嬉しい。此日ダリヤの花始めて咲く。（一等）

園藝日記

山形 阿部英子

從兄さんから西瓜の種を十粒許り貰つて來て、裏の小さな私の畑に蒔いた。尤も肥料丈は作助に手傳つてもらつた、そして種を撒いて土を細かにして其の上に砂を少しかけて置いた。

翌日、見舞つたが何の變りもない。其の次の日も何の變化もない少々ぢれつたくなつた、もしや從兄さんが自分のばかり好いのを取つて、私には惡い種を與れたのではないか知らとも疑つて見た。其後二日間强い雨が降つた、土の掛け方が足らない樣だつたからもしや雨の爲めに種が流される樣な事はないかと一方ならず心配した、雨が晴れて丁度十日目の朝、ぽつちりと柔かい、嬰兒の手の樣な瀞みどりの二葉が芽を出して居た 私は嬉しさに飛び立つた。（二等）

始めての留守番

尾張 榊原みね

今日 母と祖母とに出懸けられて始めて留守番をした、何だか心許ない樣な氣がする。夫の出た後は妙に下女がすゞける。庭の掃除、臺所の雜布も私が獨りでやつた、直ぐ近所の八百屋へ使に出せば一時間も遊んで歸る。しみ〴〵年寄の必要を感じた、例の魚屋が來て鰈を二尾置いて行つた。料理辭典を開いても面白いのが無いので、そのまゝ魚船に入れておく。お晝は寂しく下女と二人精進で過ごす。午後振賣の松葉賣が乞食のやうな姿で這入つて來た、鄭重に斷つてやると、恐ろしい顏付で睨めて行つた。早く皆が歸ればよいと思ひながら、針仕事にかゝると、芝居で見た人殺しの記憶が頭に浮んで來る。うす暗い五月雨の日も早や四時を打つた。先の鰈をフライにして居る時、夫が歸つた。下女も顏を出した。（三等）

子供があれば

京都 朝子

幾度言つても同じ事は一つ事と、夫は笑ひなさるけれど、こんな便り

を見ると又悲しくなる。何故私には子供を授けて下さらぬのだらう、今日の姉様の御手紙にも、年末には私も母にとある。同じ頃に結婚した従姉達は疾うに母親に成りすましてゐるのに、私ばかりは、あゝ。気が塞いで針持つ気も出ぬ。

先日送つて上げたお菓子が大変とおいしかつた、殊に買入らずのお品と姑様から細々お礼状を下さつた。やさしい姑様、やさしい夫、あゝ是で子供さへあればと 又しても愚痴が始まる。今夜は何となく淋しい晩だ。せめて姑様でもゐて下さつたら少しは紛れるものを。（秀逸）

花日記

牛込　輝　子

昨夜から降り出した雨は未だ歇まずに。しと〳〵と降つて居る。此間例の植木屋で買つた真紅の罌粟は、雨に打たれて頭重気にうなだれて居る、その葉末から、ぽたり〳〵と落ちる雫までが紅色に染まりそう。そつと其露を手に受けてお白粉を解いたら、屹度よい肉色が出来るでせう

父様が鶏小屋を直すとか御有つて、私の大事のあやめを三本も折られたで、「父様折角今咲き出さうといふ蕾を、可哀相ぢやありませんか、私損害賠償を頂くことよ」と申上げたら、よし〳〵と其儘何所へかお出掛け暫くしてお帰りになり「さあ罪、あやめの代りだよ」と、お渡しになつたのは、まあ嬉しい事、此間から欲しい〳〵と思つて居たクリームの薔薇これからは度々折られても構ひませんわつて大笑ひ。（秀逸）

機織

鈴木　しらはぎ

昨日下着へなした私の单衣を、今日は機に上げて織り始める。未だ馴れないので調子が悪く、ともすれば梭が落ちる。ベタン〳〵と愛嬌ない音で織つてると、垣一重のお隣りでカラカラ〳〵と糸を繰る音、きつと田鶴さんだ、最早、養蚕も済んだので糸繰りをなさるのだらう。お嫁さんとはいふものゝ、根の高い束髪の若い初々しい姿が目に浮ぶので、悩悩して庭を眺める。」と、花壇の葵をヒラ〳〵と舞つてた白い蝶が、虞美人草 とまつた、糸繰りの音がはたと止んで、オホホゝゝと若い華やかな笑ひ聲が起つた通り田鶴さんだつた。従姉同志の隔てなさに、「貴女、ほんとに幸福だわ、あんな優さしい、而かも叔母さんをお姑に持つて」と言つたら多鶴さんは笑つて微居した、ほんとに幸福な人だ、終日田鶴さんの糸繰の音を聞きながら、静かに想ひに耽る、（秀逸）

さみだれ

駿河　若　葉　子

一日。朝からしと〳〵と雨がふる、青葉を撲つ玉水の音を聞きながらひねもす読書に耽る、羽を濡らした燕が顔を覗くやうにして飛んでゆく夜、弟の英語を繕ふ、十時やすむ。

二日。夜来の雨が拭ふたやうに晴れた。太陽が箭のやうに直射する、あゝもう夏である。園の梔子、姫百合、松葉牡丹、とり〳〵にかわゆい花を開く。葵の花は火をつけたやう、

三日。午すぎ空曇り枝蛙が頻りに鳴く。妙に冷めたい風が吹く。軈てまた降り出した。蝸牛がいくつも重さうな包を背負つて垣根を這つてゐる。梅の実が思ひ出したやうにポタリと落ちると、下にゐた鶏が身顫ひする、夜になつて雨が歇んだ、青い月樹々の雫がきら〳〵と真珠のやうにひかる。螢がひら〳〵と飛ぶ。

植木と金魚

東京 若紫

二日。今朝迄フランネルを着て居たけれど、大通りで團扇を買つて居る人を見たら、急に暑くなつて、絹ガスリの單衣に着替える、夜、兄様と植木を買ひに行く。チユウリツプを求めるつもりだつたけれど、何れも此れも氣に入らぬ物ばかりなので、二十八錢の薔薇を買つた大分兄様の巾着の紐がゆるくなつたらしい。

三日。餘り暑いので桃割をこはして、ウインナに結ふ。久し振りなので眞い恰好に結へない、仕方なしに昨夜の薔薇を一輪挿して、ヤツと何うにかよくなつた。夕方金魚が欲しいから一緒に來て頂戴と、無理に兄様を連れ出して、夜店で五尾入りのガラスの玉を買ふ。歸りに吉木様に逢ふ。「マア貴女、何日迄も呑氣ねえ」と言つて嗤はれた、

マダム日記

東京 國子

朝早く髪結が來た、久し振りに丸髷に結ふ。新調の珊瑚玉の簪一本さすなか〱うつりがよい。白牡丹で買つた波に千鳥の手柄も眞に涼しさうに見える。長火鉢の前でお煙草燻らして居る夫は、伏目になつた私の姿を見てたゞほゝ笑んで居らつしやる、私何だかきまりが悪くてならない、夕方藥屋を見がてら二人で散歩に出かけた、百花園は今やあやめの花盛りである、籠にかはれた一羽の鸚鵡が可愛い聲して、お竹さん一點張、私は面白くなつて何時までも相手になつて居る、五六間も前へ行かれた夫は一寸振り向いて「いつまでも子供の樣だなあ」つてお笑ひなすつた。

麥の穗

岐阜 菊代

今日は父と兄弟とが數枚の筵を庭に擴げて、扱ぎ落した麥穗を、ロナパラとか云ふ木で拵らへた鉄の様な物で、ポツテン〱と叩いてこなして居る、イガが内へ飛込むので戸を締めた、戸に大きな節穴がある日が照るので其穴が三寸大に障子に映る、それへ又、外の父が一寸法師位に映つて見える、丁度ポツテン〱の音に連れて父が踊つて居る様、其れが逆だから猶更可笑しい、妹と二人轉げて笑つた、机に向かつて頻りに考事をして居た兄が、八釜敷ツといきなり襖を引あけて見たが、是又、タスタス……ピツシヤリ締めて了つた、たまらなく成つて、お臍が宿替する程笑つた。知らぬ父は一生懸命ポツテン〱を續けてゐる。

坊に代つて

牛込 白菊

四時半に目が覺めたので、オギヤーと泣いたら、母ちやんはいきなり坊を抱き寄せてお乳を下すつた、母ちやんはおねむからうに御起きになつた、坊は枕元の風車を見ておとなしくねんねしてゐた、すると父ちやんがいらしつて、坊の頰にキツスして下すつた。

母さんは朝の御飯を御濟ましになつて、いつものやうに坊に御湯をつかはして下すつた 氣持の好いこと、坊ほんとにおぶが好きだわ、それから母ちやんオシメ洗つて、おんもを抱つこして歩いて下すつた、御門の前の八重櫻がちら〱と散つて、坊のお顏に綺麗な花片が落ちた。歸つてから、夕方までは眠つたり風車を見たり、時間々々にお乳を頂いたりしておとなしくしてゐた、其間母ちやんは坊の友禪メリンスのおべゝ縫ひやら、お洗濯やらいろ〱忙しくなすつていらした、又夕方お飯め

しあがつて外を歩いて下すつた。明日も好い塩梅にお天氣なら嬉しいわ。お天氣が悪いと坊のおしめが乾かないので、母ちやんがお困りだから……。夜、母ちやんは、おばあさんの所へ御上げになる御手紙を書かれる。坊のおとなしいことや大きくなつたことや、其他いろ〳〵と……やがて十時になつたので、母ちやんはお休みなさる。お乳をたんと頂いて坊もねんねした。

還暦

駿河　丘　靜子

今日は父の還暦お祝ひだ。東の山の端を離れた十三日の月が、淡い光りを桐の中面に投げて、今を盛りの芍薬がほの暗い庭に匂ひ出た時分、十疊の座敷に並んだ人々は、父を正面に兄夫婦が左、姉夫婦が右、子供が五人、それに山本の小母さん、……、太田の叔さん、お政まで加はつて總勢へ溢れた人數はすべて十四、賑かなことだ。燈火がついてお酒が大分廻ると「や、どうも好い心持だ。人生五十と云ふが、僕は早や十一年生き延びた、へゝゝえらい欲張りぢやの、その上かうやつて揃つた孫子の顔を見られるといふは冥の好いことだへゝゝゝ、さア〳〵皆、澤山飲つて呉れ。」と張切つた赤い顔をつる〳〵撫でゝ、父は限りない歡びに包まれてゐた。ふと私は、此處にお母さんも居らしつたならと思つて何とも言へない哀愁と寂寞とを感じた。

梅雨ばれ

千葉　鈴木孝子

昨日まで降り續いた鬱陶しい梅雨も、今朝は名殘無く晴れて急に暑くなつた照り切つた。汚れ物の洗濯で半日潰して了つた。午後漸く晴れと直

霧とを撒ける。柱時計が二時を打つた時「赤い夕日に照されて友は野末の石の下」と歌ふ聲がして、末の弟が勢好く「只今」と學校から歸つて來た。埃で顔が眞黒、「メナヽ」と「桃山」を半紙に包んでやると、引たくる様にして直ぐ戸外へ飛出して了つた。

夜。歌集「相聞」を讀む。

冬の日の窓の明りに亡き母が
　足袋をつくろふ俤姿見ゆ

母亡き自分には此の歌が身に沁みて哀しく、感ぜられた。幾度か口吟み乍ら十時半床に入る。

螢合戰

黒岡　竹石はるよ

あまりお天氣が續いたので、雨を願つて居つたが、待ちに待つた雨は一夜惜みなく十二分に降つた。今宵は其のせいであらうか、はた螢合戰の故であらうか、螢が急に殖えた。私は近所の人達と一緒に、九時頃から螢見に出かけた。其飛び様は上になり下になり、右に、左に己かじし舞つてゐる。是ぞ眞に活動する天然のイルミネーションと、形容しても決して誇奨の言ではない。私達一行は堰より水が粒々と落つる河に陣取眞白な水の泡は微の風自つと起り、晝の暑さも何も忘れて、恰も仙境に在る感がせられた。



天　深川　小桃

蕗の葉に蚊のかくれなく晝の雨

地　八王子　龜井季子

石屋から先は町なし百日紅

人　大森　大森もゝよ

寮に住みて晝顏の花に人戀ふる

秀逸

麻布　信子

活け上げて一瓣散りし牡丹かな

神戸　金子榮子

新墓の主は乙女か蝸牛

本郷　壬生此花

老人の齒自慢にくし夏大根

肥前　隈部ふじよ

廢鑛となりしを鳴くか時鳥

大阪　青木みさゑ

荒神へ路嶮岨なり蟬時雨

煩悶の窓に君戀ふゆりの花　德島　紫陽花

土用干に持ち出す衣の重さかな　山口　松村やす

雨晴れて紅絹ほす庭に風かをる　信濃　湖山白百合

その家の和合見えけり燕の巣　大阪　前川綾子

夏菊の袖にかをるや朝の道　日暮里　竹内美津子

春逝いて瓢をさむる翁かな　芝　野村くに子

すゞ蟲や小督が宿の燈あかり　小石川　野の露

晝寢せし間に剃られしを泣く子哉　橫濱　安川久子

いつの間に衣更たかだてのふじ　伊豆　すゞ子

茶袋に一夜螢の假寢哉　下總　日暮文

人聲を便りて行けば清水かな　長野　かつ子

淚多き人集ふ日やさみだるゝ　牛込　輝子

笑ふ子に又泣かさるゝ魂祭　栃木　增淵ふぢ子

嫂の返歌うれしや初幟　大阪　石原君子

宗匠をむかへてひらけ木蓮花　高知　伊藤くまえ

よくさかる子持地藏や時鳥　長野　丸山加代子

蟲干に秘藏の太刀の物語り　新宿　原山時子

可愛らし小[illegible]草に夏の雨　韓國　川崎みつゑ
笛おいてまどろむ窓に時鳥　志摩　こと子
三更にひとり友呼ぶ蛙哉　羽後　久子
人忍ぶけはいに暮るゝ夏の夕　大阪　白浪
茶摘み歌に戀知りそむる宇治の里　廣島　前田みさを
晒布干す堀割に白し芥子の花　大和　井関春嵐
夜をこめてしづかに仰ぐはゝき星　肥後　二葉
鳥もがな月の離亭に君戀ひつ　深川　信濱子
肌白き京の女や繪帷子　名古屋　須賀てい
吾がせこに文かく夜や郭公　茨城　岩瀬谷夏子
背二すのびて官吏の[illegible]哉　滋賀　深田、蘭子
夢む地針をはこばす日長かな　野田　いの子
塵の世の暑さを知らぬ夏の月　横濱　道女
早乙女となりてそれより大人びぬ　千葉　清水せつ子
夏川に馬驅り入るゝ男かな　淡路　原田静
白ゆりのひともとゆかし母のおも　北海道　金子竹枝
螢とんで音なき池のほとりかな　大分　阿部たつ子
石女のいまゝで若き袷かな　伊豆　鈴木久枝子
寐ざめにもきくや打出のはま千鳥　攝津　わかば
晩風に馬の鞍重く乙女哉　大阪　鈴木欣
青すだれまいて富士見る夏の宿　新潟　加藤紫琴
紫陽花やひるねの夢を彩りぬ　本郷　吉田雅
夕立や傘かる軒に晴れ渡る　大阪　木村とく子
夕顔や牛飼ふ人の家二軒　長野　小林静子
三枚[illegible]り[illegible]ふる暑さ哉　伊勢　小倉やす子

淺間山に情死ありとや時鳥　長野　丸山時子
峠茶屋雜木林の[illegible]鳴き　大阪　河原雄子
ほめながらしめる二階や夏の月　駿河　天野欣
青嵐妹がりぼんを落しけり　神田　入木原市女
卯の花を散らしてはいる乳母の家　淡島　千場みゆき
電線にならぶ子つばめ親つばめ　長野　丸山千代
妹逝きて他郷の通夜やほとゝぎす　宮城　加藤篤子
夏の月[illegible]宵はとゞ惑ひけり　下總　日暮ふみ子
米ひらふかまどの前のすゞめかな　大阪　栄花
浴衣きてすゞしく見える女哉　麻布　鈴木喜栄子
一群の鳩行く空やうすつく日　神戸　山口るい子
ひぐらしや湖畔の夏の眞晝時　三河　高橋むつ子
あせるほど高くとびゆくほたるかな　京都　渡邊ふき子
衣更へて冠[illegible]く男かな　相州　中田蘭子
五月雨ぞひねもす向ふつくゑかな　大阪　緒方花子
朝まだき水汲む我田露涼し　淡路　長船とよの
新らしき長屋にならぶ若柳　横濱　山崎糸子
化粧して笛吹く人や青簾　美濃　酒井萱美子
青桐をメラ〳〵過ぎ行く夏の雨　長崎　竹女
新茶など煮ましよ來ませと文しけり　信州　ちか子
晴の間を蜘蛛はい登る牡丹哉　鹿兒島　小牧貞子
夕顔の窓に琴ひく女かな　麹町　牧野杏子
乳匂ふ牧舎の裏に葬の花　神戸　森中かず子
望まれて夏を嫁ぐ娘の肩細き　奈良　百合香
笠をとる吹井の傍や青嵐　相馬　しづゞ

讀者倶樂部

▲前號に被物に就てお說がありましたが、私は以前から考へて居りますのですが、此頃大分見受けます「ブエール」とか申すのを髮から顏へかけて被りますが、あまり恰好の宜しきものとは思はれず、あれを被るに付いて最う少し工夫をして前號の「蟲の垂衣」や「被衣」の樣では當節の服裝向にはなりませんから、私が考へますには精巧な紗で被布を作り、緣飾りもごく淡白りと付け、つまりコートの樣な形に仕立て、之れに前のブエールを被るとも、又は形を工夫して別に被りものを作り、殿方の外套の頭巾の樣に衿へ取りはずしの出來る樣にひだを取り付け頭巾のすそ、肩の邊へ通し紐とか、或は同色な糸にて刺繡でもほどこし、着る時に頭巾の形を整へる爲めに婦人帽子のピンの樣な長い兩端へ玉などの付きし簪の如きものをさし、被るにも首まで被りしもあまり見よからず、鼻の下あたり迄とせば全體の形から見てもブエール丈被りし形より餘程優美ならんと思ひます、又模樣方なれば襟から頭へ掛け山水或は花鳥の模樣を染め付け、又無地にしても着物の色合に應じて美しく、高貴な方に金鎖のキラ〳〵とほのかに外より透し見ゆるも實に奥床しき事と思ます、おすれば顏もおほひ、塵除けにもなり、携帶に便利で、春は櫻の頃より、秋は紅葉の頃迄三伏と雖もさして暑さも感ぜぬと思ひます、お說の通り何時も流行は花柳界より魁がけられますから、之れを貴族から召し初めましたら、如何かと思ひます、諸嬢の御意見承りたう御座います、（神奈川八重）

▲記者樣、御寄集の美文、日記文、書簡文とも規定の二十字詰十五行（つまり三百字以內で御座いますれ）を越えたのをいくらも見受けますが、文章が上乘ならば少し位長くなつても宜しいのですか、（柏木信太英子）どうぞ規定より越えないやうに願ひます、（記者）

▲此の讀者倶樂部も追々盛大になりましゝ、併し殘念に思ふのは、始めは有益な事のみで、これは他雜誌にないところと嬉しく思ふて居たのですが、近頃はもう誰々さん御手紙有がたうだの、御交際を願ひたいのと、面白くもない事が多くなりました、此の調子で進めば或る雜誌の樣に之が爲めに害を釀する事がないとも限りません、皆樣少し御反省なすつて、他に益なき個人的の交際の事は少し遠慮なすつて、此貴重なる紙上を御互に益する樣趣味深く致さうではありませんか、（靜岡わかば）

▲六月號も面白うございましたね、千代子樣のお作もすきですが、綠木樣のお作もいゝことね、それから物集先生の杜鵑に對する趣味もまことに面白く拜見しました、青葉茂る私の村などは、毎日夜明けから八聲にねむりを破られてゐますから、ことに興味を以て快讀致しました、（磐城綠葉子）

▲前號の與謝野晶子先生の、雜記帳を拜見して天才詩人としての外更に又一段おえらい方だと思ひましたわ。（尾張しら菊）

▲御相談を申します、一つ本誌愛讀の方が寄つて當地に女學世界誌友倶樂部と云ふやうなものを設けては如何でございますか、誌友間でもお互ひに會つて見たいと思ふお方もありませうし、また清い交際を求めたいと思召す方もございませうから、その機關として斯う云ふものを設け、さうして幹事を決めて事に當つて貰つては――、御賛成の方がございますなら、大阪市天王寺伶人町四八四二山田芳枝へ、

▲眞香樣御親切なる御言葉誠にうれしう御さいました、不束ながら此後御交際を、私は今古鄕に歸つて居りますの、小樽の千代子樣、私もね岩田小春樣に「嫁ぐ人」を御送り致しましたのに、何の御返事もないの、まあどうなさいましたのでせう、小石川の唐澤みさを樣、御姉さん

ほんとに素らしいのね、もう少し次ぎの「鳥の聲さへわからなくトンテン」きゝたかつたわ、(岡山すみれ)

▲「世渡り上手」實に面白う見ましたのよ、私共の様な世の中に出た許りの雛子には實にいゝ手引でした、私女學世界一番好きよ、永々愛讀してますの、貴十卷の書物は箱にギッシリよ、だから森さんの仰つた藤田いさを様や、河原よし子様 皆知つてるわ、今春女學校を卒業して漸く一人前になつたやうな氣持がしますが、田舍に歸ると淋いから、今からは此の女學世界が一番私の親友なんだわ、誌友の皆様どうぞ〳〵私も御仲間に入れて頂戴な、そして御交際を願ひます、(山口縣美禰郡眞長田村弘本靜子)

▲伏見の成田てい子様、貴女も矢張りクリストを御信じなつて居られる様誌上にて拜見致しまして誠に御なつかしく存じます、殊に貴女とは遠からぬ處でありますから、何卒御交際下さいます様願ます、釜山の長谷尚純子様、御なつかしく存じます、貴女の御云ひになる宮川は私の伯母で、矢張女學院の音樂部に居ましたが、今は大阪に住んで居ます、今學校に女學院から三四人來て居られます、何卒永劫に御交際あらんことを願ひます。(京都宮川しづえ)

▲前々號の讀者クラブで古切手を賣り度いとい ふ就ばらさん、私は日本の古切手丈會買ひ度ふ御座いますが、おいくらで御讓り下さいますか、下名迄至急御一報下さい、(東京市本郷區西須賀町二東京音樂學校寄宿舍内服部はる子)

▲日本の諸姉様、御變りは御座いませんか、私は米國加州の平野に一人淋しく暮して居りましたが、過ぎつる二月の下旬より本誌の愛讀者となりましてからは此世へ甦つた様な心持がいたします、そして諸姉様方と御交際が出來るのは此上も無く嬉しう御座います、こんな四千海哩も隔てた異郷に居る不束な者ですが、哀れと思召して何卒御交際して下さいな、そして御通信下さつたおかたには妾しきつと美しい繪端書を御禮に御返送いたします、米國加州サンタアナ市アールデー一郵函九拾壹號福島千代子 R. D. 1. Box 91, Santa Ana California U. S. A.

▲記者様、衛生顧問はどこに出したらよろしいのですか、(青山野の白百合)――それは端書に女學世界衛生質問の旨を記し、尋ねる事柄を認め、東京市本郷區弓町二丁目八番地糸左近氏に宛てゝ御送り下さいまし(記者)

▲妾が昨秋當欄で園藝種苗の交換をお願ひ致しましたら、内地は勿論、遠々米國や韓國から、而かも目的以外の繪端書交換だの、妾如き田舍者にはトント合點の行かぬ華美な手紙などに接しました事が、實に百餘通に達しました、なれども妾は元來種苗交換が目的なので、不本意ながら園藝に關係なき御交通には實來斷然御返事致し兼れますから、どうぞ惡しからず……「木曾川や郡に知らぬ風通ふ」園藝同好の諸姉様にして森峽の山水を探らんと欲し給ふお方は是非御知らせ下さいませ、妾停車場までお迎へに參りますわ、そして高山植物の採集にお伴致しませう、(岐蘇にて愼子)

▲僕は男子です、しかしこゝに投寄するのやむなきに到つたことを許したまへ、僕に最愛の妹が只一人あつた。ことし十七歳で、郷里の女學校に出てゐました、「女學世界を送つて」と云ひますから、昨年の春より僕が買ふて、一と通りよんで、そして、殊に面白いところ、爲になる所に線など引いて送つてゐました、あゝ、しかし、わが最愛なる妹は、櫻の花のちる頃、ふとした病氣がもとで、永遠に不歸の客となつてしまつた、僕は彼女と一月の休みにあふたきりで、其時、夢にだに此悲哀な事があらうと思つたらうか、僕の悲嘆は僕の兩親以上であると思ふ、此夏一家族でどこかの温泉へ行かうとはなした事も仇となつた、あゝ僕は妹の死の爲めに世の中がいやになつた、……けふも、本屋がまだことはらなかつたゝめに六月號をもつて來た、僕

はまた今非常にかなしくなつた、……こゝに四月以來送らなかつた本誌があるから希望の方にはよろこんで上げませう(仙臺二高生)

▲六月號の梅本軒子樣の御作「處女の空想時代」ほんとにおもしろくて、私幾度も拜見しました、私等の樣な田舍者は田園の事など出て居りますと、格別興味がありますの、どうぞ此の後もお作拜見いたしたう御座います、(群馬吾妻薫子)

▲諸姉樣の内で昨年の夏内藤千代子樣の御筆になりました小說松風の載つてゐる本誌避暑號をお持ちの方は御惠み下さいませんか、當時の拜借でもよろしう御座います、御禮は必ず致します、(埼玉縣栗橋町柿沼秀子)

▲私は日本一の大湖の東、滋賀縣甲賀郡水口町に住してをります、本町は藤細工が盛んです、其大部分は輸出向きです、御希望の方は、參らしい(細物)繪葉書御送附下されば、替次第安物ですが一個づゝ進呈致します(滋賀縣甲賀郡水口町みどり)

▲諸友の皆樣、名所繪ハガキを御送り下さつて貴重にも御禮申し上げます、以後も相變らず御惠み下さい、金剛山の麓で皆樣の御便りを得て樂しく日を送つて居ります、私も必ず大和名所を差上げますから、何卒御願ひ申します(奈良縣南葛城郡葛城村宮井戸中田大次郎方靜子)

▲あの六月號の藤田いさを樣の溫泉旅行は、さすがに感心致しました、あんなのを澤山願ひます(京都さみだれ女)

▲記者樣、私れ、只今六月號の本欄讀みましてびつくり致しましたの、それはれ奈良のすみ子樣の投書に、大雅堂先生に一方ならぬ御厚意をかけて居るなんてございましたからですの、私それうけて居りますと書きましたつもりでございましたが、どうで御ざいましたでせう、あんな事が先生の御目につきますと誠に申譯ございませんから御斷り勞々(京都神谷都子)

▲此頃の内藤千代子樣の燃ゆる樣な御作を拜見し大層な御評判を聞くに付け、かの荒波くだくる岩頭に立つて非巡の友をかなしみ梅かほる窓になき姉上を偲ばれた藤田樣いさを樣ゝ想はぬ時とてはございませんでした、それに今日六月號を開きますれば、「溫泉日記」、引きつゞいて「まぼろし日記ー」、思はず熱い涙が頬を傳ひました、まこと千代子樣が牡丹花なれば、いさを樣は水仙花の如く清く、梅花の如く凛とした方でせう、森隆子樣以上に私はおなつかしくお慕ひ申してをります(濱花にて不知火)

▲諸友諸姉樣よ、何卒内地子供の繪葉書の交換を願ひます、御禮としては御意に召すものをきつと差上ます、(在米桑港アキマナン街千八百四十三番西川鈴子より)

▲六月の美文欄に「水交社の中日」と云ふのを御出しになつた奥のちか子樣、もしやあなたは山本さまでは御座いませんか、樂しく御暮し遊ばすのは誠に御羨やましう存じます、誌上に御名を拜見してもしやと思つた時にはほんとに御なつかしう御座いました、私御存じでせう、廣島に居たよし子ですの、お差支へなくば御所御知らせ下さいませんか、御手紙さし上たう存じますが・

▲河岡先生の「病床三月」しみ〴〵と拜見いたし、自分の新婚當時骨髓炎を病んで仰臥中年冷たい病院のベットに呻吟した時分を思出しました、一年志願患者の御說誠に面白く、殊に看護婦さん方には其必要があらうと切實に感じました、どうぞ一日も早く御全快遊ばして、痛快なる御筆をお揮ひ遊ばすやう陰ながら祈つて居ります、(埼玉野菊女)

▲御なつかしき皆樣方、私もどうかこれから誌上で御交際を……、早速ですがどなたか東京市内で編物を自宅に居て内職にさして吳れる確實な所が御座いませんでせうか、もしも有りましたら誠に御手數ですがどうか誌上でお知らせ下さいまし、(牛込輝子)

▲記者樣に御伺ひ申します、每號有益な面白い

投書で長編のものが載つて居るやうですが、あゝいふものは何時投書してもよいのですか、又誰が出してもよろしいのですか、（若月妙子）何時にても誰方からでも歡迎します、（記者）

▲私一卷一號からの愛讀者で御座います、初めは姉が愛讀して居りましたが、此の頃では私が引つゞき拜見して居ります、本誌も大そうハイカラになりましたれ、私時折一卷や二卷のを出して見て樂しんで居ります、扨皆樣の中に園藝好きの方が澤山入らつしやいますが、此の欄で草花培養に付て有益なお話や御注意をお聞かせ下さいませな、私も草花が非常に好きで御座いますので、猫のヒタヘ程の庭へ作つて樂んで居ます、皆樣御存じでも御座いませうが、朝顏やオラには熱湯をやると大變よろしいです、生長もすみやかで花も光澤の有る大きいのが咲きます、初めは私もあやふんであたゝかいお湯からやつて居りましたが、此の頃ではどし〳〵熱いのをやります、決して枯れたり致しません、皆樣おためし遊ばせ、熱湯は一ヶ月に一度位が適度です、溫湯なら毎日おやりになつてもかまひません、（京都鶯の宿）

▲四月のスイトホームは内藤樣でしたから、いよ〳〵令夫人になられたと思ふて居ましたら、六月の誌上では又いつもの小縣として書いて有りました、御作中に横代樣が早く金子百合さんの樣にたのしい家庭を造つて頂戴と有ります、何んだか私わからなくなつてしまひました、妾の土地は世に名高き應擧寺の所ですから、繪はがき御入用の方は交換を致しませうか、（但馬城崎郡香住山本槇枝）

▲先月始めて御目にかゝりました石内富枝樣、あなた樣も今後どし〳〵御揭載下さい、樂しんで待つて居ます、（大阪三島郡宮島村吉川春花）

▲佐々木信綱先生の御教へ仰ぎたき希望に候が、もしや地方の者にても入門御ゆるし下さるまじく候や、又何か會の如きもの候て地方の者にて入會の出來先生の御教授を受くる事を得る會に候はゞ御多忙中恐れ入り候へどもぜひ御答へ下され度願上候、（筑前みどり）神田區小川町一番地竹柏會へ御聞き合せ下さい

▲私は本年十九歳にて、幼少より不幸ばかりつゞきまして思ふ樣に勉強も出來ませんが、どうか私の樣な愚な者でも小間使なり下女なりとお使ひ下さる事はできませんでせうか、何も出來ませんが、一つ眞心を以て忠實におつかひ申す心で御座います、お慈悲の御方樣はすみませんがすぐお手がみを下さいませ、すぐまゐります、（福井縣福井市千年町元長尾杉山春方吉田美子）

▲皆さん、私は畫が好きで、ボツ〳〵、おけいこをして居ますから、皆さん方の地方の名所等を畫いて送つて下さい、御願致します、（堺市市之町西三丁南井秋野方靜子）

▲大和の名無草樣、私共は陸軍將校の家族で、夫婦に子供四人の一家で御座いますが、幸ひ貴女が來て働らき下さるならば、私共も出來得る限りは將來共御相談相手になります、若御思召がありますならば、至急御住居御知せ下さいませ、委しき事共書面にて御相談申上ますから、（和歌山縣海草郡西脇野村西の庄公平瑛子）

▲世渡り上手は大變面白く拜見致しました、一等を得給ひし野の花の君、三等の玉露さん、最もよろしき御作と拜しました、（大阪淑子）

▲皆樣、私は草深い米國の片田舍に佗しく住んで居て女學世界が唯一の友です、これから御文通を願ひます、而して私は自分の將來に就いて皆樣の御意見を伺ひたい事が有ります、憐れと思し召して何卒御教示下さい、追て委細の事情も御話し致します、（米國モンタナ三樹武子）

▲潮風樣の病床三月拜見致して、まことに〳〵御氣の毒でたまりません、御不自由の御身どんなにか御つらく御出でせう、私も丁度一昨々年から脊髓にかゝりまして、まことにつらい思ひを致して居ります、學校もやめまして、今では

何の樂しみもなく悲しい月日を送つて居ります、潮風様、どうぞ御大切に遊ばして一日も早く御全快遊ばせ、陰ながら祈つて居ります、(千葉にて松影)

▲千代子様、いつぞや伯爵家のお小間使におなり遊ばすつてお書きになりましたわれ、あの續きを是非ともお書き下さいましれ、秋の長い矢がすりのお召に、もえる様な緋の帶しめて、高まげ重たげにお次の間から若様の御用伺ふ御様子が早く拜見致し度う御座いますわ、ぜひお書き下さいましれ、お願ひ致しますわ、(桃江)

▲諸姉様の御作皆面白く拜見致して居りますが、私は僅か高等小學を出たばかりなので、語學の素養がありません故、御作の内に英語や佛語が交つて居ますとわからぬので困つて居ります、御親切な姉君達、何卒當地で佛語を教へる人を御存じでしたら御しらせ下さりませ、(大阪あやめ)

▲内藤様のもよいでせうが、私は野菊様と玉露様のが大好きですよ、丁度蕉園様の繪を見てゐるやうな氣持がします、前號世渡り上手の中の世渡りを網渡りになぞらへ遊ばした野菊様の御考へや御頭の輝くは尊き御心の反映云々の玉露様の御云廻し隨分振つてゐますのれ、いつもながら實に面白う拜しました、玉露様は私と同窓の先輩ですの、同じ教への流れをくみながら、私なぞなぜかうでせうれ、(本郷類生)

▲五月増刊の「世渡り上手の卷」私ほんとに氣に入つてしまひましたの、あつさりといやみのない御作れ、野菊様つてどんな方でせう、御なつかしき野菊様よ行末長く御幸へ遊せや、(東京雅子)

▲明治三十一年の春、東京牛込區愛日小學校を卒業に成った女子部の方々の御消息がうけ玉はり度く存じます、もしも本誌愛讀者中に、其御方がゐらつしやいましたならば、誌上で御知らせ下さいまし、また御存じの御方は何卒御知らせ下さいまし、(同級生の一人)

▲皆様、札幌も新緑の時丈けは全く誇り度いですよ、森葉松、イタヤ楓、柳の芽が何れの街にも翠の枝をさしのべて居ります、それに町幅が廣くて規則正しいから、格別綺麗です、しかし毎日強い風のふく丈けは實に困りますよ、(札幌早乙女郁茂子)

▲愛讀者皆様の内に元備中國吉備郡大井村爲羽正子様が目下の御住所を、もしや御承知の御方も御座いますれば、何卒直接御一報下さいませな、又に北海道石狩國上川町旭旅揚附近に御住ひ遊ばして居らつしやる御方は御座いませんか、御尋れ申上げたい事がありますのですから、甚だ恐れ入りますけど、これも御一報下さいませな、御願ひ申上げます、(備前國入濱町山田多賓壽)

▲皆様の中で昨年の九月の増刊「滑稽智惠競べ」御不用の方ありませんか、もしあつたらば先月(五月)の婦人畫報とかへてください、増刊御送り下されば早速畫報御送り申します、(靜岡郡叢井町西尾稻子)

▲萩香さん貴女の文にはほんとに感心して仕舞ひました、いくら天才とは言へ好く彼様に書けたものれ、併し貴女は幸福な方よ、幾千萬の讀者諸嬢の羨みの的となつて居らしやるんですもの、——どうぞお慕ひ申して居る私初め諸嬢のために桃代さんとお二人の御寫眞を紙上に載せて頂戴、(大阪白菊)

▲大阪翠葉様、當地に入らつしやつたさうですれ、おなつかしうございます、さうして病める妾と云ふのは、貴女様の事ですれ、ほんとにお氣の毒ですれ、此節は如何でございますか、一日も早く御全快遊ばすよう陰ながら祈ります、(京都白椿女)

▲昨年五月發行の「驚ろく手紙」御持の方は何卒御ゆづり下さい、御禮には最も珍らしい西洋草花種々押花にして御送り致します、(大阪府下北河内郡二島村大字三島中野末摘花)

▲長谷場光子様の仰せのお姉さまとはもしや元藤原まさ子様と申さるゝ方では御座いませんか、大急でお答を願ひます、(兵庫にて和子)

▲同病相憐むと申ますかれ、四ッ谷高林すゞ子様、御なつかしう存じます、私も耳が遠いのですよ、どうぞ御手紙の御交換を願ひます、御住所御知らせ下されば、私から差上ます、(尾張すが子)

▲美鈴女様、如何遊して、お暮しう存じます、葉山にかよわき身を養ひ給ふ君、まことのむから御察し申上ます、我身は遠き都の空に東をまもり、神かけて御全快祈ります、あゝ竹澤様よ、翠子様、どうぞおだいじに、(西の都にて貴衛)

▲寳町の春枝様へ、私もね、萩香様の御作拝見する度に口惜しくなりますの、私だつて明治の女、あれくらゐのものが書けなくつてときばつてみても、未熟な筆をどうしませう、春枝様、どうぞ振つて頂戴、樂しんでまつてますわ、私より一つ上ですつてね、姉様の様に思はれてよ、私は伊豫娘よ、伊豫娘なんぞ御嫌ひ？これでも現代の血が通つてますよ、(松山月)

▲今業平の妻様、ふかくお察し申上げますわ、でも餘りおなげき遊ばすな、夫の操行に泣く者は貴女ばかりではありません、随分御自重遊ばせよ、奈良の田村君子様、同級でおなつかしいわ、おところはいづこ、(奈良縣伸りポン子)

▲皆様私も愛讀者の一人となりました、私は男の兄弟ばかりで何の樂しみもありませんから、どうぞ今後姉妹のやうに御交際して下さい、皆さんの中で女學校卒業遊ばされた御方、どうぞ私も田舎の女學校の卒業生の一人ですが、一時的でなく末長く御文通して下さい、御手紙下されば早速御返事差上げます、住所は記者様に御聞き下さい、(栃木初音子)

▲諸姉様、私は第十巻の第一號から愛讀を致して居ます、何卒御交際を願ひます、私は本年の四月に女學校を卒業致しまして、只今は本誌をのみ好き友達として居ります、(丹後宮津コスモス)

▲記者様に御尋ね致します、私は同様に本誌を愛讀致して居りますが、投書しても差しつかへ御座いませんか、(大阪府北河内郡友呂岐村大字太間大西民子)、(差支ありません)

▲五月號の美文二等に當選なすつた若葉様、御文才の程誠にお羨ましう存じます、不束者ですが御交際を願ひます、皆様もどうかお手紙下さい、必らず御返事を差上ます、(横濱市南吉田町六八九藤倉雪子)

▲皆様、私は昔から本誌を愛讀して居る者でございますが、島から何とぞ御心安く御交はりな御願申上ます、種々の雜誌に投書なぞお出し遊ばした對馬國の葉子様、おなつかしく存じます、私も十二年ほど前に御地に居りまして、嚴原の小學校に三年ばかり通學いたしました、其後は東京へ参りまして、また三年前當地へ参りました者でございます、御差支なくば御住所御知らせ下さいませな、(伊豫國新居郡金子村住友舎宅峰藤子)

▲四の邊にお住ひ遊ばす今業平様の妻様、實に實に御同情に堪へませぬ、私も御同様な境遇に數年泣いて居ます、そして此頃ではもう浮世がいやになりまして、圓頂黒衣山の中へでも入りたく思ひますが、種々の事情で夫も叶はず、日々煩悶に煩悶を重ねつゝ暮して居ます、私も女學世界は創號からの愛讀者で、そしてこれだけが私の唯一の友で有ましたが、ふと貴女様の事を承り、誠に失禮ですが、會心の友を得ました様、實に／＼おなつかしく存じます、おさしつかへなくば御手紙で御交際が願たう御座いますから何卒御住所を誌上でお知せ下さい、(黒衣女)

▲米國の岡様、何卒お姓名とお住所を今一度お聞かせ下さいまし、私もかねて繪葉書を集めて居るのです、大急で御知らせ下さいましたら、住所姓名をくはしく申上げます(平安の春都ローツ子)

新刊紹介

△日蓮上人の教義　田中智學著

日蓮上人は法界の英雄として其の特殊なる性格は夙に日本國民の誇りとするところにして又熱烈なる信仰の標的たり、上人が金鐵の如き意志の力を以て紛亂淆濁せる當時の教界に本化妙宗の教義を鼓へして一切衆生に佛教の大本を示し以て遵從する處を知らしめたるは非常の卓見にして又博大深淵なる智力の致すところなり、本書は即ち日蓮宗の學僧田中智學氏によりこの教義の由來、成立、信行並に教義の深意妙法を詳しく解說されたるものにて所論やゝ專問的にして通俗の人の辿らんには聊か難解の嫌あるべしといへども前後反覆して其教義を翫味すれば唯にその教法の要義に通曉するのみならず、併せて世界的に廣大なる佛教の大本旨に到達することを得べし、教義解說の外に史傳として日蓮上人の略傳を掲げ以てこの大偉人の生涯を知らしめたるは眞に法界の偉觀を極めたりといふべし價二圓五十錢博文館發賣

△近松全集上巻　故三木竹二　水口薇陽　校訂

近松の淨瑠璃本は從來屢々飜刻されて其數既に數十種に及びて、猶未だ其全部を悉さずといふ、この全集は即ち近松が著作興行の年代の順序によりて、全部を完集するの計畫を以てまづ貞享より元祿十六年までの分を上巻として廿九篇を收む、いづれも所謂時代物にして大半は史劇の部に屬せり、本集が從來の飜刻本と異りて校訂上殊に意を注ぎたるは淨瑠璃の曲譜を傍點せしにあり、即ち院本中より一切の符號を活字によりて保存し以て當時に於ける俗曲研究の一助たらしめるは飜刻の出所を明かにし、幷れて俗曲の系統を知るに於て頗る要意の到れるものなりといふべし、猶解題として作の由來とその大意を說明したるは初めての讀者を指導する便宜ありてよし價貳圓叁拾錢東京堂發行

△女子のふみ　與謝野晶子

故一葉女史は才の人なりき、又筆の人なりき、されば才情煥發して文字に豐富なりし事は萬人の認むるところなり、されど斷じて創見の人にはあらざりき、晶子女史に至つては才華の爛漫たるもの珍しといへどもその創造力に至つては眞に空前なり、この手紙文は女史が手紙の作例をなしたるものにて何も創造の天才のといふほどのものにあらずといへども、手紙の書き方はその人の性情によりて自から異れる特色ありとすればかゝる作例も又自からこの大天才の面影の一端を窺ふを得べきものなり手紙の作例二百二十三種を收む價四十五錢日本橋大倉書店發賣

△惣菜料理年中重寶記　龜井まさ子著

初めに、割烹器具の取扱方より、飯の炊き方、煮出しの製法等料理法に於て先づ行ふべき事柄を說き、それより各季節に應じて野菜、魚類、西洋料理法彼是三百種程を記したる重寶の書なり、價七拾錢、南鍋町文泉堂書房

△家庭百科全書衣服の調整　石崎篁園著

單に衣服といふと雖も、其調整は家庭に於ても婦の重要なる仕事に屬し、家族の年齡地位に應ずる地質縞柄の選擇、裁縫、紐結の方法、衣服と儀式の關係、洋服の事、其他衣服の整理方、保存法等より、洗濯或は汚拔の法に至る迄なかなか廣き智識を要するものなり、本書は即ち此等に關する事に勿論、苟くも衣服に關係ある事は最も詳細に說明せるものなり、價四拾五錢、本館發行

△動物の同盟罷業　丸山薄夜譯

本書は亞米利加の米國人道教育會の出版にかゝる懸賞小說を譯したるものなり、其の内容は下等動物が人類壓制に對する同盟罷業を描きたるものにして、その主旨は人間が動物に對して懷ける誤念を指摘して之を矯正せんとするにあり平易にしてなか〱面白し、價四拾錢、巣鴨内外出版協會

△ポッケット文章軌範　信夫恕軒　石崎篁園著

漢學復興の氣運は古き論語をポッケットとして修養する學生ありとすれば文章軌範は更に適實なる性情を陶冶すべきものならん、本書は漢文中の雄壯を以て誇れる文、志氣の奮興に資すべき文及び珠玉の文世教に益あるもの十數篇を撰し、これを袖にして樹下石上、電車汽車中にて誦讀し且つ味ひ讀むに便ならしむ、價五十五錢、東京堂

△新式文範愛の手紙　水野葉舟著

新らしい形式を以て書いた手紙の文、即ち作例を示したものである、段々と世が進み、人の思

趣が進んで來れば感情を亂す事ちも又自から變られねばならぬ、本書の如きは少し時勢に進み過ぎた感はあるけれど一部の人には既に用ゐられてゐるといへば追々この種の書籍が流行して來るであらう、價六十錢、神保町春秋社

△少女小説 花子の行衛　河崎　靜閑著

人情の機微を穿ちてなかなか趣味多し、稍々年長けし桃太郎、時々山等のお伽噺に飽きたる少女の讀物として恰度宜しからん、美しき挿繪、愛らしき挿畫等もありて體裁も好し、正價金貳拾入錢本術發行

△手工研究(第七號)

上原六四郎氏を會長とする手工研究會の講義錄にして、本號には切拔細工につきて(板倉賛治)を初めとし、手工科教授雜感(岡本秀吉)、紙造花實驗(山本精顯)、薄板及び竹籠の考案(武田富雄)、其他手工教育に關する有益なる記事多し年四回發行、會費一ヶ年金五拾錢、麻布區本村町二〇三、手工研究會

△家庭看護法　兒玉　修二著

一般家庭に心得べき看護の方法を説きたるもの病氣の原因、傳染病の手當、呼吸器病の取扱ひ胃腸病、神經病、脚氣、レウマチス其他並に婦人病、小兒病等の心得、附錄に救急療法あり定價三十五錢、内外出版協會

△音樂(第一卷第五號)

こは東京音樂學校學友會員の協力に依りて發行せらるゝ音樂雜誌にして、曾に同窓學友會の會誌なりしを、本年一月より題の如く改め、廣く世間に頒つ事となしたるものなり、本號には音樂進化論(田邊尚雄)、オルガン自修法(島崎赤太郎)、和聲學新解(同人)、音樂上の叙事問題(湯原元一)、邦樂家に望む(清元延壽太夫)、其他讀むべき記事多し、定價金拾五錢、發行所神田神保町東京堂

△和歌と俳句　西村　醉夢著

和歌及び俳句に關する解説、歷史、批評並に修辭法を記述し、尚ほ卷首には「詩學梗概」と題してそれに就ての簡略なる解説もあり、極めて平易を旨としあれば、何人が讀みても分りやすくして、斯道の大體に通ずるに難からず、定價金五十五錢、本館發行

△書簡文捷徑　金子　薫園著

曩に「新體美文」を著はしたる著者は、更に、書簡文を正しく且つ巧みに書くを得べき近道を知らしめんとて本書を公にせり、内容は作法、文格、書簡、書簡類語集其他に分ちて懇切に説明しあり、定價金參拾錢、麴町區飯田町新潮社發行

△清水宮子遺稿　黑石つや子編

清水宮子氏は愛知縣士族石丸弘氏の長女にして、仝縣小學校　實踐女學校本科及び同校裁縫科を經て、高等師範國語體操專修科に入り、四十年卒業、後實踐女學校に教鞭を執る事一年、聰明の質、自ら人に敬慕せられしが、四十一年清水正巳氏に嫁し、これより益々光を放たんとするに及んで、計らずも病を得、四十二年五月廿三歳を一期として逝けり、平生特に文筆を嗜み小篇和歌詩なからざりしより、記念の爲め今回編して題の如き小册子となし、之を知友の間に頒てり。

△西洋料理教科書　櫻井　薫子著

本書は多年女子教育に從事されたる著者が歐米の見聞と實地經驗とを基として專ら家庭に用ひらるゝ料理の教本として作られたるものなり、スープの作り方より肉料理十數種、野菜料理十數種、菓子の製法其他容易に出來る料理凡數十種を撰び、附錄として食卓心得、料理のつけ合せ、臺所の改良、主婦の心得、並びに家庭顧問として日用必須の事柄數十件を加へたれば主婦の參考書として頗る有益のものなり、殊に料理法の欄には欄頭に英文を挿みたれば本文と對照して見るによろしく、料理を習ふ傍ら英文の智識を學ぶべく一擧兩得の良書なり、價一圓三十五錢、神田今川小路榮明社發行

△家庭娛樂 花と庭　北村　東江著

美しき草花を栽培してこれを觀賞するは家庭の娛樂として誠に清きなぐさみの一つなり、この種の書は草花の栽培を書きたるものなれど從來世に有觸れたる、栽培書とは聊か趣味を異にし專ら園藝趣味を美文の筆によりて傳へ、花を味むる人のこゝろにうるはしき感じを與へ、植物に備はる自然の美を發揮して草木に對する同情の念を養はしむる樣、いとも温やかに、味ひある樣に書き成されたる書なり。定價六十六錢、博文館發行

才媛文壇懸賞募集（七月十二日〆切）

▲美　文（二十字詰十五行以內）

▲日　記（二十字詰十五行以內）

▲書簡文（二十字詰十五行以內）

▲いろ〳〵の經驗（十五行以內）

▲和　歌（一人一首）

▲俳　句（一人一句）

▲笑話　▲誌友倶樂部

△美文、日記、書簡文、いろ〳〵の經驗の四種は用紙は半紙の事△和歌、俳句、笑話、倶樂部は端書に限る、△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす△名宛は博文館內女學世界宛とし△原稿に文の種類及び住所氏名を明記する事

賞品

△美文△日記△書簡文
天賞壹圓五拾錢、地賞壹圓、人賞五拾錢

△和歌△俳句△笑話
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△いろ〳〵の經驗（賞壹圓以下）

毎月一回一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內（定刊數……十二冊
　增刊四回：一、五、九、十一月價格同一

郵稅　一冊　二錢

廣告料

四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十三年六月廿六日印刷納本　第拾卷第九號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　本局　三千二百六十二番、三千八百二十九番

最新發明 肺病 肋膜 新藥に就きて

獨逸ドクトル 高平氏報告（醫事週報二七號報告再録）

新治療劑主薬の諸結核による熱度下降は可驚著効あり四十度を示す熱は本薬應用後は常温下に減じ患者は薬劑が無味なるを喜び之が服用を嫌忌せず食慾を增進す

右の外本劑の著効ある事は既に諸家の試験報告及賞讃により明らかなれども今本院服薬患者につき其成績を左に報ぜん

●金森某（德義上住所姓名を秘す）女子三年前發病遂に末期重症の**兩肺結核**に陥り咳嗽たん盗汗動悸呼吸不利。不眠。發熱激しく度々咯血し非常に羸痩す服薬壹週頑固なる熱を去り咳嗽咯痰を輕快す服薬貳週咯血やみ臥辱せしもの屋外に出で日光に曝をとるに至る連用三十日病全く治し食慾進み體重を増加せり

●兵頭某 卅一歳男 **肋膜炎**（咯血無し肺病初期の疑あり）胸部痛み食不振身體倦怠盗汗。咳嗽と頭痛あり身體羸痩を見る卅九度に至る發熱あり服薬五日奏効あり二週にして全治す僅々二週にて全治するの如きは病輕症なるに因るとは云へいかに新治療劑が肺病。肋膜。肺炎。肺尖加答兒。氣管支加答兒。腹膜結核等の諸症に對し可驚効力ある全治薬なるを知らん以下病歴を細述する時は冗長に亘るを以て左の通略式とす

患者	性	病名	成績
三村	男	兩肺結核	全治
中川	男	肺尖加答兒	全治
松信	男	結核性肋膜及腹膜炎	微効
笠井	女	肋膜炎	全治
上野	男	右肺結核及腸結核	全治
籠谷	男	兩肺結核末期	無効
宮本	女	結核性肋膜炎	全治
岡田	男	氣管支加答兒及肺炎	全治
阿崎	男	右肺結核及腹膜結核	全治
神村	男	肺結核初期	全治

新の如き好成績は從來の薬物に於て見る能はず我國薬劑界名譽の發明薬として報告する義務あるを信ず又効力多大にして持長服薬するも副作用なく殊に**咯血**と其豫防に可驚効あるを以て醫薬の傍ら服用最も妙ならん吾人は病者に向つて新治療劑は現今に於て完全なる發明藥なるを紹介し安心服薬せん事を勸むと共に醫師は自家患者に本劑を投薬せん事を勸告す●本治療法を知らんとする患者は貧富の別なく（醫者にも療法あり）遠慮なく送料郵劵二錢添東京神田竪大工町拾三番地療養院製薬所村尾明治堂宛申込あらば新治療法の書を無代貰ひ得らる・故是非一讀あれ益する處多からん、之れによりて全治の幸福を得らるべし

藥價

壹週 金二圓
貳週 參圓九十錢
參週 五圓七拾錢
四週 七圓貳拾錢
五週 九圓

東京神田竪大工町 療養院 製藥所 **村尾明治堂**
電話本局參千七百五十二番
振替口座東京壹四參壹九番（私書函神田本局第三號）

理想的最新製劑
ちゞれ毛くせ直し ベント

本品を一度使用せば如何なるチヾレ毛クセ毛にても立處に直伸す永く使用せば根本的にチヾレ毛クセ毛の有る處を忘るべし

定價 大金九十錢 中金四十七錢 小金廿五錢
送料 市内四錢 市外六錢

最新輸入高等染髪料
しらが赤毛そめ ヘーヤダイ

大壜金貳圓五十錢 中壜金壹圓 小壜金五十錢
送料 市内四錢、市外八錢

發賣元 東京市本所區外手町八十七番地 **深澤國華堂**

衛生化粧新美髪法

此の二大有効製劑の説明は左の書に詳記せり

最新本書の内容

◎しらが、赤毛染の話
◎ちゞれ毛くせ毛直しの話
◎抜毛どめ、ふけとりの話
◎毛のなき所に毛の生へる話
◎毛髪の洗ひやうの話
◎毛髪營養の話
其他毛髪化粧に關する秘訣

本書御入用の方は郵劵二錢封入御申込あれば無代進呈す

發行所 東京本所區外手町八十七番地 **深澤國華堂**

◎天下唯一の家庭參考書(第六版發賣)◎

實用家庭百科全書

▲大勳位侯爵松方正義閣下題字
▲貴族院議員公爵二條基弘閣下題字
▲樞密院副議長伯爵東久世通禧閣下題詠
▲樞密院顧問官伯爵芳川顯正閣下題字
▲前東京府知事男爵千家尊福閣下題詠
▲文學博士井上哲次郎先生序
▲日本女子大學校長成瀨仁藏先生序

▲文學士 小原要逸先生
▲文學士 物集高量先生
▲醫學士 三原新太郎先生
▲農學士 宮坂倉太郎先生
▲東京女子職業學校講師 木村俊秀先生
合著

▲實力競爭の現代に於て理想的家庭を現實し得るは全く本書を繙きて學識を備へたる家庭にあり

菊判洋裝優美なる函入にて紙數一千三百餘頁口繪大凡三十面、悉く美麗なる繪にて殊に製本は堅牢永世傳承に堪ゆ、尚挿畫は三百餘面ありて婦女子には親切なる說明者となり即座に活用し得るやう編輯しあれり、項目は家政、禮法、修身、敎育を始め文藝、手藝、料理、育兒衛生に至るまで頗る懇切に說きたる良書なり

見本申込次第進呈

▲本書は大好評を以て既に參萬部を賣盡くせり

▲定價參圓六拾錢 郵稅不要

發賣元 東京日本橋區本町三丁目 博文館 振替貯金口座東京二四〇番

女(後付の二)



家庭整理の指導

當代第一流の女子教育家編著

家庭百科全書

全部五十册＝每月一回發行

和裝美本◉紙數各三百頁
石版彩色口繪一葉
挿畫十數個
正價一册金四拾五錢
郵稅一册金八錢

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、輙もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には槪れ理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過ぐるか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

- 第一編 **新家庭訓** 三輪田高等女學校長 三輪田眞佐子女史著
- 第二編 **四季料理** 宮中臣民兩流料理師範 大日本割烹學會々長 石井泰次郎君著
- 第三編 **裁縫指南** 女子高等師範學校教授 喜多見佐喜子女史著
- 第四編 **和洋菓子製法** 東京治庖會講師 龜井まき子女史著
- 第五編 **茶道と香道** 水原翠香女史著
- 第六編 **諸流生花指南** 琴松園文雅君 松幸齋理常君 共著
- 第七編 **育兒の務** 醫學士 田村貞策君 朝夷孤舟君 共著
- 第八編 **簡易治療法** 新潟縣高田高等女學校敎諭 藤井靜子女史著
- 第十三編 **教育お伽噺** 少年世界記者 木村小舟君著
- 第十四編 **女德の養成** 前田長太君著
- 第十五編 **家屋と庭園** 內山正如君著
- 第十六編 **魚鳥家畜の飼養** 農業世界記者 鹿野化骨君著
- 第十七編 **女子作文法** 遠藤ふみ子女史 松崎ふく子女史 共著
- 第十八編 **子女の教養** 私立高等女學校長 棚橋絢子女史著
- 第十九編 **家庭の趣味** 文學士 大森兜山君著
- 第二十編 **家庭遊戲法** 高橋忠次郎君 松浦政泰君 共著

販賣用電話 本局二六二〇

發兌元 東京日本橋

婦女必讀の大全書

第九編
禮式と作法
女子高等師範學校教授 佐方鎮子女史著

第十編
惣菜料理
赤堀吉松君 赤堀峰吉君 赤堀菊子女史 共著

第十一編
編物指南
女子技藝實踐學校編物科主任 三木とみ子女史著

第十二編
婦人の生理と衞生
青山學院教授 牧野清子女史著

第廿一編
書道手引
歌道書道專攻大和會々長 井田秀生君著

第廿二編
歌の手引
大和田建樹君著

第廿三編
刺繡術指南
刺繡術專門 磯村大次郎君著

第廿四編
摘み細工指南
山田興松君著

第廿五編
新式化粧法
藤波芙蓉君著

第廿六編
室内裝飾法
近藤正一君著

【第一章】總論（室内裝飾の要旨●家屋の構造と室内裝飾の關係●裝飾の四季外十六項）【第二章】四季の座敷飾の一（春の室内裝飾●初春の書院飾●初春の廣間飾外八項）【第三章】四季の座敷飾の二●夏の廣間飾（夏の室内裝飾●首夏の廣間飾の二外九項）【第四章】四季の座敷飾の三（秋の室内裝飾●初秋の書院飾●初秋の廣間飾外七項）【第五章】四季の座敷飾の四（冬の室内裝飾●初冬の書院飾●初冬の廣間飾外七項）【第六章】器具調度の配置とその飾り方（床の間の飾り方●床脇違ひ棚の裝飾●床脇地袋棚の裝飾外二十七項）、第七章）各室特殊の裝飾法（日本式座敷飾●書院は如何に裝飾すべきか外三十一項）

第廿七編
衣服の調整
石崎篁園君著

●緒言●衣服の目的及び効用●衣服の區別及び種類●衣服の沿革●衣服の原料●機織（織方の區別、機の種類、機の織方、織物四十八種、織物の產地）●染色（色合四十種、季節と色合、色の調和、綿糸の染方、織物の染方、染返色上艶出法、洋服色上法、模樣、紋所）●裁縫（衣服各部名稱、裁縫要具、運針法、積り方、裁ち方、縫ひ方、繼ぎ方、解き物及屑糸布取扱法、綿の入方）●紐の結方●西洋小物裁縫（機械使用上の心得、附屬機械の種類及使用法）シャツ、ヅボン下、ネクタイ、前掛、涎掛）●古代の衣服（闕腋の袍、半臂、下襲、袙單大帷、表袴及大口、小直衣、衣及び出衣、奴袴、狩衣、半尻、水干、直垂、長絹、大口、素襖、大紋、唐衣、裳袿、打衣、單、五汗衫、蒙衣、袿、時服）●現代女裝（肌着、半襦袢、長襦袢、蹴出、半襟、下着、合着、上着、比翼、腰帶、下帶、帶、帶揚、帶留、扱、浴衣、湯卷衣、袴、小袿、細長、湯具、帷子、單衣、羽織、袴、袷、小袖、布子、振袖、頭巾、前垂、足袋）●現代男子服裝（春の部、夏の部、秋及冬の部）●洋服（イブニングコート、フロックコート、モーニングコート、脊廣、外套）●流行●衣服の取合せ法（子供の衣服、祝着、婦人向衣服、婦人羽織、帶、其の他●禮服（男子禮服同洋裝、女子禮服同洋裝、婚禮服、喪服●衣服と禮式●衣服と衞生●衣服の撰び方●衣服の着方附帶●衣服の疊み方●衣服整理法（置物、入物、仕別、出納、整理）●衣服保存法（汚點、濕氣、蟲蝕、褪色、垢、破損、風通、蟲干、防蟲法 容器納方、置場洋服保存法）●洗濯法、木綿物、毛織物、絹布及麻布、一般の心得、簡易洗濯劑製法及火熨斗湯熨斗法）●西洋洗濯法●衣服汚拔法●結論

本町三丁目 **博文館** 振替貯金口座 東京二四〇番

故新岡久頼君筆



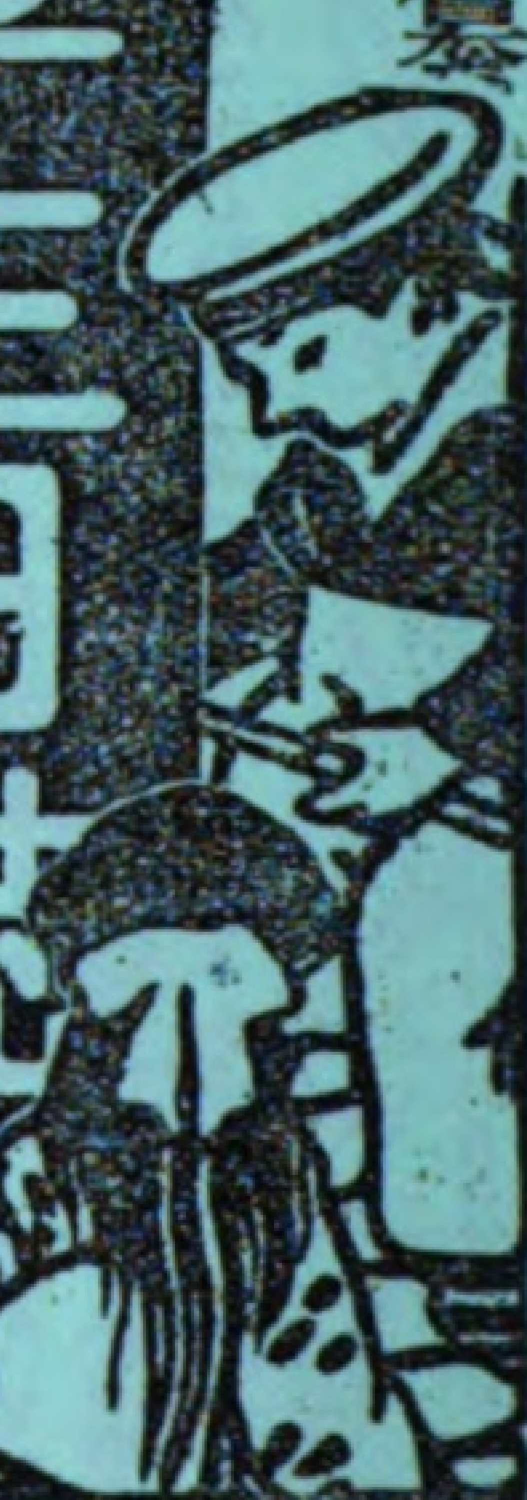
全一冊
和裝大本書判美本
正價金壹圓　郵税八錢

東京本町　博文館發行

博文館編輯局編纂

明治四十三年

夏期休暇 小學生日誌



洋裝菊判

石版刷表紙頗美本

各冊口繪寫眞版一枚

挿畫數十個挿入

本書は夏期休暇を利用して兒童の常識を養成し併せて、日誌の記載方を練習せしむる目的を以て、編纂したるものにして、創刊未だ兩三年に過ぎざるも望外の好評を得、絶大の部數を發賣せり、本年は殊に實驗家の意見を參照訂正を加へ既に市に出だせり、亦た賣り切れとならざる内速に購求あれ。

(定價)

▼尋常科第三學年用
▼同　第四學年用
(紙數毎冊四十二頁)
正價各一冊五錢五厘
郵税一冊二錢宛

▼尋常科(第五學年用 第六學年用)
▼高等科(第一學年用 第二學年用)
(紙數毎冊四十二頁)
正價各一冊七錢
郵税一冊二錢宛

特別割引

尋常小學三、四學年用

五十冊以上……一冊送料共	金五錢八厘
百冊以上……一冊送料共	金五錢六厘
二百冊以上……一冊送料共	金五錢四厘
三百冊以上……一冊送料共	金五錢二厘
四百冊以上……一冊送料共	金五錢
五百冊以上……一冊送料共	金四錢八厘

尋常小學五、六學年用
高等小學一、二學年用

五十冊以上……一冊送料共	金七錢貳厘
百冊以上……一冊送料共	金七錢
二百冊以上……一冊送料共	金六錢八厘
三百冊以上……一冊送料共	金六錢六厘
四百冊以上……一冊送料共	金六錢四厘
五百冊以上……一冊送料共	金六錢二厘

注意

一、臺灣、樺太、清國、韓國、送分は……一册に付三厘增しの事

二、內地代金引換小包送分は……一册に付三厘增しの事
但臺、樺太、清國、韓國行、代金引換小包送りは……注文者の負擔を輕からしめんため前記三厘增の外割增を爲さゞる事

東京日本橋區本町三丁目

博文館

振替貯金口座東京二四〇番

各女學校
高等小學校
生徒＝夏季休業中必需書

博文館編輯局編纂

明治四十三年



各高等女學校等に於て、生徒に夏期休暇日誌を記載せしむることは、近來殆その軌を一にせり、然るに之に恰當せる書冊あらざるため、亂雜なる書き方に流れ易く、教師は之を閲覽訂正するに苦しみ、生徒はこれが保存にその興味を缺く弊多し。これ等の弊を矯むる目的を以て、本書を發行し來りしこと數年幸に江湖の好評を博して、殆んど全國各女學校及小學校女子部に採用せられたり。因て本年もその內容を全く改めて既に發行せり。今や夏期休業は近きにあり女學生方は豫め一本を購求あらんことを希ふ。……

裝釘……全一冊洋裝菊判石版表紙美裝
紙數　五拾頁　石版口繪挿入
正價　金拾貳錢
郵稅　金四錢
正價送料……割引

割引

▼五十冊以上…一冊送料共　金拾一錢五厘
▼百冊以上…一冊送料共　金拾錢五厘
▼二百冊以上…一冊送料共　金九錢五厘

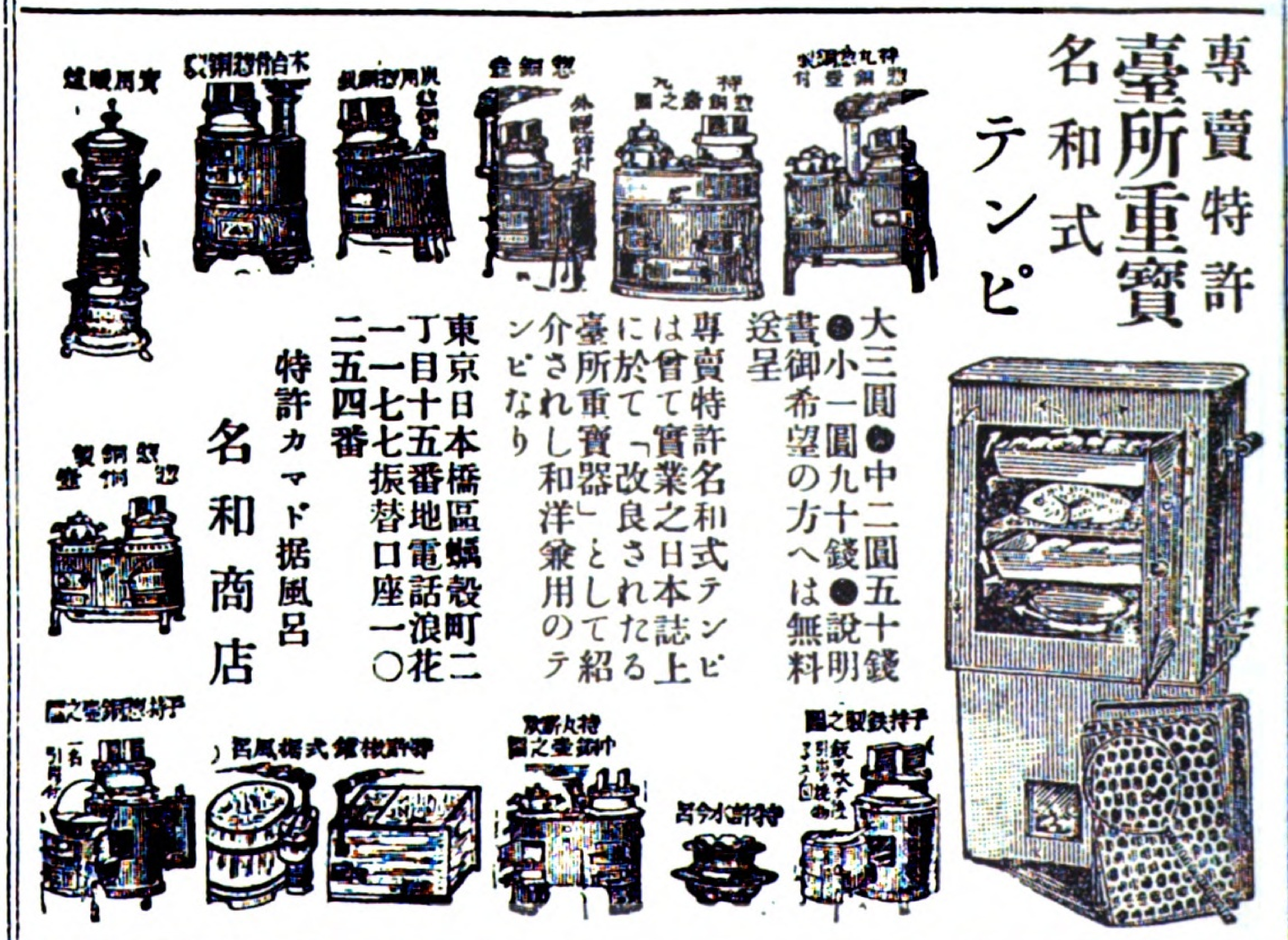
注意

一、臺樺清韓送分は…一冊に付三厘増の事
二、內地代金引換小包送分に同三厘増の事
但臺樺清韓行、代金引換小包送りは注文者の負擔を減ずる爲め前記三厘増の外割増を爲さゞる事

發兌元　東京本町　振替口座東京二四〇　博文館



柳清香油
けい志かう油
GIYA
RYUSEIKO
紳士
貴女用
フロラー香水
美術小間物化粧品
二十錢
一円卅錢
一円八十錢
東京日本橋通三
柳屋本店
電話本局二二一



専賣特許
臺所重寶
名和式
テンピ
大三圓●中二圓五十錢●小一圓九十錢●説明書御希望の方へは無料送呈
専賣特許名和式テンピは曾て實業之日本誌上に於て「改良されたる臺所重寶器」として紹介されし和洋兼用のテンピなり
東京日本橋區蠣殼町二丁目十五番地電話浪花一一七七振替口座一〇二五四番
特許カマド据風呂
名和商店

女學世界
(每月一回廿六日印刷納本)
第拾卷第九號
(明治四十三年六月廿六日印刷納本)
(明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可)

婦人の煩悶は此一言にて解決す

皆さん、若し「人生の最大幸福は何か」と問はれたらば、何と御答へになりますか、「富」と答へる方もあり又「位である」「權勢である」と御答へになる方もありませう、なるほどこれを贏ち得たる人は幸福者に相違ありませぬ、併し是がすぐ樣人生の最大幸福と云へませうか、さらば最大幸福とは何かと考へて見るに、どうしても「健康」で御座います、それが證據皆さん、病魔の爲めに苦悶し而も生命に危險の憂ひでもあつて御覽なさい、一切の慾望を擲つて專念健康を喝望する樣になります、健康の價値は如斯大なるものでありますから、御婦人中には健康の勝れぬ爲めに憂ひ悲み・遣瀬なく、煩悶に沈んで居らつしやる方が少なくありませぬが、之は誠に御尤もの次第で御座います、併し中には一擧手一投足の勞を吝み、自分の盡くすべき方法を盡くさずに、たゞ悶えて居る人がありますが、斯ういふ人は云はゞ自繩自縛と申すものでせう、又中には何とかして病苦より遁れんとして努力しても、良治療法を見出す事が出來ず、空しく暗黒の中に彷徨する婦人もありますが、此等の人は丁度暗夜深山に踏み迷ひ、如何にかして人家に辿り付かんと藻掻き右に行き左に奔り、遂に達すべき道に逢着し得ないと一般、若し此時彼方に一點の光明を認めたならば、その人は如何にうれしいでせう、此と同樣に中將湯は、病の爲めに暗黒の中に苦悶して居る婦人を、健康に達する道に導く處の唯一の光明で御座います、故に自分の盡くすべき手段を盡くさずに煩悶する婦人は早く中將湯を御上りなさい皆さんの身體は强壯となり、總ての煩悶は雲消霧散するので御座います、さて中將湯の効能は、

●子宮病 子宮内膜炎にて白帶多く又下腹腰足の引つり痛む人●婦人神經(ヒステリー)血の道には氣鬱ぎ癇高ぶり物を苦し夜眠れず●月經不順 月經滯り等にて吹出物多く又何んとなく身體惡き人●逆上頭痛眩暈し肩こり腰足冷え●息切れ動氣強く手足痺れ水腫十七八歳になりて月經なく血ぶとり又月經の前後に下腹痛む人●白帶赤帶滯下多く顏色蒼白き人●冷症にて難產流產の癖ある人●產後何となく常ならざる人、嘔吐、產後古血の滯り或は日立惡く●此外子宮血の道 月經不順に起因する諸病にてぶら〳〵と惡き人

定價は四日分卅五錢●一週間分六十錢●二週間分一圓十錢●三週間一圓六十錢●五週間二圓五十錢です本舖は東京市日本橋區通四丁目津村順天堂で取次店は全國到る處にあります●本舖には加減藥あり病狀詳しく御申越あれ。

(定價金貳拾錢●郵稅貳錢)